

Minecraft ~ある冒険 家の旅路~

セツキー.Jr

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は旅に出た。父のように強くなるために、
そして 世界を見るために。

目次

1章：最初の冒険

1：プロローグ	1
2：少年の旅の始まり	4
3：1日目の出来事	10
4：終わりの世界	15
5：洞窟	21
6：クールスナイパー	27
7：守られし村（前編）	34
8：守られし村（中編）	40
9：守られし村（後編）	53
10：砂嵐の男（前編）	65
11：砂嵐の男（中編）	71

12：砂嵐の男（後編）	83
13：雪国の裁き（前編）	91
14：雪国の裁き（後編）	103
15：醜い戦士	115
16：VSブレイズ（前編）	124
17：VSブレイズ（後編）	134
18：炎	145
19：レッツゴー！ジャングル！	153
20：真夜中のジャングル	161
21：蠢く影	172
22：VS謎の影	178
23：世界のスキマ	188

番外編 2 : Merry Christ	5 : 島の終わり	315	番外編 1 : くらふと☆がーるず♪	4 : 古からの贈り物	3	2 : 太陽と陰 (前編)	1 : 新たな旅	2 章 : 次なる世界!	2 7 : The End.	2 6 : The End?	2 5 : 再開	2 4 : 終わりの世界へ	
	344			294	280	263	250		225	215	206	195	
552	1 5 : メデイウス・ライブラリー		1 3 : 裏側 (後編)	1 2 : 裏側 (中編)	1 1 : 裏側 (前編)	1 0 : 表と裏	419	9 : グレート・スライヴシティ	8 : 狼の名前は . . . ?	7 : 光と咆哮	6 : 真夜中の怪物	mas!!	
		540		496	483	456	435		405	392	370	358	

16 : 鈍行世界	566	25 : 歯車の街	833
番外編3 : 深夜のロングトーク		26 : 王様の気まぐれ	849
593		27 : ブラウン村	869
17 : 小さな戦士達	605	28 : 機械の文明	880
18 : 廃坑探索! (前編)	626	番外編5 : 今日の世界旅	901
19 : 廃坑探索! (後編)	638	29 : 愉快な海賊達	910
20 : 絶交?	664	30 : 桜の咲く国	937
21 : Herobrine	691	31 : 正月花火	952
22 : 世界を結ぶ道	721	32 : 「強い」刀	968
番外編4 : Tropical Hea		番外編6 : クリーパーの恋	995
t!!	735	33 : 二つの燃える国	1009
23 : ジャックの弟 (前編)	757	34 : 違う (たがう) 心	1030
24 : ジャックの弟 (後編)	796	35 : パン工場見学!	1050

1237	4 3 : 10億人を殺した科学者	121511198
	4 2 : グルメの街	
	4 1 : 災いの少女	
1173	4 0 : 魔法世界の冒険(後編)	
1146	3 9 : 魔法世界の冒険(中編)	
1129	3 8 : 魔法世界の冒険(前編)	
	3 7 : 池を抜けると…	110510741061
	3 6 : 空の英雄	
	番外編7 : 恐怖の館	

	4 4 : 宇宙の壁	
	4 5 : アートの街(前編)	
	4 6 : アートの街(後編)	
	4 7 : 海底の涙	
	4 8 : 小さな島の研究所	
	4 9 : 嵐の前の静けさ	
	5 0 : 計画始動	
	5 1 : 国際会議	
	5 2 : 賽はなげられた	
	5 3 : 防星近況①	
	5 4 : 防星近況②	
	5 5 : 防星近況③	
	5 6 : 集まる戦士達	

1470145914381415139613821351134413251299128212611250

エピソード：地獄にて	1649
最終回：The beginning	1598
60：結末	1563
59：Mr. F	1538
58：世界決戦	1514
57：ミュータントモンスターズ	1489

1章：最初の冒険

1：プロローグ

一人の少年がその父に聞く。

「・・・パパ、パパってむかし、せかいをみてきたんでしょ？」

「ああそうさ。パパは世界のあちこちにいらっているものを見てきたんだ！」

そしてくつきょうな男が語る。

「雪に包まれた森、植物がほとんど生えない砂漠、動物の豊かな森林、険しい山岳地帯……

実は地の果てや宇宙彼方の星にも行ってきたんだぞ！」

「ほんとうに!？」

「本当だ!!変な宇宙人もいたぞお。こんな顔の!」

そういつて一人の男は両方の目じりを横に引っ張った。

「あはははは!へーんなの!」

少年は爆笑した。

「ねえねえ、もつときかせてよ!」

「それはだめだ!」

男は言った。

「……じゃあ行ってくるよ。」

「……行つてらっしゃい。」

そしてすやすやと眠っている少年を見た。

「……強くなれよ。そして自分の目で確かめるんだ。……世界を。」

2：少年の旅の始まり

「えーと．．．どこにしまったかなあ．．．前やったゲーム．．．」

少年はチェストに首を突っ込んで探している。

母はあきれた顔をしながら言った。

「またゲームやるつもりなの？．．．あなたもう高校生でしょ？ちゃんと勉強」

「分かったって！いつも言われてるから！．．．！あつた！」

少年はチェストからゲームを手を取った。

そしてゲームと一緒にとれたものがあつた。

「．．．？なにこれ．．．『冒険日誌』？」

「！．．．それはあなたのお父さんが書いたものよ．．．」

「お父さん？冒険日誌？」

．．．．．！

少年は思い出した。

「．．．おやつのアイス、食べるの忘」

「いやなんでなのよ!?それ見たら他の事思い出すでしょ普通！」

「なにが？なににも思い出せないよ？．．．そうだ、それよりゲームゲーム！」

少年はゲームをやり始めた。

母はただため息をつくだけだった。

その夜。

少年は夕食を食べてから自室にこもった。

「ふう、食った食った！」

ふと少年はまたゲームをやろうとチェストの中身を見た。

そこにはさっきの冒険日誌。

「．．．お母さんにはあんなこと言ったけど．．．実際なにかつつかかるとはなかなかなあ？」

少年は沈黙した。

しばらくしてから少年は部屋を見渡した。

「．．．お母さんは．．．いないと．．．」

また少年は沈黙する。

「．．．よー」

少年は勢いよく本を開いた。

中身を読み進めると、少年の頭の中から何かが無数に広がってきた。

白に包まれた森林、肌色が無限に広がる砂漠、緑と黄、赤が美しく混ざり合う森林……
そして自慢気に話す男と、それを瞳を輝かせながら聴く少年。

それと——詳しくは覚えていないが、少年に語りかける優しく響く声。
どこかさびしさもあつた声。

なんだ……!?!? なんて見たこともないのに……想像できるんだ……?
その時、一枚の紙が落ちてきた。

筆跡は「お父さん」と思われる人のものだろう。

乱雑だが、その字は丁寧なものでもあつた。

一つの言葉だけであつた。

「強くなれ、そして、世界の果てまで自分で確かめるんだ。」

少年は激しく後悔した。

俺は何をやっているんだ!?

なぜこんな大切なことを忘れていた!?

俺は父が大好きだった。

そして父と同じくらい冒険好きだった。

冒険が……したかったのだ。

翌日の朝、少年は荷物をまとめた。

そしてリビングへいった。

「ああ、おはよ。今日は早いわね。朝ごはんできてるわよ。」

「母さん！」

「えっ……!?!」

「俺、俺！」

「……旅に出る！」

しばらく母は黙っていたが、ついに話した。

「……教科書の準備はもうしたの？」

「だから母さん！」

「あなたには今もつと大切なことがあるでしょ！」

母は目を大きく開きながら言った。

「俺は……世界を見に行くんだ！」

「勉強のほうか」

「俺は！お父さんのように強くなるんだ！」

母はまた黙った。

母から大粒の涙がぼろぼろと流れた。

「か、母さん?ご、ごめん。」

「……大きくなつたわね。お母さんはすごくうれしい……」

母は涙を拭いてから笑顔でいった。

「……缶詰めやトランシーバーはどこにあつたかな?」

「……母さん!」

「あなたの強い意志をとめるつもりはないわ、ただし……」

「もう、私になにも失わさせないでね。」

「……はい!母さん!」

母は大きく手を振り、

「行つてらっしゃい!」

少年は駆けていった。

そして少ししたところまでとまり、

息を大きく吸った。

「すうーっ・・・」

「いつてきまーす!!」

これは少年の旅路を記した物語である。

3：1日目の出来事

「えーと、クラフトボックスにこんな配置で・・・できた！」

少年は海を旅するため木を伐採し、小さなボートを作った。

「後は海に浮かべて・・・いざ出発！」

少年はボートに飛び乗った。

50年後・・・

一人の老人は海の上だった。

ズタズタになった小さなリュックを背負っていた。

「はあ、もう少しだ・・・陸が見えてくるだろう・・・」

と言った瞬間、老人は小さなボートの上でうごかなくなってしまう・・・

「うわあああああああああああ!!!」

・・・という夢だった☆

「はあ、はあ、夢かあ・・・」

少年は陸を待っているうちに眠ってしまったようだ。

あたりは真つ暗になっている。

夜空にはたくさん星が散らばっている。

その星を見ながら、少年は思った。

「父さんも・・・こうやって星空を見てたのかなあ・・・」

優しく、そして強かった父を心に浮かべた少年の瞳には――

知らぬ間に、一粒のしずくがたっていた。

次々としずくと共にあふれ出す思い出。

「父さん・・・絶対死んでいないよね?・・・強い父さんなら・・・!!」

ジチジチ・・・

「!?!」

少年の背後から忍び寄り謎の鳴き声。

いや、背後だけではない、左右からも違う鳴き声が聞こえる。

ヴオオオオ・・・

カラン・・・コロン・・・

チャアアアア!!

一匹の蜘蛛が少年に襲い掛かった。

「うわぁー!」

ビリリッ!!

少年の服の袖が少し破けた。

ピュッ!!

「うわわわわー!」

一つの矢が少年の顔をかすった。

切り傷から血がたれる。

「やばい……!逃げろ!!」

少年はボートを全力でこいだ。

少年は謎の緑の影を見た。

シュー……

?

……は……

すでに太陽は昇り、明るくなっていった。

目の前には砂浜が広がっている。

持ち物がすべてなくなっている。

背後では砂浜がえぐられていた。

服の焦げた部分をはたきながら、少年は思い出した。

たしか父さんの昔言っていた話では・・・

海の向こうの真つ暗な島には凶暴なモンスターが現れるんだ・・・

とあるモンスターは背後から忍び寄り崩壊を招き・・・

とあるモンスターは住人の家のドアを壊し襲い・・・

とあるモンスターは遠距離からの攻撃で惑わし・・・

とある科学の超電磁砲・・・

「なにそれ？」

「あー、ああ。これはもう少しお前が大人になったら分かるだろう。（ま、間違った・・・

！）続きを言おう。」

とあるモンスターは・・・

終わりの世界から現れ、目を合わすと恐ろしい表情で襲うものがある。

「モンスターかあ・・・もつと身を整えなきゃなあ・・・」

その時。

「ワン！」

「? . . . 犬？」

4：終わりの世界

「?・・・犬?」

少年の目の前にいたのは鋭い目をした一匹の狼であった。

「ああ、あつちにあるタイガのバイオームからきたのか。よしよし、はいおと
「ガルルルル!」

「うわわ! 嘯みつくな! いててててててて!」

その時、どこかから野太く、力強い声が聞こえてきた。

「俺は犬じゃねえ!」

「・・・?」

少年はあたりを見回した。

声から推測される男性の姿はどこにもない。

少年は首をかしげながら、自分の右耳を手のひらでたたいた。

「うくん・・・モンスターに襲われて耳がどうかしてしまったかなあ・・・?
「おい!・・・ここだよ!」

目の前にいる狼から聞こえてくる。

少年は沈黙した。

「……」

狼も応答をまった。

「……」

「……」

「……」

「キヤ……」

「キエアアアアアアアア!! シャベツタアアアアアアアアアア!!!」

「第一声それ!? お前絶対ニコニコ動画毎日見てるだろ!?!」

「俺はライモン、昔は冒険家だったんだ。」

「え……いや……その姿でそれ言われてもなあ……信じられねえよ……」

「ハハハ……まあそうだろうな。昔は人の姿だったんだがな……」

「……なんでその姿になったんだ?」

「それは……」

「これは昔の冒険家の話。」

冒険家は洞窟を探索していた。

「松明も残り少ない．．．かといつてもう後戻りは難しい．．．ん？」

目の前に見えたのは謎の石レンガで囲まれた空間だった。

「こんな洞窟の奥深くに人工的な空間があるだと．．．！」

そして少しくと謎の黒い光を放つ門があった。

その周りには十二個の独特の光沢を放つ玉がはめ込まれていた。

「()は．．．？」

その門に近づいた冒険家は．．．

「う、うわあああああ!!」

漆黒の門へと吸い込まれてしまったのだ。

目が覚めるとそこは黒い柱が無数に立つ怪しい場所だった。

謎の紫色の目を持った長身の生物も無数にいたのだ。

無数の紫色がこちらを見ている。

「な．．．なんだ!?!あいつらは．．．」

冒険家は怖くなり門から帰ろうとしたが。

すでに門の上にはその生物がいたのだ。

「い……いつのまに……？」

その生物は口を開かずに話した。

「ココハ……シラレテハナラナイセカイ……」

「セカイハ……モウジキイツシヨクトナル……」

「オマエヲ……ナカマトトモニサセナイ……」

そしてとても低い声が後ろから聞こえてきた。

「ソウ……シラレテハイケナイ……」

冒険家が後ろを向いた時、もう遅かったのだった。

謎の巨大な物体に頭を強打されたのだ。

目が覚めるとそこは青空と森の中。

地上に戻っていたのだ。

体に異変を感じる。

足で立つことができないのだ。

——四足であるかなければいけなかったのだ。

「……というわけだ。幸い、声を狼に完全に変えることはできなかったようだがな。少年ははつとした。」

終わりの世界から現れるモンスタ―。

ライモンが言っている謎の世界はたぶん、終わりの世界だろう。

父が向かった場所……The^{ジュ}End^ドであろう。

「俺はその遺跡を再度探している。地上に戻った地点はまったく分からない場所だったからな。」

「本当にひどい目にあつたんだな……よしよし」

「おい！お、俺をなでるんじやねえ！」

「あ、ごめん……犬だからつい……」

「だから俺は犬じゃねえっつーの！お・お・か・み！……まったく、おれは子供でもないし犬でもない、狼で四十き……えふんえふん。」

「え．．．!!」

「えーまじ四十歳？キモーイ！四十歳が許されるのは、小学生までだよねー！キャハハハ！」

「文章わけわからんし！やっぱりお前ニコニコ動画観てるだろ！」

「本題に戻そう．．．おれはこの狼の体じやまたやられてしまうだろう。」

そういうとライモンは前足と前足を無理やり合わせた。

「頼む．．．！協力するから．．．な？」

「そう言われてもな．．．俺は一人で旅をしたいんだけど」

「僕と契約して魔法少女になつてよ！」

「オマエも観てんじやねーかよ！」

こうしてライモンが仲間となった。

5：洞窟

少年がライモンと出会ってから3日……

「で、できたあ……！」

すでに自宅が完成していたのだった。

「うむ……なかなかの出来だ。豆腐ハウスじゃないし。」

「作るって楽しいな！」

「ああ……俺もこの体になる前までいろいろ作ってきたな……」

少年と狼はずつと家を見つめていた。

「……ところで次はどうすればいいかな？」

「お前本当に何も知らないんだな……」

「だって入門書までなくなってたんだぜ？」

「まあ……次にするとすれば洞窟探索だな、まずは木炭をもつとつくらなきゃな。」

「松明は必要だしね。」

少年は森でたくさんのお木を刈り取り、焼いて、松明を3スタックほど用意した。

「あそこに洞窟があるぞ。行ってみよう！」

「ちよつと待った。お前・・・」

「剣・・・持つてるか？」

「剣？」

「お前素手で戦おうとしたの!? 馬鹿なの!？」

「俺のパンチはピストルのように・・・」

「某大海賊時代をモチーフにしたコミックの序盤の主人公の真似しなくていいから！」

「いいか、洞窟は暗いだけじゃない、モンスターがうじゃうじゃいるんだ。

だからこそ万全の準備で行かなければ鉱石なんて絶対に取れないぞ。」

「へえ・・・てことは・・・食料も必要ってことか！」

「お前つてやつあ・・・」

ライモンはため息をついた。

「いぎー！リベンジ！」

「いやお前さつき洞窟の前しか来なかっただろう。」

「よし……入るぞ！」

少年と狼は奥へと進んでいった。

松明をおきながら進んでいくこと半日。

集まった鉱石は鉄と石炭のみ。

「なかなか見つからないな……」

「この洞窟はもしかやはずれだったのか？」

「!?なんかくるぞ?!」

カラン……コロン……

「この足音は……スケルトンだ！」

スケルトン。

遠距離まで攻撃の出来る弓矢を持っている。

その命中率はほぼ90%といっても過言ではないだろう。

「くそ……こいつが出てくるとは……」

「どうする?」

「……とりあえず剣で攻撃だ!」

「うおおおおおお!」

カラン!……カラッ!

ビュッ!

「ぐほ!」

「大丈夫か?」

「……大丈夫だ、問題ない。」

某ゲームの真似をしながら少年は2回、モンスターに剣を振り下ろした。

カラッ……!!

「やった!倒した!」

「おお!骨骨!」

ライモンは骨にかぶりついた。

「お前……ほんと犬だな……」

「しよ……しよ……しょうがねえだろ!本能的に動いちゃうんだよ!」

その後。

奥地からは数々の種類の鉱石。

ラピスラズリ、レッドストーン、金・・・

ダイヤも6つ、見つかった。

モンスターも次々と倒し、

黒曜石も手に入れた。

洞窟はまだ続いていたが、少年は洞窟を後にした。

ここはとある廃坑。

チェストの中をモンスター達が整理しながら、

雑談していた。

「おい、このごろ、新しい気候帯が地殻変動で出来たんだってさ。」

「へえ、どんな気候帯だい？」

「なにしろ天までそびえたつ樹が生えて、新種の生物も出始めたらしいぜ？」

「へえ・・・今度いつてみようや。」

「ああ！・・・ところで、この廃坑の北にある洞窟、犬を連れて人間がほぼ制覇しちゃったらしいぜ」

「まじで!? あんな広い洞窟も明るく照らされちゃったのか……」

「あそこのモンスターがほとんど倒されたらしい……」

ガヤガヤ……ガヤガヤ……

その中で一人、黙り込んでいるスケルトン。

帽子を被っている。

「……ほう……人間か……懐かしい……」

そのスケルトンから独り言がこぼれた。

6：クールスナイパー

「資源はだいたいそろった。次は食糧を簡単に手に入れるようにするぞ！」

「どゆこと？」

「・・・農耕だ！」

「・・・の、のうこう!?!・・・なにが濃いのか？」

「そつちの濃厚じゃない、農耕だ！」

「ええく？農耕つてあの無精ひげと麦藁帽のおじさんが

『今年はキャベツがよくとれる年だつべ！』

『んだ、んだ、んだす！』

とかやつてるあれでしょ！なんか格好悪いよ・・・」

※Minecraftにキャベツはありません

「えつと・・・とりあえず田舎の人たちに謝れ。そして農耕は以外に楽しいぞ！」

「・・・さあさあ、百聞は一見にしかず、百見は一行にしかず。やってみるぞ！」

「おー・・・」

やや皮肉そうな口調で近づいてきたのは一匹のスケルトンだった。

「農業くくろう！いい小麦じゃないか！おいしいパンが焼けそうさく

でも自分の仲間の粉を使って育てるなんて、許せなく思うな〜」

「くめんなさい。」

「いいっていいって！Don't worry！自然の摂理だからね〜」

「でも、僕が君と勝負して、勝ったらその小麦を全て僕が貰うよ〜」

ライモンはワン、ワンとほえながら、

「ほほう・・・いい度胸じゃねえか・・・うちの相棒をなめるなよ！」

「ぼくが思うに、君のほうがその子の相棒だと思うな〜・・・飼う方向性で。」

「ムキキーーー！こいつむかつく！おい！やっちまえ！」

「ま、まじで!?俺、絶対無理だよ〜!!」

「大丈夫だ、」

「俺はおまえを信じてる。」

少年はハツとした。

ライモンはあつちから俺のことを「相棒」と呼んでくれた・・・俺は信頼されている、信じられているんだ！

「・・・よし！」少年はソードを構えた。

「やるのかい？君はソードで戦うんだねえ・・・ただし」

スケルトンは鋭い目を見せた。

「・・・手加減はないからねえ！」

ビュビュビュビュ！！

次々と矢が少年に向かってくる。

「ぐっ！！」

少年は肩に2本矢を受けた。

「ハハハハ！それで終わるなんて、つまらないねえ」

よくそんなんので冒険家になろうと思ったねえ！」

「ここぞ終わるぞ？」

ザザザザッ！

「おおっあれは……!」

「何!? 2本の矢を受けてあんなに走れるはずはない! 倒れるぞ!」

ザクツ! シャツ!

「ぐっ!」

スケルトンの体は後ろに飛ばされた。そして倒れた。

それと同時に、少年も倒れた。

「おまえもThe Endにいったのか!」

ライモンは驚きの声をあげる。

「……ああ、俺は昔、村では名高い、弓の名手だったんだ……」

異名もつくほどだった。狙ったものは逃さない、『蜜蜂のジョー』ってな。」

「でもさあ、なんでスケルトンと仲良くしてんだよ。」

「自然の摂理、だ。廃坑のなかではモンスターに従うしかない体だ。」

スケルトンは涙をこぼした。

「……自分の冒険家という信念を馬鹿にしてもな……！」

犬もつられて涙が出た。

信念を捻じ曲げられたものたちは泣く。

少年はいい言葉が見つからず、黙り込むだけであった。

夕方、スケルトンは廃坑に帰っていった。

ライモンももう涙を流していない。

帰り際のジョーの言葉が聞こえてくる。

「よし……充分ないた。……今日はありがとよ！」

「……ああ、いいんだ。俺も話し合える仲間と出会えて嬉しい。」

ライモンは涙を拭いた。

「君も本当にありがとう。俺を倒してくれた。こんな奴は初めてだ！」

「ああ、もうお別れだね。」

「俺は口下手でね……自分の気持ちが言えないんだ……最後は嘘で別れよう……」

「もう絶対！絶対こねえからな！」

「ああくんな！絶対何回もくるな！」

ジョーは愛情のたくさんこもった嘘で別れた。

「お前らなんて！大嫌いだああああ！」

少年とライモンはこれに答えた。

「俺もだあああ！」

7：守られし村（前編）

少年は牧場を作っている最中であつた。

近くの草原から茶色や灰色、白の毛の羊、

白と黒のマーブル模様の牛や鶏を、小麦を手につれてきていた。

「ほらほらこつちこつち．．．ライモン、

お前こつち観てると羊を追いかける犬みたいだな。」

「だから俺は犬じゃねえ、鋭い牙持つ狼だつーの！」

「犬」は力強くほえながら、牙を見せつけた。

「つい間違つちやうんだよなあ．．．まあいいか！」

「よくねえ「じゃ、また第二軍つれてくるから！」

．．．つてかさえぎるんじゃねーよ！」

少年は草原へ走つていった．．．ツ！

と思つた瞬間、興奮しながらこつちへ戻つてきた。

「おい！こつち来てみるよ！」

「おい、どうしたんだよ．．．」

少年が指差す。

そこにあつたのは家であつた。

もちろん少年が建てたのではないし、何軒も立ち並んでいたのだ。

「人も住んでいるみたいだぞ……」

「こいつは驚いた……まさかこんな大草原の中にポツンと……」

近づくとやっぱり村のようだった。

するとそこに、しゃがまれた老人の声がかきこえてきた。

「ようこそ旅人のお方様。」

「あ……どうも……」

「ワン！」

ライモンは驚かせてはいけないと狼のふりをしているらしい。

「みなさん、旅人のお方様がいらつしやいましたよ！」

家の中からはたくさんの人が出てくる。

肉屋も、神官も、子供たちも……

「ようこそ！ ストート村へ！」

「わー！ワンコだあー！」

「すっげー！はじめてみた！」

「ほらパン、いる？」

（早く行つてくんねーかな・・・）

ライモンは子供に囲まれていた。

「お手！お手！」

「ちんちん！ちんちん！」

「ブレイクダンス！」

（おい！いくらなんでもブレイクダンスはできねえだろ！）

「はやくやつてよー！」

「ねえねえ！」

「ワンコー！」

（・・・ああもう！）

「俺はワンコ・・・モガッ！」

少年は犬の口を押さえた。

「あれ・・・？ワンコしゃべったー？」

少年はごまかした。

「お・・・俺はワンコが好きなんだー♪」

子供たちは首をかしげた。

「・・・へんなお兄ちゃん！」

「旅人のお方様！休憩の準備が整いましたぞ！」

「あ、じゃあお言葉に甘えて・・・」

「モガガ！モガッ！」

「ストート村？」

「その名前は私が名づけたものです。この村は

ゾンビの来襲、雨風に何度も耐え抜きながら発展した村なのです。」

「なるほど・・・」

「ここは鍛冶屋のバルコニー。少年と狼はくつろいでいた。

ライモンは犬のえさをががつがつ頬張っている・・・ふりをしているのだろうか？

ゴトツ・・・ゴトツ・・・ゴトツ・・・

「!?この鈍い音は!?」

ドアが勢いよく開いた。

「敵襲だ！狼、いけえ！」

「ワワワワン！」

「待っててください！それはこの村の守護者なんです！」

「・・・守護者!？」

これは50年も昔の出来事・・・

村長はその頃10歳という村の子供であった。

そして、誰ともなじめない、臆病な子供でもあった。

しかし、それと同時に、器用な手も持っていた。

そのため、いつも一人、さびしく花を摘み、花で輪を作ったりしていたのだ。

そんなある日。村の採掘者が崖を掘っていた時・・・

「こ・・・これは・・・！鉄の人形!？」

巨大な鉄の人形。このニュースは村中に広まった。

それからまたある日、臆病な子供は母親からキノコを採ってくるようにと

命じられた。

「あかキノコかあ・・・どこにあったかなあ・・・」

少年が考えながら歩いていると、そこには採掘者の掘った洞窟があった。「てつのおにんぎょうさんってどんなのかなあ・・・？」

少年は洞窟へと歩を進めていった。

その背後からの赤い視線に気づかないまま・・・

8：守られし村（中編）

幼き子供は洞窟へと向かう。

奥へ、奥へ、奥へ・・・

そこには鉄の人形がずっしりと座っていた。

「これかあ・・・」

そこに、水脈から垂れてきたのだろうか。

水滴がちょうど人形の目のあたりに落ちた。

幼き子供にはそれが一人で泣いていたように見えた。

「だいじょうぶだよ。なかないで。これ、あげるからさ。」
と言って、子供は一輪の花を見せた。

ビチュン・・・

「……すきなひとにわたすものなんだよ！」

「……スキ……バ……ギト？」

「ちがうよ、す・き・な・ひ・と！」

「……スキ……ナ……ビゴ？」

「おいしいだよなあ……す・き・な・ひ・と！」

「ガン……モ……ドキ？」

「なんかすごいはなれちやった！なんでしつてんだよ！」

「ぼく……きみのこと……すき……だから……ともだちに……なる……」

「トモダチ……」

人形は考えながら、ひらめき、

洞窟に生えていたキノコを渡した。

「あ、ありがとう！……それは「はな」じゃなくて「きのこ」っていうんだよ！」

「キ……ノ……ゴ？」

「アハハハハ！またまちがってる！」

洞窟から笑い声が響く。

「じゃあ、もうかえらなくちゃ！またあしたくるよ！」

「・・・アシタ・・・？」

「日がおちて、また、のぼったときだよ」

「ヒ・・・ツキ・・・ヒ・・・」

「そう！日がおちて、月がのぼっておちて、日がのぼるとき！」

「・・・アシタ！」

「うん！あした！」

子供はキノコをもって、洞窟から去って行った。

「うわあああああ！」

人形は振り向く。洞窟の手前のほうだ。

人形は走る。轟音を響かせながら・・・

「トモダチ・・・アブ・・・バイ！」

3匹の蜘蛛が子供を襲う。

「ギシュウ！」

「うわっ！」

子供の服が破ける。

「えーん！えーん！」

まだ10歳の子供は泣く。

「ギシユシユシユ!!」

「グシユ！」

「わああああん！」

ゴオオオオオン！

「クシユウウ・・・」

「ギャシユウウ・・・」

「人形！」

「トモダチ・・・マモル！」

鉄のパンチが舞う。

ガン！

ゴツ！

「クシュウウウウ・・・」

子供は見入っていた。

このおにんぎょうさんはゆうきがあるんだ・・・！

ぼくもこんなゆうきもちたい！

ないているだけじゃだめなのに・・・なみだがとまらないよお・・・

「・・・ありがとう！」

子供は人形に飛びついた。

それから何ヶ月たっただろう。

周りの目も気にしないまま、

子供は毎日人形に会いに行き、

名前もつけた。

友を守る正義の怪物。「ゴーレム」と。

子供はゴーレムと共に言葉を学び、

積み木で遊び、花の輪の作り方を教えたりしていた。

そんな幸せの毎日。まだ幼き子供にはそれが永遠に続く……と思っていたのだ。

それから1年。

子供は少年と呼ぶほうがふさわしい年齢になった。

採掘者は毎日自分たちの仕事場の洞窟に

少年が来ることに非常に気になった。

「おい、あの小僧はまた洞窟に入っているのか。」

「なんだろうな、『こつちにきちやだめ!』って言いやがる。」

「まさか金かダイヤでも見つけたから、

毎日少しづつ素手で掘っているんじゃないか？」

「俺が見てくるよ」

採掘者は少年のいる洞窟に入っていった。

「おい! ビッグニュースだ!」

「なんだ!?!」「どうしたんだよ!?!」

「鉄の人形が・・・動いてやがる！」

「「な、なんだってー!?!」」

「まさかあの人形がうごくなんてなー!」

「びつくりだな！」

「そ・こ・で・だ。うまい話がある。」

あの人形を隣町のおもちゃ屋に売ってくるんだ！」

「なるほど！動く人形！これは大富豪が買ってくれるだろう！」

「しめしめ・・・さっそく明日の夜・・・決行だ！」

「じゃ！またあした！」

「ジャ・・・ネ・・・！」

少年は洞窟から去っていったと同時に、

採掘者は洞窟の奥へと向かった。

人影を見たと同時に、ゴーレムは動かないふりをしていた。

「動かないふりをしなくても大丈夫だ・・・一緒に話そうじゃないか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もうお前が動くことはばれているんだよ！」

「……オマエハ……ダレダ……」

「ただの通りすがりの採掘者……いや、

もうすぐ大富豪となる男、ととらえてもいい！」

「ドウイウ……コトダ……？」

「何……つて……もうすぐお前は大富豪の家でこき使われるってことだよ……」

俺がお前を売るんだからよ！ハハハハハハ！」

「……トモガ……イル……ワレト……オナジ……ヒトリ……」

……ダカラ……イクモンカ……！」

「おいおい！あいつを友だと思ってるのか？」

採掘者は人形に指をむけながら罵った。

「人形が人間と友達になれるわけないじゃないか！」

人形つてのは人間に「遊ばれる」ためにあるものさ！

馬鹿らしい、馬鹿らしい！ハハハハハハハハ！」

ゴーレムは目を大きく見開いた。

「あいつは「二人」だからお前と友達になれるって

「ただ妄想」していただけなんだよ！それをお前は気がついてない！」

脳みそなんてろくに入っていない馬鹿だからな！」

ゴーレムの表情は険しくなる。

「・・・タダノ・・・モウソウ・・・ジャ・・・ナイ！・・・アノコハ・・・

ワタシヲ・・・コンナスガタノワタシト・・・シタシク・・・シテクレタ！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「え、え？」

ゴーレムは叫んだ。

「・・・オマエナンカニキメテモライタクナンカナイ！」

「ひいー！」

採掘者は涙目になりながら、

「そ、それがどうした！こっここっこ怖くなんかないぞお！

覚えてろ！おまえなんかスタンガンで一発だ！

へーん！メメー！（ママーー！）」

と去っていった。

ゴーレムはオーバーヒートし、一夜が過ぎた。

「ワレ・・・ニンゲント・・・トモニ・・・イキラレル・・・?」

「ど、どうしたの? 来た時にオーバーヒートしてたし・・・」

扇風機あてつづけたら直ったけど・・・」

「キノウ・・・バカニサレタンダ・・・」

ゴーレムは昨日の出来事を話した。

ゴーレムの話は終わり、少年は沈黙したままであった。

「・・・クヤシカッタ・・・クヤシイ・・・」

ゴーレムは涙を流す。

数分かして、少年はあまりの悔しさに歯を食いしばった。

「・・・この村を一緒に出よう! 君を売らせはしない!

今日の夕暮れ時がチャンスだ!」

少年の目には勇気が宿っていた。

夕暮れ時。

一人の少年と巨大な物体。

一人の少年は周囲を見渡し、巨大な物体に手招きした。

巨大な物体は後をつく。

そのまま、広い草原へと駆け出していった。

少年は木材を置き、小屋を作った。

松明もしつかりおいた。

「ちよつと狭いけどここが僕たちの新しい家だ！」

「.....」

ゴーレムはうつむいたままだ。

（人形つてのは人間に「遊ばれる」ためにあるものさし！）

（お前と友達になれるって「ただ妄想」してただけなんだよ！）

（人形が人間と友達になれるわけないじゃないか！）

昨日の言葉がコンピュータに響く。

「……大丈夫だよ！」

少年は笑顔で言う。

「僕等は心が通じ合っているじゃないか！」

「……ウ……ウ……ウ……」

「……アリガトウ！」

ゴーレムは少年を抱きしめた。

「ちよ、おま、苦しい、ガホ！」

「……！……チョット？……ダイジョウブデスカー!?」

ゴーレムは泡のはいた少年にあせていた。

9：守られし村（後編）

少年と鉄の人形の二人だけの生活が始まった。

二人で木を切ったり、食糧を確保したり、

鉱石をたくさん採り、ある夜にはゾンビと戦い……

そんな毎日の忙しい日々の中……

「……カマド……ココ……デ……イイ……？」

「うん、そこにおいという。俺は牛を狩ってくるよ……」

ゴーレムには少年の体が一瞬ぐらつくのを見た。

次の瞬間。

少年はふらつと体が横に傾き、

そのまま床に倒れてしまった。

「……ワレ……ノ……トモ……！」

ゴーレムは少年に駆け寄り、額に手を当てた。

ひどい熱である。ゴーレムはどうしていいのか分からなかったが、

ひとまずベッドに寝かせ、氷を叩き割り、額にのせた。

「ダイ……ジヨウ……ブ……？」

「ああ……ただの熱だ……ハア……ハア……」

「ワレ……イチバン……ワルイ……ワレガ……キラワレテ

「うるさいー！」

「……！」

ゴーレムは一喝され、ひるんだ。

「君は何も悪くない！自分を責めるんじゃない！」

嫌われることが悪いなんて誰が決めた!?

もし天が決めたというなら・・・!

この世を創りあげた者が決めたとしたなら・・・!

俺は違う世界に生まれたほうが数倍、数百倍良かった・・・!」

ワレハ・・・コノコノタメ・・・ナニガ・・・デキルノダロウカ・・・
コノコハ・・・マエマデ・・・トテモ・・・オクビヨウ・・・

コノヨハ・・・ワレヲ・・・ハイジヨ・・・シタ・・・
ユウイツ・・・コノコハ・・・ワレヲ・・・ミトメタ・・・
シナセテハ・・・イケナイノダ・・・!

それから二日が経った。

ゴーレムは看病を続けたが、

一向に良くなる気配はなかった。

むしろ、熱はあがるばかりだった……

三日目の夜。

とうとうゴーレムは決意した。

このままではこの少年は良くなるはずがない。

……医者をたずねるのだ。

ゴーレムは村まで全速力で走った。

矢は飛び交い、後ろでは爆破音がなり、蜘蛛も飛び掛る。

その攻撃全てをなぎ払い、ついに村に着いた。

だが……忘れていたのだ。

そこに立ちはだかっていたのは採掘者たちであった。

「よお……向こうのほうでガタンゴトンと音がしたと思ったら……

やはりお前だったのか……」

右手にはスタンガン。一人の採掘者が指を動かす度に、

青白く光る電流が走る。

「ハハ！よくここまで二人で生きてきたものだ．．．！」

だがここまでだな．．．お前は天国で一人さびしく生きていくんだからよ！

．．．おっと、天国に行っている時点でもう死んでるか．．．」

「「ハハハハハハハハハハ！」」

採掘者たちは笑う。

「．．．ナニガ．．．オカシイ．．．!!」

ゴーレムの目はどんどん明るくひかり、

何かの噴出す音が間接から聞こえる。

「トモガ．．．ヒトリニナルコトノ．．．ナニガオカシイ！」

ゴーレムは突進していった。

「馬鹿な奴め！この電流でお前はイチコロだ！」

ビリッ!!

「・・・ギギギ・・・」

ゴーレムから機械音が聞こえてきた。
少し動きが鈍くなっている。

「これでどうだああああ！」

一人の採掘者がゴーレムに向かってピッケルが飛んでくる。

グシヤ!

「うわああああ！」

採掘者はぶっ飛ばされた。

「……………」

「何だこのガキイ!?!」

どうやら採掘者に向かって8人ほどの少年たちが

卵を投げつけたらしい。

「…………俺らはいいつが何で洞窟に入ったか知ってたんだ。」

あいつは友達がいなかったからなんだ。

俺らには話す勇気がなかっただけなんだ……………」

「だからこれが…………挨拶代わりになると思ってた……………」

少年たちはオリジナルの木の剣を振りかぶって採掘者たちへ向かっていった。

「…………トモとしての!」

「お人形さん、あなたは医者へ向かって!」

「…………アリガトウ……………」

ゴーレムは医者へ向かった。

バタン！

「だ、誰だい君は！」

「おい！ここはお前みたいナブリキ人形が来る場所じゃねえぞ！」

「ここは人間の病院だ！」

「・・・君は・・・あの洞窟の人形かね!？」

ゴーレムは短く、こういって、床につつぶした。

「トモ・・・タスケテ・・・」

医者は言う。

「・・・急患だ。君、診察を代わってくれないか。」

患者の一人がどなる。

「おい！人間をほったらかしてブリキ人形に従うのかよ！」

そんな不公平じゃねえか！」

「だまれ！」

医者もどなる。

「彼は人間じゃない……ただ彼は……患者の家族であることは確かだ！」

患者は打ちのめされると同時に、周りの厳しい視線にも気がついた。

「……さあ、患者のいるところへ案内してくれ。」

患者は納得のいかない表情で、腕を組みながらしぶしぶ座った。

医者とゴーレムは、モンスターの間をかいくぐってようやく草原へでた。

しかし、雨が降り始めたのだ。

ぼつん、ぼつん……

ザー……

ビリビリビリ！

ゴーレムの体から電流が漏れ出す。

「君！大丈夫か！案内がなければ患者も危ういぞ！」

ゴーレムは前を指した。

「・・・トモ・・・」

プツン・・・

「・・・! そんな・・・!」

朝日が昇り、指を指した方向には一軒の小さな家があった。

熱の原因は食中毒であった。

鶏の生肉を食べたからであった。

医者によれば、あと一日で死ぬところだったらしい。

一人の勇氣ある戦士がいなければ死んでいた。

———だが、彼は今、ここにいないのだ。

———「あの時、私は泣き崩れました。」

たった一人の友達。それを私は失ったのですから。」

「そういえば探掘者はどうなったんですか?」

「あやつらは無論のこと、少年たちに勝ちました。」

村で裁判も行われ、少年たちや、私も判決に立ちあわせたのですが、

証拠がない、これだけで泡になりました。

私は友を認めない、そんな村が嫌いだったのでしよう。

私や少年たちは、遠くへ旅立ったのです。

新しい村を作るために。

．．．今思えば、彼が少年たちとめぐり合わせてくれたのです。」

「あれは新しいゴーレムなんですか？」

「いや、その「友達」、そのものです。」

電源を変えたり、部品の交換で修理したのです。

機能はもとのまま使えます。ただ．．．

記憶はないのです。」

「．．．．．え．．．．．」

「．．．彼はあの日々を覚えているのでしょうか。」

．．．あれは現実だと思っではダメなのでしょうか．．．！」

村長はうつむいた。

「．．．現実ですよ．．．！」

「え．．．？」

ゴーレムがこちらへ寄ってくる。
一歩。

一歩。

一歩。

一歩。

彼は差し伸べた。

「……ゴゴ……ガギ……！」

彼はきつと、友達といったのだろう。

彼の差し伸べる「花」がそう語っていた。

10：砂嵐の男（前編）

少年と狼はストート村の村長とゴーレム、村民に挨拶をし、去っていくところであった。

「ありがとう、あなたのおかげでゴーレムはあのことを覚えていた

ことが分かりました。本当に、ありがとう。」

「いえ、・・・俺なんかよりも感謝すべきなのは

ゴーレムに向けてだと思えます。」

彼は記憶の壊れた片隅から、

精一杯、あなたとの思い出を思い出したんですから。」

「・・・そうですね。」

村長はしわのある手で涙をぬぐった。

「何か足りない資材があれば、言って下さい。」

「わたくしにおまかせを。」

とって、村民をかき分けながら前に出てきたのは、

めがねをかけた一人の少年であった。

少年とライモンは心の中でこう思っていた。

（うわあ、ついに打ちやったよべたなガリベンキヤラ・・・）

（まさか本当にいるとはなくべたなキヤラは後でつまり原因に・・・）

「だ、だれがべたなキヤラですか！」

「あ、あれ？口に出してたの？」

「僕たちが今ほしいのは砂や砂岩なんだ。砂漠ってこの近くにある？」

「はい、ここですね。」

めがねは地図の中心を指差した。

「ふむふむここから北の方に・・・大きな砂漠があります！」

「本当だ。ここにいけばたくさん手に入りそうだ。・・・ありがとう！」

「はい、あなたもたくさん色の世界、見られるといいですね！」

「ああ！・・・そういえばライモンは・・・？」

「ライモン？」

「ああ、犬・・・いや狼の名前だよ。どこだ？」

扉をあけてライモンを呼んだ。

バタン！

「おーい、ライ．．．!!」

「はっ!?!」

ライモンは犬用のエサをがつつ食べていた。

「だっておいしかったんだもんよ〜!」

「うるせーよ! 今日でどんだけ食べてんだよ!」

朝と昼もあわせて4回じゃねーか! 健康にわるいぞ!」

「じゃあもつとおいしく肉を焼いてくれよ．．．てかこのごろ

は生肉じゃねーか! なんでだよ!」

「だってめんど．．．石炭の節約だよ。」

「おい! さつき何か言おうと．．．あ、見えてきたぞ!」．．．おい!」

目の前には肌色のキャンパスの続く景色だった。

「よし! 掘れ掘れ!」

「掘れ掘れ!」

（・・・こいつパンツレスリングとか見てんのかよ！）
少年は心の中で叫びつつ、砂を掘り始めた。

「あれ!? あつちに何かあるぞ?」

「ああ、サボテンだな。砂漠にしか生えてない植物だ。」

「ふーん・・・」

少年は近づいてみようとする。

「おい! そんなに近づいたら・・・!」

「痛てててててててててててててててててててて!」

「言わんこつちやないぜ!」

「ふう、痛かったあゝ」

「サボテンは触れると傷ついてしまうんだよ・・・」

「・・・気をつけないとな。」

「!・・・あつちにあるのは?」

「またサボテン?」

「違う・・・家だ・・・」

「・・・家？ここは砂漠の中心だぞ!？」

「・・・とにかく行ってみるか。」

少年と狼は家に向けて夕暮れのなかを進んだ。

「・・・ここだ・・・」

石で単調に作られた家である。そばには沢山の水がたまっているオアシスだ。

木も育てられ、りんごが実っている。

「なんなんだ・・・」

少年がチャイムと呼ばれるボタンを押す・・・

ボタン！

「・・・え?」

砂を踏む感触がなくなった。

歩けないし、走れない。

なんなんだ？

と思い、下を見ると・・・

下の砂がなくなっていた。

「うわあああああああ！」

「今俺も行く！」

犬と少年は暗い穴へと落ちていった。

11：砂嵐の男（中編）

ゴオ・・・

ゴオオオオ・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオオオオオオオ!!

バシヤアアアアアアアアア!

「ぶはー！」

「下に水があつたから良かったが・・・」

「ココは何なんだ？」

「どうやら岩盤近くまで掘つてあるらしい。下のほうから
絶え間なくでる磁気を感じる。」

「うええ・・・ここはマグマが近くにあるからか

硫黄のにおいがぶんぶんするぜ・・・！」

「そこにドアがあるんだが・・・」

石に囲まれた不審なドア。鉄製のらしい。

「だめだ・・・あっち側からしか開かないらしい。」

「こつちから声が聞こえるぞ。」

長い長い道を行くとそこには・・・

「あれ？岩盤近くじゃなかったのか？空があるぞ。」

そこにはいつもの風景。木が張り、花が咲き、牛や豚もいるではないか。

?????
もうわけが分からない・・・」

「いや、ちよつとまで。これを見てみる。」

狼は勢いよく向こうの空へ駆け出した。

「おい、ちよつと待てよ!・・・つてあれ?」

空がどんどん大きくなる。

地上がなくなってしまった。

そして狼は・・・空に跳ね返された。

ポフンツ・・・

「・・・これは空色と白の羊毛でできている空だ。」

「え!?!」

確かに目の前の空に触ると柔らかい。

「おお、あなた方も迷い込んでしまいましたか。」 7

そこにいたのは村長・・・といってもストート村の村長ではない。

違う村の村長だ。砂漠で住む人なのだろうか。肌の色が黒い。

「あなたたちは?」

「私たちは砂漠の中にある村の者です。」

そしてここはムフェックリーの研究所です。」

「私たちは砂漠で日々を楽しく過ごしていました・・・」

しかしちょうど五年前、ムフェックリー博士と名乗る男は私たちを研究所へ招き入れました。そこでこの罠にはまったのです。

ムフェックリーは、あなたたちにはこれからここで暮らしてもらおうとだけ言い、鉄のドアの向こうに去っていききました。」

「何という奴なんだ！そいつはこんな大勢の人たちを騙したってことか！」「はい、幸い、食べ物や資源には困ることはないのですが、私たちは

本当の太陽と月の光を浴びてみたいのです。・・・ちようど来たようです。鉄のドアが一瞬開き、一人の男が姿を現した。」

肌は黒く、髪は茶髪、白衣を身に着けている。

「諸君の期待している太陽光、月光のことだが、後ほど、天井をガラス張りになりたいと思う。」

「ふざけんな！そこまでするなら俺たちを外へ出しやがれ！」

「そうだそうだ！何のために俺たちを閉じ込めているんだ！ムフェックリー！」

「言っているでしょう……？閉じ込めているんじゃない、『守っている』のだと。」
「ぐっ……」

「そこまでだ！」

「おや？新たな村人が生まれたのですか？よしよしここまで大きくなったとは……」
「俺は通りすがりの旅人だ！」

「旅人……！」

ムフェックリーは旅人の右手を引っ張り、走った。

「ワンワン！」

ガブツ！

「ぐっ……！」

ムフェックリーは噛まれた腿の痛みをこらえ、
鉄のドアの向こうへ少年と狼をつれていった。

「私はムフェックリー。この研究所の所長……といっても私しかないのだがな。」
「そんなのは知っている！お前は村人たちを騙したんだ！いますぐ村人を解放しろ！」

少年は渡された紅茶を飲まずに話した。

「村人は解放できん……彼らは狙われているのだ。」

「狙われている？」

ゴオオオオオオ……

砂嵐が吹いている。その中を小さな子供は歩いている。

「ハア……ハア……」

子供はお使いに買ってきたりんごをこぼし、倒れた。

ザザザザザザ……！

少年の左の砂が吸い込まれていく。

蟻地獄ができたらしい。

「わ！わあああああああ！」

少年は叫んだが、砂嵐がかすかに響くだけであった。

ぼくはもうしぬんだ……

ありがとう、かあさん……

「……は？」

子供はベッドで寝ていた。

「おや気がついたかい？だんながねえ、砂に半分埋もれてたあなたを助けたんだよ……何をしてたんだいぼうや？」

知らないお婆さんがいた。

「おつかい……」

「まったく……これからは砂嵐の恐ろしさを知っておくんだね！」

「あ、ありがとうございます……」

「……シチュー、食べるかい？」

少年は泣きながらシチューを食べていた。

かすかにしか聞こえない砂嵐のなかで、

かすかにしか見えない砂嵐の中で、

自分を救い出してくれたのだ。

時は経ち、ここは学校である。

一人の老人が青年に声をかける。

「えー次はこのたび、貴校を卒業し、若くして見事博士号をとった学生です。」

「——ムフェックリー君。」

「はい！」

ムフェックリーはそれから研究に没頭し、

毎日フラスコを掲げては、コンピューターと面を向けていた。

ムフェックリーは近年に騒がれている

住宅街の倒壊を研究していた。

なぜか住宅の一部分が抜き取られ、家はどんどん

家となくなりつつあるのだ。

パーツの行方は分かっていない。

ただ分かっていることが一つ。

その住宅が抜き取られた後には、必ず「宇宙人」が目撃されるのだ。

「やはり宇宙人が関連しているのではないか・・・？」

博士は考える。

「がぁー！考えてばかりじゃダメだ！」

といつて、街をうろついていた。

道端の端に、ピカッと光るものがあつた。

「・・・なんだこれは・・・？」

家に帰って、博士はテレビをつけた。

（ある冒険家が無人島に古代遺跡を発見したという連絡がありました。

その男は興奮した口調でこう伝えていました。

「いやあ地下の洞窟から奥へ進んでたらなにか円状に並んでてさ、

その場所には何かの絵があつたんだよ。・・・確か、炎を体にまとつたもの、

長身の生物が描かれてあつたんだ！これは古代の遺跡に違いない！

「ちやんと証拠もあるのです！これは宇宙人の落としたものです！」

前に拾った謎の光沢をもつ玉。

一人の科学者が前に出る。

「これが証拠？ばかばかしい・・・ただの大きなビー玉じゃないか！」

・・・宇宙人だつてたつた三秒で証明できる。ただの嘘、背の高い人、見間違ひ。」

ギヤツハツハツハツハ！

いいぞー！

よく言った！

もつと行ってやれ！

フフフフフフフフ・・・

ハハハハハハハ！

若き博士は齒を食い縛った。

博士たちも、テレビも、新聞も、

誰一人意味の分らないことを言う博士を笑った。

若き博士は負けずに言い張った。

しだいに友人も近寄らなくなった。

マスコミもついに目を向けなくなった。

研究発表会も出場禁止。
誰からも嫌われる博士。

見放したわれわれは彼をこう呼ぶ。「砂嵐の男」と・・・

12：砂嵐の男（後編）

ムフエツクリーはその後も一人、研究に明け暮れていた。

研究を進めてくうちに、いろいろなことが分かったのだ。

宇宙人は水を嫌うこと、宇宙人は資源を別の空間に運んでいくこと。

遺跡の絵画にそっくりな炎の粉が雪国で発見されたこと。

その炎の粉と水晶を練り合わせることで、特有の光をもつ物質になること。

沢山の人からの証言を元に、宇宙人の出現場所を記していた。

「ハ、ハ、これは……！」

宇宙人の出現場所が、砂嵐の中あの村に日に日に近づいてきている。

——住人達が危ない・・・！

科学者はどうするか考えた。

屁理屈ばかりを述べる科学者に頼んでも意味はない。

・・・強硬手段だ。

ムフェックリー博士は村人を先の見えない岩盤付近に住まわせた。

「だからって！お前はやりすぎだ！」

「分かってる！」

科学者は叫ぶ。

「分かっているんだ……私は嫌われている……嫌われ者なんだ……でも……」

「たとえば嫌われても！自分の恩人達を死なせたくはないんだ！」

「住人達には今日……話してみるさ……いつかいつかと待っていたら時間が過ぎてしまつた……」

ムフェックリー博士は地下へ降りていった。

「はあ……これだからまじめな奴は……」

「……」

ライモンは皮肉を言ったが、少年はただ黙っていた。

科学者は淡々と話していた。
宇宙人のことを。
信じてもらえない宇宙人の話を。

今話は終わった。
皆は沈黙していた。

途端に、一人の男性が笑い出した。
「ハハハハハハハハハハ!!!」

やはり信じてもらえなかったのだ・・・

「宇宙人がなんだ！」

科学者は驚き、顔を上げる。

「そっだよ！あんた。宇宙人なんて来たところでなんだい！
ただ小麦を荒らしにきた豚を追い払うもんじゃないか！」

「全くだな！」

「ほく強いんだかな！」

「宇宙人？俺の汗がしみこんで作られたソードで一発だ！てやんでい
！」

「戦おう！共に！」

「ハハハハハ！」

皆は笑った。

科学者とは違う、優しい笑い方だった。

科学者は泣いた。

信じてくれるものがいたのだ。

砂嵐が通る。

その過ぎた後には無数の芽が生えた。

重い砂を掻き分けて育ったその芽は．．．

とても、強かった。

砂嵐の男と、無数の芽の住人達である。

鉄のドアの前の少年と狼は言う。

「よかったね！」

「ふう・・・まあな！」

ここは地上。

村人は防具とソードをもっている。

ある村人は赤い粉をばら撒いている。

ムフェックリー博士は戦うことにしたのだ。

「俺はこの人たちと一緒に戦い続けるよ。」

「がんばれよ！」

「・・・ああ！」

少年と狼はその砂漠を後にした。

13：雪国の裁き（前編）

「あ、そうだ。俺らさ、雪国を探しているんだけど・・・」

別れ際、ムフェックリーに問う。

「雪国なら、あっちの方角にあったぞ。そこで私は謎の炎の粉を見つけたんだ。

・・・君はThe Endにも行くんだろう？」

といって、博士はかばんから謎の光る玉を沢山取り出した。

「これは・・・？」

「これはその謎の炎の粉を宇宙人の出した玉に練り合わせたものだ。

この目のように光る光沢。これを私達はEnder Eye・・・終わりの者の目と呼んでいる。」

「エンダー・アイ・・・」

「この玉は遺跡の絵画にあったとおりのもの・・・だと思うのだ。

確信はできない・・・だが、」

ムフェックリー博士は袋に入れた沢山のエンダー・アイを少年に渡した。

「君が行くというのなら、確かめてほしいんだ。」

確かめる・・・懐かしい響きに少年は思いを馳せた。

（自分の目で確かめるんだ。）

父の力強い声だ。

The Endに行けば、きっと父さんもいるはずだ。

死んでなんか・・・絶対にない！

少年は信じていた。

父は死んでいないのだ。

絶対に・・・

「・・・分かった。ありがとう！」

「気をつけろよ！」

「ああ！」

少年はムフエツクリー博士に手を振った。

「あゝ熱いゝ」

「そんなに毛皮着てるからじゃないの。脱げば？」

「ああ、そうする……って脱げるわけねえよ！」

砂漠をもう何時間歩いただろう。

目に見えるのは発色の良い緑のサボテンと、焼け付くような砂の肌色だけだ。

「しかし本当に広い砂漠だなあ。……家を建てようか。」

「そうだな、……せつかく砂岩や砂があるわけだし、オシヤレにいこうぜ！」

少年は汗をかきながら、砂岩を並べ続けていた。

「はあ……ライモン、手伝ってよー！」

「俺はただお前にブロック渡すことしかできねえんだって。」

といて、いつの間にかビーチパラソルを広げ、

ボーカロイドの情報誌を読んでいた。憎たらしい。

「どこに持ってたんだよビーチパラソル！」

「小説の裏を覗くことになるが実は

「わあああああ！止めて！話さないで！」

少年は砂岩をさつきより速く並べていた。

松明を立てた。

「よしできた！」

作ったのは宮殿をイメージしたオシヤレな家。

窓にはガラスを張った。

その隣にはクリーパーをあしらった謎の砂オブジェ。

「なんでクリーパーのオブジェ作ったんだよ……」

「かわいいからだ！（キリリッ）」

「でも不吉すぎるだろJK（常識的に考えて）」

「大丈夫だって！何もこないって！……というフラグを立てておいて……！」

何の変哲もない朝を迎えた。

「いやあよく寝た！」

「でもすげえ暑くて寝付けなかったぜ……」

狼はあくびをかいた。

「あ！見えたぞ！」

そこにあつたのは黄色と緑だけでなく、深緑の木の上に白が積もっている景色。
雪国だ。

「やったやった！雪だ雪だ！」

「ライモンやけにうれしそうだな。」

・・・そうか！犬は喜び庭駆け回るとか言う歌詞の
童謡があつたな。」

「・・・俺は犬じゃねえ！」

犬が叫んだところでタイガバイオームに踏み入った。

「また村だ。」

見ると村人達がいた。

子供達は雪で遊び、

老人達は鍛冶屋の火で温もりながら雑談していた。

青年達は畑仕事や鍛冶の仕事をしていた。

「あ！けるべろすはっけん！」

「たいちようめいれいだ！こうげき！」

「・・・へ・・・？」

子供達は雪球を相手ではなく狼に向けた。

「わわわわわ！止め！」

狼は逃げ惑う。

少年は腹を抱えて笑う。

「これでどうだ！ワンワン！」

ライモンはやめろと喋りながら楽しんでるようだ。

狼は口に雪を含み、少年達に当てた。

「わあー！」

子供達が逃げ惑う。

「きやはははは！」

子供達も笑う。

少年はそれを見て楽しくなった。

「大変だ！裁きだ！裁きだあー！」

村人達はざわめく。

「なにしているの!?家に入って！さあ、早く！」

お母さん達は子供達を家に入れる。

「どどどどどどうしたんだ!?!」

「・・・とにかく行ってみるぞ！」

少年と狼は村人達が走る方向へ走り出した。

燃えている。

白い雪とは対照的に黒い煙が舞い上がっている。

家が燃えているのだ。

「水をもってこい！はやく！」

村人達のバケツリレーが始まった。

「あ・・・！ミイ・・・？ミイ！」

「どうしたんですか!?!」

「私の娘が・・・助けて・・・！」

「ワンワン！」

狼は炎の中へ消える。

「ライモン！」

中から小さな女の子と狼が出てきた。

女の子の服を口に咥えている。

「ミィ・・・！」

「ママー！うええええん！」

女の子はお母さんに抱きついた。

バシヤアン！

水をかける。

幾重にも幾重にも水を重ねる。

だが炎は消えることは無かった。

結局、誰もが無事ではあつたが、家は全焼だつた。

「さつきはありがとうございました！」

「わんわん！ありがとうっ！」

狼は照れる。

「いえいえ、この狼がやってくれたことです。礼ならこの狼に言って下さい。」

「じゃあ、ほとんど燃えちゃったんだけど・・・骨でいいかしら！」

狼は渡される前に口に咥えた。

「・・・ところで・・・さつき村人が『裁きだー！』って言っていたのですが

どういうことですか？」

「それは・・・」

村の一児の母は語る。

この村には昔から信仰しているものがある。

それは地の果てに住むという「富と災を与えし鬼」・・・

不運の続いた年には収穫をもたらし・・・

悪い者がいれば災いを与えた。

その姿はいろいろ伝えられているが・・・

知られているのは意外なことに、金の剣をもつ醜い豚の姿らしい。

醜い豚の姿だが、正義の心をもつ優しい鬼なのだ。

しかし・・・二年前から、「富と災を与えし鬼」は「悪魔」と化した。

一年ごとに貢物をささげなければ、災いを起こすという強欲な悪魔と化した。

富は一個も与えようとしなくなつた。

人は日に日に信仰を避けた。

豊作も無く、ついには生贄をささげるようになった……

「それが今日の災いなのです。……おかしいですよね……神聖な者を怖がる生活なんて……」

少年は黙っていた。

「何も私達は抵抗ができませんのです……！相手が悪魔なのですから……！」
少女はさびしそうに母親を見る。

「ママ……？なんでおめめからなみだでてるの？」

「……さあ、もう遅いから寝なさい。おやすみ。」

といつて、母親は娘の額に口付けをした。

「なあ、」

骨を口から離したライモンは問う。

「お前は・・・鬼を許せるか・・・？」

14：雪国の裁き（後編）

「お前は・・・鬼を許せるか・・・？」

ライモンは問う。

「俺は許せない。俺達がこの村に入った時の、あの子供達

の雪合戦の時の笑顔を見たか・・・？」

「・・・」

「俺もあの笑顔に癒された。砂漠の疲れだつて・・・一気に吹き飛んだ！

それに比べ、騒動の時の子供達の顔はおびえてた。」

「・・・」

「・・・そんな子供達の笑顔を消す者なんて・・・神聖に扱えるか！」

「・・・でも相手は鬼だ。どうにもできないだろ？」

「・・・俺が信じているのはだれだと思おう？」

「え？」

「俺だけじゃない、ムフェックリーの奴もそうだ！お前も・・・信じている相手がいるだ

ろう？」

——「父さん？」

「そいつだって、お前を信じていると思うぞ：そして、お前の帰りを待っている人も。」

「そう、信じている相手がこんなにして、あきらめていいのか？」

「……」

少年は黙った。

俺は、ライモンだけに信じられているんじゃないんだ。

母さんだって、俺の帰りを「信じている。」

ムフエックリー博士は、俺がThe Endに行くことを「信じている。」

父さんも——

俺は——『信じられている。』

「そうだな。俺は期待にこたえなきやダメなんだ！」

「その意気だ！」

「よし！いくぞお！」

「おお！」

少年と狼は歩き出し・・・

出そうとおもったが・・・

「・・・どこに行くんだ？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

少年と狼は成す術もなく、

立っていることしか、できなかつたのだ・・・

そんな宿舎の中で立っていた少年に、

窓の外がコンコンと鳴った。

「・・・？」

「なんだ・・・？」

ガラガラ・・・

窓を開けると、そこには少年がいた。

「ずっと 外で聞いてたんだ・・・ あんちゃん、鬼たいじにいくんだろ！」

「ああ・・・そうだけど・・・？」

「おいら、知ってるんだ！その犬がしゃべること！」

「な、なんだってー!？」

「まちがえた・・・このことはおいといて、地の果てにいく方法！」

「ど、どうやっていくんだ!？」

喋ることがばれた狼はたずねる。

「ゲートを使うんだ。この村の北にある教会の裏にあるんだ！」

「ほ、本当に!?案内してくれ！」

「そのかわり・・・」

「ぼくも連れてつてくれ！」

「へ？」

「強くなりたいんだ！あんちゃんみたいに！」

聞けばその子供は、さっきの話に感動していたらしい。

だから、ここにいるのも嫌になってしまったらしい。

そして、村の役になりたいらしい。

「いいけど・・・危険だつてことはわきまえておいてよ？」

「ああ、もちろんだ！おいら、ワクワクすつぞ！」

「ちよ、それは言っちゃだめえ！」

少年は叫んだ。

「ここがゲートだよ。」

木の防具をつけた子供は説明する。

黒曜石で淡々と囲まれた建造物。

なんともまがましい。

「ここを通り抜ければいいんだな？」

「まだだよ。このごろおいら気づいたんだけどさ……」

キセキが起こらなきやだめなんだ！」

「キセキ……？」

「まあ気長に待とう！」

一日が過ぎ、二日が過ぎ、六日が過ぎた。

空は薄暗い。

「なかなかこないなあ……？」

「オイオイ……まだこねえのかよ！」

「犬君、気長にまとうよ。キセキだから！」

「俺は犬じゃねえ！」

叫んだ時、後ろで轟音が響く。

ピシヤァン！

雷が鳴ったのだ。

ゲートに火がともされる。

紫色に光る。

「おおおおおおおおおー！」

「きたああああー！」

「やったああああー！」

二人と一匹は喜んだ。

「よし！早速いくぞー！」

「おおー！」「ああー！」

少年達は紫の炎の中へと向かっていった。

「ついた・・・！地の果てだ！」

「ここが地の果て・・・！」

赤い岩が広がる。遠くで灼熱の橙色をした溶岩の海が音を立てる。

少年達は赤い岩を踏みながら進む。

空には幽霊達がさまよっている。

幽霊達がこちらを見つけたようだ。

「タス・・・ケテ・・・」

ボオ・・・！

言葉は炎の玉に変わりこちらへ向かう。

「口から炎の玉!?!」

「うわ！」

少年達は伏せる。

バアアン！

後ろの床が崩れる。

「イキタイ．．．イキタイ．．．イキノコリタイ．．．！」

ボオ．．．ボオ．．．ボオ．．．！！

「やめろお！」

ドオン！

「うわ！」

「こいつは．．．厄介すぎる！」

地の果てはみるみる壊れていく。

まるでクレーターののように、穴ぼこだらけだ。
バアン！

ボオン！

「ストオーツプ！！！！」

少年は急停止した。

それに続き、後の狼と子供も停止した。

前の床が崩れ、下には溶岩が広がっているのが見える。

「あ、あぶねえ……」

「クルシミタクナイ……！」

ボオツ！！

炎の玉がこちらへ向かってくる。

「ダメだ……よけられない！」

「うわあああああああああああ！」

ガキーン！

前には・・・豚？

豚が炎の玉を剣で素早く跳ね返した。

跳ね返した玉は幽霊に当たった。

「プシューウ！」

そのまま、マグマの海へと落ちていった。

豚は言う。

「我は・・・正義を貫く地の戦士なり！」

15：醜い戦士

幽霊達は空を舞う。

少年達は豚の後に続いて地の果てを歩いていた。

少年と狼、子供はひそひそ話し合っていた。

(ねえ、おいら全然悪い悪魔に見えないんだけど・・・)

(俺もだ。見た目は確かにグロテスクだけどさあ

・・・ライモン、あの鬼って本当にお母さんが言ってた悪魔なのかなあ。)

(油断するな。たとえいい鬼に見えても中身は違うかもしれない。)

・・・もしかしたら食べるために、俺達を助けたのかもな・・・)

(ひい！怖いこといわないでよわんわん！)

(そうだよ、お前も犬鍋にされるかもしれないぞ！)

(・・・俺は犬じゃねえっつーの！)

「先ほどから何を話しているのだ。お前達は。」

(（ひいっ!!))

少年達は背筋が伸びた。背中に汗が流れる。

少年は咳払いをし、正直に言った。

「あなたはなぜ罪の無い村人達を裁くのですか？」

鬼は黙った。

少年達に緊張が走る。

（言っちゃった・・・言っちゃったけど良いのかこの空気!?)

（おい、お前のせいで気まづくなっちゃったじゃねーか!!)

（ガクガク・・・ブルブル・・・)

少年達は目を合わさないように、直立不動で横を向き、目を食い縛った。

「すまない・・・」

少年達は前を向きなおした。

「私が地位を剥奪されたのが原因なのだ・・・私が弱いばかりに・・・」

「・・・？」

「・・・勝手ながら、私の長話を聞いてはくれないか。・・・」

180年前・・・

私は生まれた。

天使のような母と、強い父のもとに。

醜い豚の子として。

私は正義を通した。

村人が倒れていれば口で啜えて近くの街に運び。

水の無い街にはバケツを首にぶら下げて街へ持っていった。

だが醜い、汚いなどと言って追い出された街もあった。

それでも一部の人々から愛されていた。

私はそれだけで十分だった。

やがて15年が経った。

季節は冬だ。

私は老いていた。

瞳がくすむ。

だが死ぬのも悔いはない。

・・・でもできれば、死後も善を尽くしたい・・・

森の木の葉の最後の葉っぱが一枚、ひらひらと地面に落ちた。

目を開けるとそこは赤い世界だ。

私は死んだのだ。

行つた先は地の果て。

天に昇らなかつたのだ。

私は泣きそうになつた。

(待ちなさい……)

声が聞こえる。

天の声らしい。

地の果てまで響く壮大な天の声。豚は耳を傾けた。

(おぬしは悪いから地の果てに行つたのではない。「天の指令」を受け取つたのだ。)

「……天の……指令ですか？」

(そうだ・・・おぬしには鬼という地位の配属を許可した・・・)

なぜなら、おぬしは死ぬ際までも善を尽くしたいと懇願したからだ。

これはおぬしにとつての「大きな宝」であろう・・・)

「・・・ありがたく、もらわせていただきます。」

(よろしく頼むぞ・・・)

それが天の声の最後の言葉だった。

それから165年もの間、私はとある村に富と災いを与えつづけた。

それはとても幸せであった。

人々の笑顔をずっと観ていたかった。

166年目。

私はいつものように仕事をしていた。

だが、何者かの炎の玉によって、溶岩に突き落とされた。

長い長い間溶岩の近くで体がなれていたため、何も無かったのだが・・・

地位を奪われた。

炎の悪魔は言う。

「神聖な者とは・・・美しく、それでいて力のあるものになるにふさわしいのだ。

お前のような弱く、醜い者には決してむきはせんのだよ・・・」

悪魔は高らかに笑う。

「あいつの裁きは非常に卑劣で、強欲なものであった。

貢物はむさぼるが富は決して与えない。ただ貢物を忘れると災いを与える。

最悪な「裁き」なのだ・・・」

「そいつはいつたい、どんな奴なのですか？」

「炎の悪魔・・・その名をブレイズと言う・・・」

16 : VS ブレイズ (前編)

「炎の悪魔……その名をブレイズと言う……」

「ブレイズ……?」

「奴は美しい炎を身にまとった強い悪魔なのだ……」

だが幼い頃は、守護者という鬼の次に当たるほどの地位を持っている有能な守護霊であつた……

時というものは残酷だ……良き者でさえ悪魔と化してしまう。」

「そいつが……『裁き』をかけているというわけですね?」

少年は問う。

豚はうなずいた。

「頼む」

豚はいきなり少年に懇願した。

「奴は話を聞かないのだ。見たところお前は弓を持っている。

．．．奴を倒してはくれないか。」

少年は狼を見る。

狼はコクン．．．とうなずいた。

子供を見る。

子供はビクビクと震える足をこらえ、うなずいた。

「．．．よし！ブレイズを．．．倒しに行くぞ！」

「「「おおー！」」」

「な、なんだあれは．．．！」

少年が見たのは暗い紫色の巨大な城の残骸のようなものだった。

その紫色の外壁に、しきつめられた溶岩の光が照らしている。

「「「」からは危険である。増援を呼ぼう。」

豚は口笛を吹いた。

「ピィ……!!!」

すると、2秒ほど経ったのち、豚が何匹も赤い石の陰から姿を見せた。

「ゾンビピッグマン第一部隊！只今全員揃いました！」

「うむ。これからブレイズの本拠地へと臨む。増援を願う。」

「ははっ!!!」

といつて、第一部隊は一列に並んだ。

「この豚たちは……？」

「こやつらは私の部下、言い換えれば同士だ。」

こやつらは生前、善を成して死んだ私の話を聞いて、

死ぬまで、いや、死んでも善を成そうとしたものたちだ。

天はこやつらを私の部下として与えた。彼らがいるとさびしさも吹っ飛ぶのだ。」

「マ○オパーティ買った？」

「いやルイ○ジマンションだろJK」

「おまいらソニ○ク・ザ・ヘ○ジホッグを忘れるなよ」

「おれとしてはファイ○ル（ry）」

「……ゲーム○ユーブの話だよなあれ……」

「ああ、そうだね・・・」

「おいらは絶対ボン〇ーマンだな！」

子供は目をきらきらさせて言うのであった。

少年たちは遺跡に行く。

松明をさしながら向かう。

ピチュン・・・ピチュン・・・

なにやら音が聞こえる。

向こうの壁際に物影が見えた。

「・・・！お前か！ブレイズは！」

ビクウツ!!

「・・・てあれ・・・炎まとつて無いじゃん・・・」

「それはマグマキューブという奴だ。・・・あ！近づくのではない！」

「え．．．？」

マグマキューブは高く飛び上がる。

そして少年の顔にひつついた。

「うわわわ！ガバゴボ．．．息が．．．」

「ワンワン！」

「それえ！」

子供の鉄の剣と犬が舞う。

「おい！おまいら！俺にもダメージが！やめ！」

マグマキューブは倒れ、アイテムをドロップした。

「大丈夫か！」

「へへ．．．全国のマグマキューブ諸君．．．おはようござえます．．．」

狼は思う。

(だめだこいつ．．．瀕死状態じゃねえか．．．)

豚は思う。

(こやつらで本当に大丈夫なのか．．．)

「．．．とりあえず肉食え！ほら！りんごも！」

ライモンは肉とりんごを手渡す。

「はあ、ありがとう、ライモン」

「これは・・・伝説の素材じゃないか！」

『『マグマクリーム』であるな。マグマキューブを倒すと出てくるものだ。』

「わあ、すごいなあ・・・ここで手に入るんだ・・・」

子供はへろへろしている少年をよそに、わくわくしていた。

「・・・少年達よ、同志達よ、気を引き締めろ・・・ついたであるぞ・・・」

そこにあるのは中央に溶岩の器がある部屋であった。

暗い部屋を溶岩が明るくしている。

「私の部屋にいる者は誰だ・・・」

ゴオツ・・・ゴオツ・・・

炎が神々しく燃える音がする。

「・・・出たな・・・ブレイズ・・・」

「またお前か。お前の醜い姿はもう見たくないといったはずであろう。」

「・・・今日こそお前を説得にきた・・・」

「ならば、私を倒すがいい・・・どんな時でも・・・美しく、強いものが勝つのだ。」

「正義を知らぬものに教えてやろう！第一部隊！出撃い！」

「「うおおおおおおお！」」

金の刃が舞う。

しかしその刃は軽々とかわされた。

「正義、根性・・・どれも醜い虚勢にしかすぎんだ・・・醜い者たちよ・・・」

その言葉の終わる瞬間、ブレイズは結晶化した炎を勢いよく廻した。

火の玉が第一部隊に向かって飛ぶ。

ボオ・・・
ボオ・・・

ボオ・・・

ボオ・・・

「ウ・・・！」
「ぐはっ・・・!!」

「ぐあー！」

「イ……！」

「弱い者達よ……」

「うおおおおおおお！」

「ワンワン！」

「おりやあああああ！」

二人と一匹がブレイズに向かって突撃した。

「はあ……醜い叫びだ……」

ボオ……

ボオ……

ボオ……

「おつと……あぶねえ……」

「ワン！……」

「うわわわ！あちちち！」

少年と狼と子供は運よく玉をさけた。

「くらえ！」

少年は鉄の剣をブレイズに向けて振った。

「私にここまで近づいたことだけはほめてやろう・・・」

「だが甘いのだよ」

ブレイズは勢いよく炎を廻して、一つの炎の玉を出した。

「あんちゃん！」

「だめだ・・・あいつは空中だ・・・！火の玉の餌食だ・・・」

「何をのんきに会話しているのだ・・・？弱い者達よ。」

ボオツ・・・ボオツ・・・

少年は火の玉をくらった。

少年は後方へ飛ばされる。

遺跡の道の上を飛ぶ。

下には、空気が広がるだけであつた・・・

狼も子供も・・・後を追うように空気の底へ落ちていった。

17：VSブレイズ（後編）

少年達は落ちる。

暗い暗い空中を。

下に近づくほど橙色で明るく染まる。

溶岩の泡の破裂する音も大きくなる。

ドサツ！　ドサツ！　ドサツ！

少年達は運よくも溶岩ではなく、黒い砂の上に落ちた。

だが致命傷であつた。

幽霊達は空をさまよう。

その幽霊達は傷ついたもの達を見つけた。

一粒の涙を流す。

その大きな一滴は少年達の頭上に降りかかる。

少年達の傷は再生されていく。

「あ……危なかった……死ぬところだったぜ……」

「なんで傷が治っていくんだ……?」

子供は自分の腕についた水滴をなめた。

「しょ……しょっぺえ……幽霊達の涙だったのか……」

「なんでわかるんだ?」

「伝説にあったんだ、地の果てには沢山の死者の幽霊がさまよっていて、

その後悔や苦しみをこめた涙は人を再生させるっていつてた。」

「しかしどうすれば勝てるのだろう……」

「そうだ……!おいらに考えがある。力でだめなら頭脳を使うんだ!……おいら地上へ戻るよ!」

「地上に……!?!お前見捨てるのか?」

「違うんだ……ちよつとした、武器をね……」

「おいらが作ってくるから、豚さんの援護をよろしく頼むよ！」

「・・・分かった！なるべく早くこいよ！・・・行こうライモン！」

「おう！」

少年と狼は遺跡を上へ上へと目指していった。

「まだ分からぬのか・・・お前では私に勝てない。」

「くう・・・何のこれしき！」

豚は剣を振り回す。

その剣は一向にあたらない。

「この世に正義ほど見苦しいものはない・・・」

ブレイズは素晴らしいながら、昔のことを思い返していた。

燃える民、それを狂うように笑う自分。

正義など・・・

ボオ・・・！ボオ・・・！

「ぐあ・・・！」

2発の火の玉が豚に直撃する。

「隊長・・・！」

「大丈夫だ・・・お前達は下がっている・・・」

「何故ですか・・・隊長！」

「正義をここまで馬鹿にされては・・・引き下がれまい！」

「この火の玉で全て終わりにしてしまおうでは無いか・・・！」

ブレイズは回転をし始めた。

ビュ・・・！

一つの矢がブレイズに刺さる。

「ぐあ……！」

ブレイズは苦しんだ。

「お前らは……生きていたのか！」

「ゾンビピッグマン、もう大丈夫だ。俺達が行く！」

「ヴ……ワンワン！」

ブレイズは笑い出した。

「何が大丈夫なのだ？ さっきとは何も変わっていないではないか！」

「いや、仲間がすごいものを作ってくれるんだ……俺はお前に勝てる。」

「次は溶岩に落ちてしまうことを祈ろう……」

ボオ……　　ボオ……

少年達は火の玉をよけた。

「俺の矢をくらえ！」

ビュ……！！　ビュ……！！

「矢ごとときで私が倒せると思うか！」

ボオ……！！　ボオ……！！

それからブレイズと少年達の攻防が始まった。
火の玉と矢が飛び交う。

少年が矢を撃った時であった。

ビュ……！！　ボキッ！

「弓が……壊れた！」

「剣で行くしかねえな！」

しかし、遅かった。

ブレイズはこちらへ近づいてきた。

火の玉を一発放つ。

「うわあ！」

「ガルルルル！」

狼はブレイズへ飛び掛る。

だが火の玉を浴びせられてしまった。

少年と狼の背後には壁。もう逃げ道は無かった。

「あんちゃん！これを！」

横の遺跡の橋から子供は2つのポジションを投げた。

それを少年が受け取る。

「それを飲んで！早く！」

少年と狼は水色のポーシジョンを飲む。

「・・・何もかわらないぞ・・・？」

「おい！まさか何も効果がないわけじゃねえだろうな!？」

「ハハハハハ・・・！ただの風邪薬で倒せると思っていたのか！くらえ！
「ぐっ！」

少年と狼は至近距離で火の玉をくらってしまった。

だが、無傷であった。

「何故だ！私の火の玉を近く受けて立てるはずが無い！」

「それは、火炎耐性のポーシジョンだ！マグマキューブが教えてくれた！」

「よし……！これなら奴に勝てる！おらあ！」

ズシユ！

「ぐ……！」

ザッ！

ズバシツ！

「くっ……！」

ブレイズは3回斬られた。

「あんちゃん！わんわん！豚さん！そこから離れて！」

少年達と豚達はブレイズから離れる。

「くらえ！」

子供は一つのポーションを投げた。

ポーションの瓶が割れ、中からは液が漏れ出した。

「ぐ……なんだこれは……！体がしびれる……！」

「蜘蛛の目から抽出した毒のポーションさ！」

「こんな弱い者たちに・・・負ける・・・だと・・・?」

ブレイズはその場に倒れた。

ゾンビピッグマン達は

長い、長い年月の戦いの末

炎の悪魔に勝利したのであった・・・

18：炎

ブレイズはその場に倒れた。

ゾンビピッグマンは問う。

「・・・なぜ私の地位を奪ったのだ？」

「私は、昔、火事を理由として地の果てにたどり着いた・・・」

私は生まれてすぐ、人々に消され、地の果てへ向かった。

まだ子供であった。

幼い私は地の果てで天の裁判を受けた。

周りの視線が体中に針となって突き刺さるように感じた。

幼い私にとって・・・それは恐怖であった。

私は気が動転していた、いや、狂っていたのだ。

私はもう一度、裁きにかけられた。

またあの恐怖を味わうことになる。

幼い私は耐え切れなかった。ただ逃げるしかなかったのだ。

それから1年後、隠れていた私の目の前に飛び込んだのは、醜い豚であった。醜い豚ごときが鬼という地位を与えられている。

「なぜだ！私は美しいのに誰からも認められなかったのだ！

正義も一瞬に碎け散った！なぜ、なぜこんな醜い者に負けるのだ！」

ブレイズの目からは涙が光っている。

「ブレイズよ……」

ゾンビピッグマンが言う。

「私は、キノコのシチューが大好きだ！」

「へ……？」

「ん……？」

「は……？」

少年達は唾然とした。

ブレイズも目を開いている。

「お前……ふざけているのか！」

「いいから聞け。私が子供の頃、村人からキノコシチューを貰った。それはとても、家庭の味がした。おいしかったのだ。」

「私が雪国に食糧を運んでいた時、家の中で子供達と暖かい時を過ごした。」

「・・・キノコシチューの作り方を教えてやろう。」

キノコを二種類用意する。それらをじっくりと火にかけるのだ。」

「初めての暖炉とはとても心地よかった。雪国でも人々の心が温かいのは

この暖炉のおかげだったのだ。」

「・・・わかるか？私は火に恩恵を受けている。決して、お前は認められていないわけじゃない
のだ。火は古来から人々や動物に愛されているのだ。」

「・・・私は・・・ただ自分の非力さにいじけていただけだったのか・・・」

「そうだ。お前は炎の守護神だ。お前の仕事にもどらなければなるまい。」

(待て・・・)

「こ・・・この声は・・・！」

「天のお方だ！」

(まだ決着はついておらぬ・・・ブレイズ・・・お前には罰を受けてもらうぞ・・・)
「待つてください！もう決着はついたのです！」

(だまれ・・・裁きだ・・・刑罰を發表しよう・・・)

(笑え・・・)

「え・・・!!？」

(笑うのだ・・・炎の守護神として心が温かくならねばならぬ・・・笑うのだ・・・)

ブレイズから息が漏れる。

その息から、笑いが起こる。

笑い声は地の果てに響く。

まるで地の果てに光がさしたかのように、周りは明るくなった。

豚もそれにつられ笑う。

少年達も笑ってしまった。

天も低い声で笑っていた。

地の果てから聞こえる笑い声は

いつまでも、途絶えることは無かった。

地の果てに灯された、
一つの炎のように。

19：レッツツゴ―！ジャングル！

「少年達よ、本当に、ありがとう。」

「私からも礼を言う。ありがとう。」

「それよりも、これからは二人で仲良く地上の人たちを守ってくださいね！」

「ああ、もちろんだ！・・・というわけでブレイズ、酒持ってきてくれ。」

「はあ!? お前何俺に指図してんだゴルア？」

「いやお前守護者だから・・・俺よりも地位低いじゃん・・・だから・・・」

「いい加減にしろこの！ジジイ！」

「はあ!? 何を！この青二才！」

「俺は青二才じゃねえよ！どっちかつつと赤二才だバーカ！」

二人はガミガミ喧嘩をし始めた。

「・・・もともと気が合わないのかもね？」

「おい・・・ここまでトークできるんだったら漫才やれよ・・・」

「はははは・・・!」

二人は幸せそうな顔で、肩をくんでいた。

ネザーゲートを通って雪の村に戻った。

「ありがとう、あんちゃん! これからは村で楽しく過ごせそうだよ!」

「そうか・・・!」

「・・・ところであんちゃんたち、何で旅してるの?」

「世界を見に行くんだ! いろいろな世界を!」

「へえ・・・おいらも行ってみたいな・・・」

「行っても良いわよ!」

家から出てきたのは子供のお母さんとお父さんだった。

「いいの!?!」

「昔から、かわいい子には旅をさせよ、って言うからねえ……」

「あなたも、もうそんな年頃だからね！お兄さんに迷惑かけるんじゃないよ！

……ということとで旅人さん、息子をよろしくお願いします。」

「……分かりました！」

「いやーにぎやかになるねえ……」

お父さんとお母さんはびつくりした。

「い、犬がしゃべった！」

「な、なんと！」

「おい、ライモン！」

「いけね！……あ！お父さんだいじょうぶですか！」

「ブクブク……お前にお父さんと呼ばれる筋合いはない……」

「だめだこりや……気を失ってるよ……」

少年達は草原を歩いていた。

「ところでお前はなんていう名前なんだ？」

「おいらはジャック。友達からは歩く冒険の書って呼ばれてるんだ！」

「変なあだ名だな・・・」

「お・・・見えてきた！」

見えたのは自宅。久しぶりに戻ったのだ。

「あゝー！動物が散乱してる！」

「作業が途中だったなそういえば・・・」

「集めようか！」

動物達を集めてから、少年達は自宅の床についた。

少年はおきた。

腹が減っていたので豚肉を食おうとしたら・・・

「あ・・・」

「むにやむにや・・・骨骨パラダイス・・・むにや・・・」

「ライモン！おきてー！」

「もう自分がほ・・・はっ！」

何の夢を見ていたかは知らないが、少年は今の状況をライモンに話す。

「石炭が切れちゃったよ・・・」

「意外と早いな・・・松明とか燃料に使っちゃったからか。」

「木炭なら20個ほどあるんだけど・・・これじゃこれから切れるよな・・・もぐもぐ」

「そうだな・・・もぐもぐ」

「どうすれば・・・むしやむしや」

少年と狼はパンを頬張りながら悩んでいた。

「ぐー・・・真剣な眼差しで見つめるスフィンクスの放つ幻想的な香り・・・」

「こいつまだ寝てるのかよ・・・ってかなんの夢見てんだよ！」

「それは君も同じじゃないかライモン・・・おい、朝だぞー！」

「それでいて珍しい色のスタチュー・オブ・リバティー・・・はっ!」
「なんで世界遺産なんだよ・・・」

「なるほど、炭が足りないんだね・・・それなら沢山木の生えるところに行こう!」
「でもほとんどの木って丈が短いからそんなに取れないんだよな。」

簡単に4スタック分くらい原木が取れる木があれば・・・」

「ジャングルしかないな!」

「ジャングル!?!」

「確かここへ来る途中、東に密林の気候帯があつたんだ。そこへ行ってみよう!」

少年達が東へ歩くと

そこには天までそびえる大樹だった。

明るい緑の葉に、赤橙色の幹。

「ここがジャングルか……」

「壮观だな……」

「さっそく伐採しようよ！」

「でも……どうやって？」

「こんな大樹じゃ、下からブロック積み上げて切るのは大変だぞ。」

「いや、あれを見てよ！」

子供が指差したのは幹。

その幹をよくみると緑色の網のようなものがかかっている。

「密林の気候帯ではツタが群生しているんだ。あれをのぼって、木の天辺から

一気に切る、という寸法さ！」

「なるほどな……」

「よし、のぼるか！」

少年は木の幹をつたってのぼり、木を切っていく。

3 本目を伐採した時、気づけば夜になっていた。

「ふう．．．4 スタックどころじゃないな．．．7 スタックか!」

「すごいな!」

「．．．やばい．．．! 夜だ!」

「何だ? 確かに夜は怖いがそんなにあわてることは」

ガサ．．．

「!?!」

ガサッ

ガサガサ．．．

子供は涙目になりながら答える。

「密林の夜は．．．見にくいからどこから敵が来るのか分からないんだ．．．」

20：真夜中のジャングル

ガサツ・・・

ガサ・・・

四方八方から音が聞こえる。

だが姿が見えない。

ガサツ・・・

「そこだ！」

少年が影を狙って矢を放つ。

「シュツ・・・！」

「やばい・・・クリーパーだ・・・」

ガサツ

「そしてこっちだ！」

ビュツ・・・

「カラン・・・」

「スケさんまで!？」

「くそお・・・ここまで多いと弓矢でもきりがないぞ・・・!」

「ひとまずその木に登ろう!」

少年達はいそいで傍の背の小さい木に登った。

モンスターたちが姿を現す。

クリーパー・・・

ゾンビ・・・

クリーパー・・・

スケルトン・・・

クリーパー・・・

クリーパー・・・

クリーパー・・・

蜘蛛・・・

「く!よりによつてクリーパーが多い!」

「こんな数のクリーパーに爆破されちゃひとたまりもないよ!」

「朝まで経つてもクリーパーは死なないからな・・・」

ビュッ!

「うわ! 矢が! 皆気をつけろ!」

「この木なら蜘蛛は寄ってこないが・・・」

「ライモン! 後ろ!」

「・・・! ガブッ!」

もう少しでやられるところだった。

後ろの背の高い木から蜘蛛が伝ってきたのだ。

「こりゃそんなに時間かけてられないぞ・・・」

「背の高い木を伝って砂漠に出ればなんとか踏ん張れるけど・・・」

「あっちだな・・・」

ここから二つ、三つ木を伝っていったところに砂漠が見える。

「よし! いくぞ!」

少年達はジャンプしながら砂漠へ目指した。

「もうすぐだ・・・到着!」

砂漠には着いた。

「ぬ、ぬこだ!」

「か、かわええ・・・」

「カラン・・・コロン・・・」

「ヴァー」

見るとスケルトンやゾンビたちも見とれていた。

「シュ・・・シュー!」

クリーパーたちは拡散していった。

「い、いまだ!」

「逃げるぞー!」

「よしきた!」

少年達は猫を抱えたまま、夜の砂漠を走り出した。

スケルトン達はようやく気づき、追いかけてきた。

クリーパーやゾンビは歩いていた。
そのとき、背後から走る音。

見ると人間が鬼のような形相で猫を抱えたままこつちに走ってくる。

「うおおおおおおお!! 道を開けろおおおお!!」
「にゃー!」

クリーパーとゾンビは驚いて逃げる。

どちらも人間に。

人間達と狼はそのまま砂漠を走っていった。

ボタン！

少年は自宅のドアを急いで閉めた。

「はあ、はあ、はあ・・・」

「なんとか、逃げ切ったな・・・」

「もう、なんか無理やりな展開だな、もはや作者もネタぎ・・・」

「わーわーわーわー！それを言うな！」

(ナイス、少年。b)

「おいら、もうドキドキしまくりだよ・・・」

「こんな冒険も、いいね！」

ジャックは言う。

「・・・ああ、そうだな！」

「まったくだ！スリル満点だ！」

少年達は思いつきり笑う。

ヴァー・・・

ドンドン！ドンドンドン！

バリツ！

「ヴァー！！」

「「あ」」

その後、少年達はボコボコにやられるのだった・・・

「シゲンハドウダ・・・？」

「ハイ、カクニンシマス。モクザイ1378000コ、セキザイ893680個・・・」

ここは無数の黒い柱が建つ漆黒の世界。

謎の生物が目録を読んでいる。

「・・・ハナ65879個。イジヨウデス。」

「ソウカ・・・モウスグダ・・・」

謎の低い声。

「
・
・
・
セカイハ
・
・
モウスグイツシヨクトナル
・
・
」

21：蠢く影

少年と狼はジャングルで集めた木炭をチエストに

入れながら、チエストの中身を整理していた。

「木炭がたくさん集まったな！」

「本当だな。4スタック半ぐらいか・・・」

「げっ!? イカ墨がなんで1スタック分あるんだよ!?!」

「いや、池にイカがうじゃうじゃいたからさ、倒したらこれぐらいたまった。」

「こんなに使えねえだろ・・・羊毛を塗るぐらいしか使えないぞ?・・・ポイツと」

「ああー! 俺の努力の結晶を軽々と・・・肉が少ないな・・・」だからさえぎるなつて
!」

「そういえばジャックはどこなんだ?」

「あ、外でレッドストーンばらまいてたぞ。」

「何を作っているんだ?・・・」

少年は外に出た。

「よし、できた。」

「なんだこれ？」

「へへ、これぞおいらの傑作！『半自動農業マシン』だ！」

みると四角く囲まれた中に小麦、サトウキビ、スイカ、カボチャが
育てられている。

「何だこれ？言われても分からん・・・」

「これは土に種さえまいておけば、後はボタン一つで収穫してくれるんだ。」

「レッドストーンってこんな使い方するのか。」

「レッドストーン回路を組めばトラップも作れるよ。」

「なるほど、分からん。」

「まあ作物が育つまで家で待とう。」

少年達は家に戻った。

あれから二日が経った。

少年達は『半自動農業マシン』の様子を見に行くことにした。

「全部育っているね！」

「早くパンが食いてえよ……」

「このボタンを押すのか？」

「そう、押すだけだよ。」

「ポチツと。」

バツシユン！

ピストンが押されて、水流で作物が全て流されていく。

そして取り出し口には大量の作物があった。

「おおおおおおおおお！」

「こんな感じだよ。」

「レッドストーン回路っておもしろいな！」

「そうでしょ！武器にも使えるんだ！」

「へえ、俺も作ってみ……」

ビュツ・・・

!?

何か前を通った・・・気がした。

「おい、さつき何か通らなかつたか？」

「え？何も。」

「どうしたんだ？」

「・・・いや、なんでもない。」

その夜。

少年達は家の周りの湧きつぶしをしていた。

「モンスターが家の周りにスポーンすると大変なことになるからね。」

「たしかにな・・・朝起きたときに蜘蛛の鳴き声があるなんてごめんだぜ。」

「昼のあの影はなんだったんだろう・・・」

「お前は疲れてんじゃないのか？このごろ忙しかったから。」

「そうだね・・・ちよつと今日は寝ておいたほうが良いよ。」

「ああ、おやすみ。」

少年は寢床についた。

ビュ・・・

!?

少年は謎の音に目を覚ました。

まだ夜だ。

外を見てみると・・・

「ジャック！ライモン！」

「お、おお、お前か……」

子供と狼が倒れていた。

ジャックは話す。

「おいら、暗闇の中に、何かの影が見えたんだ……」

それを……見たら……その影に……一瞬で……

近づかれたんだ……ライモンも……攻撃したけど……倒された……」

「大丈夫だ。ジャック。休んでいい。」

「俺がそいつを倒す。」

少年の眼には炎が灯っていた。

22 : VS 謎の影

ビュツ・・・

ビュツ・・・

「・・・くそお・・・なかなか姿を現さねえ・・・」

まだ月が真上に昇っている夜中に

少年は剣を構えていた。

「気をつけて！そいつは・・・高速で移動して背後から襲うんだ！・・・後ろ！」

ビュツ・・・！

気がつくくと背後には黒く、長身で眼が横に長い謎の生物。

（お父さんはな、宇宙人も見たんだぞ！こんな顔の！）

昔、自分の聞いたお父さんの話を思い出した。

・・・父さんは、まさしくこいつのことを言っていたのだ。

ドン！

「ぐはっ・・・！」

少年は長身の生物のパンチで倒れた。

「こいつ・・・高速で移動するだけじゃない・・・強い！」

「また来るよ！そいつに背後を取らせちやダメだ！」

「そんなこと言われても・・・」

ビュッ！

バゴ・・・!

「がっ・・・!」

少年はまたパンチを食らってしまった。

だが、後ろに剣を振り回す。

しかし宇宙人は逃げた。

「後ろを取られちゃ、勝ち目がない! どうすれば・・・」

その時、子供は考えていた。

何なんだ・・・こいつは・・・

何も知らない・・・

知らないことに・・・こんなに恐怖を持つなんて・・・

おいらに・・・旅の選択肢は・・・当てはまらなかったのか・・・?

「!・・・そうだ!」

少年は思いついた。

少年は家の壁に近づいて、壁と反対の向きに立った。

「おい、宇宙人・・・」

「俺の背後、とってみろよ。」

ビュツ・・・

ギュー・・・

宇宙人は少年の背中と家の壁の間に

まるで紙のように挟まった。

横長の眼が縦におしつぶされている。

「ぶっ……ははははは！ばーか！」

「オマエハ……オコラセルアイテヲ……マチガッタ……！」

ビュツ……！

ドカツ！

バキツ！

「ぐっ……！ぐはっ！」

「あんちゃん！」

宇宙人は少年にラツシユを繰り返している。

「ぐはっ……ふん！」

少年はがむしやらに剣を振り回した。

宇宙人は逃げる。

そのとき、少年の眼が大きく開いた。

少年はパンをバッグから取り出して、食べながら言った。

「ジャック・・・分かったぞ、あいつの弱点。」

「え・・・！」

宇宙人はまた少年の前に移動した。

「かかったな！」

少年はすぐさまバケツの水を下にこぼした。

「グッ・・・」

宇宙人は逃げる。

「・・・なんであんちゃん・・・分かったの？」

「あいつが遠くへ行った時、池に入ってもがいたのを一瞬見たんだ。」

あいつの弱点は水だ！」

「ごめん・・・おいら、何も分からないんだ・・・」

「大丈夫だ。何も心配することは無い。・・・！来たぞ。」

大丈夫———？

ビュツ・・・

「おりゃー！」

少年は出た瞬間に剣で切った。

見事、相手は倒れたのだった。

「あれ？なんだ・・・強いのはパワーと高速移動ぐらいなのか？」

宇宙人から、謎の玉が出た。

「？何だこれは・・・」

「ううう・・・ここは・・・」

「あんちゃん！宇宙人がおきた！」

「なんだって・・・！！・・・？なんか様子がおかしいぞ・・・？」

「開放された！やった！自由だ！」

「……? ……わけがわからねえ……! ライモン! 大丈夫か?」

「むにやむにや……骨であしらった自分だけの太陽光発電ハウス……」

「こ……こいつ……のんきに寝てやがって……」

「ありがとう、私はエンダーマンです。よろしく。」

「エンダーマンはなんで襲い掛かってきたんだ? そんなに友好的なのに……」

「……分かりました。話が長くなりますが……お話しします。」

それは今から18万年前……

世界には六つの種族がいた。

一つ目は石、土、雪などの物質。

二つ目は木、草、花などの植物。

三つ目は犬、にわとり、猫などの動物。

四つ目はゾンビなどのモンスター。

五つ目は村人、つまり人種。

六つ目には——実際には四つ目に入るのだが区別されている種族。だが名前は無かったのだ。特徴は、長身で、横長の眼を持つ。

彼らは人間達と非常に友好的であつたため、モンスターという「人間と敵対するもの」という枠の中から独立された。

あるときは収穫を手伝い。
あるときは資源を回収する。

それと同時に人間も自分達の文化や文字を教えていた。まさしく、人間にとって友のようなものだったのである。

だが

その5万8千年後。

宇宙人の住む世界・・・後のThe Endを支配する王はその生涯を閉じ、自分の息子に王の権限を託した。

息子は——王ではなく、もはや暴君であった。

23：世界のスキマ

前の王の息子は暴君であつたのだ。

自分の世界だけを中心とする、独裁政治。

当然、人間達との絆を持っている私達は反対した。

だが・・・

暴君は謎の水晶を私達の体の中に閉じ込め、心を支配した。

そして人間達の世界の資源を強引に集めるように命令したのだった。

「サア・・・アツメルノダ・・・ヒトヲコロシテデモ・・・」

「「「ハッ！」」」

私達はなすすべもなく操られ、人間を殺し、資源を手に入れた。

人間達はそんな宇宙人達に失望し、私達をこう名づけた。

—— E n d e r m a n . . . 全てが終わってしまった世界から来た者。

「その水晶はあなたの手にしているように攻撃を受けることで心から出て行くのです。しかし、操られた私達に勝てるヒトは久しぶりに見ました・・・」

10年前に私は一回倒されたのです。

男はとても強かった。

その男は私がマインドコントロールから解けたすぐに、こう言っていました。

『私は君達を救いたいのだ！君の住む世界に・・・もう一度案内してくれないか！』

その男は今もなお、長い戦いを続けています・・・暴君と。

私も戦ったのですが・・・すぐに水晶で操られてしまいました・・・」

「・・・おい、ちよつと聞きたいんだが・・・」

ライモンが口を開く。

「なんでこの世界の資源を集めるんだ？理由が分からない。」

「それは・・・私達の暮らす世界には主に二つの素材しかありません。」

黒く硬い石に白い大地という・・・

それに比べ、この世界の素材というものは皆、特殊な力を持っているのです。

その力を使って暴君はこの世界に『スキマ』を作ろうとしているのです。

——その計画がすでに始まろうとしています。

そのスキマからは沢山のエンダーマンが現れ、この世界を

全てThe Endに染めようとしているのです・・・！」

「「ええ!?!」」

「そんな．．．恐ろしい計画が．．．こんな平凡な日常の裏で．．．実行されつつあるのか．．．!?!」

「そんな．．．この世界は．．．白と黒に染まっちゃうの!?!」

「く．．．『全世界の暴君』になるわけか．．．」

エンダーマンは頭を下げた。

「．．．お願いします。私と共に、暴君の計画を．．．阻止してくれませんか?」

「．．．分かった! 皆、OKだよな?」

「．．．ごめん、あんちゃん」

「ジャック．．．お前何を言っているんだ? 怖いのか?」

ライモンは問う。

「おいらは．．．弱いし何も世界なんて知らない。戦力にならないんだ．．．」

「このエンダーマンだって．．．おいらが何か知っていれば．．．もっとすぐに倒せた

はずなんだ……！

おいら——降りるよ……」

少年は笑う。

「ジャック……お前何言ってるんだ？」

狼も笑う。

「本当だ……お前……バカか？」

「な……ふざけてるんじゃない！おいらは……」

少年はまじめな顔をして言った。

「旅つてものは今までの知識を実践していくものじゃない、

……手探りして、学んでいくものだぞ。」

手探り——！

そうだ、あんちゃんは——「世界を見たい」って言ってた……

あんちゃんは——毎日手探りしているんだ！

「分かったよ。あんちゃん。おいらは．．．『世界を学びたい』！おいらも戦うよ！」

「よし！その意気だ！さあ、みんな．．．」

少年は手を差し伸べる。

その上に狼の肉球が乗つかる。

その上に子供の小さな手。

その上に黒い手が乗った。

「暴君を倒すぞ！」

「『「おおー！」』」

「コロコロ．．．」

24：終わりの世界へ

西の空に、紫色の切れ目が見えていた。

「……ついに始まったか……」

「こうしてはいけません。皆さん、防具や武器の準備をよろしく。」

ここはとある緑の草原。

西の空に紫色の切れ目。

その様子を村人達は見ていた。

鉄の人形と村長も。

「これは……どういふことなのだ……」

「……」

ここはとある灰色の洞窟。

西の空に紫色の切れ目。

クリーパーやゾンビたちが洞窟の外を見る。

帽子を被ったスケルトンも、弓の手入れをやめた。

「・・・あれは・・・何なのだ？・・・」

ここはとある深緑のジャングル。

西の空に紫色の切れ目。

猫はそれを見て毛を立てた。

「プシュウウ・・・」

ここは赤い地の果て。

西に紫色の切れ目。

鬼と守護神は見る。

「なにやら不穏な空気だ・・・」

「これは・・・ただ事ではないな・・・」

ここはとある白の雪国。

西の空に紫色の切れ目。

子供と母が窓から覗いている。

「ねえねえママ・・・あれなに？」

「・・・お母さんにも・・・分からないのよ・・・」

ここはとある黄色の砂漠。

西の空に紫色の切れ目。
博士と村人達を見る。

「・・・敵は・・・もうすぐ来るぞ！・・・武器の準備だ！」

「「ああ！」」

少年達は洞窟の奥へと進む。

もう明かりが点いている。

壁や床の鉱石もほとんど回収しきっている。

「・・・こちらです。」

そこにあつたのは、12個の台座。

周りに白い虫がたくさん這っている。

「（こ）だ・・・」

ライモンは懐かしい思いで歩いていた。

その白い虫を追い払って進んだ。

「・・・ここにエンダーアイをはめるのです。」

「ムフェックリーから貰ったこの玉だな。」

少年は一つずつはめていく。

最後の一つをはめた途端、少年達は吸い込まれた。

「」が・・・The End・・・!

前に広がる殺風景な景色。

エンダーマンがそこかしらにいる。

「・・・ダレダ・・・オマエラハ・・・」

一人のエンダーマンは近づいてきた。

「やばい・・・」

少年達と共にいるエンダーマンは、そのエンダーマンの腹を殴る。

「ウ・・・」

水晶が体から出て倒れた。

「エンダーマンは私が何とかします。・・・暴君はそこです！」

エンダーマンは空を指す。

「・・・オマエラハナンダ・・・」

低い声がした。

少年達は見上げる。

そこにいたのは巨大な真つ黒な竜であった。

「……こいつが……我らが暴君、エンダードラゴンです。」

「……エンダードラゴン……この計画を……俺達が消してみせる！」

少年は答える。

「ハハハハハハ……コンナチビニ……ケサレルヨウナケイカクデハナイワ！」

竜が飛んできた。

突進するつもりだ。

「気をつけてください！こいつの突進は……最強です！」

・ゴオオオオオオオ！

「うわー！」

「くっ！」

「わわわ！」

少年達の横を竜が通りすぎた。

「ひとまず大地へ！」

少年達は広い大地に足をつける。

「シラレテハイケナイ……」

・「シラレテハイケナイ……」

「このー！」

ドツ！

バゴツ！

「グツ！」

水晶玉が二つ落ちる。

ゴオオオ！

「おりゃー！」

「ガブツ！」

「たあっ！」

二つの剣と牙が竜へ向かう。

全ての攻撃が当たった。

「よしー！」

だが・・・

傷は再生されていった。

謎の光を浴びて。

「何?!再生している!」

「なんでなんだ!?!」

「・・・分かったよあんちゃん!あの柱の頂上から光がでている!

その光が回復させてるんだ!」

ジャックは空を指した。

「あんな高いところにのぼらなきゃならねえのか!?!」

「めんどくさいことを!」

「アタマノイイ・・・トイッテホシイナア!」

ドラゴンは少年に突撃していく。

ゴオオオオオ!

「わああああ!」

「あんちゃん!」

「小僧!」

グシユツ！

「!?」

少年の目の前にいたのは一人の男。

頭は・・・かぼちや？

剣でドラゴンを斬ったようだ。

「グウ・・・」

ドラゴンは一旦、柱の近くへと向かった。

「ここへ来たからには、油断してちゃいけないなあ……」
と、頭のかぼちやをはずした。

「旅人さんよ！」

「お……」

「お父さん……！」

25：再開

ここは草原の村。

村人達は宇宙人の襲来に驚いていた。

「女と子供は避難するんだ！」

「うわぁん！ママー！」

「大丈夫。近くの洞窟に逃げるわよ。」

「コノセカイハ・・・イツシヨクトナル・・・」

「ゴーレム！村を・・・守ってくれ！」

「ゴオオオオ!!」

鉄のパンチが舞う。

その強力なパンチにはさすがにエンダーマンもかなわなかつたらしい。

3体のエンダーマンが吹っ飛ばされ、家の壁に激突した。

そして水晶を出した。

ゴーレムはエンダーマンをなぎ払う。
「いいぞー！ゴーレムー！」

ここは砂漠の村。

宇宙人の集団が地平線からこちらへ来る。

ムフェックリー博士は指示を出す。

「大砲用意ー！撃てー！」

屈強な男達はそれぞれのレバーを引く。

6つほどのTNTがそれぞれの大砲の中で点火される。

少したってからもう一つ、TNTが点火された。

その瞬間、爆風と共にたくさんのTNTが空を飛んでいった。

そして、どれも宇宙人の集団の中に落ち、爆破した。

「「グワアアアア・・・」」

たくさんの宇宙人から水晶が出た。

「「よっしやあぁー！」」

「・・・順調だ！」

「ここは黒い世界。」

「お父さん・・・！」

「ナニイ!？」

「あんちゃん・・・の・・・お父さん？」

「あなたは・・・！10年前の・・・！」

少年は涙を流した。

「お父さん・・・生きてたんだね・・・」

「ごめんな・・・心配かけて・・・」

男は少年の頭をなでた。

まるであの子供の時のように・・・

「さあ、もう涙は終わりだ。．．．ルーフス。」

エンダーマンがいるってことは、話は聞いているな。」

「ああ、この世界を暴君から助けるってことだね．．．

．．．あいつは攻撃を受けるたびに回復する。」

それをどうにかしないと．．．手を出しても意味が無い！」

「では、こうしよう．．．お前達4人はそれぞれの黒い柱の根元から

黒い柱の頂上へたどり着いてくれ。私はドラゴンをおびき出す。．．．わかったな？」

「「「おおー！」」」

「．．．おい！ドラゴン、長年の決着をここでつけようか。」

「ノゾムトコロダ．．．オマエハ．．．ソウダナ．．．」

ドラゴンは男に向かって飛んでいく。

「．．．ニワトリニデモカエテヤロウ！」

ビュオオオオオ!!

「おおおおお！」

ズシヤ！

「フツ・・・ヤハリツヨイ・・・ダガマダマダ・・・！」

少年は父の戦いを初めて見た。

「さすがだよ父さん・・・強い・・・」

「おい！」

狼は爪を立てて黒い柱に登りながら言う。

「今は見ている場合じゃねえだろ！」

「ご、ごめん・・・俺達がこの頂上に行くんだ！」

少年は土を積み続けた。

エンダーマンはワープで頂上まで移動した。

「・・・この結晶が回復の元だな・・・」
エンダーマンは結晶を破壊した。

ドオオオオオン・・・

「エンダーマンが壊したみたいだ・・・おいらも早く行かないと・・・」
「ク・・・コワサレタカ・・・コシヤクナ！」

ドラゴンは方向転換をした。

「あ!!しまった・・・!気づかれた！」

「ん?何だこの音・・・?」

ゴオオオオオオオ!

狼は気づく。

「つておわー！助けてくれー！」

「あいつは両手・・・いや両足がふさがってるんだ！」

「わんわん！」

「ライモンさん！」

その時、一本の矢がドラゴンに刺さった。」

ズシャー！

「・・・？・・・ナニモノダ・・・！」

「ジョー！！」

少年と狼が言う。

「ス、スケルトン!?!」

子供と男と宇宙人が驚く。

「・・・偶然終わりの世界に来てな！」

「このお！嘘つきやがって！」

狼は笑う。

「よし・・・！頂上についた！・・・この結晶だな・・・たあ！」

ボオオオオン・・・

2個目の結晶が爆破された。

「グツ・・・コノジンミンドモメ・・・！」

ドラゴンは柱の頂上にいる少年に体当たりした。

「うわあああ！」

少年は落ちる。

下が全く見えないほどの高い柱から・・・

26 : The End ?

「うわあああ!!」

少年は落ちる。

ドサツ・・・

少年は眼を開くと・・・

「ゴーレム！村長さん！」

「危機一髪でしたな！」

「ガガ・・・」

ゴーレムが両手で受け止めていたのだ。

「・・・村はどうしたんですか・・・?」

「私達の村の名前を忘れたのですか?」

おい! 旅人さーん!

増援だー! 戦うぞー!

「ストート村・・・でしたね!」

村人達は村に襲撃してきたエンダーマンを

全て倒したのだった。

後ろには仲間についたエンダーマン達がいる。

「ナニ・・・エンダーノナヲモツモノガ・・・ニンゲンニ・・・マケルダト・・・!?!」

ドラゴンは言う。

「ゴノ・・・カトウナジンミンドモメ・・・!!」

ドラゴンは村人に向かって突進する。

わああああ!

きやああ!

村人が逃げる。

「フツ・・・シヨセンハヨワイモノタチダ・・・」

バアン・・・！

「グツ・・・」

ゴーレムがドラゴンの頭にパンチをした。

「トモ・・・キズツク・・・」

「クツ・・・エンダードモ！イクノダ！」

「「シラレテハイケナイ・・・！」」

「眼を覚ませ！エンダーマン！」

村人達も攻撃をする。

黒い世界で大きな戦争が起きる。

村長が言った。

「生きて帰ろうではないか！皆！」

「「「おおー」」」

ここは地の果て。

地の果てに住む軍勢とエンダーマン達が戦っていた。

炎の玉が飛び交う。

エンダーマンが倒れる。

マグマキューブが倒れる。

遺跡は崩壊していく。

崩壊した壁は、マグマの中に落ちて音を立てる。

「これでどうだー！」

ブレイズは三発の炎を出す。

「グアアアアア!!」

「グッ・・・!!」

「アアアア!!」

エンダーマンが三体倒れた。

水晶が三つ出る。

「これではきりが無い……」

ブレイズの後ろにはエンダーマンの腕が迫っていた。

「危ない！ブレイズ！」

ズシャ！！

エンダーマンが倒れる。

豚はブレイズの後ろにつく。

「油断をするな！お前の後ろは任せろ！」

「そつちこそな……！」

エンダーマンがまた一体、マグマの中に落ちていった。

ここは雪国。

沢山の雪だるまが配置されていた。

しかし雪はエンダーマンには全く当たらない。

「くそ……！遠距離の攻撃は効かない……！いくぞ！」

「「おおー」」

村人達は剣を振り回す。

エンダーマンは斬られていく。

一人の村人が剣を振る。

すると、エンダーマンに火が点いた。

「グアアアアアア!!」

そのまま、エンダーマンは倒れた。

水晶が出る。

「みんな！そこから離れて！」

村人は撤退する。

一人の母親が子供達と一緒に宇宙人に瓶を投げる。

地面に当たった瓶はわれ、液が漏れる。

エンダーマンは次々と倒れていった。

「わーい！やったやった!!」

子供達は笑う。

ドオオオオン！

3個目の結晶が子供に破壊された。

「こっちは爆破したよ!」

「まだ7個もあるのか・・・土をさっきの柱に置いてきちやった・・・」

「私にお任せください。ゴーレム、見せてあげなされ。」

「ゴゴゴ・・・」

「え・・・?」

ゴーレムは少年を持ち上げ・・・

一気に真上に投げた。

ゴオオオオオオ!!!

「ちよつとおおおおおおああああああ!!」

柱の頂上が目の前に見える。

それを通り過ぎた。

そのまま前方へ落ちていく。

そして柱にたどり着いた。

「ふう．．．はらはらさせやがって．．．」

ボオオオオン!!

四個目。

「．．．マタカ．．．」

ドラゴンは歯を食いしばる。

「．．．で．．．地道に石並べて降りなきやいけないのか．．．」

少年は黒曜石の柱の側面に石を並べていた。

その時。

巨大なドラゴンはその柱に向かって突進してきた。

「わああああ!!」

「くそっ!」

ジヨーは弓を構えた。

が・・・敵のエンダーマンはその弓をはじき落とした・・・

「コウゲキハ・・・ソシ・・・」

そして四体の他のエンダーマンに囲まれる。

「こ・・・このやろお!!」

ゴオオオオン・・・!

「ル・・・ルーフス・・・!!」

ドラゴンは壁に胴体をくっつけている。

少年は・・・

壁の中であつた。

27 : The End.

ドラゴンは胴体を離す。

それと同時に少年は下の下の砂の上に落ちる。

「ルーフス？しつかりしろ！ルーフス！」

父は少年の名前を呼ぶ。

返事は何も無い。

帰ってこないのだ。

「ルーフス・・・起きて来い！ルーフス！」

何度も呼ぶ。

「おい！お前まさかこんな終わりになるわけじゃねえだろうな！」

柱の頂上についた狼が言う。

「俺はいつでもお前を信頼してきた・・・いつも困難を！乗り越えてきたじゃねえか！」

「お前はこんな終わり方でいいのかよ！」

ボオオオオン!!

5個目。

「ほんとだよあんちゃん!」

柱のふもとの子供は言う。

「あんちゃんは・・・まだ世界をすべて見ていないじゃないか!」

「私からも言いたいです・・・あなたは負けるべきではありません!」

「トモ・・・シンジル・・・」

村長とゴーレムは言う。

「私からも言わせてくれないか・・・」 「私からも言わせて貰おう!」

「お前ら・・・!」

ブレイズとゾンビビッグマンは言う。

「「あなたはここで・・・負けるわけがありません!」」

「そうだ・・・私はお前に倒されたんだぞ?・・・こんな図体だけでかい奴に負けるというのか?」

「私からも言わせてくれ。」

ムフエックリー博士は言う。

「私はお前を信じてこのエンダーアイを渡したんだ・・・」

「お前はここで死なない!そう信じて渡したんだ!」

「「「起きるんだ!おきろお!」」」

「・・・そうだ・・・俺は・・・ここで負けてはいけない!」

少年はふらふらと起きる。

傷が痛む。

息苦しい。

でも

俺はここで倒れば——

「ナゼ．．．ナゼタチアガル！．．．ナゼソコマデネバル．．．！」

「俺は．．．いろんな世界を見るために旅に出た．．．」

生命感のあふれる黄緑の草原。

枯渇する黄色の砂漠。

見るだけで寒い白の雪国。

奥へ行くほど暗くなる緊張感のある灰色の洞窟。

背の高い木の生い茂る深緑の密林。

灼熱のマグマに照らされる赤い地の果て。

そして——この黒と白の終わりの世界。

いろんな世界を旅したいからなんだ・・・！

そんな素晴らしい世界があるからこそ旅が面白くなるんだ・・・

そのいろんな色を・・・俺は・・・一色だけにしたくない！

俺は！立ち上がらなきゃいけない！」

「クツ・・・コノニンゲンドモガア!!」

少年に向かってドラゴンが突進する。

ガキーン！

「グホオ・・・!!」

少年はドラゴンの頭部を斬った。

「カ・・・カイフク・・・セネバ・・・」

「もう結晶など無いぞ！」

ブレイズは言う。

「ナニイ!？」

「私が三つ、燃やしてしまったさ！」

「二」そして我がゾンビピッグマン第一部隊が二つ、早急に爆破した!」

「クソオ・・・エンダードモ!カカレ!」

「何を言っているんだあんたは？」

一人のエンダーマンが言う。

「へ・・・」

「二」あなたの仲間はもういないんだよ!」

「ナ・・・ナニ・・・!バカナ・・・モウエンダーマンガ・・・ゼンメツ!・・・ヨミガ

エラセテヤル!」

「その前に俺達が!」

「「「「お前を倒す!!」」」」

「オマエラハ・・・スベテ・・・クリーパーニカエテヤル・・・!!」

ドラゴンは少年達に突進してきた。

ジヨ一の矢が刺さる。

父の剣が胴を裁く。

犬は足に力強く噛み付いた。

子供と少年の剣も刺さる。

ブシユウウウウ!!

「グハア・・・!!オノレ・・・キサマラダ!!」

ドラゴンは草原と地の果てに住む者たちにすばやく標的を変える。

誰も逃げはしなかった。

豚の金の剣が首を斬る。

ブレイズの炎が胴に当たる。

最後にゴーレムがパンチを頭部にくらわせた。

ゴオン!!!

竜はよろよろと飛び続けようとする。

「マダ・・・マダコンナトコロデハ・・・」

「スノーゴーレム達！今だ！」

ムフェックリー博士と雪国の村長が命令する。

雪だるま達は雪球を一斉に連射した。

「俺の今までの研究の成果を・・・お前は全く知らないのだ！」

「グオオオオオオオオオオオ!!!」

ドラゴンから光が放たれる。

今まで集めていた地上の『特殊な力』がドラゴンから放たれる。

「・・・ココデ・・・オワルトハ・・・」

ボオン・・・

「バカナア・・・バカナバカナバカナア!!」

一瞬の静寂。

と共に、ドラゴンの放つ光は強くなった。

倒したのだ。

終わりの世界の暴君を

倒したのだ！

「やったあああああ!!」

同じ目的で集まった者たちが喜ぶ。

「世界は救われたんだ!」

「俺達も解放だ・・・!」

「よかったな!お前ら!」

「あんた達がいたおかげだ!ありがとう!」

エンターマン達は地上と地の果てに住む者たちに礼を言う。

「気にすんな!パーティだ!パーティを開くぞ!」

「「ワアアアアアアア!!」」

「・・・?ライモン、体が光ってるぞ?」

ライモンは自分のしつぽを見た。

「まさか・・・」

ジョーも自分を見た。

「俺もだ・・・」

この白と黒の世界で

喜んでいた人々は

まるで、七色、いや、それ以上の色で

カラフルに、染まっていたかのように見えた。

ここは砂浜。

ネザーラックの火が灯されている周りで、

パーティが盛大に開かれていた。

その時。

モンスターたちが村人を襲いに来る。

だが村人はこの日ばかりは怖がらなかつた。

「ほれ、肉食え肉。」

「ヴァ・・・？」

「カラン・・・？」

「シユー・・・？」

モンスターも参加してもっと面白くなったこのパーティーは

止まる気配は全く無かった。

「ほら、どんどん食うんだお前ら。」

ムファッククリー博士がゾンビピッグマン達に渡したのは豚肉の丸焼きだった。

「「「・・・共食いさせる気かつ!!」「」」

「ハハハハハハ・・・」 「シユー・・・!!」

ブレイズは笑う。

「ジョークだよジョーク・・・ああ悪かったって！怒るなっ！」

「クリーパーさん爆破しちゃってくださいよ！」

「わわわわ！マジでやめろ！会場が大変なことになっ！」

ムファアツクリー博士は砂嵐ではなかった。
皆と笑えているからだ。

彼は博士を辞めるつもりだった。

だが研究は続ける。

いろいろなところに住む人たちのために、いろいろなものを研究していこうと思ったのだ。

もう研究発表会にはでない。

自分のためだけにしかならないではないか。

さあ、始まりだ。自分の新しい道。

「・・・ナア・・・」

「なんだね、ゴーレム。」

「・・・サバク・・・テ・・・ナンダ・・・？」

「なんでそんなことが知りたいのかね。」

「・・・アノコドモ・・・キミガ・・・コドモノ・・・トキ・・・ソツクリ・・・」

ゴーレムはエンダーマンと話していた一人の子供を指差した。

「これは『ポーション』っていうんだ！」

「ほう・・・確かひいじいちゃんと言っていたな・・・」

「もつと教えてくれ！」

「うん、いいよ！でもおいらが知ってるのは全てじゃない。

・・・これだけは覚えておいてね！」

「キミ・・・ワレニ・・・オシエテタ・・・イロンナコト・・・」

モツカイ・・・オシ・・・エテ・・・！」

「・・・わかった。ゴーレム。」

村長は涙を流した。

私とお前とでは、生きている時が違う。

私は・・・もうすぐに死ぬかもしれない・・・

だから、こいつ——親友のこいつにはもつとたくさんのことを教えたい・・・

昔のように・・・！

「お前は どうするんだ？」

「俺はまだ旅を続けるよ。熱帯雨林や山岳地帯だって、一度も見てないんだ！」

「・・・そうか。」

一人の男は答える。

お父さんではない、口ひげを生やした男だ。

「・・・俺は、ここでお別れだ。」

「なんでだよ！俺は前のお前の姿でなくてもいい！一緒に旅をしようぜ！」

「いや、自分の故郷に、俺の帰りを待っている人がいるんだ。帰らなければ。」

「・・・そうか。今まで本当にありがとう。」

「こつちこそだ。お前とジャックとの旅は本当に楽しかった・・・ありがとうな。相棒。」
少年と男は飲み物を掲げる。

「乾杯。」

カロン——

翌日の朝。

少年とジャックは旅の準備をしていた。

「・・・準備できたか？」

「ああ、あんちゃん、次はどんな旅をしようか？」

「自由気まま。その言葉しかいえないな。」

「じゃ、俺はこれで。」

「ああ、ライモン。じゃあな。」

ライモンは去っていった。

ライモンは遠くからこつちを振り向いた。

「おいルーフス。」

「お前を俺は、いつでも信じているからな。」

少年は頬に落ちた涙を拭いた。

そして笑顔でこういった。

「・・・ああ！おれもだ！」

「あれ・・・？あんちゃん、お父さんは？」

「・・・また旅に出たんだよ。知らないうちに。」

「あの人は俺以上に旅好きなんだ。」

ここは喜びの砂浜とはもう遠い、密林地帯。

ジャングルの大木の上に立てた広い家のベランダで広い密林を見渡していた。
水辺に浮かぶ小船はだんだんと遠ざかってゆく。

「ルーフス・・・まだお前の旅は終わってないぞ・・・だが——」

「俺の旅も・・・終わってないな・・・！」

「ライモン．．．また一緒に冒険したいな．．．」

少年は歩きながら、バッグの中にあつた一つの骨を見つめていた。

「本当だね．．．」

クウン．．．

「あ！狼だ！」

「お前も、ついてくるか？」

少年は骨を狼に差し出し、そういつた。

「ワン！」

狼は嬉しそうに、しっぽを振った。

終

2章：次なる世界！

1：新たな旅

緑色に染まった草原の中。

動物達の鳴き声が飛び交う中を少年達は歩いていった。

「ふあああああああ!!」

「あんちゃん、大きなあくびだね。眠れなかったの？」

「そりやそうだよ・・・昨日の夜はやけに雷がうるさかったからな・・・

ってかお前よく眠れたな・・・」

「はははは。おいらは眠い時にはいつでも、どこでも眠れるからね。」

終わりの世界でエンダードラゴンを倒したルーフス達は、

ご覧のとおり平和な旅を続けていた。

少年達が草原を描きかけの地図を持って歩いていると、

前方には民家が広がっていた。

「・・・お！村があるぞ。立ち寄ってみるか・・・」

「ちようど暗くなってきたし、ここで泊まらせて貰おうよ。」
少年達は村へと向かう。

「ようこそ！ 私達の村へ！」

「へ．．．」

「え．．．」

そこにいたのはたくさんのメイド服を着た、女の子達であった。

「さあ、どうぞ〜」

「あは、いや、どうも．．．」

少年達はメイドさん達と一緒に村の中へと、頬を染めながら入っていった。

「村長さん、旅人の方がいらつしやいましたよ。」

「おおおそうかいそうかい．．．さあ、上がってください。今日はここで、一晚泊まるといい。」

「ありがとうございます。村長さん。」

「この村には女の子達がいっぱいいるんですね。」

「はい・・・この村のほとんどがおなごですわい。伝承といいますが、この村では生まれてくる赤ちゃんが、女の子であることが多いのです。」

「へえ・・・」

「きゃー！」

ドタン・・・バシャアン!!

「うわ! しまったね・・・何すんじやあ!?! このアマ!!」

「!?!」

「あんちゃん、今のはなんだ?」

隣の宿泊民家から聞こえてきた怒声。

「・・・行ってみよう!」

「うん!」

少年達は宿泊所の扉を開けた。

見れば一人のびしょ濡れになった男がメイドに怒鳴っていた。

「すみません!! すみません!!」

「あやまれれば済むって問題じゃねえんだよ！このスーツいくらしたと思ってんだ！」
「本当に……すみません……」

「だ〜か〜ら〜……!!弁償せんかい！エメラルド持ってこんかい！ああ？」
「ぐすん……」

メイドは首を横に振る。

「ほう……そうかい……だったら、体で払ってもらうしかねえなあ？……」
メイドははつとする。

その時、メイドの口から大きな声が出た。

「やめてください！このセクハラ男！」

カチン・・・

「何だとお!!?このアマア!!!」

男の拳がメイドに襲い掛かる。

ビュオオオオオ!!

ズバシ!!

「ヒョオ!!」

バタン!

男は殴られ、床に倒れた。

ルーフスに殴られていた。

「・・・嫌がつているじゃないか、止めてやれよ。」

「キサマア!!俺を・・・この俺を・・・殴ったなあ!?!」

ビシッ！

ズバシ！

ドン！！

少年の三発の拳が男のあちこちに当たる。

その様子を村のメイド達と村長が見守っていた。

泣いていたメイドは呆然と少年の姿を覗いていた。

「グホオオオ！！」

「・・・俺は終わりの世界のドラゴンを倒したんだ。なめてもらっちゃ困るな。」

「くそお！覚えてろ！バーカ！！」

男は逃げていく。

「ありがとう・・・ごさいます。」

「大丈夫だったかい？」

「キヤー！！」 「かっこいいわー！！」

黄色い声がたくさん聞こえてくる。

「かつこよかつたが・・・何か胸騒ぎを・・・感じるわい・・・複雑じゃ!!」
村長は言った。

「お礼に紅茶を・・・ああ！」

ドタン！バシヤアン!!

「わわわわわ!!」

またスカートの裾を踏み転んで紅茶をこぼしたようだ。

「すみません、すみません！すぐに拭きます！」

村長は口を挟む。

「紅茶は上手いがこぼすと服はぬれる・・・複雑じゃ!!」

・・・口癖なのだろうか？

「ははははは・・・君はドジなんだな。」

かあ・・・

メイドの顔が赤くなる。

「お恥ずかしい・・・限りです・・・」

「お姉さん、おもしろいな!!」

さらに赤くなり、眼はぐるぐると回り始める。

そして倒れてしまった。

「大丈夫か！おい！」

「はははははは！やっぱり面白いや！」

こうして、一晩は過ぎていった。

朝。

少年達は木を調達するため、村の近くのジャングルへと向かった。

「私の村のおなごを派遣してはどうか？こやつらは良く働きますわい。」

「じゃあそうしようかな。」

「おおい、手が空いている奴はおらんかのお？」

みればほとんどが小麦収集に励んでいた。

・・・が、昨夜のメイドだけ、鍛冶屋の隅で、座っている。

「・・・何をしておるんじゃ？・・・ほっほっほ・・・またつまみ食いかね？」

ビクウ!!

こつちを向いたメイドは口にクツキーの食べかすをつけていた。

村長は笑っている。

かあ・・・

また顔が赤くなつた。

「す……すみません!!」

「なんのなんの……腹が減つては戦はできません。さあ、旅人の方々と共に、木を切つてくれんかのお。」

「は、はい!!」

「じゃあ、行つて来るよ。」

「じゃあね!」

「で、では、行つてきます。」

「行つてらつしやいませ。」

少年達はジャングルへ歩を進めた。

「?……この実はなんだ?」

「?……おいらも分からないよ。なんだろう、新種なのかな?」

少年と子供は首をかしげる。

「はい、それはカカオの実です。これを材料として、先ほど私の食べていたクッキーが作れるのです。」

今ではこの村で、パンの次に主食としているものです。」

「へえ、お前詳しいんだな。」

「お姉さんすごいや！」

かあ・・・

またまた顔を赤くした。

「わ・・・私は料理に関しては一人の興味を持っています・・・」

といつて、下を向いてしまった。

「クッキーを山ほど作れるように、これも沢山とつておこうな!!」

少年は笑顔で言った。

「！・・・はい！」

少年と子供はこの村に来て、初めて彼女の笑顔を見た。

彼女の笑顔は、とても明るかった。

まるで太陽を見ているかのようだ。

少年と子供は、つられて笑顔になってしまった。

その時。

彼女の笑顔は、一つの鳴き声によって掻き消された。

「キシユウウウ!!」

蜘蛛だ。

メイドの脳裏にはいろいろな音が響く。

蜘蛛の鳴き声。

赤ちゃんの大きな鳴き声。

そして女の鳴き叫ぶ声。

「きやあああああああああ!!!」

メイドはその場に座り、大きな声で叫ぶ。

「ど、どうしたんだろう?」

「大丈夫か!」

「やめて……!!こないで!!……きやあああああ……」

女はその場に倒れこむ。

「こんにやろ!こんにやろ!」

キシユ!!キシユ!!

クシユウウウ……

蜘蛛は倒れた。

「あんちゃん、お姉さんは?」

「良かった……気を失っているだけだ。」

「一旦戻ろう、あんちゃん!」

「ああ……」

少年の腕の上に寝込んでいる女の目から

一粒の涙が垂れた。

2：太陽と陰（前編）

「ここは村長の家。

ベッドにはメイドが寝ている。

少年達はその横で村長と話していた。

「そうですね．．．そのようなことがあったのか．．．」

「いくら蜘蛛が嫌いとはいえ、もう彼女は精神を保っていませんでした。

．．．村長さん、何か知っていませんか？」

「．．．．．．．．．．」

村長は沈黙した後、黙って席を立ち、扉へ向かう。

そして、扉の前で止まった。

「場所を変えよう……彼女の横で話してはダメだ。」

少年と子供はうなずき、宿泊所へと向かった。

宿泊所の中。

村長はベッドの上に座り、少年達はその前で話を聞いていた。

「あれは……今から五年ほど前のことだ……」

ここは昔の村。

月は真上に上っている。

村長は部屋で今日の日記を書いていた。

インクを横に置き、真っ白な本にペンを走らせている。

「カカオが足りなくなってきたな……サルバにでも採ってきてもらおうかのお……ん
？」

(・・・)

「・・・気のせいか・・・？」

はて・・・なにか見知らぬ鳴き声が聞こえたような・・・

あつちの方角は確かジャングルであつたな・・・

・・・わしもとうとう耳がひどくなってきたようじやな・・・

(・・・わああああ・・・)

・・・！違う・・・動物ではない・・・この声は・・・

子供か・・・!!

「ニース!!ニースや!!」

一人のメイドが村長の部屋に入ってくる。

いかにも眠そうに目をこすっている。

「・・・どうしたのですか？こんな真夜中に・・・」

「援護をしてくれないか．．．いまからジャングルに入るぞ。」
「はあ!?!」

「村長．．．ただの聞き違いだったんじゃないですか?」

「そんなことはない! 私ははつきりきいたのじゃ!!」

「分かりましたよ．．．」

メイドは葉を掻き分けながら村長を引導する。

「あ．．．本当だ．．．!!これは女の子の泣き声ですよ．．．!村長!!」

「やはりそうか．．．行くぞ!!」

(わああああ．．．)

声は近づいてくる。

モンスターが行く手を拒む。

メイドがモンスターを倒してゆく。
村長とメイドはついにたどり着いた。

「うわあああああん……」

みれば女の子が泣いている。

そして蜘蛛が近づいていた。

「たあ!!!」

ズバシ!!

キシユウウウ……

そして、蜘蛛が逃げると同時に、メイドと村長は言葉に出ない悲しみを感じた。

なんと、泣いている女の子よりも小さな女の子が、ぼろぼろになって倒れていた。
「わあああああん!!!」

「これは大変だ……手当てをしなければ!!」

「……だめです……もう……脈はありません……!!!」

「そんな……」

村長はひざから崩れ落ちる。

メイドは何もいえなかった。

その時、女の子の泣き声が静まった。

そして、赤ちゃんを抱えているメイドのスカートの裾をつかむ。

「わたし……守れなかった……!!妹も……ママも……ひつく……!!」

．．．つよくなりたいの．．．!!わたし．．．!!えつぐ．．．」

メイドから涙がこぼれた。

この子は．．．何らかの理由でお母さんも亡くしているのね．．．
そんな事にも負けずに．．．強くなりたいと願っている．．．!!

女の子であつても．．．

いや、

女の子で「あるからこそ」!!．．．

「この子を……育てよう、ニース。」

「……はい……!」

この子には……守ってくれるものは誰もいないのだ……
だから……私達が守らなければ……!

「彼女は今もお強くなりたいたいと願っている……夜中にな……

いつも剣を振る音や矢を射る音が聞こえるのじゃ……

最初は未熟な初心者の音であったが、日が増すごとに強くなっておる。

彼女は過去の重い荷を背負い、自責の念を抱いた。それが……その『願い』につながっているであろう。」

「願い」
「.....」

少年と子供は思い出す。

あの彼女の太陽のような笑顔を。

あの太陽の裏にあったのは、とても暗い陰。

彼女からこの暗い陰が消えるのはいつなのだろうか。

彼女が強くなった時なのであろうか・・・

いや、強さに限界など無いのだ。

このままでは・・・

永久に。

永遠に。

彼女の陰は、無くならない。

「……村長さん。」

「・・・？」

「彼女と、話をさせてくれませんか。」

翌日の朝。

女はベッドから起き上がった。

周りを見渡す。

村長の家だ。

そうか・・・私・・・

!!!!!!

ズキン・・・!!

脳に痛みが走る。

ドクン・・・!!ドクン・・・!!

鼓動が早くなる。

声が響く。

(キシユシユシユシユ・・・!!!)

(わああああああん!!)

(おねえちゃん!!うわああああああん・・・!!!)

「止めて・・・!!」

(キシユシユシユ・・・クシヤアアア!!)

「止めて!!」

メイドはチェストの中のソードを取り出す。

ドクン・ドクン・ドクン・ドクン・・・

(キシユウウウ!!)

ド・ド・ド・ド・ド・・・

蜘蛛の音が響く。

目の前で妹が殺される。

赤ちゃんの泣き声。

蜘蛛の鳴き声。 ■ ■ ■ 蜘蛛の鳴き声。

妹が殺される。

赤ちゃんの泣き声。

鳴き声。

赤ちゃんの泣き声。

妹が殺される。

蜘蛛の鳴き声。

「勝てない・・・何も・・・私は・・・弱い・・・」

妹が殺される。

蜘蛛の

蜘蛛の鳴き声。

赤ちゃんの泣き声。

赤い血が飛ぶ。

ビシヤアア
!!!

ダッ
!!

「何が『強く』だよ……」

メイドは腹を見る。

ソードは自分の腹の前で止まっている。

その代わりに、一つの手がソードで赤く染まっている。
手をたどって顔を見ると、

そこには旅人が居た。

3 : 太陽と陰 (後編)

「何が『強く』だよ……」

!

見ると少年は手から血を出していた。

扉のすぐ先の床で皿が割れ、まだ湯気の出ているキノコシチューがこぼれている。

「お前は……『弱い』から死ぬのか?……」

「私は……強くなれないの……!!何も……守れないの!!」

「あきらめていたなら……蜘蛛に襲われて死んでしまえば良かったんだ……」

「……!!」

「……じゃあ……お前は今……何で生きているんだよ!!!」

「!!!」

（この子を・・・育てよう。ニース・・・）

村長の温かい声が響く。

「強くなるために残しておいた命を・・・お前は全て踏みにじる気か!？」

少年の口調はとても厳しかった。

が

それでいて、とても優しい言葉であった。

「……お前は……一人『だった』……でも。」

少年は、笑顔でこう言った。

「今は、お前は『皆』と強くなれる。」

キイツ……

「あんちゃん!! その血はどうしたんだい!?!」

「何事であるか……?」

「どうしたの……?」

「きゃ!! 血……大変!! 救急箱をお持ちします!!」

「チェリー……あなた……」

村の皆とジャックが家に駆け寄る。

「俺達は、どんなにお前がドジしたって、どんなに赤くなって倒れたりしたって気にしない。」

「俺達は、お前と一緒に強くなりたい。そして、お前を支えて生きたいんだ!!」

お前が、決して暗い陰を見せないように……!!

俺達は、お前の……明るい太陽が見たい!!!」

ベッドの中心が、一粒一粒、濡れていく。

ぼろぼろと涙が落ちる。

女は少年の傷ついた手をとる。

そして、顔をうずめて泣いた。

「・・・う・・・う・・・ごめんなさい・・・旅人さん・・・皆さん・・・」
「ほっほっほ・・・なんのなんの・・・ほれほれ・・・涙を拭きなさい。」

「なぐに言ってるの!! あんたは私のかわいい妹じゃないの!!」

「チェリー・・・あんた、あの時からほんと強くなったよ・・・!!」

「[[[[ほらほら、泣かないで!!]]]]」

「そうだよお姉ちゃん、笑ってよ!」

「さあ、あつちで皆クッキー焼いて待ってるぞ。」

少年は手を差し伸べる。

メイドは手をとる。

「・・・はい!!」

少年と村の皆は、今日、今までに無い明るい太陽を見た。

それから三日後。

少年の手の傷も回復し、

少年と子供は既にジャングルの木を取り終えた。

カカオの実と共に。

チエリーはそのカカオの実を床にばらまき。

皆と笑い。

そして農作業を手伝い、

村のメイド達との優雅なお茶をたしなみ。

ぐっすりと眠り。

ついに別れの時が来た。

「・・・忘れ物は、大丈夫ですかな。」

「はい、全部荷物は大丈夫です。そうだよな、ジャック。」

「うん、『ぜんぶ』もったよね・・・!!」

「ほう・・・それは良かった・・・しかし、去るといふのも、

仕方ないというか悲しいというか、複雑な気分でございますじや。・・・じやが。」

「ルーフス殿、チェリーを救ってくれて、本当に、ありがとうございます。」

「そんな・・・またこの村に遊びに来ますよ。」

「いつでも、お待ちしております。」

「」「また遊びにきてねく!!」「」

「?・・・」

少年は思った。

そういえばチェリーの姿がどこにも無い。

ははあ・・・あいつのことだから部屋で泣いているのかな・・・?

ここは触れずに行こう・・・

「では、また会いましょう!!」

「キヤー!!」 「ワー!!」

「ありがとうねー!!」

村のメイド達と村長に手を振りながら、少年と子供は村を去っていった。

少年はジャングルの中を歩いていった。

「・・・そういえばチェリーさん、どこ行ったんだらう?」

「さあな、そつとしておけ。俺達に一番なじんでいたのは、今思えばあいつだったな。」

「そう思うとなんだかさびしいな・・・」

ガサ・・・

ガサ・・・

「・・・?」

ビュオオオ!!

その時、草むらから影が襲い掛かってきた。

「こ．．．これは．．．新種のモンスターか．．．!!」

「ちよつと待つて．．．!! 違うよ!」

「きゃああああ!!!」

どさっ!!!

メイドだ。

「チェ．．．チェリー!?!」

「あ! ルーフスさん! さ．．．捜しました!」

「え．．．?」

ニースは村を教会から見渡す。

そしてはしごを降り、村長のもとへ駆け寄った。

「村長さん……まさか、チエリーは……」

「あやつは決める時にはその心にまっすぐに従う。

きつと、自分の求めていた人を見つけたのであろう。」

「……止めは……しないですよね。」

「……ああ。」

村長は涙をたらず。

「旅立ちというものは……嬉しければ悲しくもある……

とても、複雑な気分じゃ……!!」

チエリーは照れながらあるものを手渡した。

白く、細長い糸。

蜘蛛の糸だ。

「お前がしとめたのか．．．!?」
「．．．はい．．．!!．．．そ、それと．．．!!」

メイドは顔を赤くして、

「私も！お供させてください!!」

「・・・ああ！もちろんだ!!」

「やったあ!!チエリーさんが仲間になった!!・・・?」
「本当だな!!・・・?」

「・・・・・・・・」

「あ!!」

「どうしたんですか・・・!？」

「お前のために秘密に作ったクッキーを置いてきた!!」
「大丈夫です、」

「既に、私の、お腹のなかです♪」

「ええええええええ!!?はええええええ!!」

「この速さなら、このジャングル全体のカカオを3日ぐらいで

全部食べちゃうんじゃないか・・・?」

「カカオは定期的に貯蓄しないとね・・・」

「ちよつと・・・私もそこまで・・・食いしん坊じゃ・・・ないですよ!!」

「ははは!!また赤くなった!!」

「ほんと恥ずかしがりやなんだからな!」

こうして、チエリーが新しく仲間になったのだった。

4：古からの贈り物

少年達は新たな仲間、チェリーと共に、密林を進んでいた。

実はこの密林に足を踏み入れてから、もう一週間たっている。

その間、この密林の中で、クツキーを食い、モンスターと戦い、リンゴを食い、高い木からの雄大な景色を見たりして、

なんとか7日間、密林の中を過ごしてきたのだ。

少年は、ボロボロな服を揺らし、だるそうに、密林を歩いていた。

「あゝなんて広いんだこのジャングルは……」

「本当ですね……私もここまで広いジャングルは始めてみました。」

「たぶん、ここはラージバイオーム……つまり巨大な気候帯なんだよ。」

ひどい時にはこれくらい、地図一枚分も埋め尽くすんだ……」

ジャックは人差し指と親指で、四角形を作って言った。

「マジで!?!……そりゃあ先が見えないはずだ……」

ルーフスは肩を落とす。

「でも私は、とても嬉しいです。」

チエリーは話す。

「今まで・・・ジャングルは怖いイメージしか無かったものですから・・・
あんなに高い木からみた景色は・・・とても心が洗われました・・・！」
チエリーはニコツツと笑った。

「・・・そうか。」

少年や子供も、つい笑ってしまった。
笑うと、不思議と元気が沸いてくる。

「よし！がんばって歩くぞ!!」

「「オー!!」」

それから一時間後。

まだまだ密林は続いている。

一匹の山猫が木の横をすり抜けていく。

その時、目の前に何かが見えた。

「……? ……あれは何だ……?」

「建物だ……」

それは石材で作られた謎の建物。

緑色のコケが生い茂っている。

「……あれは……もしかしたら……遺跡、じゃないでしょうか!」

「遺跡……?」

これは五年前。

チエリーがまだ幼い少女だった頃。

チエリーは村の書齋を掃除していた。

パタパタパタ・・・

本のホコリを一冊ずつ、はたきで払っていた。

その一冊のうちに、表紙にエメラルドの描かれた本を見つけた。

中身を見てみると、なにやら変な絵が描いてある。

「おじいちゃん・・・これ、なんなの?」

「おお、チエリー、・・・ふむ・・・」

村長は考えて後、口を開いた。

「これは、『むかしのひとたち』の思い出が描かれている本じゃ。」

『『むかしのひとたち』・・・？』

「そうじゃ。・・・」

『むかしのひとたち』はな、ある日、他の国からこの村・・・そして、

宝石も何もかも、奪われてしまったのじゃ・・・

しかしこの人達は、『少しでも』わたしたちに役に立ててほしい、と、

小さなチェストを、遺跡の中に隠し、罫を仕掛け、他の国の者達に奪われないようにした。

その想いから、子孫達は屈せず、他の国の者達に勝つたのじゃ。

その遺跡の中の宝石は、『むかしのひとたち』に敬意を示して、今もなお、遺跡にのこしておる。

「あれは、『古からの贈り物』なのじゃよ……」

「おじいちゃん……眠たいよ……」

「おやおや……私としたことが。つい長く話してしまった。さあ、おやすみ。……」

「……おそらく、その『昔の人々』の遺跡かもしれません。」

「なるほど……中に入ってみるか！」

「ダメだよ！あんちゃん！大事な遺跡なんだから！」

「でも……私も『昔の人々』が何を残したのか気になります。」

「チエリーさんまで!!」

「まあまあ、気をとがめるなって……見るだけ、だから。な?」

「はあ……本当にのんきなだからなあ……」

「ごめんなさい……」

子供は、一人の乙女に謝られて自然に罪悪感が湧いてきた。少年も目が輝いている。もう止められないだろう。

子供は理由をでつち上げ、妥協した。

「……チェリーさんに言われちゃあな。……まあ僕も、『昔の人々』の仕掛けた罠が気になるから。……行ってみる価値はありそうだね。」

「じゃあ行ってみよう！」

少年達は遺跡に入ってしまった。

遺跡に入ってから階段を降り、目の前にチェストが見えた。

「……なんだ、もう見つかったぞ。簡単だな……」

「まさか……罠が無いはずがありませんよ……!!!」

「ルーフスさん！ストップ!!」

「え・・・」

ピン・・・

何かが張るような音がして、少年の右で何かが光る。

ビュツ・・・!!

「だあっ!?!」

少年は間一髪でよけた。

サクツ・・・

壁に矢が刺さる。

少年は青ざめた。

「さすが古代の人々です・・・『油断する気持ち』ほど、罨にかかりやすいものはありません。」

「ほ・・・本当だな・・・とととととても怖いな・・・」

「あんちゃん鳥肌がすごいよ・・・」

少年達は今、チェストの前だ。

「・・・開けるぞ・・・」

「ゴクリ・・・」

「はい・・・」

ギギツ・・・

中には、骨や肉。——人肉、人骨だ。

人肉はもうとつくに腐っていた。

とてつもない異臭より先に、驚愕するしかなかった。

「ぎや．．．！」

「え．．．」

「．．．．．」

少年達は目を開く。

「ぎやああああああ!!!」

「きやああああああ!!!」

少年と娘が叫び声を上げる。

「はははは早く逃げよう!!怖すぎる!!」

「ジャックくん!逃げましょう!!ここにはいてはならない気が．．．」

「歴史。」

ジャックがつぶやいた。

「・・・え・・・？」

「どうした・・・」

「歴史だ。——古代の人々は、『宝石』だけを後世に残したいわけじゃなかったんだ。」
ジャックは右側面に穴の開いた、一つの頭蓋骨を手に取る。

「この、戦いの歴史。それを伝えたかったんだ。」

少年と娘は、チェストに近づいた。

「確かに・・・『戦いに勝つ』為には・・・被害者は必要だな・・・ごめんなさい・・・大きな悲鳴を上げてしまって・・・」

「・・・私も・・・この頭蓋骨を怖がってしまいました・・・すみませんでした！・・・」
少年と娘は一つの頭蓋骨に謝る。

「そして・・・後世に伝えてくださって・・・ありがとうございます！！」

娘は涙目で笑った。

少年と子供も涙ぐむ。

2人はずっと、頭蓋骨を抱きしめるチエリーを見つめていた。

「……じゃあ、あんちゃん、チエリーさん、旅を続けよう!!」

「……ああ!」 「……はい!」

また歩いてから一時間後。

「見えた……見えたぞ!!」

「やった!!」 「わーい!!」

見えたのは広い広い草原。
密林の旅は終わりに近づいていた。

密林の夜。

高い樹林の間から、青白い月が見えている。

ゾンビの声^が聞こえる。

スケルトンの骨のかすれる音も聞こえる。

コツ・
コツ・
コツ・
コツ・
コツ・

何者かの影が遺跡の中を歩いている。

遺跡の罫の糸を簡単に、ずさんに切り、その先のチェストを開く。

ぎい
・
・
・

「・・・うわ!!きつたねえ!!そしてくせっ!!なんだこの骨と肉は!!チツ・・・」
男の声だ。

男はチエストをひっくり返す。

中から人骨と人肉が何個も転がる。

その奥から、エメラルドがいくつか出てきた。

「チツ・・・しよつぺえな・・・まあ貰つとくか・・・」

その男は遺跡から出る。

ちようど月が真上に昇った。

木でさええぎられた月光はまっすぐに男を照らす。

ピカピカのスーツに金髪。

欲望しか見えていないよどんだけ目。

ヴァー!!

「・・・ああうぜえ。」

男はポケットから拳銃を取り出し、ゾンビに向かって何発か弾を発射した。

バン！バアン！バアン！バアン！！

グアウ・・・

「あーほんと踏んだりけつたりだぜ・・・収穫はすくねえわ・・・」

「あんなチビに負けるわ女にののしられるわ・・・」

番外編1：くらふと☆がーるず♪

「ルーフスさん……」

チエリーが自室にいる少年に声をかける。

「んー。」

ルーフスは地図で洞窟の場所を確認していた。

「あ、あの……ケーキ作ったので……一緒に……食べませんか？」

チエリーは照れながら言う。

「あー今はいいわ。うん。ちよつと忙しいから。ちゃんと閉めてってね。ドア。」

「……………」

バゴン!!!

チエリーはドアをとて強く閉めた。

ルーフスは気を留めもしない。

地図を眺めているだけだ。

あー眠くなってきたな・
・
そろそろ寝よう・
・
・

朝日が昇る。

少年は起きる。

背伸びをする。

ニワトリが鳴く。

何の変哲も無いいつもの光景。

パンを食べて、外へ出る。

「よし！今日も快調だ!!……ってあれ?……ジャックとチェリーは……?……」
寝室を見ると、誰も居ない。

「……?……まさかあいつら、もう洞窟に行ったのか?……しようがねえなあ……」
少年は鉄ピッケルとクツキー、松明を持って、洞窟へ向かった。

「なんだ、あいつら違う洞窟と間違えたのか？・・・ぜんぜん明るくないぞ・・・」
少年は松明をつけながら進む。

うあー。うあー。

ゾンビの声だ。

なんか耳がおかしい。

なんかいつもより高い声が聞こえる。

少年は右耳を人差し指で掃除した。

ん・・・！クリーパーの気配！！

後ろだ！！

少年は後ろを振り向く。

「あれ・・・」

後ろに居たのは女の子だ。

緑色の、見覚えのある顔の柄が付いたパーカーをかぶった女の子。
なんでこんなとこに女の子が・・・？

女の子はしゃべる。

「あんた・・・」

「へ・・・？」

「どこからきたのよ！」

「いや・・・え・・・？」

「なによ！はつきりしなさいよ・・・」

「い．．．いや、いきなり可愛い女の子に話しかけられてもな．．．」
「か．．．かわ．．．かわ．．．いい．．．だなんて．．．私!!」
その女の子は光った。

その瞬間。

ポオン!!!

「うわあ!!!」

(.)

(うん、ちよつと待ってくれ。)

(整理がつかないぞ. . . ?)

(女の子が・・・洞窟の中に現れて・・・爆発。)

(まるでクリーパーのようだ。)

(落ち着け。落ち着くんだ。)

少年は深呼吸する。

ビュン・・・

エンダーマンだ。

あつちの方角に・・・

「つてあれ・・・」

今度は女の人だ。

美人で、手脚が長い、スレンダーな女性。

黒袖の手で石を運んでいる。

少年はじっと見つめる。

女性はこちらに気づき、頬を染めた。

「……しいか……」

何かしやべった。

「……えつと……なんですか？」

「……恥ずかしいから……」

「……?」

「・・・私の・・・顔・・・見ないでください!!」

バチン!!

(生まれて初めて、女性に殴られた。美人な女性に。)

このとき、初めて少年は気づく。

(なんか・・・今日、なんか変だ
!!!!!!)

「きしゅー!!」

今度は小さい女の子が両手を挙げて襲ってくる。

「きちゅー!!」

その後に一段と小さい女の子。

「なんだ!? 蜘蛛みたいに身軽だ．．．!!」

「たあー!!」

ばすっ!!

「いて!!くそお．．．反撃．．．」

相手は女の子。

「できるかあー!!」
少年は逃げる。

ビュツ!!

「ひっ!!」

矢が飛んできた。

見れば、洞窟の入り口に、一人の女性が立っている。

白い甲冑のような服。

「あなたのハート。狙い打ちたいわ・・・！」

ビュッ!!!!

ビュッ!!!!

ビュッ!!!!

「ちよ、おま、待って!!」

右に抜け穴があった。

その先にはネザーゲートだ。

(しめた!!・・・っていつ作ったっけ・・・?)

ビュツ!!

「きしゅー!」「きちゅー!」

「と、とりあえずいくぞー!!」

少年はネザーゲートに入っていった。

「よし．．．ここまでくれば．．．」

「ルーフス様ではありませんか!!」

「ええ!?!」

そこに居たのはやはり女の子だ。

「私ども、ルーフス様のご無事を祈って．．．」

「ああ、分かった!!ありがとうございます!!」

「おまちください!!私どもに、どうか服従を．．．!!」

少年は走る。

遠くへ走る。

「やっぱり何か変だ。」

「よお、お前は旅人か？」

遺跡の橋の欄干に座っていたのは茶色の水着に身を包んだ女性だ。
吊り目のボーイッシュな顔立ちだ。

「あなたは・・・？」

「お前のその心、われが温めてあげよう！」

ポオツ!!!

「観光ですか？」

「いや、そうじゃないんだけど・・・」

「うれしいです！！こんな所に観光に来てくれるなんて！！」

「いやそうじゃな・・・」

喜ぶと同時に炎が噴出される。

「ちよ」

ぼおん!!!

「言わんこつちやねええええええええええ!!!」

床が崩れ、少年が落ちていく。

目が覚めると、そこは夜の草原。

「あれ、マグマジや・・・」

「逃げてえええええ!!! きゃあああああ!!!」

見ると茶色の服の女の人を追っかけられている。

「やった!! 普通の人だ・・・げえ!?!」

後ろから青いTシャツを着たショートヘアの女の子が大勢、女の人を追っかけている。

「うあー。」 「うあー。」

「うあー。」 「うあー。」 「うあー。」

「うあー。」 「うあー。」 「うあー。」

「うあー。」 「うあー。」

「うあー。」 「うあー。」 「うあー。」

「きやあああああ!!!」

「やべ!逃げ・・・」

後ろを向く。

「あなたと一緒に／＼／＼・・・いたい!!」

「私の・・・私の顔を・・・見られるなんて・・・／＼／＼」

「きしゅー!」「きちゅー!」

「ねえ・・・撃つちやうわよ・・・／＼／＼」

幼い姉妹。

緑パーカーの女の子。

黒長袖の女性。

白い甲冑の女性。

「私ども、あなたさまを守りたいのであります!!」

金の剣を持った女性達。

「さあ、また始めようではないか・・・ハハハハ!!」

茶色の水着の女性。

「きや!またあえるなんてすてきく!!」

浮遊した大きい女性。

「あくもう訳が分からないく!!!」

少年は頭を抱える。

そのまま、沢山の女の子の渦に巻き込まれた・・・

「うあく。」

「狙い撃ち・・・!!」

「助けてく!!」

「うふふふふく♪」

「ルーフス様!!」

「爆破・・・しても／＼／」

「恥ずかしい／＼／」

「ハハハハハ!!」

「きしゅー!!」

「うあく。」

「きちゅー!!」

「お守りします!!」

「うあく。」

「・・・さん・・・」

「・・・フスさん!・・・」

「ルーフスさん!!」

．．．．。

夢か．．．。

良かった。

「大丈夫ですか、ルーフスさん．．．何か怖い夢でも．．．!?あ、ケーキどうぞ。」

「お……おう……」

少年はケーキを食べながら、チエリーを見る。

「……どうしたんですか？」

「……やっぱ、お前が一番、可愛いな!!」

「へ……いきなり……何を／／／……はうつ!!」

バタン!!!

「あ!大丈夫か!!チエリー!!チエリー!」

今度こそ、平凡な一日が始まった少年であつた。

番外編
1：終

一人で、レッドストーン並べるのって・・・悲しいね。」

5 : 島の終わり

「着いたあ!!」

「やったー!!」

少年達は一週間もの密林の旅を終え、ついに草原に抜けたのだった。

「本当に長い旅でした!」

「そうだなー!上からのゾンビ達に震えながら旅ももう終わりかあ・・・」

「ただバイオームを抜けただけなのに、なんか嬉しいね!!」

少年達は笑う。

その時だった。

「ワン・・・ワン!!」

「あ・・・!!」

「お前は・・・!!」

少年達の元に、一匹の狼が近づいてきた。

あれはエンダードラゴンの野望を打ち砕いた後のこと・・・
ライモンと離れ、再び旅に引き返した少年達に近づいてきた狼。

「お前も・・・ついてくるか？」

「ワン!!」

少年は骨をかざす。

だが狼はタイガへ引き返してしまった。

「・・・?・・・」

「どうしたんだろう・・・？あんちゃん？」

「・・・ついて来い、って言ってるのかな・・・」
少年達は狼の跡を追う。

「ワン！」

「これは・・・」

少年の目の前にいたのは・・・

「家族だ・・・」

その狼は子持ちであった。

父親か、母親か・・・どちらかは分からない。

その時。

子供の一人が、少年の腕に噛み付いた。

「ガルルルル……」

子供の狼の噛む力では、当然少年も噛み跡がつくだけだ。

「……たくましい子だ。」

「本当だ……」

少年は子供の狼の頭を二度、軽くたたいた。

「クウン……」

子供の狼は腕から離れた。

「……あきらめようか。こいつには、子供を守ることのほうが重要だ。」

「そうだね。」

少年達はきびすを返す。

その後ろから。

「ワンワン!!ワンワン!!」

子供の狼が強く吠えた。

「・・・ああ!!大きくなったら・・・俺がお前を迎えに行くよ・・・!!」
「待つてるからね!!」

「・・・お前なのか・・・?」

「ワン!!」

「そうか・・・お前か!!よくここが分かったな!!」

「ワンワン!!」

「え・・・?」

狼はバッグをしょったチェリーの周りを嬉しそうにはねている。

「ははははは！なるほど、クッキーか！」

「チェリーさんにそっくりだ!!」

「ふふふふ．．．あなたもクッキーが大好きなんですね!!」

「ワンワン!!」

狼は嬉しそうに吠えた。

少年は狼に青の首輪をつけた。

口にはクッキーを頬張っている。

「．．．これでよし．．．と．．．」

少年は立ち上がる。

「さあ、新しい仲間が増えたところで!!旅をつづけますか!!」

「「おおー!!」」

「ワンワン!!」

少年達は草原を踏みしめる。

が
．
．
．

「．．．あり．．．？」

「え．．．」

「うそ．．．」

「クウン？」

地平線の先が見えると同時。

草原は終わったのだった。

前には海ばかり。

「な．．．な．ん．で．す．と．．．」

「まさかこんなに短いバイオームだったなんて．．．」

前のようなラージバイオームとばかり思っていました・・・
「ワンワン!!」

バシヤ・・・バシヤ・・・

狼は水遊びを始める。

「いっらあ!!そいー!」

少年は怒る。

「・・・つてことは・・・」

「この島に・・・別れを告げなきゃいけないってことだね・・・」
子供はつぶやいた。

「・・・そうだな・・・」

ルーフスは思い返す。

この島のとある浜辺でモンスターに襲われた。

ライモンとも出会った。

洞窟で鉱石を取って、ジョーとも出会った。

ゴーレムと村長さんに出会い・・・

ムフェックリー博士に出会い・・・

そして、こいつ・・・ジャックに出会ったんだ。

ジャックも思い返す。

本当に、いろんなことがあったなあ・・・

地の果てでゾンビピッグマンと出会った。

ブレイズと戦った。

あんちゃんと共に、エンダードラゴンを倒した。

(俺は、この島で・・・)(おいらはこの島で・・・)

(どのくらい、成長したんだろうか・・・)(

チェリーは笑う。

「本当に、いろんなことがあったんですね・・・顔がほころんできますよ。」

「うお!?まじで・・・ハハハハハ!!」

「ハハハハハ!!」

「ふふふ・・・」

「よし、島の最後の記念に、ここに灯台を建てるか！」

「賛成!!」

「ワン!!」

「長期にわたる大きなプロジェクトだ・・・拠点を完成させよう！」

チェリーはジャングルに木を、ジャックはこの草原の動物達を狩ってきてくれないか？」

「分かったよ!」「分かりました!」

二人は散っていった。

「さてと・・・俺達は洞窟で鉱石をとってこよう!!」

「ワン!!」

少年は洞窟を捜しに森へと向かう。

太陽が沈み、夜になり、朝になった。

少年達はそれぞれの場所で睡眠を取り、作業を続けていた。

最初に戻ったのはチエリー。

汗を拭きながら、木材の沢山入ったバッグを草の上に置いた。その横に寄りかかるようにして座る。

「ふう……このくらいでいいかな……」

松ノ木と榎の木も採ってきちやった……

……ルーフスさんとジャック君はまだ終えてないのね……」

「チエリーさん!!」

「ジャック君!!」

ジャックが戻ってきた。

バッグの中には焼いた肉とキノコのシチュー。

「草原の動物は本当に元気があったよ。感謝して食べないとね!」

「そうですね! どうでしたか? 夜は。」

「夜は良く眠れたよ。縦穴掘って、松明立ててね。」

・・・そういえば昨日は狼の鳴き声がすごかったような・・・

「確かに私もそうでした！昨夜はそれであまり眠れなかったんですよ・・・」

「はははは！それにしちや、肌もきれいだよね、チエリーさんって！」

「お、お世辞を言わないでください!!」

メイドは顔が赤くなる。

「・・・あ！あんちゃんが帰ってきた!!・・・って・・・え・・・!?!」

そこに居たのは戦場の跡にしたような出で立ちの少年だった。

狼も・・・なにやら怖くなっている・・・

「はあ・・・はあ・・・あいつは・・・これまでで最大の強さだった・・・

あいつとは・・・関わるべきでは無かった・・・」

「ど・・・どうしたの・・・あんちゃん？」

少年は押さえていた左腕を離して、真顔でこう言った。

「いんや。なんにも。」

「なにがしたかったんだよー！」

「ワンワン!!」

狼はしっぽを振る。

メイドは腹を抱えて笑っていた。

「よし、設計図は決まった！明日の朝一、作業に取り掛かろう！」

「おやすみなさい！」「おやすみー！」

「クウン・・・」

少年達はベッドにもぐった。

今日も、月がきれいであった。

続く

番外編2 : Merry Christmas!!

少年達はタイガの山岳の壁に、石を採りに来ていたのだった。

その時、ジャックの目の前に、ちらちらと白い何かが降ってきた。

その白い何かは、止め処なく、降りしきる。

「雪だ!!」

「なるほど、今日はクリスマスでしたね!!とてもきれいです・・・」

「あくうずうずするぞおく!!雪をみるとく!!」

「ワン!!ワン!!ワン!!」

狼は雪を捕まえようとあちらこちらへとさまよっている。

少年は木をすり抜け、拠点へ戻っていく。

「ジャックくんは、確か雪国出身でしたよね?」

「うん、本当に長い間、冬には雪を見てたよ。」

「やっぱり、雪を見ると落ち着くなあ・・・」

「ふるさとのものって、何か落ち着くものがありますよね・・・」

「やっぱり、おいらはまだ子供なんだな・・・」

「・・・？」

チエリーはジャックの言い出したことに疑問を抱いた。

ジャックとチエリーに、いきなり何かがぶつかる。

冷たい。

「きゃっ！」「うわ！」

「ハハハハハハ・・・!!」

見れば少年が雪を投げている。

「もう！ルーフスさんの頭の中には風情というものがないんですか！」

「このう!!村の雪合戦で一位になったおいらをなめるなよ!!」

ジャックは雪を集めて投げ返す。

「こっちだこっち!!」

少年も逃げる。

「待てー!!」

「・・・もう・・・」

チエリーは少し笑った。

そしてはしゃぐジャックを見てチエリーは考えていた。
さっきの言葉の意味だ。

もしかしてジャックくんは、プレゼントが欲しいのじゃないかしら・・・
無理も無いわ。まだ11歳ですもの・・・
・・・！そうだわ！

チエリーは手を一回叩いた。

「ふう・・・遊んだな〜!!」

ジャックがリビングに寝転がる。

横では狼が眠っている。

「ジャックくん、疲れてるでしょう、部屋でゆっくり寝たらどうですか？」

「うん、そうするよ。ありがとう、チエリーさん。」

「俺も、そうしようかな！」

「あ……ちよつと！」

チエリーはルーフスが立ち上がったと同時に呼び止める。

「……ちよつと、手伝ってもらえませんか。」

ジャックは暗い自室で考えていた。

つつい、クリスマスプレゼントを欲しがってしまう自分。

冒険に出た者として、こんな甘い考えでいいのかな……
もつと、自分は大人になれるのかな。

まだ、自分は子供なんだ。

ふとドアの外を見た。

もう深夜だ。

なのに明かりが点いている。

「あれ・・・まだあんちゃん達寝てないのかな・・・」
ジャックは部屋から出て、一階へ降りた。

やっぱりまだ寝てないんだ。
ジャックはドアを開けた。

キィ・・・

「メリー！クリスマス!!」

「ワン!!」

そこに居たのは赤いサンタの服に身を包んだメイドと少年。
狼までもサンタの服を着ている。

子供は一瞬、ポカンとした。

だが、その次に沸きあげてきたのは

嬉しさだった。

「さあ、ジャックくん、今日は夜更かしして楽しみましょう！」

「ほらほらー！ご馳走もいーっぱい！作ったぞ!!」

「ワン!!ワン!!」

狼はチキンの骨を啜っていた。

「あんちゃん！チエリーさん！ありがとう！・・・ごめんね手伝わなくて。」
「気にすんなって！」

お前は俺達にとって、大切な弟みたいなもんなんだからよ!!」

ジャックは涙が出ってしまった。

この二人が、自分にとってもっと近くにいることを感じたのだ。

もはや、『家族』。

「・・・おいらも・・・あんちゃんやチエリーさんみたいな
お兄さん、お姉さんができて嬉しいよ!!」
ルーフスとチエリーは笑う。

「さあ！今夜は楽しむぞ!!」

「おー!!」

「ワン!!」

大人になつたら、こんなことも素直に歓べなくなるのかな？

なら

僕は。

まだ、子供でいても、いいかも知れないな!!

番外編 2：終

ここは地の果て。

鬼と守護神は地上の雪をみていた。

「なあ、ピッグマンよ．．．」

「どうしたのだ？」

「俺も、雪国。いきたいなあ・・・」

「・・・自分の体、見てから言えよ。」

ブレイズは頭を下げた。

「……だよな。」

6：真夜中の怪物

「よし！明日の力仕事に備えてみんな、おやすみ!!」

「おやすみなさい。」

「おやすみ！」

「クウン・・・」

家の明かりが消えた。

ここは何の人影も見えない草原。

今日はいつもより風が強い。

草がざわざわとなびいている。

・・・前言撤回しよう。

草原の中に一人、人影が見えた。

人喰い狼達が群がる。

いかにも危ない。

喰われる。

と思われた矢先。

人影は大きくなった。

もはや人影ではない。

その横顔の影はまるで

『狼』。

「ゴオオオオオオン・・・」

「ワオオオオオオン・・・」

「ワオオオオン・・・」

「ワオオオオオオオン・・・」

「ワオオオオン・・・」

遠吠えが一軒の小さな豆腐小屋にまで響いた。

「ううん・・・」

ジャックは、布団を肩までかけなおした。

時間を進め、翌日の正午。

少年達は拠点を半分まで完成させていた。

「チェリーさん、ガラス余ってる?」

「あ、1スタックありますよ。」

「おい、ジャック、ちよつと斧取ってくれるか?」

「ごめん、今手が離せない。」

「ああ、大丈夫だ・・・」

「ワン!!」

見ると狼が斧を咥えている。

「おお! お前も手伝ってくれるのか・・・よしよし、あとで肉いっぱい食べさせてあげるからな!」

「ワン!!」

「おーい! あんたら、何してるんだい?」

「あ、住人の方ですか・・・こんにちは。」

「こんにちは。」

そこに居たのは中年のおじさん。

「グルルルル・・・」

狼は険悪そうに唸る。

「ああ、こころこら。ごめんなさい・・・」

「ははは・・・いいんだよ。」

おじさんは笑いながら言った。

「わたしはペットの狼には嫌われやすいんだ。」

(ペットの狼『には』・・・?)

ジャックは少し疑問に思う。

「ところで、何をやっているんだい？」

「あ、今灯台をここに建てようと思ひまして・・・まだ拠点を作ってるのですが・・・」

「な・・・なるほど・・・そうか・・・」

(・・・なにやら不満そうだ・・・)

子供はまたも疑問に思う。

「まあ、気をつけてやれよ。」

「ありがとうございます！」

おじさんは森の中に入っていった。

「・・・」

「グルルル・・・」

少年は考える。

「・・・？・・・ジャック、どうした？」

「あんちゃん・・・おかしいと思わない？」

「なにが？」

「あのおじさんだよ。あんちゃんやチェリーさんは、昨日のそれぞれの作業の時、

どこかに一軒家を見た？」

「いや。」「私も。」

「おいらも見えてないんだ。じゃあおじさんはどこで夜を過ごしてるんだ？」

「いや、それは初めてここに来たからじゃ・・・」

「それもないよ。おじさんは自分で森へ入っていった。初めてなら絶対に迷うし、迷ってたなら高く見渡せるジャングルに行けばいい。」

おじさんが持つてたのは斧だけ。リュックもしよってないんだよ。」

「ちよつと考えすぎじゃないのか？」

ルーフスは笑う。

「ただ地下で生活してただけだよ。地下に拠点があるんだ・・・さあ、続けようぜ!!」

「地下にしては汚れてもいなかったけど・・・まあ考えるだけ無駄か・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼は「俺もそう思う」といったような、そんな様子に見えた。

その夜。

「拠点も完成したし、明日はいよいよ灯台作りだ。皆、しっかり寝て、体力つけておくんだぞ。」

「はい!!」

「ワオン!!」

皆それぞれの部屋に入る。

ジャックは部屋の電気を消した。

「さあ、寝よう。」

ベッドにもぐりこむ。

ガオオオオオオン・・・

子供は電気をつけた。

なんだ・・・？

いつもと違う狼の鳴き声。

近い。

ガオオオオオオン・・・

近い!!!

子供はおそるおそる一階へ降りる。

あ！．．．

玄関が空いている。

あんちゃん．．．鍵閉め忘れてます．．．

ジャックは涙目になる。

ゴト．．．ゴト．．．

何者かがいる。
リビングだ。

ジャックはりビングを覗く。

そこに居たのは・・・

狼男。

「うわ・・・」

子供は大声を出しかけた。
狼が左右を確認した。

だめだ・・・気づかれる。

ここは・・・こっそり・・・

しんと静まり返った家の中。

子供には狼男しか見えなかった。

ドクン・・・

子供はリビングの端にあつたチェストをこっそり開く。

剣・・・剣・・・

チェストにあったのは、まだ一回しか使っていない金剣。

ルーフスがただただかっこいいから作ってみて、使えなかったもので放置された剣。これしかないなあ・・・もっとういのは

「カラン・・・」

狼は後ろを向く。

床にはチェストから落ちた鉄のシヤベル。

その横に——剣を持った子供。

「ばれちまった・・・」

狼男が口を開く。

「ひっ・・・!!」

「しょうがねえ・・・消すしかねえなあ!!!」

「うおおお!!やけくそだああ!!」

子供は狼男に斬りかかる。

狼男は剣を見てあせった。

「ちよつと・・・あれ?それ?おま、金つて・・・」

ズバシ!!

「お・・・俺の・・・弱点・・・」

ボタン!!

「・・・ありやりや・・・」

月はもう沈もうとしている。

少年はあぐらで、腕をくんでいる。

テーブルの向かい側に、狼男が正座している。

その横で、子供とメイド、狼が見守っている。

「なんで石なんか盗もうとしたんだ？」

「あんたら、都会の奴らだろ。ここに灯台を建てて、その場所を起点にして！」

「この森を開拓するんだろ！」

「はあ？そりや間違いだよ．．．俺らはただの旅人だ。森なんて焼き払ってどうするんだ

よ。」

「え．．．そうか．．．」

狼男はうなだれた。

「俺としたことが．．．すまなかつた!!」

狼男は頭を下げた。

「分かればいいんだよ！」

少年は笑う。

狼男は悲しそうな目で問う。

「なあ……一つ、頼みを聞いてもらえないか？」

「あんちゃん！そいつは泥棒だよ！頼みなんて聞く必要が……」
「待て、ジャック。なんだ？頼みって。」

「俺も……その灯台、手伝わせてくれねえか。」

「「え……？」」

「クウン……」

狼は眠そうにあくびをする。

もう朝日が昇りかけていた。

「……ここから、ずうつと離れた都会に、俺の娘がいる。」

朝日が部屋に差し込む。

狼男は縮んだ。

さつきまで凶暴だったその顔立ちは・・・

まさに、父親そのものの優しい顔立ちであった。

「お前は・・・昼間の時の・・・!!」

「私は、娘にその灯台の光と共に私の声を届けたいんだ・・・!なあ・・・頼む!!」

「・・・分かった。異論は無いよな、二人とも。」

「分かりました。灯台を完成させましょう！」

「そんな頼みなら大丈夫だ！」

少年は狼にも問う。

「お前も、いいか？」

「ワン!!」

狼は元氣よく答えた。

「ありがとう・・・皆さん・・・」

狼男が涙を流す。

「おいおい・・・泣くなよ・・・」

「泣いてない！こりゃあ、汗だ!!」

「はははは・・・」

「ふふふ．．．」

「じゃあ、今日から、灯台作りをはじめろ！みんな！怪我に気をつけて、楽しく作るぞ！！」

「「おおー！！」」

「ワン！！ワン！！」

こうして、ルーフス達と狼男の灯台作りが始まった。

7：光と咆哮

鳥が唄う。

太陽が青々しい海の彼方から、オレンジ色を放って昇る。

少年達はチェストから急いで資材を取り出して外に出た。

「よおーし、今日は灯台作り、がんばるぞ!!」

「おー!!」

「ワオーン!!」

三人と一匹は、早速、設計図を元に灯台を作り上げていった。
ジャックは設計図を確認し、

チェリーが内部から松明をつけていく。

狼男が高速で石を積み上げる。

ルーフスも石を置く・・・置き間違つて、

狼は資材を三人の元へ運ぶ。

またまた作業を繰り返す。

三人と一匹は汗をだくだくと流し、灯台の完成を目指していたのだった。

時計の針は廻り。

一日がもうすぐ終わろうとしていた。

今日は狼男の提案で、外で夕食をとることにした。

二人と二匹が横たわった原木のベンチに座っている。

「ふう〜疲れた〜!!今日はガッツリ食うぞ!!」

「久しぶりの運動になりました!」

「で、でも大丈夫?狼寄ってくるんじゃないや……ってこんな狼だらけのパーティーじゃ

寄ってこないかあ……」

子供はホッと息をつく。

「ん?バンバン寄ってくるぞ。」

「エ……」

「なんせ人喰い狼達は俺の部下だからな。」

毛むくじやらの狼男は言った。

「大丈夫だ。人喰い狼っていうのは世間の名。俺がいるうちには、人間はくわねえさ。」
その背後から、「灰色の毛の狼達がこちらを覗く。」

「「ワオーン!!!」」

「言ってる傍から来た・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼は嬉しそうだ。

「ははは、やっぱりお前仲間みたいなもんなんだな。遊んで来い。」

「ワン!!」

「「ガル!!」」

狼達はいっしょに森のほうへ、嬉しそうに走っていった。

「ちゃんと朝までには帰って来るんだぞ!!」

少年達と狼男は焼いた豚肉を食べながら話していた。

「・・・そういえば名前聞いてなかったな。」

「俺はビスト。狼人間だ。」

「狼人間がこの世界にいるなんてなあ・・・世界は広いんだな。」

「お前ら知らんのか？俺の先祖はまだ陸が一続きになっていた時代にさかのぼるらしい。」

世界中に狼人間は散らばってるぜ。俺みたいな人肉に興味の無い奴もいるが、ほとんどは

人間を食い殺す。気をつけろよ。」

子供の背筋が凍る。

少年は問う。

「・・・そういや娘さんがいるらしいな。」

「ああ、俺には娘がいる。だがあいつは狼人間ではなくなったただの人間だ。」

母の血を多く受け継いだようだ。」

「お母さんは・・・？」

「あいつが幼い頃、死別した。元々病弱だったんだ。」

あん時は悲しんださ。・・・でも。」

「娘がいたからこそ、俺は強くなれたんだと思う。」

「娘さんは今どこに？」

メイドは尋ねる。

「遠い遠い地に働きに行っちゃったよ。あいつは出て行くとき、反対する俺にはじめて反抗したんだ。」

驚いたね。小っちゃええ時は狼の姿の俺を見て一日中ベッドから顔を出さなかった事があったのによ。」

『自分も外に出て、世界をしつかりこの目で見たい』だとよ。

そんなことを一心に伝える娘を見て、俺も心折れちゃったよ。それでいいだろう、と。」

「ワオーーン!!」

「「「ワオーーン!!」」」

狼達は木の上に昇って吠える。

狼男はどンドン燃えていく炎を見ながら言う。

「だが実際、行っちゃまうと寂しくなるもんだな・・・」

「なあ。」

「ん？」

狼男は作りかけの灯台をみる。

「・・・この光、あいつにも届くかな・・・」
「ああ、届くさ。」

少年は言った。

炎は燃え果てて、どんどん小さくなっていく。
狼がもう一吠え、月夜に吠えた。

翌日、

ルーフスたちの灯台作りが再開した。

丸石を並べ、松明をたて、石を採取し、・・・

夕方。

前には堂々とそびえたつ灯台があつた。
真つ赤な太陽に、薄明るい光を放っている。

「できた・・・」

少年達は草原に寝転がる。

その日の夜。

少年達は灯台を眺めていた。

「明るいなあ!!」

「本当だね!」

「素敵・・・」

「ワン!!ワン!!」

狼男は無言のまま眺めている。

そしてしばらく経った後、口を開く。

「この光なら、娘に届く・・・」

狼男の目から涙が垂れる。

その涙は一続きになっていき、狼男は草原に座りこんだ。

「・・・ありがとよ・・・ありがとう・・・!!」

少年達は笑う。

「
ワ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
ン
!!!!
」

「
ワ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
オ
ン
ン
!!!!
」

狼男は何度も吠える。

まるで光と共に我が娘に伝えるように。

——私の娘へ。

元気ですか？

体調崩していませんか？

怪我していませんか？

私は、いつもこの地で帰りを待っています。

その時まで、この光と声を届けます。

——
父より。

8：狼の名前は・・・？

灯台を見上げていた夜が過ぎ。

狼の草原に朝が来た。

ルーフス達は拠点から、手持ちにするものを選んでいた。

「終わったか？お前ら。」

「終わりましたよ。」

「おいらも終わったよー!!」

「よし、後は・・・あ・・・あいつか・・・」

「狼のことですか？それなら家の前で狼達と別れを惜しんでましたよ。」

「クウン・・・」

「ワオーン！」「オーン!!」

「ワオーン！」

家の前で五匹の狼が泣いていた。

「・・・さすがに二日も滞在してちや、親友になるよな・・・」

「もう少し出発を遅らせましょうか。」

「お前ら、本っ当にありがとうな！こんな立派な灯台を作ってくれやがって！」

「俺らだけで作ったんじゃないさ、あんたも手伝っただろ！」

ルーフスは笑う。

「俺も灯台作ってて楽しかったぜ！ガキの頃に戻ったみてえだった！」

「ふふふふ・・・あなたって本当に子供らしいですねっ！面白いです！」

狼男は照れる。

「お前らはこの後、どっちに行くんだ？」

「あつちだ。」

ルーフスはジャングルと反対側の、広い海を指差す。

「!!・・・はははははは!!」

「きゅ・・・急にどうしたんだよ・・・」

「わりいわりい、偶然だな・・・俺の娘もあつちの方角に船を進めていったんだ。」

「じゃあ、もしかしたら会えるってことかあ!」

「そうかもな、・・・もし会ったら、話してみてくれ、性格は悪くねえからよ。」

「ああ。・・・狼、大丈夫か？」

「・・・ワン!!」

三人はボートを海に浮かべる。

「じゃあな!風邪なんか引くなよ!!」

「わあつたよ!!お前らもな!!」

「ワオーン!!」

「!!」
「!!」
「!!」

今まで旅をした島に、別れの遠吠えが響いた。

「あ・・・」

「どうしたの？あんちゃん。」

「今悪いんだが・・・」

「狼の名前。」

「あ、あ、ーッ!!」

「ワオン？」

「なんで灯台作り終わってから気づくんだよ!!」

ルーフスはボートを叩きながら自問自答する。

「し、仕方が無いですよ。」

メイドは言う。

「なんてったってこの小説の作者が忘れたから

こんな変なギャグ展開を作ること・・・」

「ワーワーワーワー!!メタな発言はやめろ!!」

※本当にごめんなさい。

ボートはまっすぐ進行方向に進んでいく。

「……まあ名前を考えましょう。どうします?」

「かつこいい名前がいいな!!ガ○ダムとかエ○レカセ○ンとか。」

「おい、登場する度○をつけるような名前はやめなさい。」

「あんちゃんはどんなのがいいの?」

「うー……ん……そうだな……」

骨が大好きだからコツコツ君とか……」

「チエリーさんはどんな名前がいいの?」

「かわいい名前がいいですね!ウルフから『ウールちゃん』とか。」

「なんか羊みたいな名前だな……」

「スルーせんといて!!」

ルーフスは涙目になりながら大声をだした。

狼は犬掻きで楽しそうにボートを追いかけていた。

ボートはゆっくりと進んでいく。

「まだ島は見えないな・・・よし、ゆっくり考えるぞ。」

まずはこいつから連想する情報を整理するぞ。」

ルーフスは本と羽ペンを取り出す。

「まず狼!」「うん。」

「お肉を食べますよね。」「うんうん。」

「骨もなめて・・・って食べ物しか思い浮かばないぞ。」

もつと性格の方で考えよう。」

「えつと・・・強いですよね!!」

「確かに、こいつは真つ先に俺の腕に怖がらずに噛み付いてきたよな。よし、候補つ

と・・・。」

「気が利く!」

「なるほどなるほど・・・。」

海はすでに赤く染まろうとしていた。

海上の夜。

少年の本には300以上の候補。

「だぁー!!逆に何選べばいいのかわかんねえ!!」

「候補出しすぎましたね・・・」

「途中で止めておくべきだったよ・・・」

「・・・ちよつと休もうぜ?」

「ハア・・・どーしよーかな・・・」

三人はボートの上でへたばる。

狼は寝ぼけているのか、犬掻きしながら器用に寝ている。

少年達は夜空を見た。

星がキラキラと小さく輝き放つ。

少年は懐かしく感じた。

自分の最初。

旅に出てから、まだ一人だった頃。

こんな風に、夜空を眺めていたんだっけ。

「・・・そうだ・・・星だ！」
「ルーフスさん？・・・」

「あんちゃん?」

「おい、ジャック、お前、なんか違う言語の辞書持つてるか?」

「ああ、あるよ。」

少年は本を取り出す。

「『星』って調べてくれ。」

「星・・・星・・・ステーラ。ステーラだよ、あんちゃん。」

「まあ・・・いい響き・・・でも何故『星』を?」

「俺、いつも思うんだけどさ、どの星もこの星からすげえ遠いだろう?

考えてみれば、よく光なんか届くよな、て。」

ルーフスは狼の頭をなでる。

「だから俺は星のように、『強く』輝いて欲しいんだ。こいつにな。」

「いいよ! あんちゃん! かつこいい名前だ!!」

「私も賛成です!!」

「よろしくな! ステーラ!!」

「クウン・・・」

狼は寝ぼけ眼でルーフスを見た。

翌朝。

「はぁ．．．寝ちやつてたのか．．．．．」

子供は背伸びをする。

「どこまでです．．．．．」

子供は進行方向を見たと同時に固まる。

そして目をこする。

もう一回見る。

そして目をこする。

もう一回見る。

音量注意。

「え
．
．
．
．
」

「前を見る」っていつてるらしい。

「前?・・・!!!」

前を見た瞬間、少年の疑問符は感嘆符に変わっていた。

「なんじゃありや・・・」

「何・・・あれ・・・」

9：グレート・スライヴシティ

「なんじゃありや……」

「何……あれ……」

少年は目の前に見えた景色に目を見開く。

霧には直方体の大きな影が映される。

ボートは前進する。

霧が晴れていく。

ビル、だ。

10階どころではない、30、いや、80階はありそうだ。

「すげえ………」

「初めてみました……あんな高層ビル……」

「すごい都会だね……」

少年達は見入るばかりであった。

少年達が砂浜に着くと、

改めて高層ビルの高さが目に分かった。

高層ビルの周りには大小それぞれのビルが建っている。

「何？あの子達。」

「旅人さんかしら？」

「まあ、服の汚らしいこと。」

「彼らは悲しい人たちなんだ、ほつとこうぜ。」

「そうね！ダーリン、・・・」

近くで悪口やら何やらが聞こえている。

少年達は目にもくれなかった。

「くらー！君達！！」

見るとライフセーバーが走ってくる。

「困るな、ここにいては。ここはリゾート地なんだ。」

君達がいると評判が下がる。」

少年達はムツとした。

が、おくびにも出さず、

「ああ、すみません。まだ田舎者でございますから。へへへ・・・」
と皮肉りながらすすこと立ち去っていった。

リゾート地の出口から出ると、もうビルや店が並んでいた。

人通りも多い。

『ロイヤルベールホテル：グラントスレイヴシティ支店』

『メークドネルド：グラントスレイヴシティ第3支店』

『メイプルドーナッツ本社ビル』

『ビース生命保険本社ビル』

．．．

少年達は看板を見ながら歩く。

狼が舌を出しながらしつぽを振っている。

初めての景色に興奮しているようだ。

その挙動不審の姿を観てたのか、一人のアロハシャツの老人が話しかけてきた。

「君達、この街は初めてかね？」

「はい、私達は北の島から旅をしてきた者です。いや、本当にすごい都市ですね。」

「ワン！」

ずっと黙っていた狼がやつと口を開く。

「ほう、君達、旅をしてきたのか……」

老人は遠い目になる。

はっと思い出したのか、

「ところで君達、『エメラルド』は持っているかね？」

「エメラルド？……ああ、確か……」

ジャックがバックから取り出す。

「……この宝石ですよね。」

ヒスイ色に輝く宝石。

「そうじゃ、ここでの『対価』は『エメラルド』で行うのじゃ。

これを持っていないければ、あんた、この都市で何も買えんぞ。」

「なるほど……ありがとうございます、おじいさん。」

「なんのなんの……旅人さんに出会えたことで、私も昔の思い出を思い出すことができます。こちらこそ、ありがとう。」

老人は去っていった。

少年は少し安心した。

さつきみたいな卑下する奴ばかりいるのかと思ったが、親切な人もいるんだな、と。

ぐうぐう……

ジャツクのお腹が鳴る。

チエリーは微笑んで、

「せつかくだから、何か食べていきましようか。」

「ああ、そうだな！」

「へへへ……」

「ワンワン!!」

少年達は近くにあつた『メークドネルド：グランドスレイヴシティ第3支店』
に入つていった。

「「いらつしやいませ〜!」」

「ご注文は何でしょう?」

「えつと・・・フィッシュサンド一つ、ビッグサンド二つで。」

「テイクアウトで?」

「へ・・・」

受付は少し顔をひきつらせて、

「お持ち帰りにしますか?ここで食べていきますか?」

「あ、お持ち帰りで・・・」

「エメラルド5コになります。」

少年はジャックからもらったエメラルドを払う。

「「ありがとうございます！」」

「はあ．．．意外に高いんだな．．．」

「本当だね．．．」

少年達は街道を行く。

狼はチェリーのフィッシュサンドの魚の半分を食べている。

「でもおいしいですよ、このハンバーガー。」

「おお、そうだな．．．ムシヤムシヤ．．．」

少年はがっついた。

「この都市も、まあまあ楽しいところだな！」

「おめえは．．．この都市の何を知ってる？」

少年は目を開く。

右を向くと、そこには路上に缶を置いて酒を飲む男がいた。

ボロボロのジャンパーを着たその男の表情は、ネックとキャップでほとんど見えなかった。

男は続ける。

「おめえの目に映るもんが、ぜんぶ真実だと思うな。この都市にや、裏があるんだよ……」

ジャックとチエリーも話を聞く。

さらに続けた。

「おめえは、この瞬間の都市を信じるか？ 疑うか？」

その男は見るからに汚らしい存在であつた。

だが見えない口からこぼれだす話は、妙に惹かれる点があつた。

どういう意味だ？

その時、遠くから大声を出して歩いてくる人物がいた。

「やあやあ諸君!! 今日もがんばっているかね!!」

「これはこれは市長!! こんにちは!!」

「元気でなによりだ!! がははははは!!」

豪快で、金髪のその男は笑う。

「市長さん! こんにちは!!」

見ると少女が一輪の花を持っていた。」

「これ!!」

少女は男に花を渡す。

「ありがとね〜お嬢ちゃん! お兄さん、今日も頑張っちゃうよ!」

スーツの男、市長は少女の頭をなでる。

その時、後ろについていた女性秘書は市長を呼ぶ。

「市長、午後3時丁度から『メルエス株式会社社長、ラレール・ベルグソン氏とのご対面があります。そろそろ戻らなければ。』」

茶色の長い髪を縛り上げ、黒いスーツに身を包んだ女性秘書。

銀縁眼鏡をずりあげている。

「ああ、分かったよ。じゃ、戻ろうか。」

男が振り返る時、一瞬目が会った・・・様な気がする。

そして素早く目を逸らした・・・様な気がする。

はて・・・

あんな人、どっかで見たような・・・

チエリーも首をかしげている。

ジャックは何も感じないようだ。

「市長さんって、面白そうな人だなあ。」

「クウ〜ン？」

ここはグレート・スライヴシティ、グランドビル58階。

最上階であるこの階に一人の男が座っていた。

逆光で顔が見えない。

壁掛け時計は午後5時を指している。

この季節だ。外はもう真っ暗だ。

男は少し考える素振りを見せながら、誰かに電話をした。

「お前ら。この都市の北に旅人が来た。」

そいつらを始末だ。」

「了解。」

ガチャン。

隣にいた秘書は言った。

「恐縮ですが」

「うわ、びっくりしたあ!!」

部屋の明かりが付き、逆光ではなくなった。

「お、お、お前は、気がつくくと近くににいるからびっくりするんだよ!

もつと強くノックしてこいよ!!」

さっきのダンディな声と裏腹に、まぬけに裏声を出した。

「承知しました。」

そして裏返すように、ダンディな声に戻る。

「ふっふっふ・・・あいつら、終わったも同然だな。

私に逆らうとこういうことになるんだぜ・・・はっはっはっは!!」

10：表と裏

昼食をとった後、ルーフス達はエメラルドを5個ずつ持って、解散した。集合場所と時刻は午後6：30、都市の中心の噴水だ。

ルーフスはただただ気ままに、電気屋や釣り道具屋などをめぐりめぐる。ステーラはルーフスについていく。

ジャックは図書館でこの付近の気候帯の調査や、本を読んでいた。

チエリーは本屋で料理本を選び、服屋で服を見ていたりしていた。

チエリーが服屋から大きな紙袋を持って出ると、さっきのアロハシャツの老人がいた。

「おお、これはこれは・・・先ほどのお嬢さんではありませんか。」

「あ、こんにちは・・・」

「おや？他の二人はどうしたのかね？」

「今は自由行動中です。午後6：30分に噴水に集合する予定で……」

その時、老人の目が大きく開く。

そして老人は服屋に少し入ってから、受付の上に飾つてある時計を覗く。

午後5：16。

老人は服屋から出て、チエリーの肩を掴む。

「今すぐこの街から立ち去りなさい！」

「今すぐだ!!」

「えっと……おじいさん……どうしたのですか？」

老人は血相を変えて言った。

「いいか、お嬢さん、この街の夜間人口に対する昼間人口の比率は96%だ。」

老人は年の割りに難しいことを喋っている。

チエリーが要約して喋る。

「つまり……夜の間の人の数より昼の間の人の数が大幅に大きいってことですよね……」

「そうじゃ、なぜこうなっているかというとな……」

チエリーは老人の言葉を耳にして、驚愕した。
た、大変!!

ルーフスさんとジャック君に知らせなきや！
チエリーは都市を駆け抜けていった。

「くれぐれも気をつけるんじゃぞ!!」

ルーフスはじーつと見ていた。
ステーラと一緒に。

蛙だ。

ルーフスが足を踏みおろす。

ダン・・・

ゲエーコツ。

蛙が鳴いた。

ステーラも同じく。

ボン・・・

ゲエーコツ。
蛙が鳴く。

ルーフス。	ダン。	ゲエーコツ。
ステーラ。	ポン。	ゲエーコツ。
ルーフス。	ダン。	ゲエーコツ。
ステーラ。	ポン。	ゲエーコツ。

「面白いな・・・これ。」

「クウーン。」

「・・・！！・・・今は・・・」

午後6：27。

「うわ、蛙に見とれてたらもうこんな時間かよ!!急ごう、ステータ!!」

「ワンワンワン!!」

ルーフスとステータは雑貨屋さんから出た。

午後6：40。

「あぁー!!あんちゃん、なにやってたのさ!!」

「ごめんごめん、蛙が・・・」 「ワン!!」

「蛙?・・・それよりかチェリーさんが来ないんだ。どうしたんだろ?」

「え・・・?あのチェリーが?・・・あいつはおつちよこちよいだけど時間は必ず守るはずだよな。」

「・・・あんちゃん、何かチェリーさんの身に何か起きたんじゃないの?」

「でもあいつにや剣術が・・・」

「あ、あー!!!」

ルーフスのジャックの中に、三人の武器一式とエメラルド5個。

「まままままずいジャック……どどどどどどどうしょ……」

少年は顔面蒼白になっている。

「大丈夫だよあんちゃん、この街はとてつもなく広い、3時間程度じゃ都会から逃げ出せないよ。……捜そう！チエリーさんを!!」

少年は気を引き締める。

「……ああ!」

「ワンワン!!」

「やっと見つけましたね兄貴。」

「ばっきやろー!!」

兄貴と呼ばれる男は弟分を殴る。

「てめえが雑貨屋さんの『あの玄関によく置いてある防犯用の蛙の置物』に見とれてたからだろうが!!」

「ひい! すいません!!」

廃ビルの3階。

銃を持ったスーツのたくましい男は銃口をセットする。

照準・・・旅人の少年。

「だが俺の銃のテクニクにかかりや、一秒で終わりさ・・・」

「いつけー! やっちまえ! 兄貴!!」

少年の頭が照準に合わされる。

アディオス・・・

「おっ！・・・なんじゃこりや！」

サツ

バピューン。

バシヤ!!

少年はかがみ、水鉄砲の水は後ろの車に当たった。

兄貴は殴る。

「あ、あ、兄貴・・・照準が・・・」

「あー!!」

照準は既にいずこへ。

「チエリーさん！チエリーさん!!」

「チエリー!!返事しろー!!」

「表通りは一通り見たんだけど・・・」

「路地裏にいたりして!」

「いや、そんな・・・」

ジャックの動きが止まる。

「ジャック、どうした?」

「・・・あんちゃん、あれ。」

少年が路地裏を見ると、そこには皮の薄着一枚で、縄で縛られている女の子が3人。

近くには目のよどんだ男達がいる。

「これは・・・」

「おう、おっさん、いまならこいつら、まとめてエメラルド3個だ!!」

少年の目が見開く。

「ほう・・・今日は特価じゃないか・・・どうしたんだい？」

「こいつら、全くもって使えないんですわ。よーするに、

売れ残りだよ。」

売れ残り。

人の。

「さあ、どうすんだい？おっさん、買うの？買わないの？」
「じゃあ、買おうかな。ほら、エメラルド3個だ。」

人3人で、エメラルド3個。

少年は言葉を思い出す。

おめえは、この瞬間の都市を信じるか？疑うか？

こういう意味だったのだ。

この金欲にまみれた風景を見て、昼間の都市など信じられるわけがない。

表と裏だ。

「いやだ!!」

女の子が一人叫ぶ。

「おかあさんとこ帰るんだ!もう売られたくない!もう止めて!

止めて!」

男は蔑む。

「はあ?・・・ハツハツハ・・・止めれる訳ねえだろこんな儲かる商売

．．．いいかあ、お前。こうなるのもお前が貧しいから悪いんだぞお。
嫌なら儲かれ。嫌なら金を手に入れろ。」

「うつ．．．うつ．．．」

女の子は泣く。

「さあ、メイルちゃん、おじさんと、家へ来るんだ．．．」

女の子二人は呆然としている。

もう意識はほとんどないらしい。

中年の男はいやらしい目で女の子の腕を乱暴に掴む。

「やだ!!やだ!!．．．」

女の子は最後に泣き叫んだ。

「誰か助けてえ!!」

ドオン！　　バゴン!!

中年の男と販売人が同時に吹っ飛ぶ。

少年と子供がパンチをしたのだ。

少年は笑う。

「・・・やっぱお前もか。」

「・・・常識だろ、あんちゃん。」

少年と子供は女の子の縄を解く。

「さあ、逃げよう！」

女の子達は少年と子供に手を引かれ、表通りを駆け抜けていった。

「に、逃がすなー・・・てどわああ!!」

「ガールルルル・・・」

「ステータラ！ありがとう！あとで肉たっぷり食わせてやっかん!!」
ルーフスは叫ぶ。

ガブツ!!

「いててててて!!」

男は痛さで応援も呼べないようだ。

・・・

ここは？

チェリーが起きると、そこは牢獄の中。

窓もない檻の中。

そうか、私・・・誰かに後ろから殴られて・・・

「気が付いたかい？」

見るとそこには昼間の市長がいた。

・・・いや、市長と呼ぶべきでない。

遠くからじゃ分からなかったが・・・

こいつは・・・！あの時の！！

「村じや、よくも私のことを『セクハラ男』と呼んでくれたもんだ。」

「だって実際にそうなんですもの。」

「な、なにをー!?!」

男は咳払いをし、言った。

「まあいい、お前はあいづらを始末してから、終わりだからな……ハッハッハ!!」
男は去っていく。

あーあ……

油断していた。

あの時に思い出せばこんなことは予測できたはずだ。

バッグも無くなってる。

お腹すいたなー・・・

ギイ・・・

ドアが開く。

「!・・・あなたは・・・」

茶髪の女性秘書だ。

「・・・これ、あなたのバッグでしょ？」

「なんで・・・あなたはあのセクハラ男の仲間じゃないの？」

「ふふ……」

女性秘書は『セクハラ男』という呼び名に笑う。

「私はね、純粹にこの都市の市長として働きたかっただけなの。

だけど前にいたのが……ふふ、『セクハラ男』だったわけよ。」

「ふっ……」

チエリーも笑ってしまった。

「あ、バッグ、ありがとう。」

「私、あなたとなら友達になれそうだわ。」

「友達になりましょ！」

牢獄の中小さな笑い声が響いた。

11：裏側（前編）

ルーフスとジャックは三人の貧しい女の子達をつれ、都会を駆け抜けていた。

「おい！お前ら！あいつら捕まえろ！！」

背後から追いかける黒スーツが声を上げた。

横の路地裏から次々と黒スーツが姿を現す。

「「「コノヤロオ！待て！！」」」

「くそ・・・あんなビジネス街が夜はこんなことになってたなんて！」

「あんちゃん、この女の子達が危険だよ。どこかに身を隠しておかないと・・・」

「でも、そんな余裕も無さそうだぜ？・・・もう俺達の情報は広く知れ渡ってるようだ・・・」

「そんな・・・チェリーさんも捜さなきゃいけないのに！！」

「どうすれば・・・」

「待てえ！！」

「うわ！前から・・・！！」

ルーフス達は女の子達の手を引き、ただただ、逃げることしかできなかった・・・

ここは牢獄。

女性秘書とチェリーは檻の中で話す。

檻の中とは思えない、幸せな内容であった。

都会での暮らしと、旅人としての暮らしを交互に話し合った。

「・・・あ、申し遅れたわね、私はヴァイオレット。」

「私はチェリー。よろしくね！」

「ふー。でもいいな。私も、旅人を目指していれば、こんな窮屈な所で仕事しなくても良かったのに・・・」

「でもあなたはビジネスウーマンとして働きたかったんでしょ？」

「確かにそうだった・・・だからこそ他の暮らしにも慣れてくることがあるわ。」

女性秘書は立ち上がる。

自信に満ちた顔だ。

「でも私はやっぱりこの仕事がいい。男じゃなくても仕事はできるの！その事を社会に伝えたい!!」

「その意気だ!!」

チエリーは笑う。

一瞬にしてバイオレットの顔が曇る。

瞬時に後ろを振り返る

ドツ!!

一発、後ろから近づいてきた黒スーツの腹にパンチを入れたのだ。

「ウツ・・・」

黒スーツは倒れる。

チエリーは驚きの顔を見せる。

「あなたって．．．本当に強いよね．．．心も体も。

なんであんな『セクハラ男』を超えられないのかが疑問だわ．．．」

「それは．．．」

ヴァイオレットはためらいながらも話す。

「お願いします!!この私を秘書にしてください!」

ヴァイオレットはビルから車に乗ろうとする市長に懇願する。

三人の内、一人の黒スーツは叫ぶ。

「こちらお前!市長に向かって失礼だ!今市長は忙しいのだ!下がれ!」

「まあまあ・・・君はこの私のサポートをしたいんだね。歓迎さ。今ちようど、秘書がいなくなつたからね。付いてきなさい。」

市長は笑顔を向けて言った。

良かった・・・偶然秘書がいなかつたんだ・・・

これでやっと、市長になる夢に近づける・・・

「ありがとうございます!!」

市長の働く光景は輝かしいものだった。

市民に必ず声をかけ、市民の意見を反映させる。

暴力団撲滅ののろしを上げ、活動する。

最高の市長であった。

私も、こんな素晴らしい市長になりたいと思ってしまうた。

思ってしまったのだ。

ヴァイオレットは市長の部屋に重要書類を置きに言った。

トントン・・・

「失礼します。」

市長はいなかった。

秘書は重要書類を机において、こつそり壁に寄りかかる。

ふう……

ちよつとがんばりすぎたかな？

まだ秘書としての仕事が慣れてないとか……

……よし！気合を入れないと……

ポチ・・・

「え・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

寄りかかっていた壁が開く。

牢獄だった。

何でこんなものが・・・？

女性秘書は中へ入っていく。

目を疑う光景があった。

一人のスーツの男性がボロボロになって檻の中へたれこんでいる。

もう死んでるようだ。

ヴァイオレットは恐怖に襲われ、後ろに下がる。

と同時に、何かを踏んだ。

バツジだ。

そこには、「第一秘書：ジール」と書いてある。

「見られてしまったか・・・」

女性秘書は後ろを向く。

すると、市長の後ろに黒スーツが二人。
いつものボディガードじゃない。

一人は暴力団の副総長の顔にそっくりだ。

「市長、・・・その男達はどういうことですか。」

「なあに、その通りにとらえておけばいい。それより今はコッチのことだ。」
市長は顎で血まみれの男を指し示す。

「……全く、この男ときたら……私の計画を話せばいきなり秘書を辞めるとか言い出してね。」

この都市をさらに発展させるための計画なのに。」

そうつぶやくと、市長は女性秘書の耳元に近づき、こうささやいた。

「誰にも言うなよ……お前の情報はもう調べてある……」

お前の親父の血が吹き飛ぶ羽目にあうぞ……」

「どろろろ……」

女性秘書は聞き返す。

「なになに・・・ただの偶然さ・・・」

男は話す。

「まさか、焼き尽くそうと思っていた森の管理人が、お前の親父だったとはねえ・・・」

女性秘書は目を見開いた。

女性秘書は一瞬で市長を床に押し付け、護衛用の拳銃をスーツのポケットから取り出した。

カチャ。

市長の眉間に当てる。

「おやおや・・・そんなことしていいのかなあ、こつちにはこの無線のスイッチがある。これを押せば、森にいる俺の部下の受信機に送られて、そいつらが狼男を殺す。そして森に放火だ。・・・ハハハハハ!! 楽しみだなあ、押すのが!」

女性秘書は目に悔し涙を流し、拳銃を離して、押さえつけていた手の力を抜く。「そうだ。お前の親父を大切にしたいんだったら、服従しろ。・・・」

あんなに人の事を考え、行動していた市長が。

あんなに市民に明るかった市長が・・・。

この都市の事を第一に考えていた市長が!!!

「お前は、俺に逆らわなければいいんだよ・・・ハッハッハッハッハ!!」

市長はそういつて明るい社長室へ出る。

「う……うう……う……」

ヴァイオレットの遠い記憶が蘇ってくる。

「ねえねえ、おとーたん。」

「んー？」

「なんでおとーたんは、いつも木をじっとみているの？」

父は笑いながら話す。

「お父さんはな、実は木のお医者さんなんだ！」

「木もおかぜ、ひくのー？」

「ああ、ひくよ。いいかいヴァイオレット。」

「木も私達と同じなんだ。だから、木にもお医者さんが必要なんだよ。」

少女は少し考えてから、

「よくわかんない。」

父親は少女を抱き上げ、頬ずりする。

「わが子ながら、かわいいやつだなあお前は!!」

「おとーたん少しくたい・・・」

「・・・へ・・・?」

雷の降る真夜中。

「ただいまー。」

「ううう、おとーたんーん！」

狼男に目を開いてない少女が飛びつく。

雷が相当怖かったようだ。

6歳の少女は顔をみる。

お父さんではなかった。

狼だった。

少女はベッドに飛び込む。

「わああああん！おおかみさんだあ〜」

少女はベッドを涙で濡らす。

「ああ、しまった!!」

狼男は叫ぶ。

狼男はもうすぐ朝日がくることを確認して、演技をした。

「がおー……雷が怖い子はたーべーちやーうーぞー……」

「うえええええええん……」

そっぽを向きながら、違う声をだす。

「ヴァイオレットー。だいじょうぶかー。」

野太い声で、大根役者は言った。

「おお、なんだとう、なんだ、にんがんかー。つてウワー。」

狼男は外へ引つ張られるふりをした。

バン、ボカ、バキ、ドカ

狼男は自分の体を叩く。

朝日が昇り、狼の姿から戻る。

「ヴァイオレットー。大丈夫だったかー？」

「うええええええん．．．おとーたん．．．」

「ハツハツハツハ．．．」

父親は少しヒリヒリする腰をさすりながら笑った。

「何？都市へ出る？」

「うん．．．私、ビジネスウーマンとして働きたいの！」

「．．．？．．．びじ．．．ねす．．．うーまん？．．．何だそれ．．．ハツハツハ」

「真面目に聞いてよ！」

「ダメだ!!」

父親は怒鳴る。

「何でよ!」

「えつと・・・ダメなもんは、・・・ダメなんだよ・・・」

「・・・お父さんなら・・・分かってくれると思ってた。

『行つてらっしゃい』って、笑顔で行つてくれると思つてたのに。」

「・・・そんなに行きたきやあ・・・勝手に行つてくればいいじゃねえか!!」

娘はバックパックを持って扉を開けて出て行つた。

ボタン・・・

開けたままのドアが、ゆっくり閉まる。

ガラス窓から、机に伏せていた父の姿が見えたような気がした。

「うう・・・お父さん・・・うう・・・」

女性秘書はただただ、暗い場所で泣いていた。

私はあんな表裏のある奴についていこうとしたんだ。

バカだった。

ただただ、自分を後悔するだけであつた。

「だから私はあいつについていくことしか出来ないの……」
女性秘書は黙った。

が、少し経ってからチェリーが口を開く。

「私、あなたのお父さんにあつたわ。」

「……え？」

「あなたのお父さん、『娘に自分の声を伝えたい』って……『自分がここにいることを伝えたい』って必死に言ってた！

私はあんな強いお父さんなら、絶対に死なない、いや、『死ねない』の。あなたのために!!」

ヴァイオレットは涙を流す。

あんなに反対してた理由は・・・私を心配してたからなのね・・・

私は大人になっていく中で、自分のお父さんを信じられなくなってきたんだ・・・

お父さんは昔から、強くて、逞しくて、嵐にも竜巻にも負けなかった!!

お父さんを信じなきゃ!!

「・・・ありがとう、チエリー。あなたのおかげで、大切なものを気づかせてくれた・・・」

「あなたはこれからどうするの？」

「戦争だわ。あの『セクハラ男』をぶちのめすの！」

チエリーは元気に、かつ壮大に話した。

「・・・私も、その戦線に参加してもいい？」

「もちろん！」

チエリーはヴァイオレットの手を握る。

「この都市を、『作り直す』のよ!!」

「・・・ええ!!」

12：裏側（中編）

ここは都市のちょうど中心あたり。

月はビルの屋上をほぼ真上から照らしている。

暴力団が徘徊するこの都市の夜に、明かりは『一つしか』ない。

市長が管轄しているセンタービルだ。

たった今、一つ小さなビルに明かりがともる。

ビルから誰かが出てきた。

「何か外が騒がしいのお・・・」
老人だ。

老人は今日の夕方の事を思い出す。

「いいか、この街の夜、人がほとんどいないのはなあ……」

この街で、人身売買が行われているからじゃ!!お前さんはさつさとこの街から出て行ったほうがいい!!」

娘は驚きの顔を見せ、走り出していった。

「気をつけるんじゃぞー!!……おや?」

歩道には娘が買った服が置き去りになっていた。

「大変じゃ!おーい!!お嬢さーん!!」

老人は若々しく、袋を持って歩道を走る。

遠くの前方に娘が見えた。

ちようど曲がり角だ。

老人も曲がる。

はて・・・？

確かにここを曲がったはずじゃが・・・

・・・まあいい、私の家にひとまず保管しておこう。

「もしやあの子に何かあったのかも知れないな・・・」

「いたぞー!!」

掛け声と同時に、誰かが曲がってきた。

「・・・!!」

「お前さんは・・・」

黒スーツが曲がってきた。

黒スーツは老人に聞く。

「おい、じいさん。」

「ん？なんじゃ？」

「ここら辺に、これぐらいの坊主達を見なかったか？」

黒スーツは両手でそれぞれの身長を示した。

「んー……しらんのお……わからんのお……最近物忘れがひどくてなあ、見たかどうかも忘れちゃったよ。」

「そうか……ってかじいさん、こんな夜中に何してるんだ？」

「わしや、マラソンにしようとしただけじゃ。でもそりや、あなたの方もじやろ。」

「……まさかこんなヨボヨボの老人を売るつもりじゃなからうね？」

「と、とんでもねえ、お、おじいさん、ありがとやした!!」

黒スーツはいきなり敬語になり、虫のように去っていった。

「・・・いったぞ。」

「ふう、ありがとうございます。」

「なんのなんの、おやおや、そこのお嬢さん達ポロポロじゃないか。」

「・・・どうだ、君達、暗くしなきゃならんがお茶でも？」

「あ、じゃあいただきます。」

「いただきます。」

小さな二階建てのビルの中でルーフス達はおいしいお茶を頂いていた。ルーフスはおじいさんに、何があったのかを話す。

「ほう、・・・わしの大学時代の後輩がそんなしやれたことを・・・」

「へえ、あのホームレスのおっさん、後輩だったんですか。」

「あいつは、真面目じゃないが変に自論を持ちたがるやつでのお、

彼からいろんなことを教わったんだよ。」

「おじいさん、頼みがあるんですが。」

「なんじゃ？」

「この女の子達は人身売買で売られそうになってたんだ。風呂に入らせてやってくれないかな。」

「別にいいんじゃないが・・・お前はわしを疑わないのか？もしかしたらわしも、人身売買に関わっている人間かも知れないのじゃぞ。」

ルーフスは話す。

「あなたに旅の話をした時、あなたは昔を思い出していたでしょう。」

その時の目は、お父さんと同じように輝いていました。

あなただけは、疑えないのです。」

「ハッハッハ・・・現役の間、というわけか。・・・ここまで信じられたのなら、

この子達も信じなければダメだろう。」

あの暴力団達に関して、一つ怪しい点があるんじゃない・・・」

おじいさんは可能性を話す。

「なぜ、こんな夜中まであのセンタービルの明かりが点いているのかに気になってな……確かに市長は忙しい。……かといって、まさか寝ている時にも電気をつけているわけではないだろう。」

「まさか……市長と暴力団に何かつながりがあったて、夜中まで働いているのでは……と?。」

『『可能性』じゃ。……でも調べる価値はあるじやろう?』

老人の目に好奇の輝きが現れた、気がしたような。

「ありがとうございました。おじいさん。」

「おお、そうだ、名前を聞いていなかったな。わしはハヤブサ。」

「僕はルーフス、こちらはジャックです。」

「体気をつけてね、おじいさん!。」

「なんのなんの……あと100年は生きる思いじゃ!。」

少年達はセンタービルを目指す。

「着いた！」

「でっかいなあ……」

60階ぐらいはあるのだろうか、遠くで見ていたよりも威圧感がある。

「ワン、ワン!!」

「お！ステーラ!!あいつらはどうしたんだ？」

狼は繰り返し顎を開閉して、音を鳴らした。

「噛んでやったのか!!さすがだ、ほら、肉だ。」

「クウン♪」

狼は道路に落ちた肉をくわえる。

「あんちゃん！あれ！」

ジャックは叫ぶ。

右を見ると、灰色スーツとサングラスの女性がシートを着込んだ人を運んでいる。

よく見ると、チェリーの茶髪とメイドスカートの裾がちらちら見える。

車に近づいていく。

「ま、待てー!!」

女性はチェリーを連れ、地下駐車場へ逃げる。

少年達は追いかけていった。

地下駐車場の地下二階に女性は逃げる。

「待てー!!」

するといきなり、女性とチェリーが立ち止まる。

「どわあ!びくった!!」

女性はサングラスをはずす。

チェリーもシーツを脱ぎ捨てた。

「ルーフスさん、この人は私達の味方です!」

「初めまして、ヴァイオレットです。」

「へ・・・市長の秘書じゃねえか・・・どういうことだ?」

「話は後です!ルーフスさん。・・・あの市長、よく思い出してみてください、私と初めて出会った時を!」

「ん?・・・うーん・・・」

一瞬の静寂の後、ルーフスの脳に電流が走る。

「ああああああああああああああああああ!」

「あいつが黒幕です。ルーフスさん、この都市を『作り変える』のです!!」

「なんかチェリーさん、いつもより熱いな・・・」

「だな。」

こうして、ルーフス達の計画は始まったのだった。

13：裏側（後編）

ボタン!!

ルーフス達はセンタービルの最上階の、社長室のドアを開けた。

誰もいない。

机の上には置手紙が置いてあった。

その置手紙には、甘ったるい、ふざけた口調でこう書いてあった。

「やあ革命家諸君、君達がここに来る事は分かっていたよ。

ここで戦つては、私の愛するビルが壊れてしまう。

西の爆弾処理場だ。ここならいくら壊してもらつてもかなわない。

まあ、もし、君達が『犯罪者』になつてもいいというのならな。」

最後の文字を黙読した途端、あざ笑うような笑い声が聞こえたような気がした。

「くそ！あいつ、俺達を走りまわせやがって!!」

「待つて、あんちゃん、置手紙の下になんかある!」

「ん?」

見ると、年代がかったている写真のようだ。

女の人・・・？

笑顔じゃない、女の人が映っていたのだ。
何かを抱えながら、女の子を連れている。

逃げているのか…？

「・・・なんだこりや?・・・」

「きれいな人だね・・・」

ルーフスやジャックは分からなかった。

が、チエリーは驚愕していた。

まさか・・・そんな・・・ここは・・・

私の・・・

「チエリー、どうした？」

「顔色が悪いよ？」

ルーフスとヴァイオレットが問いかける。

「い、いえ、なんでもありません！…それより、爆弾処理場へ行きましょう！」

「そうね。このセンタービルには一人も部下がいなかった。」

つまり爆弾処理場に全員が待機しているはず。気を引き締めていきましょう。」

皆が頷く。

そして、社長室をあとにする。

中心街から離れ、ルーフス達は西へと進む。

廃業になった水商売のお店が立ち並んでいる。

チエリーはその光景をただただ見ていた。

何も記憶がない……まさかね……そうよ……

いきなり、チエリーの脳裏に何かが光った。

違う…そんなはずは…

チェリーは首を振る。

そして、歯をかみ締め、心を戻す。

「やあ、よくきたねえ。君達。」

「いい加減その甘ったるい口調はお止めにしてもらえませんか？」

ヴァイオレットは厳しく言い放つ。

「おや？ヴァイオレット。お父さんがどうなってもいいのかい？

薄情な女だ…見損なつたぜ…」

「お父さんは死なない!!お父さんは…例え森が焼けても…

くじけない…！…自分の手で生き返らせるわ！」

バキユン!!

ヴァイオレットの髪に弾がすり抜ける。

市長が拳銃を放ったのだ。

ヴァイオレットは拳を握り締める。

恐怖で足が立ちすくむ。

「なんて奴だ……人間の風上にもおけない！」

「……」

ルーフスは市長を睨む。

「子供がこんなに弱いのによお！」

…エメラルドもろくに持たねえ田舎もんが語るんじやねえよお！

世の中は権威が全てなんだよ！馬鹿力で勝てるもんじやねえんだ！」

チエリーが剣を振りかぶり、市長に向けて降ろす。

暴力団の一員が斧でガードする。

戦闘用斧。バトルアックスだ。

「すごい…チエリーさん…」

ジャックはチエリーの速さに見とれていた。

「おやおや、これは村のお嬢さん。はしたないですなあ、
まるであなたのお母さんのように。」

「…そうだったのね。…なんであなたがお母さんを知っているの？」

「親父のアルバムを発見したのさ。親父がどうもお世話になりましたっ！」
相変わらずのふざけた口調だ。

「なるほど…家族揃って狂ってたわけね…」

チエリーは珍しく皮肉で返した。

「そういえば、まだ家賃滞納してないのですよー。

返してもらわないとなあ！」

バン!!

「チエリー!!」

ヴァイオレットが叫ぶ。

「グルルルルルル…」

ステーラも唸り声をあげる。

チエリーの肩から血が飛んだ。

「チエリーさん！」

「……………ッ!!」

ルーフスは睨んだまま舌打ちした。

ジャックが手を見れば、

震えている。さっきのヴァイオレットとは違う震えだ。

「…チェリー。」

ルーフスは優しい口調で話しかけた。

「お前は、休んでろ！な！」

「…ごめんなさい、ルーフスさん…」

ルーフスは最高の笑顔で言った。

「いいってことよ！あとはジャックと何とかするから！…ヴァイオレットも看病、よろしくな！」

「分かりました…幸運を祈ります。」

「ああ！」

ヴァイオレットはチェリーをおんぶして、爆弾処理場の門から出て行った。

ルーフスの顔が豹変した。

先ほどの優しい笑顔からは、想像もできないくらい冷たい顔だ。

市長は笑っている。

ルーフスとジャックの背後、ウォーハンマーを持った二人組を見ていた。

ビュン!!

ルーフスとジャックは素早く剣で斬る。

ズバツ!!

「うお!!」

二人組は倒れる。

市長の笑いが消える。

ルーフスは二人組の一人の胸ぐらを掴んで問う。

「おい、あいつの今までにしたことを言え…！」

黒スーツはビビッて声が出てこないようだ。

「言え!!」

ルーフスは怒鳴った。

「に…人間ひとを売って！遺跡から宝石を奪って！それから…森を焼き払ってテーマパークを建造する計画をたてましたっ!!」

「遺跡…」

ジャックは悲しみと、怒りが湧いてきた。

古代の遺跡を、こんな欲望まみれの奴に荒らされたのだ。

市長は続ける。

「そいつの言ったとおりだ。だが良く考えてみるよ…」

人間ひとを売れば、仕事が楽になる。場合によっては、心の癒ひとしになる。金は手に入れられる。

遺跡から頂けば、儲かる。森を焼き払えば、肥料も沢山、テーマパークが出来れば、みんな喜ぶじゃないか！ダツハツハツハ!!」

少年は口調を朗らかに言う。

「ほう、そりやいいな…」

「へ…?」

ジャックは驚愕する。

「エメラルドが沢山あれば、本も買える、服も買える…」

俺も参加するぜ。」

「あんちゃん!」

ルーフスは答えない。

「ほう、そうか！それは良かった…ようこそ、我がチームへ！」

「さっそくだが、今までにためたお金、見せて欲しいなあ…」

「ほれ、これだ…！」

市長の手からエメラルドの束をひったくる。

地面に落として、足で踏んづけた。

パリン……

エメラルドが全て粉々になる。

「あんちゃん……！」

「お前……！！」

「人間がエメラルド一個で買えんのかよ……」

「人間が……！！こんな石の欠片で買えんのかよ！！」

「くそっ！お前ら！出番だ！！」

「準備はいいよな！ジャック！ステーラ！！」

「ワオーン！！」

「ああ!!」

「うおおおおお!!」

黒スーツがハルバードをジャックに振りかざす。

ジャックが消えた。

「アッ!」だよー!!」

また振りかざす。

また消える。

黒スーツの頭に矢が刺さった。

子供はエンダーパールを手でもてあそんでいた。

少年にフレイルの鉄球が降りかかる。

剣で防ぐ。斬る。斬る、斬る。

「ぬお!!」

ステーラは黒スーツの脛を無差別に噛む。

「いてー!」

「ぎゃあ!!」

「ああ!!」

また一人、また一人と倒れたり、逃げていく。

だがまだまだいるようだ。

「あんちゃん、これじゃキリがないよ。」

「くそ…厄介な奴らだ…！」

ルーフスの背後に剣が迫る。

「あんちゃん！危ない！」

「うわあ！！」

ルーフスのポケットから何かが落ちた。

さつきのクリーパーファイギユア。

男は動きを止め、釘付けになる。

「へ……」 「は……」

「俺のだー！」

「お前に渡すからブレイズくれよ！」

「誰が渡すかあ！どっちも俺のもんだ！！」

「スケルトンいる人ー。クリーパーこっちにもつといでー。」

「うるせえ！骨なんているか！」

「シヨボン。」

「よこせー！！」

「いてえよ！」

「はなせ！！」

「誰だ踏んだ奴！」

「おい！お前ら！何してやがる！！…くそっこうなったら

スイツチを押してやる！…てああ！！」

市長の手がすべり、黒スーツ祭りの中へ。

パキツ!!!

「ああああ!!」

「ああ、もうめんどくせえ!!」

クリーパーを持った男が爆弾処理場から出て行く。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ
ドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタドタ

………

市長は愕然とする。

目の前には壊れた無線スイッチが。

「あのヴァカ（バカ）ども……」

チェリーとヴァイオレットが処理場に入ってきた。
「ルーフスさん……さっきの人たち……」

見ると二人と一匹、そして一人しかいなかった。

「知能は猿並だったようね！クスッ！」

黒スーツを誰よりも知る、ヴァイオレットは笑う。

「ルーフスさん、これって、どういうことですか？」

「それが…」

ルーフスがこれまでの事を話す。

チェリーは話を聞き終わると、笑いもせず市長に近づく。

バシン！バシン！

チェリーがビンタをくらわせる。

「ぶほっ！がほっ！」

「これはヴァイオレットとビストさんの分。」

バシン！

「ばほっ！」

「これはお母さんの分。」

バシバシ！バシ！

「ひぶっ！ぐほっ！ばほっ！」

「これはルーフスさん達の分。…えっと、頭の数は確か…」

バシバシバシバシバシバシ！！

「がはっ！ひでっ！ぶほっ！あべっ！しぬっ！うへっ！」

「そして、昔の人たちの分。」

「ハハハハ：チェリーさん、ありがとう、スカッとしたよ！」

「ついでにチェリー、あと3発食らわせてやってくれ、

そいつに売られようとしてた子たちの分だ。」

バシバシバシ！！

「ちよっ！やめっ！ぶはっ！」

「私からも礼を言うわ。ありがとね！チエリー！」

ヴァイオレットは笑顔で言った。

「私達、友達でしょ！」

ヴァイオレットとチエリーは抱き合った。

ルーフスとジャックも笑う。

「お、おまひらー！」

歯のかけた市長がなにやら大声を出す。

「おまひら、市長にほんなほとして、タダで済むとおほうなよ……さいはん（裁判）も知らない田舎ほんどもが！」

おほいしれ！おはえらはあひた（明日）、いは、今日！処刑ら！！はっはっはっはっは……ああ、いへい……」

市長はそう言って、頬をさすりながらセンタービルに戻っていった。

「……めんなさい皆さん。私が言い出したせいで裁判に巻き込んでしまつて……」

「大丈夫だつて！」

「ヴァイオレットさん、旅人はもともと、悪いことする人たちだつたんだよ！」

別に、良く見られようとはしたくないよ！」

「そうよ！たとえ檻の中に入ったとしても、皆一緒だから！」

「ありがとう、皆さん……うっうっ……」

「泣くなよ！ほら、拭けよ！」

爆弾処理場の砂を、太陽の光が照らそうとしていた。

ここは中心街。

人が集まっている。

市長と旅人の公開裁判だ。

「えーこれより、旅人のルーフスさん達とゴルデイ市長の裁判を始める。」

「はいはい!!…私は夜に、この旅人達に暴行を加えられました！」

皆さーん! この、市民の為に力を尽くす市長が暴行を加えられたんですよ!

この旅人達は、罪を償うべきではないのでしょうか!

「そうだー!」

「有罪だー!」

「市長さーん!」

「あんたの味方するぜー!」

「ヒューヒュー!!」 「いいぞー! もっと言つてやれー!!」

「静粛に!!」

裁判長が大声を出す。

「では旅人の方々と、協力者のヴァイオレット秘書の意見を述べてください。」

「はい。」

ヴァイオレットが立った。

「ゴルデイ市長は『暴力団を撲滅する』というスローガンを立て、皆さんの評価を集めました。」

しかし今もなお、暴力団は健在のままです。なぜなら、市長自ら暴力団とのつながりがあったからなのです！」

さすがに女性秘書だ。テキパキと話を続けている。

「なんだって？」 「嘘ー。」

「女は下がってろ！」 「嘘つくなー！」

「ゴルデイさんがそんなことするはずねえよ！」

だが、やはり市長のほうが上であった。

「静粛に!!…度が過ぎる場合、退場させますよ。」

観客は一齐に静かになった。

「ではゴルデイ市長の意見をどうぞ。」

「私が暴力団とつながりがある？そういうのなら証拠がないとねえ…ヴァイオレットの

お嬢さん。」

「いいぞー！ゴルディさん！」

一人の男が大声をあげる。

「確かに証拠はありませんね…」

証拠が無いとすれば、旅人の方々は有罪ということになります。

そういうことでよろしいですかね？」

裁判長が問う。

ルーフス達はただただ黙る事しか出来なかつた。

証拠がないのだから。

ルーフスは観客を見回す。

ヒソヒソと話している主婦達。

携帯カメラのフラッシュをたく男達。

大声で状況を聞いている子供達。

ただひそかに笑っているおと…

！……あいつは！

「裁判長！」

「ルーフスさん、どうぞ。」

「あの男を調べてください！」

「へ……」

「あー！あんたは！」

ジャックは思い出した。

あのルーフスが胸ぐらを掴んだ男だ。

「め、めっそうもない……そいつのたわごとですよ……」

「一般市民を巻き込んでいいんですか？裁判長？」

「では、おまえさん、このバッグの中に入ってたこの武器はなにかな？」
「ギクッ!!」

「ハヤブサおじいさん！」

アロハシャツの老人だ。

「きゃ！あの人、取材の鬼と呼ばれるハヤブサさんだわ！」

「なんであの方が旅人達の味方を…」

「カメラ持ってきてけばよかったなあ」

なにやらとても有名らしい。

「それだけではないぞ。…お前達、スクリーンに映しなさい。」

そこにはルーフス達と市長と暴力団員の姿が遠くから映し出されていた。

市長の声が入っている。

『…だが良く考えてみろよ…』

人間ひとを売れば、仕事が楽になる。場合によっては、心の癒しになる。

金は手に入れられる。

遺跡から頂けば、儲かる。森を焼き払えば、肥料も沢山、テーマパークが出来れば、みんな喜ぶじゃないか！ダツハツハツハ！！』

「あ…いや…それは…その…これは嘘だ！合成だ！」

…はっはっは…良く出来てる映画じゃないか…
声優が俺とそっくりだ！傑作だな！」

観客の空気が冷めた。

市長を睨んでいる。

「俺も一言言っているか？」

「お父さん…!!」

「ビスト…！」

裁判長は笑いながら言う。

「やれやれ…今回の裁判はすごい事になりそうですね…
ではビストさんでしたな。どうぞ。」

スタッフがマイクを渡す。

「俺の管理している森を焼こうとしている奴をとつ捕まえたんだ。」

そしたらなんと、ゴルデイ市長つーお偉いさんに指図されたらしいじゃねえか。」

「ほう…市長、なにか意見は？」

「皆さん！そいつは狼と人間の血を引くものです！そんな奴の言う事が信じられると思いませんか!？」

観客はゴルデイの理不尽な意見に、額のしわを寄せた。

「私達からも！」

「君達は…！」

洗いたてのまつすぐ伸びた髪 of 少女達が言う。

「私達、ゴルデイ市長の部屋の檻にずっと閉じ込められて、

それで出られるかと思ったらまた売られて…」

ゴルデイの目はぐるぐると回り、汗を流している。

観客の視線がぐさりと刺さっている。

「裁判長、証拠が山ほどありますな！」

ハヤブサは畳み掛ける。

裁判長は大きな声で言う。

「これらの重大な証拠より、ルーフスさん達の無罪が確定しました！

観客の皆様、反対意見は！」

観客は何も言わなかった。

「「やったー!!」」

「ワオーン!!」

「そして、ゴルデイ市長の件につきましては、人の命を金で買うような行為を、市長であるにもかかわらず行ったため、終身刑を科す！賛成の者!!」

ザツ!!

皆が皆、手を上げる。

こうして、ルーフス達の裁判が終わったのだ。

「お父さん!!」

「ヴァイオレット!!」

お父さんの大きな体に、ヴァイオレットが飛びついた。
ヴァイオレットは涙を流す。

「ごめんね…お父さん…心配してくれたのに…」

「いいんだ、ヴァイオレット。お前が元気でいれば、それでいい。」

「でも、なんでここに来たの？」

「いや、なんかなあ、昔お前と撮った写真、あつたら。」

「それがいきなり落ちたもんで、嫌な予感がしたただけだ。」

「もう、お父さんたら…ありがとう！」

「良かったね、ヴァイオレット。」

チエリーはもらった涙を拭く。

ジャックはハヤブサと話していた。

「へえ、ハヤブサさん、放送局の局長さんだったのかあ！」

「ほっほっほ…わしをただのおじいちゃんと思ったらダメだぞ。」

「後でカメラを見せてもらえませんか！」

「勿論じゃあ！放送局に顔を出してみてくれ！」

ルーフスとステーラはなにやら探し回っていた。

「ワンワン!!」

「あーいた！」

ホームレスのおじさんだ。

「あん？なんだ、裁判の小僧か…」

「その言い方はやめてくださいよ…」

「なんだ？この俺にんのようだ？」

「あなたにお礼を言いたくて…」

「あなたがこの街の裏を覚えてくれなかったら、

あの女の子達は売られていたし、俺も成長できなかった。

だから、ありがとう。」

「ばかやろう。旅人がホームレスに礼言っただうすんだ。」

「はは、それもそうですね。じゃ、また会えたら会いましょう。」

「二度とくんよ。」

といいながら、おじさんは手を振ってくれた。

ホームレスは一人つぶやく。

「旅ねえ…いいじゃねえか…」

「なあ、少年よ。皆、こんなみすぼらしい姿の俺を『狂ってる』というが…

こんな窮屈な世界で生活して、泣かないそんな奴らも『狂ってる』

…と思わねえか？」

灰色のビルの隙間から、青い青い空が見えていた。

14：都会との別れ

「おお…すげえ…」

「ワン!!」

少年達はハヤブサ放送局本部のビルに訪れていた。

そこには何台もの撮影用カメラ、コンピュータ、

スクリーンが設置してあった。

「すごい設備だな…」

「…」「…」「…」

薄い綿の服を着た少女達は高度な設備に唖然としていた。

「ほっほっほ…私は旅人の頃からカメラオタクだね。」

カメラの事を追求していたら、いつのまにか放送局までも建っていたのじゃ。

ちなみに、この放送局ではただ撮影するだけではないのだぞ。」

「…あれは…本で見た事があるぞ!」

ジャックがある機械に興味を持った。

「プリンターか！」

「その通り。ここでは新聞の発行も行っているのじゃ。」

「すごいやー…あつちの部屋も見ていいですか？」

「ああ、いいとも。」

ジャックは輝いた目で部屋に入っていく。

「ところでルーフスさんとチェリーさんよ。

…あのお嬢さん達のことなんだが…」

少年と娘は消えたカメラの前で、楽しそうに手を振っている女の子達を見た。
「正直な話…あの子達はこの都市にいてはいけないと思うのじゃ…」

恐らく、小さい頃からなんの教育も受けておらんのだらう。

この都市にいても将来、生きられないと思うのだ。

どこか別の場所に移してやれないものか…」

「確かに……こんな変な性格の都市じゃあ、仕事も見つからないですよね。」
「ハヤブサさん。」

「私にいい考えがあります。……ちよつとお買い物行ってきますね。」
チェリーは放送局から出て行った。

ここは放送局内の控え室。

中にはチェリーと女の子達がいる。
男性陣の三人と一匹は外で待っていた。

「出来ました！……ささ、あなた達。見せてあげなさい。」
外に出てきた女の子達は、メイドの服に着替えていた。

ハヤブサは白く太い眉を少し上げた。

「ま、まさかチェリーさん、この子達に水商売なんて…」

「ち、違いますよ…私の住んでいた村ではほとんどの人たちが女性のメイドさんなんです。」

村長も優しい人で…この子達をその村に置いていこうというわけです。

周りの自然も豊かですし。」

「成るほど…しかし似合いますな！」

「本当だな！」「かわいいわよ！」

「ワン!!」

女の子達は照れて顔を下に向ける。

「では、私はこの子達を送ってきますので。」

「おいチェリー…大丈夫か、一人で。」

「大丈夫ですよ。私を女の子だと、心配なさらないでください！」

チェリーは笑顔で答える。

「ま、待ちなされお前さん方。まさかあの距離をボートで行くというのかね？
それでは時間がかかって、二日は経つだろう。」

そうだ。私の撮影用のジェットボートが港にある。それに乗っていきなさい。

3時間後。

懐かしいジャングルからチエリーと少女達が出た。

目の前には村が見えた。

「さあ、あなた達の家よ。…」

チエリーは自分も村に入ろうとしたが――

「…行きなさい。」

「「ありがとうございます！」「」

少女達は元気な声で挨拶する。

「…いい返事だ！」

チエリーは笑う。

そうよ…私は勝手にこの村を離れたの…
今更この村にする挨拶なんて…

「何してんだい、チエリー…」

「…ムース姉さん…」

冷静な顔つきをしたメイドがチエリーの後ろにいた。

「全く…勝手にこの村から出て行くなんてね…」

「……」

「…忘れものだよ。」

メイドは本を投げた。

チェリーはあわてて受け取る。

チェリーがつけていた日記帳だ。

「チェリーは本当にあわてんぼだねえ。」

メイドは優しく微笑んだ。

「体には気をつけるんだよ。」

「……」

「ニース姉さん!!」

チエリーはニースに抱きついた。

涙が止まらない。

止まらせる事が出来なかった。

血はつながっていないが、いつも自分を見てくれたお姉さんだ。

「…ありがとう…お姉さん!!」

「もう…!泣くんじやないよ…!私の、大切な妹!」

ニースの瞳にも涙があつた。

村と再度別れた後、チエリーはジェットボートで都会に戻り、ルーフス達と合流をした。

少年達は翌日、都会で発電所や缶詰工場を見学し、都会を後にしたのだ。

「いろいろあったな…グレートスライヴシティ。」

「ありすぎてまだ疲れてるよ…」

「ワンワン!!」

ステーラは巨大な肉にかぶりついている。

チェリーは遠くに広がるグレートスライヴシティを見ていた。

さようなら…私の故郷…さよなら…お母さん、プラムちゃん…

私…この人たちと一緒に…

この広い世界を、
旅してきます。

15：メデイウス・ライブラリー

都会から抜けて。

少年達は広大な草原をこえ、緑豊かな森へと入っていった。

木のところどころに蜂の巣がぶら下がっていて、小さな蜂たちが飛びまわっている。

狼はその蜂の群れを追いかけまわす。

陽光も程よく降り注ぎ、とても心地いい。

「今日もまたいい天気ですね…」

「ふわあ〜…」

少年は大きくあくびをした。

「ほんつとに眠気が覚めない、いい天気だなあ…」

「あんちゃん！あれなんだ？」

そこには真つ白な大理石で出来た建物が森の中にそびえたっていた。

全く、見慣れない光景だ。

「なんの建物なんでしょう…」

「ちよつと行ってみようぜ…ステーラ!!」

一匹の狼がルーフスへ寄る。

三人と一匹は白い建物の中へ歩いていった。

「ようこそおいでくださいました。

ようこそ、メディウス・ライブラリーへ。

私は館長のバンダと申します。以後お見知りおきを。」

白い口ひげを蓄えた、スーツの老人が出迎えていた。

背筋をピンと張っていて、歳を感じさせないたたずまいであった。

「ライブラリー…図書館なのかあ!!」

子供の目がきらびやかと光る。

確かに、目の前には数え切れないほどの本が棚に詰め込まれていた。

ジャックはあちこちの本を指差していちいち聞く。

「あの本も…この本も…あっちの本も…全部読んでいいのかあ!!」

老人はにこやかに対応する。

「どの本も、全て、読んでいいのですよ。」

ジャックはたまらず駆け足でかけていった。

「あ、おい、ジャック…」

「ふふふ……とっても嬉しそうですね。」

ルーフスは笑ってため息をついた。

ルーフスとチェリーは中庭通路を歩きながら、館長と話をしていた。

「でも、なぜこんな森の中に図書館を？」

「私は若かりし頃、あなた方のような旅人だったのです。」

花や木、風や雲を観察し、自由気ままに旅をしていたのです。

そして私は、何よりも本が大好きでした。

しかし、この美しい自然の中では図書館などあるわけがありません。

私は旅を終えてから、都会や街とは遠く離れた場所に図書館を建設しようと決心し、昨年、このような立派な図書館を完成することができたのです。」

「昨年ですか！まだ新しいのですね。」

「なるほど……すみません、実は俺、図書館なんて今まで行った事がなくて……」

「ええ!？」

傍にいたメイドは大きく口を開き驚愕する。

「ほっほっほ…では『本の探し方』から私がご説明いたしましょう。」

「…あ……私も…お願いします。」

「お前もじゃねえかよ…」

メイドは顔を赤くして答えた。

一方ジャックは。

机に何冊もの本を山積みにし、勉強をしていた。

「荒地…:Waste land…:全体的に荒廃した気候帯…:か…:

こんな気候帯もあるのかあ…:やっぱり世界って広いんだな。…:うん?」

見ると下へ続く階段があった。

「こつちには何があるのかな?」

ジャックは机の上の本を片付け、階段を降りていった。

その後、従業員なのかそばかすを蓄えた一人の青年が、階段の前へのろのろと看板をたてた。

看板には、『Staff only』と。

「……………あああ……………置き忘れちゃったなあ……………」

青年はじれったく喋って頭を掻いた。

ステーラは玄関でエサを食べていた。

ルーフストとチエリーはバンドに説明を受ける。

「えー…まず探したい本のテーマを決めなければなりません。」

「じゃあ…私は『料理』にします。」

「俺は…えつと…」

少年は考えてから、

「…玄関に置く防犯用のあの置物。」

「も…もつと大雑把で大丈夫ですよ…。」

「…はい。…じゃあ『冒険』で。」

ジャックは階段を下っていく。

「長いなあこの階段…どんな本があるんだろうなあ！」
ジャックは感激のあまり冷静さを失くしていた。

着くと小さな場所だった。

周りには本棚は無く、ただ書見台が一つ。

上には本が置いてある。

「何の本かなあ?」

子供はわくわくして開いた。

見ると、左ページに謎の記号群、右には黒い写真が貼られていた。

「なんだこれ…?見た事無い本だなあ…」

その瞬間。

黒い写真に画像が浮かび上がる。

延々に広がる草原。

「え……？」

シユウウウウウウウウウウ…

バ
サ
ツ
：

階
段
を
降
り
た
先
の
小
さ
な
部
屋
。

その中には、ただ本が落ちていただけであった。

16：鈍行世界

「ここは……どこだ……？」

ジャックは目の前に広大な草原を見た。

遠くのあちらこちら点々と、謎の青い結晶がそびえたっている。

「……この場所は……あの本の中の場所かあ!？」

少年は驚きと同時に不安から体が震え始めた。

僕は…帰れるのか……？

もしかしたら…ずっとここで…こんな明かりも無い場所で…

夜もすごさなきやいけないのかあ…!?

脳裏に白骨死体が浮かび上がる。

少年の目がにじんできた。

「うわああああああああ!!」

ジャックは恐怖に耐え切れず無造作に回り始めた。

「どうしよ、どうしよ、どうしよおおお!!」

「…!!」

ジャックはにじんだ目でしっかり見えたものがあつた。
「村だ!!」

ジャックは村へと駆け出していった：

「すみませーん!!」

ジャックは畑を見ていた村長さんに話しかけた。

「あの一…：僕は一人の旅人なのですが…」

もしよければ泊めてもらえないでしょうか？」

：

返事が無い。

あれ、聞こえなかったのかなあ…

「…おほ…
そしていきなりはっと気づき、のったりと話した。

これはこれは…

ようこそ…

私達の村へ…

「…私は…村長の…ラルゴと…申します…」

…なんかすごいゆったりとした人だなー…

「……なるほど…私達の村に…泊まりたいと…

承知しました…すぐに…宿泊所の…準備をします…」

「あ…ありがとうございます…」

それから一息、二息、そして三息おいて、

「…おーい…アルガ…この方に…宿の用意を…」

家の中から青緑色の髪をしたメイドが現われた。

同じくのつたりと口を開く。

「…かしこまりました…」

…この遅さは遺伝なのか!?

ここはメデイウス・ライブラリー。

玄関では餌を食べ終わったステーラが昼寝をしていた。

チェリーとルーフスは説明を受け終わり、それぞれの分野の本を堪能していた。

「なるほど…パンプキンパイってこうして作れるのね…」

チエリーは料理の本を立ち読みしていた。

「うおおおおお!!やべえ、え!?こんなモンスターが!?マジかよ!!
うっほおおおおい!!!」

「ル、ルーフス様、図書館の中ではお静かに!!」

慌ててバンダが静止にかかる。

「…館長…お掃除…終わり…ました…」

「あ、はい、ありがとう。では次は本棚の上もお願いしますね。」

「…はい………」

のろのろと従業員がはたきを持って歩いていった。

「…あの妙にじれったい奴は誰ですか…?」

ルーフスは疑問に思う。

「私がこの図書館の整備を行っていた時、まだ開業してもいい

図書館の中に何故かいたのです。話を聞けば、道に迷ったらしく…

住んでいた場所の特徴なのか、彼はしきりに結晶がないとも申しておりまして…

『この場所にはそんな場所は無い。もし迷ってしまったのなら、この場所で泊まってはどうか。』

と提案した次第でございます。」

「へえ…不思議ですね…」

「この世界には、地上に結晶はありませんね…彼はどこから来たのでしょうか？」
「一つだけ、思い当たる節があるので。」

バンダは白髭をとかしながら話した。

私は昔、父親に、先祖代々から伝わる一つの本をもらったのです。

父は『帰還の書』という本を持っていなければ、この本は開いてはいけない』と私に堅く言いました。

続けて、『さもないと、この世界から完全に切り離されるだろう』…と。

以来、私はその本を決して開く事はなく、現在もこの地下に保管されています。

「その話から私は、一つの推測を立てあげました。

もしかしたらその本は、この世界と平衡して流れる世界とを繋ぐ本ではないかと…」

「……………」

ルー？？？とチェリーは難しい話に首を傾げる。

「ああ、ジャックならあそこに…」

ルーフスは机を指差した。

しかしそこには本が山積みされていただけであった。

「あれ…あいつどこに行ったんだ…」

「ブラツカス君、地下への看板は立てて置いたのですよね？」

「……………ああ…たてて置きました…」

老人は安心した。

「それなら安心だ。」

「うーん…どこ行ったんだ？あいつ？」

「……ああ……そういえば……最初………立てるの……
忘れてました………」

3人はのろまな少年を死んだような目で見た。

そばかすの少年の頭に3つ大きなたんこぶが出来た所で。
3人は蔵書の中から『帰還の書』を探していた。

「『機関車の仕組み』、『機械工学』…」

「歴史書、歴史書…」

「があああ!!ぜんっぜん見つからないじゃねーか!」

チエリーもため息をつく。

「さすがにこの図書館の本から一つの本を探し出すのは大変ですね…」

「……………」

「おい、ブラツカス、何やってんだ？」

「…『き』…『か』…『ん』…『しゃ』…『の』…『っ』…『く』」

バシコン!!

ルーフスは近くにあつた薄い絵本で頭をはたく。

「おせーんだよ!!しかもその本俺が確認したから!!」

「……あ……」

「……たく……なんでこんなろまんなんだ……?」

「……いったい……!」

「……あ!!……バンダさん、もしかしたらこの本ですか!？」

チエリーが緑の表紙の本を差し出す。

「ま……まさしくこの本です!!」

「え!?!…息子がいなくなつたですつて!?!」

「……そうなんです……鶏を小麦で……集めていたのですが……」

それから……帰つてこないままで……」

「……何故なのでしょう……この近くに村なんて一つもありませんし……」

「……私達にも……分かりません……彼が戻る事を……祈るばかりでございます……」

……ああ……じれつたい……!!

「おーい!!ジャック!!」

見るとチェリーとルーフス、バンダ、…知らない少年が立っていた。

「あ…あんちゃん!!」

ジャックは駆け寄る。

「ご無事で良かったです!」

「おお……………ブロッカス……………!!」

「……………!!……………お父さん……………!!」

スローモーションのような再開。

「…皆様…本当に…ありがとうございます。…お礼に……………我が村で……………お茶でも……………」

「わあ、おいしいパンプキンパイ!!…これあなたが作ったの？」
少女達は隣り合って話し合っている。

「……はい……少し……砂糖が……多かつたかも……」

「また今度、一緒に作りましょうね!」

「……はい!……」

「ここが…異次元…素晴らしい…」

バンダは結晶と草原の入り混じるミステリアスな光景に目を奪われていた。

「なるほど……この世界の時間は、私達が住んでいる世界の時間より遅く進んでいるのですか！」

いつもは冷静な老人も、異次元に来てしまつては興奮を押さえられないようだ。

「そして夜でもモニターを気にせずに過ごせる……とても面白い世界ですね……！」

「……ほ……っほ……っほ……喜んで頂けたなら……私も嬉しいです……！」

時の遅い世界の時間は、更に更に、ゆっくりと流れていった。

「……バンダさん……また……いつか……また……働いてみたいです……！」

「私も、君に働いてもらいたいです。君は確かに遅い所があります。」

しかし、一つの事に真剣に仕事を行う様子はしかと評価していますよ。」

「…ありがとうございました……！」

「…また…来てね！…チエリー…!!」

「では…また…会う日まで……！」

ルーフス達も異次元の人々に手を振る。

そして帰還の書に吸い込まれていった…

それからルーフス達は、メデイウス・ライブラリーに一晩泊まった。

翌日の朝。

ルーフス達は眠っているステーラの横で、バンダと話をしていた。

「いろいろな本を読ませてくれて、ありがとうございました。バンダさん。」

「本当に面白かったです!!」

ジャックはまだ目を輝かせていた。

「いえいえ：君は私の子供の時にそっくりだ。私も初心を振り返る事ができました。ジャック君。：これを受け取ってください。」

そこにはボロボロの百科事典。

いまにも千切れそうな付箋が無数のページに貼られている。

「私が若い頃から使っている百科事典です。」

「え…いい、いいんですか!?!…こんな大切なもの…」

「私もいずれは衰え、死んでしまいます。しかし、私の『努力』は残しておきたいのです。付箋を貼って、実際に見て、聞いて、行った『努力』をそこに詰めてあります。」

君は私のような…いや、私を超えるような勉強家になってほしい。

…受け取ってください。ジャック君。」

バンダは優しく微笑んだ。

「…絶対、大切に使います…!!」

ジャックは真剣な眼で答えた。

ルーフスとチェリーは黙ってジャックを見守っていた。

「さあ、行くぞ、ステーラ。」

「クウン…？」

「では皆さん、お元気で!!」

「さようならー!!」

「ありがとうございますー!!」

「お元気でー!!」

「ワオン！ワオン!!」

森の中を抜け、ルーフス達は険しい山々を登っていた。

辺りには牛が荒い息をたてていた。

チエリーは思い出した。

「あーバンダさんの歳、聴くの忘れてた！」

「はははは…意外と鈍いなー…ブラッカス達の鈍さが映っちゃったのか？」

「ははははは!!」

チエリーは顔を赤らめる。

「も、もう……ルーフスさんとジャック君たら…」

この『世界』で、今日も愉快的な旅を続けているルーフス達であった。

番外編3：深夜のロングトーク

険しい山の山腹で、牛が群れている。

ルーフス達は花が寂しげに咲いた山を下りていた。

目の前に遠く広がるのは広大な草原。

豚や鳥、羊の鳴き声が麓から聞こえてくる。

「あんちゃん、もう夕方になっちゃったよ？」

「うー…ん…早く村を見つけないと野宿することになるぞ…」

「さすがにそれは怖いですね…」

「ワン!!ワン!!」

「…よし、ひとまず走るぞ。」

みんな、置いてけぼりになるなよ!!」

「おお!!」

「ワン!!」

ルーフス達は麓から、草原へ向けて走って行った。

月が少し昇り、モンスターが出現する。
ルーフス達はあわてて見つけた村の小屋に避難した。

「ジャック！ドアをふさいでくれ!!」

「うん！」

ジャックは丸石を二つ、ドアの前に置いた。

嗅ぎつけたゾンビがドアを叩く。

三人は深呼吸をする。

「良かった…間一髪だ…」

「でもはつきり言つて、僕たちって不法侵入だよね…」

「ん…ああ…そうだな、ははは…」

「朝になったら、この村の人たちに挨拶しましょうか。」

「そうだな。」「ワオン！」

ルーフス達は窮屈な部屋にベッドを敷いた。

「さあて、寝るぞー…」

ヴォー… カラン…コロロン…

ギシャシャ…

ヴォー… コロン… カランコロロン…

ヴォー… カラン… ヴォー…

ギシュ！…

ヴォー…

ヴォー…

ギシャシャ…

「うるせー!!!」 「ガオウ!!」

三人と一匹は一喝した。

「…と…いうわけで…」

「眠れないので。雑談でも、しましよー。」

「イエーイ!!」「ワン!!ワン!!」

「えーと…何かネタ無いか?」

「そういえば近年、ゾンビが少し賢くなったみたいだよ。」

「どういうことですか?」

「探検家から学んだのか、装備を付けるようになったり、

一人が傷ついたら集団で逆襲したり…」

「おええ？まじかよ…あの見かけたらスルーするぐらい弱いゾンビまで強くなってるなあ…」

窓の外のゾンビは膝に顔をうずめて落ち込んでいた。

「スケルトンもエンチャントの武器を使うようになったり、遠くまで矢が届くようになったり。」

「…なんか知らないうちにすごいことになってるな…」

「それだけ手ごたえが生まれたっていう感じですね…へへへ」

「「チエリーさん!?!」」

ルーフスとジャックは驚きを隠せなかった。

狼はおねだりした豚肉をおいしそうに食っていた。

「パンプキンパイが焼けましたよー！」

チエリーは4つのパンプキンパイを手渡す。

「うーん……いい香りだあ……うまい！」

「うんめえ!!……最高だ!!」

「良かった!……メディウス・ライブラリーの料理本から教わったんです。」

また逢えたら、アルガちゃんとかとヴァイオレットと一緒に料理作ってみたいなあ。」

「お?そんな時は何を作るんだ?ゆでたまごか?ずんだもちか?楽しみだなー!!」

「もう、ルーフスさんたら、料理のことばかりなんだから……」

深夜に笑い声が響く。

月は明かりのついた小屋を真上から照らしていた。

「ステーラ、お手！」

「ワオン？」

「ほら、『お手』って言ったらこうだよ、ステーラ。」

ジャックが狼の前足をルーフスの手の上に乗せた。

「ワン！」

「お手！」

「ワン！」

ポテツ。

「「おおおおおおお!!」」

「おかわり！」

ポテツ。

「かわいい〜!!」

チエリーはハートの目になっている。

ルーフスは鶏肉をステーラにあげ、頭をなでる。

「お前賢いなー。」

「やっぱり、ペットって和むよねえ…」

「ステーラア!!あなたって最高よ!!」

鶏肉を口にくわえたままのステーラをチェリーが抱きしめた。

「ワン!ワン!」

狼は幸せそうに尻尾をふる。

「どこかにキノコしか生えないバイオームがあるらしいよ。」

ジャックは辞書を見ながら言う。

「え…!?!」

「マジで!?!そこに行けばキノコシチュー飲み放題じゃん…!」

「でもキノコしか生えないってなにか寂しいような…」

「ここに書いてあるには、巨大なキノコも生えてるらしい。」

「まあ、面白いですね。」

チエリーは笑う。

「行ってみてえなあ…ほかにもなんか珍しいバイオームはないのか？」

ルーフスは完全に目が冒険モードだ。

「えーと…どこかに巨大な花の生えるバイオームもあるらしいよ。」

「すげえ!!行きてえ!!」

「私も行ってみたいです!!」

ステーラはさすがに眠ってしまったようだ…

月がもうすぐ沈む。

気が付くとルーフス達は眠っていた。

時間が楽しくて、疲れてしまったのだ。

ルーフス達は仲良く地面に寝転がっていた。

「ふわああ…」

ルーフスの欠伸でチェリーも起きる。

「眠ってしまいましたあ…」

「やっぱねむらねえと駄目だな…」

楽しかったけどよ！」

ルーフスは笑顔で言った。

「私も楽しかったです！」

チェリーも笑顔で応える。

「…お…朝日が昇るぞ…」

朝日が窓から差し込む。

それはジャックと狼の上に落ち、目覚めさせた。

「もう朝かあ…」

「クウン…」

「よし、みんな起きたな、あいさつに行くぞ。」

「はい！」「うん！」「ワン!!」

ルーフス達の一日が、また始まろうとしていた。

17：小さな戦士達

何も知らぬ村での一夜を過ごしたルーフス達。

小屋の扉を開け、村人達に挨拶をすることにした。

まず出向いたのは石の屋根で作られた鍛冶屋だ。

「こんにちはー…」

返事が無い。

「あれ、誰もいないのかなあ？」

中を覗くと…

うん、誰もいない…

？

「いるじゃん…」

中には筋肉の整った男性がいた。

ワイルドな白髭の顔が似合っている。

男性はしかめっ面をしながら返事をした。

「お前達、どこだよそもんだ。」

「あ、えつとー…昨夜あそこの小屋を勝手ながら使わせていただきました…

それで、挨拶をしようか……」

男性は耳をほじりながら答える。

「なるほどねえ……昨夜のあのやかましさはあんたらだったのかい。」

「「ギクツ」」

「もつとも。」

「……まあいい……とりあえず、ここに来たからにやあ、剣を渡してもらおう。」

「えっ、剣を？」

「さあ、さつさとよこせ。」

少年はしびしび3本の剣を渡した。

ルーフス、ジャック、チエリーの3本だ。

男性はルーフスの剣を手取る。

「…これはひどい。なんて乱暴な斬り方をしとるのだ。剣がぼろぼろに傷んでいる…」

「グサツ」

ルーフスの心臓に何かの突き刺さる音がした。

「…だが、それと同時になんと破壊力のある斬り方だ。

そこだけは褒められる。」

ルーフスはほつとすると同時に、『だけ』に反応し地面にへたり込む。

続いてジャックの剣。

「…お前さんは剣をまだほとんど使っていないのだな。

まだ新品のままだ。ほれ、これはもっておきなさい。」

ジャックは投げられた剣をあわてて取る。

何か仲間はずれにされたようで納得がいかない表情だ。

最後にチエリーの剣。

持つと同時に男性の目の色が変わる。

「こ、これはお前さんのかい？」

「は、はい…あの…そんなに扱いがひどいのですか？」

「とんでもない！ 静、動の剣さばきはどちらも完璧、

とてもきれいな傷み方をしている!!

その腕、さらに上達を指したほうがいいぞ。」

「は、はい…」

チエリーはいきなりの褒め言葉に動揺する。

ルーフスは問う。

「でも、すごいですね…剣だけで普段の剣の扱い方まで分かるなんて…」

男性は真顔でルーフスの剣を研ぎながら答える。

「ものにはその人の愛情がどこかに垣間見えるものだ。

私はその細かい点を探しているだけだよ。」

「言い忘れたな。私の名前はスチル。この村の鍛冶屋を営む者だ。」

「私達はルーフス、ジャック、チエリー、そしてステーラです。」

「よろしくお願いします。」

「ワン!!」

カン、カン、カン！

鉄の槌を金床の上の剣に力強く振り下ろす。

ルーフスの剣は元の状態に戻されていく。

ひよこっ

家の陰から何かが覗いていた。
チエリーは気になり、家の後ろに回りこむ。

チエリーの目が見開いた…!!

「キヤーーーーーー!!」

「チエリーさんの声だ!!」

「なんだ、モンスターが残ってたか!？」

ルーフスは声の方角へ駆けていく。

「チエリー!!」

「ルーフスさん！見てくださいー！！」

みると腕の中に青色の人形達が3つもあつた。
みんな腕から抜け出そうとしている。

「かわいい〜！！」

チエリーは3つの人形に無理やり頬ずりした。

「なんだ…!?!人形が動いてる！」

「電池でも入ってるのかな？」

「魔法、だよ。」

ルーフスの剣を持ってきたスチルは答える。

「魔法!?!」

ルーフスとジャックは驚く。

「この村にはずっと伝えられている童謡があつてな…」

むかーしむかし。

この村には人形好きの女の子がいました。

朝から晩まで、積み木もおにごっこもせず、

粘土で作った人形で遊んでいました。

ある時、一人のお婆さんがこの村を通りかかりました。

伝説で有名な魔女です。

黒く大きな帽子に黒の洋服。

そのお婆さんはまさにその伝説の魔女そっくりだったのです。

そのお婆さんを魔女だと思い込んだ女の子はこうお婆さんに頼みます。

「このお人形さんを生き返らせて!!」

お婆さんは承諾し、粘土の人形に魔法をかけたのです。

するとたちまち粘土の人形は動き出し、女の子は大喜びしました。

しかし、近所の男の子達はその人形を赤と青に塗りたくってしまったのです。

人形たちは敵と勘違いして仲間割れ。

女の子はそれを見て泣いてしまいました。

男の子はあわてて色を戻そうとしますが、何をやっても全く戻りません。

大人たちもこの事を知り、ついに赤色の人形だけを隣の村に移すことにしました。

こうして、この村には青色の動く人形が住みついているのだとさ。

おしまい。

「…というわけだ。」

「なるほど〜わかりやすいな〜」

ルーフスが童謡に納得する。

「魔女が本当にいたなんてなあ…」

「だからこの子供達は動くのですね！」

チェリーは自分に向かってファイティングポーズをとる人形の頭をぐるぐる撫で回す。

「その童謡の名残はまだ残っているのだ。」

「どういふことですか…?」

「ほら、始まるぞ。」

スチルは草原の水平線を指差す。

ト…

…ト

青色と赤色の軍勢は一斉に接近し、

互いに棒で叩きあい…

その棒を盾で防ぎあう。

青が一人倒れる。

すると赤も一人倒れた。

チェリー、ジャック、ルーフス、ステーラは攻防戦を見守る。

スチルは語る。

「見なさい。この戦いを。」

やられてもやられても死なない彼らだが、

なぜやられたらそのままやられる私達はこのような無意味な戦いをしてきたのだろうか。

彼らは私達にそのことを皮肉さをこめて伝えているのだ。

…だから私達は、この戦いをやめさせることが出来ても、やめさせたくはないのだよ。」

やがて一騎打ちになり、最後の一突きで両方がやられた。

「…ドロー。だな。3845回目のドローだ。」

「そんなに引き分けしているんですか!？」

ジャックは尋ねる。

「『そんなに』どころではない。全てが引き分けだ。

彼らは疲れているときでも、いつでも決まった日時に戦う。

おそらく、あと100年間は余裕で戦い続けるだろう。」

チエリーは考えていた。

この子達は『敵』がいるから戦っていられるんだ。

『敵』がいなくなればいつてわけじゃない。

『敵』がいるから強くなれるのかな…

この子達にまた一つ、教わった気がするわ…

「よし、完成したぞ。」

チェリーの剣をスチルは渡す。

「ありがとうございます！」

「うむ。…おい、お前さん。」

ジャックをスチルは呼ぶ。

「今度ここに来る時には、しっかり傷をつけて来るんだぞ。」

「はいっ!!」

ルーフスは小さい兵士達と棒で戦っていた。

突く、守られる、

斬る(?)、弾かれる、

足をさばく、避けられる…

「なるほど、お前、なかなかやるなあ……」
青色の人形は照れる。

「ほら、戦士の友情の証だ。」

ルーフスは右手を握り差し出す。

その右手に粘土の小さな手がぶつかつた。

「「「ありがとうございますー!!」」」

最後にスチルは笑って見送ってくれた。
そして青色の人形達も敬礼をしていた。

「あ、ルーフスさん、あれ！」

チエリーが横を指差す。

遠くで赤色の人形達も敬礼をしていた。

「あいつら、まとまってきたら強いんだろぅな!!」

「そうだね。一瞬で負けそうだ!」

ルーフス達は青と赤に見送られながら、草原を進む。

18：廃坑探索！（前編）

小さな戦士の住む村を離れて後、
ルーフス達は…

地上ではなく地下にいた。

それは少し前にさかのぼる…

ルーフス達は広大な草原を抜け、雪原に踏み入っていた。

「クウン…」

狼は寒そうに身震いしている。

「ステーラ、大丈夫？」

「ワン!!」

チエリーは心配する。

狼は問題ないようだ。

「雪、懐かしいなあ〜」

ジャツクは右手で雪を受けながら、郷愁に駆られていた。

「ここんとこ全然雪なんか見てなかったからな。」

ずっと雪の中にいたお前は恋しいよな。」

「私もクツキーが恋しくなってきました…」

「いや、あんた毎日食べてるだろう。」

「ワン!!」「ワン!!」

ルーフスとジャックがハモってツツコミを入れる。
狼は元氣そうに吠える。

「毎日四時間に一回は口にしないと元氣がでないのですよ！」

チエリーは誇らしげに言う。

「あー、もう数とかじゃないんだ、数を通り越して周期なんだな。お前は。」

ルーフスが冷静にツツコミを入れた所で。

もう太陽は沈みそうになっていた。

「あんちゃん、早く村を見つけないとやばくない？」

「まあ、ここまでの流れからしてみるとすぐ見つかるだろ！」

「ワンワン!!」

月が少し昇った。

ルーフス達はモンスターに追いかけていた。

「やばいよやばいよ、村が無いじゃんかよ!!」

シュツ!!

スケルトンの矢が3人の隙間をすり抜ける。

「この状況どうするんですか!!ルーフスさん!!」

「ワオーン!!」

ギシュギシュ!!

チエリーの頭上に蜘蛛が飛び掛る。

チエリーが片手で3回、素早く斬る。

「あ！あそこあそこ！洞窟があるよ！あんちゃん！」

「かまわん！皆、飛び込むぞ！」

狼は洞窟の前で何回も吠える。

モンスターがひるんでいるスキに、ルーフス達は洞窟の中に駆け込み、

土で入り口にふたをする。

最後に急いで狼が隙間から入る。

「ふうくたすか…」

背後には沢山の目。

「に…」

「逃げるおおおお!!」

「ワオオオン!!!」

三人と一匹は洞窟の中を駆け巡る。右、左、左、上、下、下…

…!
!?

足を動かしても前に進まない。

それはそうだ。

空中にいるのだから。

「けーこく（溪谷）かよおおおおお！！」

「きやああああああ！！」

「うわああああああ！！」

「バウ！！ワウ！！」

ルーフス達はモンスターが見守る中溪谷へ：

バツシヤン！！

ドボン！！

バシヤン！！

バシヤーン！！

四つの大きな水しぶきがたった。

運よく下には水流があつたのだ。

ルーフス達は水流から抜け、

服を乾かそうとする。

狼は体を振って水を落とした。

「あー…服がびちゃびちゃだ…でもまいたか？」

「いえ、まだモンスターはいますよ。」

チエリーは遠くを指差す。

こうもりが沢山飛ぶ中に、

クリーパー、スケルトン、ゾンビ、蜘蛛がうじゃうじゃ。

「こりや明るい所に出なきやだめだな…」

「クウン…」

「あんちゃん、明かりがあるよ。」

「え？」

確かに渓谷の穴から明かりが漏れている。

「しめた。みんな、行くぞ。」

「ワン！」

狼は返事をする。

他の二人はうなずいた。

ルーフス達は洞穴の中へと向かう。

「!?…なんだこっちは…」

そこには人工物のレール、チェスト、木で作った門があった。何年も人がいないのか、蜘蛛の巣がところかしこに張っている。

「廃坑だね。ほら、ここに。」

ジャックはバンダからもらった辞書をルーフスとチェリーに見せる。

廃坑 (Abandoned Mine Shaft)

古代の人々が鉱石の採掘のために掘って作ったもの。そこには古代の人々が残した数々の貴重品があるため、「地下の宝物庫」とも呼ばれてきた。

「へえ…『地下の宝物庫』か。」

「でもここまできれいに残るのですね。感動しました！」

「面白いものが見つかるといいな！」

「ワン！ワン！」

「よし、皆、廃坑探索に、出発だ!!」

「おお!!」

ルーフス達の廃坑探索が始まった。

19：廃坑探索！（後編）

短くあらずじを説明しよう。

ルーフス、ジャック、チエリー、ステーラの三人と一匹は

モンスターに追いかけられ、洞窟に入り、溪谷へ真つ逆さま。

明かりを見つけると、そこは廃坑であつた。

ルーフス達の危険な廃坑探索が始まる…

今、ダイヤモンドの剣でゾンビが倒された。

木製の柱の影からモンスターが次々と現われる。

「さすが廃坑だ…モンスターがうじゃうじゃいるぜ！」

チエリーは青い顔をしながら言った。

「う…生のゾンビの肉のにおいが…」

「だ、大丈夫？チェリーさん。」

ステーラがチェリーの前のゾンビ肉を飲み込む。

「ふう…ありがとう、ステーラ。」

「ワン!!ワン!!」

狼は元気になったのか尻尾を振る。

「さあ、お前ら、気を抜くなよ。まだモンスターはいるぜ！」

シュー…

カラン…

ヴォー…

キシユキシユ!!

「はい！ルーフスさん。」

「おう！あんちゃん！」

「グルルルル…バウワウ!!」

ステーラがモンスターに威嚇し飛び掛る。

カラツ！！

スケルトンが崩れる。

チエリーが剣を振るう。

キシユウウ：

蜘蛛が仰け反り、動かなくなる。

ジャックが弓で矢を放つ。

シユウ：

クリーパーが火薬を落とす。

ルーフスが剣で斬る。

グボオア…

ゾンビが倒れる。

ルーフスは松明を力強く立てた。

「よし！ここは制圧完了!!」

「チェストがあるよあんちゃん、」

ジャックはトロツコの上に置かれたチェストを調べた。

ギコオ…

金の延べ棒と蜘蛛の糸、リングに鞍、そして鉄の剣。

「ワン!!」

狼がリングにかぶりつく。

「うーん…なんか微妙だ…」

「なーに、宝探しなんだ。そんなに見つかったら苦労はしないぜ。」

「そうですね。気長に探しましょう。」

「じゃあ、ここからは手分けして探すことにしよう。」

俺はこの道を真っ直ぐ、ジャックは左、チェリーは右へ行ってくれ。

…ステーラは誰と行くか…」

「はい！」

チェリーが名乗りをあげる。

「わたしが連れて行きます。」

「よし、決まりだ!!皆、けがなんてするなよ!」

「うん!」「はい!」「ワオン!!」

ルーフス達は分かれていった。

~~~~~ジャックの探索~~~~~

「「「ヴォー……」」」

「な、なにいい!!もしや……うそでしよ……モンスタースポーンがあるのか!?  
いやいやいや早いだろー!!」

ジャックはあわてて剣で応戦する。

ズシャ!! ザク!! ザク!!…

ゴホオウ…

グボオウ…

グホウ… グボオウ…

急いで周りを照らす。

苔だ。

「やった…!!」

モンスタースポーンを壊して、

松明をつけて、制圧完了。

「中身は…」

ギコオ…

リング、鉄の延べ棒、腐敗した肉、エメラルド…鉄の馬鎧!!

「おおおおお!?」

少年は目が飛び出る。

「これ…レアでしょ、絶対!」

~~~~~チェリー、ステーラの探索~~~~~

「…なんで元から使われていたのに鉱石が残ってるのかしら…」

チェリーは鉱石を掘りながらつぶやく。

ステーラが「それは言わない約束だ」とばかりにチェリーを見て首を振った。

「まあ、ここまで鉱石がたくさん取れるからいいわよね、ステーラ。」

「ワオン。」

ステーラは一声鳴いて同意する。

キシユウ…

キシヤ……！

蜘蛛が二匹、チェリーの元へ。

「……ごめんなさい……あなたを殺してしまう身だけど、言いたい事があるわ。私は、もうあなた達なんかには負けない！」
剣を六つ、素早く振る。

キシユウ……

キシユウ……

「クウン……」

狼がさびびしげな顔をチェリーに向ける。

「あ……ごめんなさい、なんか獲物を横取りしちゃったみたい……」

「ワン!!ワン!!」

「ふふふ、分かったわ。次の敵はあなたが倒してくれる？」

「ワオーン！」

狼は力強く吠えた。

「さ、もう少し先に進んでみましょうか。」

「ワン！」

チエリーたちは松明を灯しながら奥へと進んで行つた…

~~~~~ルーフスの探索~~~~~

「カラン…コロロン…」「シュー…」

「お、出たなモンスター！それっ!!」

ルーフスが剣で素早く斬る。

攻撃はどンドン当たる。

シューウウ…

カララツ!!

倒れた後に火薬と骨、そして弓が散乱した。

「おお、弓を落としてくれた！」

…サンキュー、お前の弓、大切に使ってやるからよ！」  
ルーフスは更に進む。

「…う…なんだこの蜘蛛の巣だらけの場所は…」

…こういう場所に限ってすげえ宝があるんだよな。  
よし、行ってみるか！」

ルーフスは蜘蛛の巣を剣でなぎ払う。

「ふう…まだ宝箱はね…!!!」





あれ…

出てきた蜘蛛はいつもの半分のサイズ。

まだ赤ちゃんか…？

「なんだ…びつくりさせやが…」

「キシユウ！」

「…!!」

ルーフスを襲う。

ルーフスは少し痛い攻撃に耐え、なんとか倒す。

ズク…

「…!!!」

ルーフスの身に経験したことの無いような痛みが走る。  
辺りを見回しても何も無い。  
蜘蛛もまだ遠い所だ。

「キシユウ!!」

お…また来た。

ズキイ…!!

「ぐっ…」

ルーフスは突然の痛みに剣を振れなかった。

剣が手から離れる。

小さい蜘蛛は寝転んだ状態のルーフスに攻撃を仕掛ける。

「くそお…!!」

ルーフスは力を振り絞り絞り蜘蛛から離れる。

蜘蛛も追いかける。

ルーフスは分岐点に差し掛かった。

「コンだ…!!」

ルーフスは急いで通路を丸石で覆う。

「キシユウ!!」

タン…

最後の丸石が置かれた。

間一髪で蜘蛛の行く手を阻んだのだ。

ズキユウ…

「ぐはっ…」

ルーフスが血しぶきを口から出す。

持ち合わせたパンを食べるが治らない。

どうしちまったんだよ俺…!!

~~~~~チェリーとステーラの探索~~~~~

ステーラの耳が立つ。

「ワン!!ワン!!」

「ステーラ、どうしたの…まさか、ゾンビの肉があたつたんじゃ…!」
首を振る。

「ワンワン!!ワンワンワン!!!」

ステーラが一目散にもと来た道を駆け出して行った。

「!!…ちよっと!ステーラ!!」

チェリーが追いかけていく。

~~~~~ジャックの探索~~~~~  
♪

廃坑に鼻唄が聞こえる。

ジャックはレアを手に入れ上機嫌だ。

「まったくだあつるのつかなく超レア♪」

即興で作った需要の無い歌を口ずさみながらスキップでモンスターを倒していく。

最後の松明が置かれた。

「…あ、…しまった、材料持ってきて忘れた。取りに行こうと。」

ジャックは辞書を読みながらもと来た道を歩く。

もと来た道を…

…

止まった。

辞書の一ページのある部分の内容を読んだからだ。

パタン…

ジャックはもと来た道を走る。

「まずい…このことは伝えなきゃいけないじゃないか…!!」

~~~~~ルーフス達、合流~~~~~

「チェリーさん！……!!!」

…ハア…ハア…

ルーフスが石の上に横になっていた。

「まさか…毒?!」

「ええ…そうよ、なんで分かったの?」

「これだよ!」

洞窟グモ (Cave Spider)

廃坑に生息する蜘蛛の亜種。

スポンブロックによってしか

出現しない、小さな蜘蛛だが、

その姿とは裏腹に強力な毒を持つ。

「ごめん、僕が廃坑の事を良く調べなかつたばかりに…」

「謝らないで、ジャック君…それより…」

チエリーが久しぶりの涙を見せる。

「ルーフスさんが…全然よくならないの!!」

「クウン…」

狼も悲しげな顔を見せる。

ジャックはチエリーの肩に手を置いて自信を持って答える。

「大丈夫だよ、チエリーさん、解毒方法はしっかり調べてあるよ！」

チエリーさん、お菓子の材料の牛乳って持つてる？」

チエリーは涙をぬぐってかばんを探す。

「牛乳なら…」

「それをあんちゃんに飲ませて！」

ゴク…ゴク…ゴク…

「あり？治った。」

一瞬で完治。

チエリーは目が点になる。

ジャックは笑顔で言う。

「ね！」

：

「ははははは…いやー小さい蜘蛛だって油断してな！

…ジャック、チエリー、ステーラ、ありが…」

チエリーが涙目になっている。

「もう…心配させないでくださいよ！ルーフスさん！」

本当に…心配…したんですからね…!!」

チエリーはまた泣いた。

「…ああ、サンキュー、チエリー。」

「ワン！ワン!!」

狼も喜ぶ。

「あんちゃん、治ってよかった!!」

ジャックも続けて笑った。

その後、ルーフス達はすぐ地上に戻ることにした。
さすがに、もう誰も毒にはかかりたくは無いから。

「へえ…ステーラが俺の毒を察知してくれたのか…」

俺より賢いなあお前！」

ステーラの頭をルーフスが撫でる。

狼は嬉しそうだ。

ジャックがいきなり発表する。

「あんちゃん、この廃坑探索ですごいもの見つけたよ！」

「ジャーン!!」

「おおおおおおお!!」

「これ、お前、かつこいいじゃんか、お前、よく見つけたなあ!!」

ルーフスは興奮している。

「本当に『地下の宝物庫』でしたね!…馬か!!乗ってみたいなあ!!」

チエリーもいつも以上に興奮している。

「クウン?」

狼は何がなんだか分からないようだ。

「いつか馬も欲しいね!あんちゃん!」

「そうだな!そんなまでに手綱を作っておかなきゃな!」

「ふふ…早いですよ、ルーフスさん、荷物になるだけですよ!」

洞窟中に笑い声が響く。

「お、出口だ…」

ルーフス達はやっと地上に出る。

「すげえええええええええ!!」

ついたのは巨大なセコイアの生い茂る森。

木々の間で鳥がさえずっている。

「すごいなあ……」

「美しいですね……」

「ワオーン!!!」

今までに見たことのない景色にルーフスは思わず感嘆する。

「世界ってこんなに広いんだな……」

「あんちゃん、早く行こうよ!」

「行きましょう!ルーフスさん!」

「ワン！ワン！！」

「おう！！」

ルーフス達はセコイアの森へ駆けて行った。

20：絶交？

セコイアの樹のびっしり生えた森の中。

ルーフス達は家を建てていた。

松の独特の黒色を基調にした

ログハウスだ。

ジャックが松明を挿したところで、雨が降る。

「おお、グッドタイミングだ。それじゃ皆、家で休むか！」

「ふう〜腹減った〜…」

「クウン…」

「ベイクトポテト、焼きましようか！」

「賛成！」

「ワン！」

ルーフス達はドアを開けて家に入っていった。

ジャックは疲れて眠ってしまったようだ。

ステーラはその隣でベイクドポテトを嬉しそうに頬張っている。
「…うめえか？ステーラ。」

「ワンワン!!」

狼は元気よく答える。

「だよな！なんせチエリーが作ったんだからな！」

ルーフスは笑う。

チエリーは一瞬、心の奥底で何かが揺れ動くのを感じた。

その揺れはまだ収まらない。

それどころか強くなっていくように感じる。

私、ルーフスさんに…恋してるのかな…

ルーフスさんは私のこと……どう思っているのかな……

チエリーは顔を真っ赤にしながら、ルーフスにきいてみた。

「あ……あの……ルーフス……さんは……私のこと……どう……思ってるんですか？」
「え？……」

ルーフスの顔が一瞬で真っ赤になる。

チエリーは恥ずかしくて、下を向くことしか出来ていないようだ。

ルーフスも同様で、チェリーの顔から目を逸らしている。

一度ほおを搔いてごまかしながらルーフスは考える。

何で…今…ここで…こんな事をきいたんだ…？

えっと…チェリーは…俺にとって…かの…

心の中でルーフスは自分を蹴飛ばす。

いやいやいや…まだそんなレベルじゃ…つてか「まだ」つてなんだよ…

俺はデートしてんじゃねえんだぞ!?!これはただの旅だぞ？

…えつと…どうすれば…

「…仲間…そう！旅の『仲間』だよ！そう！『仲間』！」

チェリーの心の揺れがピタッとやんだ。

一瞬、ルーフスを見てからの静寂。

「そ、そうですね。」

チェリーはとぼけるように笑う。

…私…なんで満足してないんだろう…
仲間がいいじゃん！私を仲間と認めてくれたってことじゃん！
…でも…

雨音が去っていく。

「…お…雨やんだな…」

ルーフスは立つ。

「俺、食糧採ってくるよ。」

「あ、はい！いってらっしゃい！」

「行ってきます。」

ルーフスは扉を開け出て行った。

チエリーは後ろに倒れる。

ふう…

私は…ルーフスさんに『彼女』って言ってもらいたかったんだ…

キイ…

チエリーは起き上がる。

扉には、赤いアウターに茶色のTシャツの男。

ルーフスさんだ。

「あれ…何か忘れ物ですか？」

目の前のルーフスは口が裂けるように笑った。

「…いただきます。」

ルーフスは倒した豚や牛に感謝し、肉を拾う。
ルーフスは小屋へ向かう。

はあ…

あそこで本当のこと、言えば良かったのかな…
チエリーの事を…好きだって言えば良かったのかな…

ルーフスはうろうろと考えているうちに、セコイアの樹にぶつかった。

「…あいて!!」

キイ…

「ただいま…!？」

見ればチェリーとジャックが倒れている。

眠ったわけではない。

二人の服はボロボロになっている。

ルーフスは手始めにジャックを起こす。

「おい！大丈夫か！ジャック！ジャック！」

ドゴツ!!!

ジャックがルーフスの頬を殴る。

ルーフスは床に倒れた。

「ツ…何すんだ！」

「あんたこそ何してんだよ！」

ジャックがいつもより強い口調で喋る。

「今まで旅をしてきて…それで仲間を滅多打ちかよ！」

「…ジャック…お前何言ってるんだよ…？」

ルーフスの頭には疑問しかなかった。

俺がジャックとチェリーを滅多打ち…？

「俺は…お前らを滅多打ちなんかしねえよ！」

「したじゃないかよお!!」

ジャックとルーフスは睨み合う。

ルーフスはチェリーを見る。

斬られたのか、血が広範囲に広がっている。

「…チェリーの手当てをしなきゃ」

「しなくていいよ。」

ルーフスが手を伸ばすのをやめたとき、

ジャックがチェリーに近づいて手当てを始める。

「…あんちゃんは…僕達が仲間じゃ不満なんだろう。」

それなら…勝手にすればいい。チェリーさんとステラで旅を続けるよ。

あんちゃんは違う仲間を見つければいいじゃん。」

ルーフスは自分の心にヒビが入ったかのように感じた。

ジャックが…自分について来てくれたジャックがそんな事をいうなんて…

ルーフスは悲しんだ。

ルーフスはジャックにさつき捕った豚肉や牛肉をジャックに渡そうとする。

「いいよ。あんたが食べばいい。」

「…くそー！」

ルーフスは豚肉と牛肉を床に投げ、扉を開けて出て行った。

バタン…

扉の閉まる音がジャックに響く。

「…僕だって…信じたくないさ。…」

ジャックも悲しい顔を見せる。

扉が今、そつと開く。

そしてそつと閉まった。

夜になり。

ルーフスはセコイアの森の北にある砂漠の地下にいた。

あるだけの松明。

あるだけの食糧を食べて。

ジャックに殴られた頬をさする。

砂の隙間から満月が見える。

月は独りをあざ笑うかのごとく洞窟内のルーフスを照らす。

ルーフスは過去の事しか考えられなかった。

ブレイズとの共闘。終わりの世界での共闘。

ステーラとの出会い。チェリーとの出会い。

都会での奔走。都会での戦い。

廃坑での戦い。

そんな事が心をめぐりまわっている。

それは目からもあふれ出すほどの冒険であった。

ルーフスはそれらを拭う。

拭っても拭ってもあふれ出す。

涙がルーフスの目から垂れる。

「俺たちや……ここで終わんのかよ……！」

…

「…！」

ルーフスは耳をすます。

…オーン…

…ワオーン…

…オーン！…

「ステーラ!!」

ルーフスは大声を上げる。

ステーラも気づいたようだ。

ルーフスはシャベルで狭くふさいでいた砂を掘り返した。

ステーラが洞窟に入ってくる。

ルーフスはステーラを抱く。

「ステーラ…おめえ…帰ってきてくれたのか!」

「ワン!」

ステーラは嬉しそうに尻尾を振る。

ルーフスはステーラから情報を抜き出そうとしていた。

ステーラの目の前の土に○と×が刻まれている。

「よし、まずはテストだ。お前はメスだ。」

「ワン！」

ステーラは×に手を置く。

「チェリーとお前はクッキーが大好きだ。」

○に手を置く。

「よし、本題だ。…ステーラ、俺が家に入ってきたんだな？」

○に手を置いた。

「そして俺がジャックとチェリーを襲った。」

○に手を置く。

「その姿は俺だったか？」

○に手を置く。

「俺じゃないってこと、お前は分からなかったか？」

×に手を置く。

「じゃああれは俺じゃない、違う奴ってことか？」

「ワン！」

ステーラは静かに○に手を置いた。

「よし…お前、よく出来たぞ…こほうびだ。」

ステーラは持っていた豚の生肉をあげる。

「…ありがとな、ステーラ。」

ルーフスは口を引き締め、月を見た。

「…絶対に見つけてやるぜ。俺の偽者め…！」

「ジャック君…あれはルーフスさんじゃないわ、

あなただって、分かるでしょう。ルーフスさんはあんな事なんて絶対しない。」

「分かってるよ。チエリーさん。…でも、現にあんちゃんが僕達を襲ったんだよ？」

「どうやって疑えっていうのさ…」

「……」

「ステーラはたぶん、あんちゃんの所に行ったんだろう。しょうがない、僕達二人で旅するしかないよ。」

「……やっぱり駄目。」

チエリーが言う。

「私達は！ルーフスさんとステーラ、ジャック君、そして私。」

「…この4人で『私達』だったでしょう!？」

「それなのに…その中の二人だけなんて…」

「ルーフスさんとステーラが恋しくて耐えられないの!!」

「…チエリーさん…そうだよね。」

あの二人がいなきや、僕達は成立しないんだ…」

ジャックは反省する。

自分からルーフスを離してしまった事。

キィ…

「すまなかつた！」

ルーフスが扉を開けて土下座する。

「俺が…お前らを裏切るような事しちゃった！」

俺を仲間に戻してくれないか！」

「ルーフスさん…！」

チエリーは喜ぶ。

ジャックがルーフスの肩に手を置く。

「いいんだ、あんちゃん。僕が言い過ぎた。

もう一度、仲間になってよ！」

「あ、ありがとう！」

ルーフスは泣く。

ジャックは笑う。

チエリーも微笑んだ。

「あんちゃん、ステーラは？」

「ああ、あいつなら近くの池で水飲んでるぜ。」

「分かった。…ちよつと僕、食糧取ってくるね。」

ジャックは家を出る。

「ふう…良かった、ルーフスさん。戻ってきて…」

バタン!!

「くれ…て…!?!」

チエリーはルーフスに押し倒された。

「お前が好きだ。」

21: Herobrine

「お前が好きだ。」

「…!!」

チェリーの顔が真っ赤に染まる。

「え、ちよつ、ルーフスさん？えつと…この体勢は…ええ!？」
チエリーは突然の出来事に戸惑う。

ルーフスはゆっくり顔を近づける。

本気だ。

ルーフスさんが本気だ…

チエリーはかなわず目を閉じる。

チエリーが目を閉じると、ルーフスは白目になり、口を裂けて大きく笑う。

まるで悪魔のような顔つきだ。

チエリーを飲み込む気なようだ。

キィ…!

ズシヤ!!

ズシヤ!!

二つの剣がルーフスの背中を斬る。

背中から二本、血が垂れる。

「てめえ！俺のチェリーに何しやがる!!」
「ワオン!!」

本当のルーフスは大きく怒鳴る。

チェリーは目を開けて本物のルーフスを見た。

「ルーフスさん!」

続いてジャックが家の中に入ってきた。

「池に行ってもステーラなんていなかったよ…?ルーフスの偽者さん。」

「グルルルル…」

ステーラは偽者のルーフスに怒っている。

偽のルーフスは大きく飛び上がり、チェリーから離れた。

「…あなたは偽者だったんですね。」

チェリーは少しさびしい表情で言った。

Herobrineは舌打ちをして本性を現す。

「黙って喰われていりゃ、いいものを…」

本当のルーフスは問う。

「お前は何者なんだ？」

偽のルーフスは答える。

「俺はHerobrine…形のねえ妖怪さ。」

「形の無い…妖怪？」

「この姿を見りや分かるように、俺は好きな人間の姿に変身する事が出来る。」

偽ルーフスの姿が歪む。

そしてジャックの姿に、

更に歪んでチェリーの姿になった。

「ぼ、僕…違う…チェリーさん…?」

チェリーの姿のHerobrineは更に続ける。

「俺はこの能力を使って、大好物の人間を食って生きてきたのさ。」

輪郭が歪んでルーフスの姿になる。

「さて、これで食べ物が増え4倍になったってことだ。」

「お前、バカじゃないの?」

ルーフスが剣を構える。

ジャックも弓を引き絞る。

ステーラが唸る。

ジャックが言葉を跳ね返す。

「お前が倒される確率も4倍に増えたってことだろう?」

「そうか…じゃあ0%ってことだな…!」

Herobrineは口を裂けて笑った。

「…ここじゃ、おめえらの本当の力を引き出せないだろう。

外へ出ようぜ。」

「はは、親切なんだな。」

ルーフスは睨みながら笑う。

「お前らには丁度いいハンデだろう?」

ルーフスとジャック、ステーラ、そしてHerobrineは外へ出て行った。

チエリーはその場に座る。

…なーんだ…偽者かー。…

…本当だったら良かったのに…

チエリーはハツとして、首を横に振る。

…それよりも…

チエリーの瞳が燃えている。

…女心につけこんで、食べようとするなんて…！

許しません!!!

チエリーは飾り棚からソードを手を取った。

夜も明けてゾンビ達が燃え出した。

「さあ、バトルスタートだ！」

ルーフスが言った。

Herobrineにルーフスが剣を振るう。

Herobrineはやすやすと避ける。

ジャックが矢を放つ。

またしてもHerobrineはやすやすと避けた。

ステーラも何回も嘔むが…

やはり避ける。

「あんちゃん、あいつ、攻撃すら当たらないよ！」

「…まだだ、続けていくぞ！」

「ワン!!ワン!!」

ルーフス達は次々に攻撃を仕掛けていくが…

Herobrineに全て避けられた。

剣を振つても全く当たらない。

矢も全て空に放たれた。

「バカが…俺はお前らに変身できるのだ。

お前らの攻撃など全てお見通しだ。」

「グルルルル…」

ステーラは唸り声を上げる。

ルーフスは考える。

「くそ…どうすりゃ良いんだ…」

「何か方法は…」

ジャックが辞書を探しまわす。

ズシヤ!!

「な…!?!」

ジャックとルーフスはHerobrineを見た。

チェリーがHerobrineを剣で斬っているではないか。

「チェリー!」 「チェリーさん!?!」

「女の子の恋心につけこむなんて…最低です!」

「ばかな…俺に攻撃を当てられる奴がいるだど!?!」

Herobrineは見えない速さで逃げる。

その途中でチェリーに変身する。

チェリーの背後をとる。

が。

またもや斬られた。

「何!?!」

チエリーは怒った顔で言う。

「私の努力を…なめないでください!」

Herobrineはさつきとは違うチエリーの顔に、
恐怖を感じて動けなくなっていた…

「…え…う…ちよつと…まつ」

ズシヤ!!…ズシヤ!!

「どわあああああ!!」

ズシヤ!!…ズシヤ!!

Herobrineが倒れる様を…

ルーフス達はただ口を開けたまま見守るしかなかった。
ルーフス達から無数の汗が流れる。

「…チエリー…怒らせないようにしないとな。…」

「…うん……………」

「クウン……………」

「ぎやあああああああああ!!!」

その夜。

「では、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

「ワン!!」

チエリーは二階に上って寝室へ行く。

ふう…

チエリーはすぐにベッドに寝転がる。

今日は疲れたな。

…はあ…

トントン。

二階の窓を誰かが叩く。

「!？」

チェリーは窓を覗く。

見ても窓に映った自分しかない…

…と思ったら窓に映った自分が勝手に動いた。

チェリーに変身したHerobrineが、窓の外にいたのだ。

「うわあ…ってあなたは！まだいたの!？」

窓を開ける、と言ってるらしい。

「…女心を利用するような人を、私の部屋に入れるような事はしません！」
チェリーはそっぽを向く。

それに対してHerobrineは手を合わせて懇願し続けている。

チェリーはその真剣さに気になって、剣を持ちながら窓を開ける。

「すまないな、夜分遅く。」

「…30秒ほどで帰っていただけませんか？」

「ちよつと、早すぎるだろう！お譲ちゃん！」

「自分にお譲ちゃんなんて言われたくありません！」

Herobrineは咳払いをして話を本題に変える。

「俺はあの時、お前を襲つただろう？」

「…それがどうしたのですか？」

「俺は本当は、家に入ってからすぐお前を食べようと思つたんだ。」

チエリーは嫌そうな目でHerobrineを見る。

「…はあ…さっきのカウント、15秒ほど縮めてもいいでしょうか？」

「ちよつと！本題はここからだつーの！」

「つまり、あれは俺の食欲が敵わないほどの愛の気持ちちつてことだよ！」

「へ…？」

チエリーは真つ赤になる。

Herobrineも真つ赤になった。

「…今見てる通り、俺の感情はその変身元の本人とリンクする。

…あいつはお前のこと、本当に好きなようだぜ。」

チェリーは顔が真っ赤になったままだ。

「…それに、お前を助けに来た時、あいつはなんて言ったか思い出してみろ。」

(俺のチェリーに何しやがる!!)

カア…!

チェリーの顔が最大に真っ赤になる。

「…妖怪が言うのもなんだけどよ…俺はお前らを応援してるぜ。

…約束の時間は過ぎてねえか？」

チエリーは言葉が理解できないままうなづく。

「じゃあな！」

Herobrineは姿を消した。

10分ぐらい経って。

チエリーはやつと冷静になり、笑顔になった。

Herobrineさん…

あなたが教えてくれなければ、私は前に踏み出せませんでした。

…ありがとうございます！

翌日。

チエリーはかまどの前で、焼き魚を焼いていた。

ジャックは武器の整備をしている。

焼き魚を焼き終わってから、チエリーはジャックに問う。

「あれ？ジャックくん、ルーフスさんは？」

「ああ、まだ寝てるよ。」

「起こしにいつてきますね。」

チエリーは二階へ上がっていった。

ギイ…

「ルーフスさん？朝ですよ！」

起きない。

チエリーは左右を確認する。

C
h
u
…
!

チェリーは、ルーフスの頬に一つ、キスをした。

…やっぱり起きない。

「…ふふ♪」

チエリーは笑顔になる。

「ルーフスさん、お先に食べていますね！」

ボタン…

や
べ
え
⋮

⋮

俺、今、チエリーにキスされたのか!?

ルーフスは寝床で顔を赤くしながら、しばらく横になっていた。

昼。

ルーフス達はセコイアの森を探索することにした。

「よし！お前ら、行くぞ！」

「おう！」「ワン!!」

「はい！……きゃあ!!」

ボタン！

チェリーはロングスカートにつまづく。

ルーフスは笑顔で手を差し伸べた。

「ほら、行くぜ！」

チェリーは手を取る。

「…はい!!」

「あんちゃん！チェリーさん！」

「ワン！ワン！」

ジャックが遠くで手を振っている。

ステーラも元氣そうに跳ねまわっている。

「おお！今行く！」

ルーフスとチェリーはジャックとステーラの元へと駆け出した。

深緑の葉に白い陽光が降り注ぐセコイアの森の中。

楽しそうな、3人と1匹の話し声が響いていた。

22：世界を結ぶ道

セコイアの森を歩く3人と1匹。

小鳥が木から今、飛び立った。

狼は鳥の飛び立った木に向かって吠え続けている。

「…広いですね、この森。」

「この景色も退屈してきたな…」

ルーフスは肩を落とす。

ステーラが後ろからついてきた。

「次のバイオームはまだ見えないね…」

3人と1匹は休みついでに立ち止まる。

トン…

トン…

「……………」

狼は無言でどこかを見ている。

「こういう時に馬があると便利だよなー…」

「そうですね。馬を見つければ一日でもっと進めるはずですし！」

「馬を早くみつけないー…」

トン…

トン…

何かを置き続ける音がする。

「…ステータ、何を見ているんだ？」

「…？…」

「…?!？」

「……………」

3人も見続け始めた。

目の前で線路を引き続けている女の子だ。

めがねに垂れ目、車掌帽に登山服。

髪はぼさぼさのロング。

無理やり詰め込まれたようなバッグをしょっている。

「こちらには気づいていないようだ。」

「うーん…方角はこれであっている…わね。」

「あ、あの〜」

「きゃー！」

女の子はびっくりして倒れる。

ルーフスは初めに気になった質問を投げかける。

「えっと…何をしていましたのですか？」

「あ…んと…失礼しました…えと…」

女の子は立ち直し、深呼吸してから答える。

「私は世界中を結ぶ列車を通すために、線路を引いていたのです。」

「世界を結ぶう!?!」

「列車!?!」

「ワン！」

「いきなり驚いてごめんなさい…すごく壮大な計画をお持ちなんです…」

「いえいえ、お褒めいただきありがとうございます！」
女の子は笑う。

一同は自己紹介を始める。

「俺はルーフス。いろんな世界を見るために旅してんだ。」

「いろんなことを学ぶためお供している、ジャックです！」

「つ、強さを求めている、チェリーと申します…何か恥ずかしいですね…」
「ワン！ワン！」

「皆さんもとても大きな夢をお持ちで！」

…私はリナ。自称、世界一の鉄道マニアと自負しています！」
リナは自信ありげに話す。

「今の所、どこを線路で繋いでいるんだ？」

「一年前から始めたのですが、結構繋がりましたよ〜!!」

リナは何枚かの地図を見せる。

カラフルな印が地図上に描かれている。

「それぞれの駅に目印の旗を立てて、記録しています。」

まず私の故郷から、アルコバリノ・ブリッジを通って、サクラノ国、

シヨウグン雪原、エンヘル村、その隣のジャングル、森と行って、海を越えて

グレート・スライヴシテイ、メデイウス・ライブラリーの森、クレイ・ソルジャーズ

の村、

そして現在に至るわけです。」

「メデイウス・ライブラリー……バンダさんにもあったのかあ!?!」

「図書館の館長さんですね。会いましたよ。」

「私の村に……グレート・スライヴシテイまで!?!」

「俺たちの行ったところ、ほとんど行っているじゃないか!」

「え……!?! ってことは、ヴァイオレット市長やスチルさんにも……!?!」

「あいつ……市長になったのか!?! 上げえな!!」

「スチルさんは元気だったのか?」

「ええ! 元気でしたよ!」

「お前とは話が合いそうだ!」

「私もです！…もう日が暮れてしまいましたね。

私の小屋でお話しませんか？」

「いいなあ！」

「よろしくお願ひします！」

チェリーは笑顔で言った。

「ワン！ワン！」

ステーラは嬉しそうに尻尾を振った。

リナとチェリーはかまどの前で料理をしている。

リナは涙を垂らしながら焼き魚を持っていた。

「うう…こげちゃったよう…」

「…あなたって、一年間一人だったんでしょう？」

そんなに下手で今まで何を食べてきたのよ…」

「パンとかクッキーだもん！クラフトすれば食べられるもん！

うええええん!!」

リナは号泣する。

「分かった分かった。私が今日はみっちりあなたに料理を伝授してあげる！」

「本当に！ありがとう！チエリー！！」

「はは、チエリーは誰とでも、すぐ仲良くなれるよな！」

「うらやましいよね……」

狼が机の上のリナの失敗作を、おいしそうに頬張った。

10回目のかまどを開けた。

「やっとな成功だあ……！」

「うん！完璧！！」

チエリーが指でOKサインを出す。

リナが全員分の焼き魚を机に運ぶ。

2人と一匹は既にへばっていた……

「もう月が真上になっちゃうぜ…」

「やっと食べられるね…」

「クウン…」

「ご、ごめんなさい皆さん…」

「あはは…」

チエリーは笑いながら汗を流した。

「「「いただきます！」「」」

「ワオン！」

それぞれが食べ始める。

ルーフスがリナに問う。

「お前はさ、なんで世界中を結ぶ列車を作り始めたんだ？」
車掌帽をはずした女の子は囁むのを止めて答える。

「私には一人の弟がいるの。」

弟は生まれた時から、足が動かなくて…

でもそんな悲しいことを考えないで、弟は笑顔で『世界を旅してみたい』って言うの。
歩きでは到底無理でしょう？

…でも列車を使えば…世界中どこへでもいける列車があれば！

世界中の人たち全てがどこへでも、行ける。

もちろん弟も…！

素晴らしいことだとは思わない？」

「弟さんのためにそこまでがんばるなんて…流石だよりナさん！」

「とても素敵！…私がおばあさんになっても、どこへでも行けるのね！」

「世界中の人たち全て…か…」

できるさ、お前なら。弟と列車を、ここまで愛してるならな！」

「ありがとうございます!!」

リナは笑顔でお礼を言った。

その後もルーフス達のおしゃべりは続いた。

楽しい夜はすぐに過ぎていった：

その後、ルーフス達は出発を延ばしてリナの線路の整備を手伝っていた。

リナが指示をし、

ルーフスは線路の両脇に石を詰める。

ジャックは灯台を立てていく。

チエリーは柵を立てていく。

ステーラはツールを手渡していた。

4人と1匹は汗を流しながら、線路を完成させていった。

サクツ：

足元に砂の感触が伝わる。

ルーフスが後ろを向くと、そこには砂漠があつた。

緑のサボテンがところどころに見える。

「バイオームが終わった…!!」

「皆さん！ありがとうございます。私はここから砂漠を横断していきます。」

「ああ、そうか。楽しかったぜ…：水には気をつけろよ。」

「こちらこそありがとうございます！リナさん！」

「もうお別れか…：」

「また会えるわよ！チェリー！」

「：うん、ありがとね、リナ！」

砂漠の彼方で、リナが手を振っている。

…ありがとう…

ルーフス達も手を振る。

…チエリー…

「…！」

…また、料理教えてね…

チエリーは涙が溢れてきた。

「…うん！もちろんよー！！」

「めずらしいな、チエリー。別れは何度もしてきたのに…」

「…何故か、悲しくなってますよ…」

「大丈夫だよ！別れは誰でも悲しいものだよ！チエリーさん。

現に僕も、少し悲しいもん…」

「そ、そうよね…」

…私、あんなことがあったから感傷的になっているのかな…

…だめ、チエリー。別れなんてこれからいくらでもあるのだから!!

チエリーは笑顔で言う。

「私達も行きましょう！ルーフスさん！ジャック君！ステラ！」

「おう！そうだな！」「がってん！」「ワオン!!」

ルーフス達は、一人で『世界を結ぶ道』を作る女の子を後に、
小屋へと戻って行った。

番外編4：Tropical Heat!!

セコイアの森が遠くなつていく。

ルーフス達はツンドラを寒そうに歩いていった。

「うろうろうう…さぶぶ…」

「……………こんなことになるなら布団を作っていればよかったですね…」

「さささささすがのぼぼぼくでも寒すぎるよ…」

雪原に住んでいたジャックさえも凍えている。

いつもは元氣よく吠えているステーラも無口だ。

「Welcome! 南国へ!」

「……」
「……」
3人は場所の通り凍えるような目で目の前の男を見た。

目の前には厚く服を着た、サングラスの黒人男性。
なんともミスマツチだ。

男は冷たい視線も気にせず挨拶する。

「Meはミラーボ。南国の管理人Sa!!」

ルーフスは言っている意味も分からず答える。

「えっと、俺はルーフス、ジャック、チエリー、狼のステーラだ。」

「…よろしく。」

「…お願いします。」

「……………」

チエリーは呆れるように言う。

「えっと…もつと服を着たほうがよろしいのでは？」

「そうだよ。あんた。寒さで頭がどうかしちやったのか？」

「温かい飲み物でも飲んだら？」

「Ha, Ha, Ha!! You達、言葉がきついねえ。」

「これを見てくれYo!」

男の後ろには…温泉だ!!

「あ、ありがてえ!!」

「え…入っていいんですか!？」

「ラッキー!!」

「ワン!!」

サングラスの男はキレのいいダンスを踊りながら話す。

「OK、OK!、このTropical Jazzに入れる、

一瞬のうちにYou達は南国に飛ばされるのSa!

「Hahaha…全く、Youは冗談きついねえ!」

ルーフスはすっかり口調が映っている。

「What? MeはJokeは言っていないYo!」

ルーフスは服を着たままジャグジーに飛び込む。

ジャボン!!

「おお!!温けえ!!」

「僕も!」「ワン!!」

ドボン!! ジャボン!

チエリーは迷いながら、寒さに負けて飛び込んだ。

ドバーン!

「あゝ温かいです〜♪」

「泡が気持ちいい〜♪」

「いい湯だ〜♪」

「わお〜ん♪」

「おうつと、もうすぐだYO!!」

ルーフス達はジャグジーの気持ちよさにへろへろになっている。

「なにかだYO〜…」

「くう〜…」

「ふう〜…」

日差しが強い。

サアアアア：

心地よい風が吹いている。

……

「日差しい!？」

「そよ風え!？」

ルーフスとジャックが目覚める。

そこには砂浜にやしの木がいくつも生えている光景。

「むにゃむにゃ…ピナコラーダおいしいよお…」

チエリーは南国の夢を見ているらしい。

「おい、チヱリー、おい！」

「むにゃ…!!」

!!!

「あれ!?まだ私、夢見てる!?!」

「夢じゃねえよ、現実だよ!これは!」

「Boyの言うとおりだZe、Girl!!」

ジャグジーの底から、アロハスタイルに衣装をチェンジした

ミラーボが出てきた。

「ここはMeが発見した南国の世界なのSa!」

「元の世界には戻れるんですよね?」

ジャックが冷静な質問を投げかける。

「もちろんSa!あのColdな雪も忘れてこの一瞬を心ゆくまで
楽しんでいってくれYo!!」

「「Yeah!!」」

「ワオーン!!」

3人と1匹はノリノリになる。

「まずはこれを飲むといいYo!!」

「ピナコラーダですね!」

「ピナコラーダ?寝言でも聞いたけどなんだ?」

「え!?寝言言ってみました!」

チェリーは咳払いをして答える。

「ピナコラーダとは、パイナップルとココナッツミルクを加えた、

カクテルですよ!」

「へえそうなのかー!」

「さすがチェリーさんだなあ!!」

3人は竹のマグカップを受け取る。

ゴクゴクゴク…

ほわあ…

「くうく!!うめえ!!」

「この味!この味ですうく!!」

「甘くてうまいなあ!!」

「Ha, Ha, Ha!!そのVery Goodな気分で、もつと楽しんでいってくれYo!!」

チェリーは水着に着替え、ビーチチェアでのんびり日光浴をしていた。

サングラスから、海で遊ぶルーフス達を見ていた。

「本当に、いい気分……」

ルーフス達も短パン一丁の水着姿だ。

ミラーボから借りた水鉄砲で撃ち合っている。

「それ!!」

「うわ!!」

ジャックの腰に水が当たる。

「ははは！また俺の勝ちだな！……」

ビーチの方を見ると、ビキニ姿のチェリーが椅子に座っている。

ルーフスがボーっとする。

顔が赤くなる。

ビシャアア！！

「ぐほあ！！」

ルーフスは頭から浅い海に倒れる。

バシャーン!!

「いっぽーん!!」

ジャックがガッツポーズを取る。

ルーフスは笑って仕返しをする。

「やったな!!」

「キキ!!」

「クウン?」

ステーラに一匹の猿が話しかける。

「キイ！キイ、キイ!!」

おどけた踊りで挑発する。

カチン！

「ウゝバウワウ!!」

「キイ？キキキイ!!」

ボコスカボコスカ。

まさしく犬猿の仲だ。

3人と1匹は夕日を眺める。

「…もう夕方だね、あんちゃん、チエリーさん、ステーラ。」

「…もう終わっちゃったか…」

「ツンドラに戻るのが心惜しいです…」

「クウン…」

ミラーボが楽しげに声をかける。

「Hey, You!!何を言っているんだい?夜がまだあるじゃねえかYo!!」

夕飯は砂浜でバーベキューだ。

「…おい、ミラーボ、明かりつけとかなきややべえんじゃ…」

「Never Mind!ルーフス!スウ…」

ミラーボが息を大きく吸う。

「カロロロロロロ!!」

「!?」「どうしたの!?!」

「何しているのですか？」

「クウン？」

「カロン…」「カロン…」

見ると腰に美濃をつけたスケルトンがうじゃうじゃ出てきた。

「ガルルルルル…」

「やべ！スケルトンだ！」

「No, No.」

ミラーボはサウンドブロックを様々なブロックの上に置く。

「Let's Dancing!!」

ドンツタドドンツタドドンツタドドンツタ♪

スケルトンは踊りだす。

「おお！いいな！」

「僕も踊るぞー!!」

「楽しい夜になりそうですね!!」

「ワンワン!!」

ドオオン…

今、南国の世界で火山が噴火した。

まるでにぎやかな客人をさらにもてなすかのように。

それはまさに一瞬の思い出。

しかしそれは、ルーフス達の心の中に、
深く、確実に刻まれる思い出であった――

南国の朝。

セミの鳴く中、ルーフスはジャグジーの前にいた。

「ありがとう、ミラーボ。本当に楽しい1日だったよ。」

「お礼を言いたいのはこっちもSa!!楽しく遊んでくれて、Very ThanksだY

O!!

もし良かったら、Meの生まれた街にも行ってみてくれYo!!」

「キキキツ!!」

ミラーボの頭の上から笑った猿が出てくる。

カチン!

ステーラは猿を追っかけまわしはじめる。

「分かった。確か…『ディスク・マウンテン』とかいう場所だったな！」
「ありがとうございますございました!!」

猿がいきなり止まる。

ステーラは首を傾げる。

猿はステーラを抱く。

背中に回した手をポンポン、と叩く。

そして腕をほどいて笑った。

ステーラも笑って返す。

「…ワン!!」

「それじゃ、See You Next Time!! Yoooo!!」

「さようなら!!」「また会う日まで!!」

「またピナコラーダ、作ってくれよなあ!」

「OK!、OK!」

「ワン!!」

ルーフス達はジャグジーから消えていった。

「Thanks, Very Good Time...」

ミラーボは小さくお礼を言った。

3人と1匹は声を揃えて言った。

「…さむ」
「」
!!!!!!!

「ワオン!!」

23：ジャツクの弟（前編）

セコイアの森を出発してから。

寒い寒いツンドラ地帯を超えて、
ルーフス達は草原にたどり着いた。

寒いツンドラを超えても、ルーフス達は走り続ける。
最近では珍しい雨が降っているのだ。

3人と1匹の雨水を蹴る音が聞こえる。

「くそ…なんてこった！」

「災難ですね…」

「どこかで雨宿りできないかな？」

「……」

ステーラはテンションがだだ下がりのようだ。

「……！」

遠くで人型の何かが倒れている。

ルーフス達は足を速める。

そこに倒れていたのは子供のゾンビだった。

とても小さい。

ルーフス達、全員の膝下までくらいの背丈だろう。

「ゾンビか。」

「人間にやられたのかな……」

「とりあえず、まずは手当てです。」

「えつと……あんちゃん達、離れてて。」

ゾンビには治癒のポーションじゃなくて、負傷のポーションが効くんだ。」

チエリーはステーラを持ち上げて、子供ゾンビから離れる。

ルーフスも離れる。

ジャックは少し遠い所から子供ゾンビに向かってポーションを投げた。

パリン!!

……

少し経ってから。

子供ゾンビがゆっくりと起きた。

「良かった……！」

ジャックとルーフス、チェリーが安堵の表情を見せる。

「じゃあ、俺らはもつと東へ向かうからよ。」

「元気でね！」

チェリーが笑顔で話しかける。

「よし！行くこう！」

ザッ ザッ ザッ ザッ …

トトトトトトトト。

ルーフス達が後ろを向く。

ゾンビとの位置関係が全く変わっていない。
気にせず走り出す。

ザッ ザッ ザッ ザッ …

トトトトトトトト。

…やっぱり変わらない。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!

トトトトトトトトトトトトトトトトトト。

ルーフスは顔を引きつらせる。

「……………あのさあ。」

子供ゾンビはジャックを見ると、ジャックの右脚に抱きついた。

「キャーーーーー！！かわいい！！」

かわいいものの好きのチェリーは眼がハート型になっている。

ジャックは戸惑っているような様子だった。

「えつと……え？……どうすればいいの……」

ルーフスはため息をついて、子供ゾンビに話しかけた。

「しょうがねえ、お前も、一緒に来るか？」
子供ゾンビは小さく頷く。

「…お！丁度いい、あの村で…あゝ!!」

「そうだ。…この子が村に入ったら、村人の皆さんがパニックになっちゃうよね。」

「ここら辺に、小さい小屋でも建てましょうか！」

「…そうだなー」

ルーフス達は小屋を作り始める。

子供ゾンビはその光景をじっと見ていた。

ジャックは子供ゾンビを確認すると、

「君も、やってみる？」

子供ゾンビは嬉しそうにコクリと頷いた。

「お！手伝ってくれるのか。はい、木材だ。」

ジャックと一緒にやってくれ。重いから気をつけろよ！」

子供ゾンビは体からはみ出すほどの木材を一生懸命持ち上げている。
ジャックが慌てて端を持つ。

「せーの！」

ポン！

しばらく経って。

雨はまだ止んでいない。

「ふう…完成だ。お前がいてくれたから、いつもより早く終わったぜ。

ありがとな！」

子供ゾンビは照れたような仕草を見せる。

「もう…かわいい!!」

チエリーが小さな体を抱きしめて頬ずりした。

かわいいものを見続けると、我を忘れるのがチエリーだ。

ジャックとルーフスはチェリーを見て笑っていた。

小屋の中。

「ワン！」

「やっとテンションが戻ったか！ステーター！」

「ワン！ワン！」

たまっていた何かを発散させているのか、部屋を走り回る。

子供ゾンビが小さなステーキを飲み込む。

「おいしい？」

チェリーが聞く。

子供ゾンビはにぱつと、幸せそうに笑った。

「そう！良かった！」

ジャックは問う。

「君、お母さん、お父さんはどうしたの？」

子供ゾンビは真顔に戻って、首を横に振る。

「…もう、いないのね。」

ゾンビがコクツと頷く。

「決めた！」

ジャックが席を立つ。

「僕が、君のお兄さんになってあげるよ！」

子供ゾンビは言葉をしっかりと理解した後、

笑顔に戻って、ジャックに飛びついた。

「ははは！」

「……………」

チェリーはそのほほえましい二人の姿を見て、ついほころんでしまった。

ジャックは子供ゾンビにゆるゆるな金のヘルメットをかぶせた。
「ありや、サイズが合わないなあ…」

ジャックは説明する。

「いいかい、外に出る時は、絶対に、このヘルメットを外しちゃいけないよ。」
子供ゾンビは頷く。

「あとは名前だなー…うーん…」

ジャックは少し考える。

ひらめいた。

「ヘルメットを被っているから、メットでいいかな？」
子供ゾンビは嬉しそうに頷いた。

ベッドの上で話している2人を、ルーフスとチエリーは見ていた。

「ジャック君、嬉しそうですね！」

「ああ……」

ルーフスは少し複雑な表情だ。

「?……ルーフスさん?」

「ジャックは弟としてみてるけど、あいつは、モンスターなんだよな。」

「……………」

「本当は敵として対峙しなきゃいけないんだ。 ……」

だから、あいつがこの旅で大きくなったら、自分の存在を考えるようになるだろう。」

「…敵対している以上、別れは必ず来る、と言うことですね。」

(ジャック。 ……もし別れが来た時、お前は悲しみに耐えられるか……?)

翌朝。

雨はすっかり晴れ上がっている。

ジャックとメット、ルーフス、ステーラが外へ飛び出す。

「鬼ごっこだ!!」

「じゃんけん、ぽん！」

「お、ジャックが鬼だな！はてさて何時間かかるか…」

「あんちゃん、僕の速さをなめないで欲しいな。1分以内に終わらせてやんよ！」

「ワン！ワン！」

家の前でチェリーが見守っている。

「逃げろー!!」

2人と1匹は散らばる。

ルーフスこける。

「あ、草…！」

どしやー！

タツチ！

「…あんちゃんあんなに挑発しておいて…」

「う、うるせえ!!」

メットが逃げ回っている。

「よし！狙うぞ！」

ルーフスはダツシユする。

しかしメットはとても早い。

ルーフスは何分も追いかけて、息が上がる。

「ぜえ…ぜえ…あいつあんな大きい金のヘルメット被って

よくあそこまで走れるよなあ…」

ササササササササ：

見ると狼が骨を埋めている。

タツチ！

「ステーラく？なんで鬼ごっこ中に骨を埋めているのかなあ？」
ステーラは汗だくだくになる。

ステーラがメットを追いかける。

あと10cm…！

メットが足を速める。

距離が長くなる。

互角の速さだ。

「あ、あいつ…ステーラと互角の速さなのか…!?」

「すごいなあ、メットは…」

タッチ!

メットがついにつかまった。

「ワン!ワン!」

ステーラとメットは笑い合う。

ビチャ!

メットのヘルメットに何かが当たる。

卵だ。

遠くに村人の子供が見える。

「ばけものー!」

「むらにちかづくなー!」

「あっちいけー!」

ジャックは怒る。

「こらあ！クソガキー!!」

その時、村人の子供達に影がかかった。

子供達が後ろを見ると…

「あらら〜？ボクちゃん達、お姉さんに遊んでももらいたいのかなあ〜？」
チエリーがいつもと違う、すごい濃いオーラを放っている。

村人の子供達はたまらず、後ずさりする。

「そおれ♪」

「うわあ!」「ぎゃ!」

「おわ!」

チエリーが3人一気に抱きかかえる。

その後の映像はお察してください。

「…チエリーってあんなに変態気質だったっけ?」

「…どうみても演技じゃないよね…」

この頃、チエリーさんのキャラが全く分からなくなってきたよ…」

「…ワン…」

「大丈夫かい?メット。」

ジャックが卵を払いのけて言う。

子供ゾンビはただいつものように笑って、ジャックに飛びついた。

「…よしよし、僕が守ってやるからな。」

ジャックも優しくメットを包み込んだ。

まるで、本当の兄弟のように。

「コルク?マット?バルサ?」

村人の母親が呼んでいる。

そこに3人の子供達が来た。

「どこ行つてたんだい！お手伝いをサボつて！

…？…なにか嬉しいことでもあつたのかい？」

3人は何も考えられないような、幸せそうな顔をしている。

「はあ…」「姉ちゃんサイコー。」「ふへへ…」

「き…気持ち悪い子達だねえ…全く…」

ゴチン!!

「さあ、約束してた洗濯を終わらせるよ！」

「痛いって母ちゃん！」「自分で歩くから〜！」

「ふひひ…」

一人、目が覚めてないまま母親は3人を引つ張つて行つた。

それから、何日か、この広い草原でルーフス達は泊まっていた。

ジャックはメットと一緒に、釣りをしたり、木を伐採してきたり。他にも言い切れないくらい、兄として体験させてやった。

そんなある日の夜。

メットはむくつとおきだし、外へと行った。

ゾンビの体質か、月夜の風がとても心地よいのだ。

シュウ：

クリーパーの倒された音がする。

メットは慌てて後ろを見る。

「…探したぞ。」

真つ黒な容姿にぼさぼさの髪。
見るからに怪しい男だ。

目にかかるほど伸ばした前髪から鋭い目が覗いていた。

メットは急いで中に入ろうとする。

が、男に前をふさがられ、軽々と持ち上げられる。

メットはじたばたと暴れる。

「…なんで逃げ出した。」

メットは首を横に振る。

「…まあ、お前には答えられないか。」

メットは首を大きく横に振る。

「帰りたくない」と行っているのだろう。

「…友達でもできたのか。」

だが、私がお前に飲み食いさせてやっているのだぞ？

本当なら恩を返してもらってもいいはずだ。」

メットは男の肩に噛み付く。

ガッ!!

男はメツトの顔を思いつきりぶん殴った。

金のヘルメツトが草の上に落ちる。

メツトは氣を失ったようだ。

「…困るな。逃げ出されては…」

お前にや俺の野望を…叶えてくれなきやあな。」

男はメツトを乱暴に担ぎ上げながら、夜の草原を歩いていった。

翌朝。

ルーフス達は小屋を飛び出した。
メットがいない。

夜の間には抜け出しているのだ。

「メットー!!」

「メットくーん!」

「メットー!!」

ステーラは鼻で匂いを嗅ぐ。

「ワン!!」

「ステーラ、方角が分かったか？」

ステーラは南の森へ走り出す。
ルーフス達はステーラについていった。

「メットー!!」

「メットくーん!!」

「返事してくれー!!」

ステーラの足が止まる。

「どうした? ステーラ。」

ステーラはしょんぼりとしている。

「朝方の雨で掻き消されちまったか…!」

「メット…どこ行っちゃったんだよ…!」

「ジャックくん…」

ジャックは拳を握り締める。

「…明日、ここを出発しよう。」

「…分かりました。」

「…うん。」

「…クウン…」

ルーフスは思う。

ここにいても、ただジャックの悲しみが増えるだけだ。
出来るだけ早く、この土地を後にしたい…

ジャックはチェストの中に入っていたメット用の釣竿を手取る。

…メット…君は、僕と自分が、違う世界に生きている事を知って、黙って行ってしまったのかい？…

そんなこと…僕と君は、もう兄弟じゃないか…

森の中に、石レンガと木で作られた、一つの小屋がある。
男が鉄の扉の横にあるコンピュータにパスワードを入力する。

ガチャッ

男は中に入る。

ガチャツ

自動的にドアが閉まった。

メットがベッドに横になっている。

「…ずっとそうしているが。腹でも痛いのか？」

メットは頷きもしないし、横に振ろうともしない。

「…昼食だ。お前の大好きなキノコシチューだぞ。」

依然として何も返事をしない。

男はため息をついて、

「そこまでの友達ができたとはなあ…行って来い。」

メットは嬉しそうに起き上がった。

「まあ夜だ。まだ朝はお前には危険すぎる。

あと、私の条件を飲んでくれたら、だ。」

メットはジャック達への会いたさから、すぐに頷いた。

男は狐のように口をあけて笑った。

男の手の中には、一つの×印の描かれたポジションがあった…

その日の夜。

「ここから、家の中で暴れるんじゃない。」

メットは嬉しさのあまり、部屋の中を走り回っていた。

「俺の条件つてのはな…この薬をかぶってもらおうことさ。」

男は瓶をかざす。

メットは怪しげな薬に背筋がゾクツとし、首を横に振った。

「友達と会えなくて良いのか？」

メットは気持ちを少しの間落ち着かせた。

そして、うん、と頷いた…

…パリン…

月がもうすぐ真上に昇る頃。

ドーン…

ドーン…

ドーン…

ベッドが小刻みに横に揺れる。

チエリーは物音と地響きに眼が覚める。

…何？この音…？

チエリーはベッドから出る。

保険としてソードを持って。

そして、ルーフス達を起こさないように静かに扉を開け、閉める。

恐る恐る一歩ずつ出る。

「キャオン!!」

「キャツ!?!」

見れば外で寝ていたステーラの尻尾を踏んでいた。
ステーラがもがいて走り回っている。

「ご、ごめんなさい…ステーラ。」

ドーン…!!

ステーラが地響きと音で止まる。

チエリーはソードを構えた。
南の森からだ…!!

その時。

木を高く飛び越えて、
一体の巨大なゾンビが現われた。

ドオオオオオン!!

先ほどとは比べ物にならない地響きだ。

「!!…何て大きいの…!？」

「ワン!!ワン!!」

ステーラが匂いを嗅ぎながらしきりに巨大ゾンビに吠える。

「まさか…メットくんの匂いがするの!？」

ステーラはそうだと言わんばかりに吠え続ける。

「メットくん…まさか…この怪物に…!!」

「ウガアアアアアア!!」

巨大なゾンビは勢いをつけて地面を叩きつけた。

ステーラが素早くチェリーを突き飛ばす。

ボオオオオオオン…

ステーラは衝撃波によって後方に吹き飛ばされた。

「ステーラ!!」

ステーラは致命傷ではなかったみたいだ。
すぐに駆けて戻ってきた。

「…今までの敵とは大違いだわ…

気を引き締めなきゃ…!」

月が今、真上に昇り——

巨大なゾンビと娘、狼を照らす。

24：ジャックの弟（後編）

月が明るく草原を照らす夜。

「グオオオオオ!!」

バアアン!!

巨大なゾンビが地面を叩きつける。

衝撃波がチェリーとステーラに襲いかかる。

チェリーとステーラは左右に分かれる。

地面の揺れが治まらぬまま、巨大なゾンビはチェリーに向かって地面を叩きつける。

バアアアン!!

チェリーは飛び上がった。

そしてそのまま、ゾンビに向かって剣を振り下ろす。

ズシヤツ!

ゾンビがひるむ。

ゾンビは大きく息を吸って、口を大きく開けた。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

チエリーとステーラはたまらず耳をおさえる。

「なんて大きな声……!」

チェリーの右前の地面がうごめきはじめる。

ステーラの左から…いや、巨大ゾンビの目の前にもだ。

やがて地中からゾンビがのっそりと姿を現した。

「死者を…蘇らせたの!？」

「ガルルルル…」

チェリーとステーラはゾンビを素早く倒す。

そして衝撃波。

衝撃波はステーラに命中する。

「クウン!!」

「ステーラー!」

ステーラーは立ち上がろうとする…

が、体が崩れた。

「どうしたの? ステーラー!」

「クウン…」

尻尾が垂れ下がっている。

体力が消耗しているのだ。

巨大なゾンビはチェリーに向かって衝撃波を放った。

「!!」

チェリーとステラは衝撃波に飲み込まれた。

大丈夫…まだ私は…戦え…

…!?

立ち上がれない。

空腹状態だ。

なんで!?!…ついさっきまで…全然大丈夫だったじゃない!

巨大ゾンビがチェリーに近づいた。

ドゴン!!

チェリーの体が宙へ浮かぶ。

巨大ゾンビがチェリーを放り投げたのだ。

巨大ゾンビが後から続く。

ポオン…!!

チェリーの体は超速球で地面へと向かう。

ボオオオオオン!!

チエリーは目を開けなかった。

巨大ゾンビは何かに気がついた素振りをして、
震えながら南の森へ逃げて行った。

「…ん…なんだ今の音は…」

「すごい音だったよね…」

ジャックとルーフスがやつと目を覚ます。

扉を開ける。

「!!」

「チェリー！」「ステーラ!!」

・
・
・

・

・

「ん……」

「ワン!!」

ベッドの横でステーラが嬉しそうに尻尾を振っていた。

「ステーラ……無事だったのね……」

「お、チェリー、起きたか。…良かった〜…」

「…ルーフス…さん。」

チェリーは起き上がろうとする。

「…うぐっ！」

ルーフスはゆっくりチェリーを寝かした。

「おっと、無理するな。」

「…昨夜は何があつたんだ？」

チェリーはベッドに寝たまま昨夜のことを話す。

「巨大なゾンビ？」

「そうです。今までに見たことのない強さでした。」

「そいつがメットを食ったのか…」

「…いや…違うよ。」

ジャックが寂しげに辞書を見ている。

「…ジャック。どうした？」

「さつきバンダさんの辞書で調べてたんだけどさ…」
辞書の一面が差し出される。

〇〇年、モンスターを凶暴化させる薬が一人の科学者により開発された。その薬はあまりにも強力であり、製造方法は封印されてきた。

しかし都市の裏ではこの製造方法を解析した者達が高額でその情報売っている。その後、世界の各地でいたずらに凶暴化させたモンスターに衝撃波、爆発、氷や石などを浴びせられ、重傷を負う

事例が発生。世界中の都市でその薬を所持する事を禁止している。

~~~~~

「……………」

「衝撃波…私、衝撃波に襲われました！」

ジャックは頷いた。

そしてジャックはステーラに問う。

「ステーラ、君は確かに、巨大ゾンビからメットの匂いがしたんだよね？」

「ワン！」

ステーラが頷くように吠える。

「…やっぱりだ。」

あの巨大ゾンビが…メットなんだよ。」

チエリーは顔を覆い、驚愕する。

ルーフスも驚いた。

ジャックは悔しそうに叫ぶ。

「…ジャックは…誰かにその薬を浴びせられたんだよ！

ただのいたずらか何かのために！」

「ジャック…。」

「…チェリーさん。…巨大ゾンビは…メットは…

その後どこに行ったか分かる？」

「…えっと…確か…南の森へ…！」

ジャックくん…まさか…」

「僕はメットのお兄さんなんだ。

…あんちゃん、ここは僕一人でやらせてくれないか？」

「……………分かった。」

ルーフスは考えてから頷いた。

「ただし。」

「俺もつれてけ。」

「あんちゃん…さっきの言葉聞いてたの？」

ジャックは苦笑いしながら質問する。

ルーフスはチェストに近づき、チェストを開いた。

「聞いてたさ。俺はお前についていく。ただそれだけだ。」

ルーフスはチェストにソードを放り込んだ。

そしてチェストを閉める。

「お前はメットの兄さんだ…」

「…ってことは、俺とチェリー、ステーラも、メットの兄さん、姉さんだろ？」

「ワン！」

「…分かったよ。あんちゃんには、敵わないや。」

「ジャックくん。」

チエリーがジャックを手招きする。

ジャックはベッドの横に近づいた。

ぎゅっ…

チエリーが優しく抱きしめる。

「大丈夫。もしメットくんを殺してしまったら、

メットくんはあなたを絶対恨まないわ。

あなたは…メットくんのお兄さんだもの。

…だから。メットくんには正しいことをしてあげてね。」

「…ありがとう。チエリーさん。」

ジャックはチエリーの温もりを感じながら応えた。

天気は曇り。

ジャックとルーフス、ステーラは南の森を無言で歩いていった。  
ジャックの手には火打石と打ち金があった。

木は前に進むに従い後ろへ流れていく。

ジャック達が今見ている世界はスローモーションのように流れていく。

風に揺らぐ木々、草、花。

池に浮かぶ波紋。

いつもとは違う、寂しげな新鮮さがあった。

ドオン…

ドオン…

ドオン…

ドオン…

ドオン…!

ドオン!!

目の前には巨大ゾンビ…メットが。



「…メット。」

ルーフスは耳で聞いた時よりすごい衝撃を受けた。

葉が…ここまで変えてしまうものだろうか。

ステーラは何も吠えなかった。

ジャックが話し始める。

「メット…君はチェリーさんとステーラを傷つけたみたいじゃないか。  
…チェリーさんは僕のお姉さんだぞ。…つまり君のお姉さんだ。」

「ガア！」

地面を殴る。

ジャックはよけなかった。

服に切れ筋が入る。

体の力がガクツと抜ける。

「…君は間違ったことをしたんだ。 …おしおきだ。」

「ガアアア！」

巨大ゾンビが腕を振り上げる。

ボオ……！

ジャツクは火打石でメットの下の地面を燃やした。

「ウガアアアアアアア!!ガアアア!!」

巨大ゾンビはもたえる。

ゾンビが燃える炎の中に映像が浮かび始めた。

一人のゾンビの子供が倒れている。

一人のゾンビの子供がおいしそうに料理を食べている。

一人のゾンビの子供が楽しそうに走っている。

一人のゾンビの子供が：

…一人の…ゾンビの…子供が：

…僕の…弟が。

「わあああああ!!」

ジャックは手に持っていたバケツに近くの池で水を汲む。

そしてゾンビに浴びせた。

炎は消えた。

だがゾンビの返事はない。

「僕の…弟は…殺せるわけないよー」

ジャックの目から涙がこぼれ落ちる。

ルーフスは黙ってジャックを見ていた。

「うっ…うっ…」

その時。

焦げたメットは、目の前のジャックを抱くように……  
いや、ジャックに抱きつくように倒れた。

最初にジャックに抱きついた時のように。

「…メット…？」

メットは返事をしない。

メットが光り始める。

「メット…！メット…！」

メットの姿が一つの武器に変わっていった。

武器はジャックの手の上にずっしりと乗っかる。

ジャックは座って震える。

確かに聞こえたよ…メット…

『ありがとう』って…!!



「うわああああああああ!!」

ジャックは武器を抱えながら号泣する。

ルーフスも涙を流す。

ステーラは悲しみの遠吠えをした。

「メット……っちこそ……ありがとうとよ……」

ウオオオオオオオオオン……

曇り空の下。

一人の少年がずっと、泣き叫んでいた

---

草原に朝が来た。

ルーフスはまだ眠たそうに起きる。

「お、あんちゃん、おはよう！」

ルーフスは驚きながら応える。

「お、おう、おはよう……」

「何がいいかな、朝ごはん。」

「えっと、パンかな。」

「分かった。小麦を三本、と。」

「ジャック、メットのことは大丈夫なのか？」

ジャックは言う。

「……確かに。今でも寂しいよ。」

でも、メットはまだいるってことに気づいたんだ。」

ジャックはチェストの中からハンマーを取り出した。

「ね？」

ルーフスは笑顔になった。

…俺の考えすぎだったな。

ジャックは今も、ずっと、成長しているんだな。

ルーフスはいつもの元気で言った。

「よし、ジャック、チェリーの為に今日はジャングル行ってカカオとって来るぜ！」

「お、いいねえ！あんちゃん、たまにはケーキにも挑戦してみないかな？」

「それもいいな！…おっと、まずは腹ごしらえだ。ジャック、とことん食うぜ！」

「おう！」

ルーフスとジャックは早食いを始める。

チェリーとステーラが起きた。

ルーフスとジャックが椅子の上で腹を膨らませていた。

「げほっ」

くすっ…

良かった、いつもどおりのジャックくんだわ。

「お、起きたか、チエリー、今日はな…」

「本当ですか!?! やったあ!」

「ワン! ワン!」

「ははは!!」

いつもどおりの楽しい風景。

その風景を窓の外から小さなゾンビが見ている。

その幻影は、にぱっと笑ってから、一つのハンマーに吸い込まれていった…

ここは南の森の小屋の中。

一人の男がカメラの映像を観ている。

「…ちつ。まだ人間一人に勝てないほどの力か…」

男は×印のポーションを見て笑う。

「だが、火力は十分だ…」

戦力としてリストに入れておこう…」

男が手にするリストのタイトルは

---

「世界壊滅計画」の文字。



## 25：歯車の街

草原の生活が1週間ほど経って。

チエリーの重傷は完全に治った。

「チエリー、大丈夫か？痛まないか？」

「ええ、全然大丈夫です！ルーフスさん、ジャック君、ステーラ、ありがとうございます  
！」

「いいってことよ！」「そうだよ、チエリーさん！」「ワン!!」

ルーフス達は元気に西へ向かう。

「お…でっかい街だぞ…」

ルーフス達の目の前にはレンガや石で囲まれた街だ。

「あんちゃん、よく見たら、ここ、一つの国みたいだよ！」  
「!…まじか…!」

遠くにうつすらと城が建っているのが見えた。

「ともかく、門へ行ってみましょう。」  
「ワオン!」

ルーフス達は門へと向かう。

門番が3人を止める。

「旅人の方ですね?」

「はい、そうですが。」

「入国料をお支払い願います。」

「入国料……ですか？」

門番は堅い表情から少しくだけて話す。

「この国では、王の権利を自分の物にしようと王を襲う輩が王国を狙ってくるのです。

だから入国に関してはとても厳しくなっております。」

もう一人の門番が話す。

「私も入国料を支払わせることは反対なのですがね……この政策が出来た後、支払うことが出来ずに

王国を避けて通る旅人が多くなりました。」

「まあ、しょうがないか……」

ルーフス達はそれぞれ1個ずつ、エメラルドを渡す。

「ペットの分は支払うのですか？」

「いえ、結構です。では、ごゆっくり。」

門を開けると同時に2人門番は笑顔で言った。

「ようこそ、デイラベル王国へ!!」

門の隙間から光が見えた。

そこには美しい赤いレンガで造られた街があつた。

石畳の道をルーフス達は踏み始めた。

「すいご…」

木材とレンガの調和。

その美しさは声も出ない。

こんな街を人が作ったのだというからより驚きだ。

一人の商人が活気に話しかける。

「よお、旅人さんかい？」

「はい。……とてもきれいな街ですね！」

「そうだろそうだろお！この街はー古い伝統を守っている街だね。

コンクリートも一個も使わずにレンガと木材だけで生きた街なのさ。

レッドストーンさえも使わないんだぜ！」

ジャックは驚く。

「動力が無くてここまで発展したの!？」

「すごいなあ……」

「いや、ボウズ、それは違うな。」

「？」

「レッドストーンは使わないんだが、歯車を使っているのさ。」

「歯車を？」

「例えだよ……」

商人はチェエストの中から例えを探す。

「これだこれ、ほらよ。」

商人は目の前の机に置く。

ちつちやなゼンマイだ。

「まあ、かわいい！」

「これは中に歯車をしこんである。こうしてまわすと！」

商人がギギギとゼンマイをまわす。

「中に歯車の回転する動力がたまる。……まあ適当な例があまりなかったから、

もう少し先へ行ってみるといい。色んな歯車が見えるぜ。」

「ありがとうございます！ではまたいつか！」

3人はお礼を言った。

「おう！いい旅にしろよ！」

先へ進んで。

ルーフス達は植林場の横を歩いていた。

「あんちゃん、あれ！」

「おー！」

植林場の中で人が木を切っている。

手にはノコの付いた機材が握られていた。

「あの一。すみません！」

「おや、旅人さんじゃないか、めずらしいねえ。」

おばさんが応えた。

「その手に持っているものはなんですか？」

「これは歯車動力で動くノコギリだよ。」

「動力を補充すれば何回でも使えるのさ。」

「すごい！」

「そうだろう、だけどこのノコギリはこれだけじゃなくてねえ…」

おばさんは斬り残した高い樹木を見つけた。  
「それ！」

ノコギリの刃が木に向かって飛んでいく。

そして木が落ちた。

「おおおおお！」

「楽々ですね！」

「ワン！ワン！」

3人と1匹は喝采を送る。

ところ変わってここは農場。

ルーフス達は広大な小麦畑を見学していた。

スプリンクラーが水を撒き散らしている。



農家のおじさんは説明を始める。

「この歯車駆動のスプリングクラーのおかげで、広大な畑を管理するのが楽になったよ。ほれ、自家製のはちみつパンを食うか？」

ルーフス達ははちみつパンにかじりつく。

「「おいしい!!」「ワオーン！」

「でも、歯車があるってことは造っている人もいるのですよね？」

「ああ、それなら、もっと先へ行ってみるといい。」

実は歯車の伝統は続いているが、歯車を造る職人は減っていて、その一軒しかないんだ……」

「え!？」

「ってことは、あのゼンマイも、ノコギリも、

このスプリングクラーもその店だけで造っているのですか!？」  
「ああ、そうさ。かなり腕のいい職人でね。

彼にかかればどんな歯車製品も造れるのさ。」

どんと、でっかい歯車がデザインされている店だ。

「ここか……」

「分かりやすいね……」

チリーン……

カウンターには一人のメガネで白髪のおじいさんがいた。すごい真剣な目で歯車を磨いている。

「いらっしやい。」

その真剣な目のまま、そっけなく言った。少し話しかけづらい。

ルーフスは申し訳無さそうに話しかける。

「あの……この店でこの街の歯車を造っているのですか？」

おじいさんは納得した歯車にうなずき、歯車を置いてルーフス達に向き合う。

「そうだ。今では私一人になってしまったがな。」

「一人で……！」

ルーフス達は感服する。

「あの……もしよろしければ、見学させてもらってもいいですか？」

「……」

おじいさんは無言でゆっくりと完成した歯車を柵に置いた。

…アレ…

迷惑だったかな…？

おじいさんはカウンターの扉を開ける。

「ついてきなさい。」

「まずは自己紹介だな。私はコグウイルだ。」

「僕はルーフスといいます。」「ジャックです。」

「チエリーと申します。」「あ、こいつはステーラです。」

「ワオン！」

コグウイルさんは茶色、銀色、金色の歯車を見せた。

「歯車には3つの種類がある。木製、鉄製、真鍮製だ。」

「後者ほど摩擦が少なくなり、動力が安定する。」

移動し、「動力伝達機材」と書かれた看板の前に来る。

「動力の伝達にはいろいろある。手でこいだり、振り子を使ったり、

蒸気を使う方法がある。ここで主に使っているのは、一番動力を生むことが出来る

タービンだ。下から蒸気を加えることで半永久的に動作できる。」

「またまた移動し、いろいろな機材の置かれている前に来た。」

「あ、さっきのノコギリだ！」

「スプリングクラーもあるぞ。」

「扇風機のようなものもありますね……」

コグウイルさんはうなずく。

「歯車を使うことでこんなにも様々なものができる。」

細かな手持ちの機材を作るにはまた違ったテーブルが必要になるがな。

…と、私が説明できるのはここまでだ。」

「ありがとうございました！」

「あの、質問いいですか？」

ジャックが手を挙げる。

「何故、あなたは歯車を造っているのですか？」

「…そうだな。」

コグウイルさんは考える。

「伝統を守りたい、とも言いたいのだが、それ以上の理由がある。」

コグウイルさんは壁から突き出た木の椅子に腰掛けた。

「私はもう分かる通り、人との付き合いが苦手だね。」

ただただ昔から、一人この部屋で歯車を造り続けてきた。

そして歯車を人に手渡した時、ひしと感じたものがある。

感謝の気持ちだ。歯車が私とこの街の人々を繋いでくれたのだ。

電気は人に手渡せないだろう？ 私は、歯車で人をこれからも繋いでいきたい、そう思っているから、かもしれないね。」

コグウイルさんは少し笑ったように見えた。

チリーン…

「ありがとうございます。」

「ちよつと待ってなさい。」

おじいさんが引き止める。

ルーフスの手に道具と沢山の釘が渡された。

「…これは？」

「これ一つしか余っていなかったのだがな。」

物騒なのだが、これは釘を飛ばす武器となっている。

モンスターが出た時は、役に立ててもらいたい。

「お金は結構だ。」

ルーフスは手を握った。

「ありがとう、コグウィルさん。」

「「さようなら！」」「ワオーン!!」

おじいさんは優しく手を振る。

ここにまた、5つの歯車が噛み合ったのだった。



## 26：王様の気まぐれ

シャンデリアで明るく照らされた王室。

王室の床は絨毯で赤く塗られている。

たくさんの兵士達があつちりと見張っている。

その部屋の玉座で王様は態度悪く座っていた。

「あゝ暇だ。」

側近の一人の若い執事が呆れて言う。

「王様、客人がいらないとはいえ、王としての態度は守っていただきたく思います。」

「うるさ〜い。暇なんじゃあ〜。」

同じく側近の一人、メイドも同調する。

「王様、しっかりとしてください。只今紅茶をお入れいたしますので。」

「あゝいい〜い。今そんな気分じゃないから。」

執事とメイドは顔を合わせ、小さくため息をついた。

王様は思いつく。

「そうじゃあ！ネクサスで遊ぼう！」

執事とメイドは慌てて反対する。

「駄目です！住民達にも迷惑がかかりますし、女王様がなんと言うか…」

「そうだ、レゴブロックで遊びましょう！」

「わしゃ子供か！なあに、私はこの国の王である！

さっさと持って来い！」

「…分かりました。住民の皆さんには私共から謝っておきます。」

「よろしい！さあ、早く早く！」

子供のような王様がせかす。

「あ！…プレイヤーがいらないではないか！」

執事とメイドが笑う。

「お…そうでした、なら違うゲームに…」

「王様、」

一人の兵士が王の前にひざまずく。

「旅人と名乗る者が、あいさつをしに参りました。」

王様は一回手をパン、と打って。

「丁度良い！その者を連れて来い！」

執事とメイドは額を押さえる。

「王様の前で、悪い態度はとらぬよう、お願いします。」

「はい。」

ジャックは答える。

ルーフスとチェリーは緊張から目を著しく開いたままコクンとうなずいた。

「ワン！」

ステーラも一声吠える。

ギギギギギ…

ジャックが普通に歩く中、ルーフスとチェリーはカチコチと動く。ステーラも後をつく。

王様の前でとまり、ひざまずいた。

ジャックは肘でルーフスをつつく。

「…ほら、あんちゃん、あいさつ。」

「はは、初めまして…」

ジャ、ジャック…じゃない、チェリー、じゃない、

ルーフスと申します。」

「ジャックと申します。」

「お、おな、同じくジャックと申します。」

「チェリーさん！間違ってる、間違ってる！」

「あ、すすすみません、チェリーと申します。」

王様はさつきとは違う、王の顔で旅人と接する。

「ほっほっほ、王の目の前とはいえ、そんなに緊張するでない。

ようこそ、ディラベル王城に。ここまでの長旅、ご苦労であったな。」

「ありがとうございます。」

ルーフスはやつと落ち着いて話す。

「して、旅の者達よ、そなた達は幾日もわたりモンスターと

戦っておるのじやろう？」

「はい。」

王様は声を大にして懇願する。

「その力、とくと見せて欲しい！」

「?…は、はい。」

いきなりの懇願にルーフス達は戸惑う。

「で。」

「門前まで戻されたわけだけど…」

「ははは…またもとの道を行かなきゃいけないね…」

「申し訳ございません、王様のわがままでこのようなことになってしまって…」

一人の執事が謝罪する。

「いいんですよ。僕達も少しワクワクしているのです。」

見るとメガネをかけたビッグマンや、蜘蛛、ゾンビが襲ってくる。

「じゃ、お前ら、準備はいいな？」

「はい!」「うん!」

「ワオン!!」

ルーフスとチェリーがゾンビを斬り進める。

ステーラが蜘蛛の足を嘯む。

ジャックにゾンビと蜘蛛、ピッグマンが一斉に襲い掛かる。

ジャックは手に持ったハンマーの重みを感じていた。

「メット…君の力を…貸してくれ！」

ジャックが力強くハンマーを振るう。

ドオオオン!!

モンスター達が吹っ飛んで行く。

「…強い！」

ジャックは手に汗を握る。

その後も次々と襲い来るモンスターを倒して行った。

スケルトンや、クリーパー、の他にも、

母蜘蛛や、危険な油まみれのゾンビに、少し大きいゾンビ、

黒い謎の人型モンスター、石のようなモンスター…

ルーフス達はいい汗を流していた。

「只今戻りました。」



「ご苦労、双眼鏡で見ていたが、さすがの強きであつたぞ。」

「王様！」

一人の兵士がボロボロになつて駆けつけてきた。

ルーフス達は慌てて場所を空ける。

「黒い反逆者たちが……！」

「なんじゃと……!?!」

バリイン!!

玉座の横の窓から黒い人が突き破つてきた。

兵士が行動するも空しく、王様に剣をかざす。

「うおっ！」

「これで天下は我が物だ……！」

「王様！」

執事は駆けつけようとする。

「待った！」

「こいつはこのまま殺してやっても良いが…

平和的な解決が俺の流儀だ。

おとなしく王位を渡してくれるのなら、王様は牢屋だけに済ましておこう。」  
「くっ…貴様が王になって何ができる！」

「俺が王になって？…まずは古い街を取っ払って、軍事施設でも作ろうかな…  
はっはっはっは!!」

ルーフス達はこそこそ話し合う。

「このままじゃ、この国、滅んじやうよ！」

「あの美しい町並みが消えるなんて…許せません！」

「俺もだ。」

…なんとか遠距離攻撃で、あの男の隙が作れねえか…？」

「だめだよ、矢はさっきの戦いで使い果たしちゃったんだ…」

「くそ…どうすれば…!!」

ルーフスのポケットにはコグウイルさんの釘撃ち器。

「……これなら！」

ルーフスは男を狙う。

行け！

ビュツ！…

キン!!

男の額に見事命中。

「いてっ！」

「今だ！」

執事は声に反応し男を取り押さえた。

カランカラン…

男の持っていた剣が床に落ちる。

「やった！」

「くそく…」

「ルーフスといったな…よくぞ私を反逆者から守ってくれた。

…そして、私の気まぐれに付き合わせてすまなかつたな。」

「いえ、僕も楽しかったから…」

「面白かったですよ！」「そうです！」

「ワオーン！」

「ほっほっほ…そうかそうか…」

…ラズリー、今夜は宴会を行う。

これは旅人の歓迎と、王国死守のお礼だ。」

「はい！かしこまりました！」

メイドは笑顔で応えた。

王様は豪快に笑う。

「ほほほほ…今日は愉快な一日だ！」

「な・に・が・ゆ・か・い・で・す・っ・て…？」

王様の顔色が一瞬で青ざめ、汗が噴出す。

「「じよ、女王様…！」」

「あなた！ネクサスブロックは住民の皆に迷惑になるから駄目と言ったでしょう!？」

しかも旅人の方にも迷惑をかけて！あなたには王の自覚が無いんですの!?!」

「…だって…暇だったんだもん…」

「暇ならもつと小さなことで遊びなさい！」

「…分かりました…もうしません…許してください…」  
「全く…」

ルーフス達は怖がる顔で女王様を見ていた。

女王様は素直な笑顔で向いて、

「夫を守っていただき、本当にありがとうございます。  
今夜は目いっぱい、楽しんでいってくださいね。」

「「はい！」」

「ワォーン!!」

その夜。

王室での愉快的な晩餐が行われている。

王様はルーフスに話す。

「ルーフス、私にお前さんの旅行記を話してくれないか。」

「分かりました。まずは……」

今ではすつかり、王様と対等に話しかけている。

女王様はステーキを頬張るステーラをなでていた。

「まあ、かわいい狼ですこと……」

「ステーラって言うんです。お肉が大好きで、とつても強いんですよ。」

「そうなの。たんと、食べなさいね。」

「ワオン！」

ジャックが説明する。

「こちらら紅茶、白身魚のムニエル、グリーンオムレツです。」

「この紅茶ってどうやって作るのですか？」

「そ、それは……えくつと……」

「茶葉を圧搾機で抽出して作るのですよ。」

「あ、ラズリー……」

「全く、シャルドつたら料理に関しては何も知らないんだから……」

「べ、別に良いだろ……おっと、赤ワインが切れてしまいましたね。」

「今、お持ちします。」



「あ、ありがとうございます。」

あの…じゃあ、この白身魚のムニエルは…」

「焼き魚と小麦粉、レモン、マヨネーズをクラフトしています！」

「これもお願い！」

「これは…」

チエリーは相変わらず料理に夢中だ。

夜はどんどん更け、話も盛り上がる。

「グレートスライヴシティという街はですね。」

「なんと、雷の力で動いているというのか！…私の国も参考にしなければな。」

「この国は今ままでむしろ良いと思いますよ。」

私はこの街の雰囲気が好きです。」

「そんなことを言ってくれるとは、私も国政により力が入るな。ほっほっほ…」

「お手！おかわり！」

「こんなことまで出来るの!？」

「はい、頭も賢いのです。」

「私も狼が欲しくなってきたわ〜！」

「ねえねえ、あなたって、あの執事さんに恋してるでしょ？」

「な、そ、そ、そんなこと無いわよ！あんな鈍感！」

「ふふ、だってさつきからあなた、あの執事さんの事ばかり話してるわよ？」

「!!…」

ラズリーの顔が赤く染まる。

「…ねえ、チェリー。」

「何？」

「恋の相談、聞いてくれない？」

「うん、もちろん！」

まだまだ楽しい夜は終わらない。

翌朝。

ルーフス達は王城の玄関にいた。

「楽しかったぞ、旅の者達よ。」

「またいつでも、寄ってください。」

「はい！おいしい料理、ありがとうございました！」

王城が離れていく。

「「さようなら〜!!」「」

「オーン！」

王様と兵士達、執事とメイドが手を振り返す。

外の太陽がルーフス達を照らす。

ルーフス達の旅が、いつものようにまた始まった…

## 27：ブラウン村

ディラベル王国の中を歩いて3日。

ルーフス達は整地のされていない森の中を歩いていた。

まだここは開発が行われていないようだ。

「王様が言うには、ここらへんは王国が開発される前からの住民達が

そのまま住んでいるらしいね。」

「『歯車』が出来る前からの住民達か…」

「あ、あれじゃないですか？」

前には木材で作られた家々があつた。

風車や水車がところどころで回っている。

「おお、旅人さんですか。」

みるとタオルを頭に被った若い男性がいた。

「ようこそ、ブラウン村へ！」

若い男性は爽やかな、活気の溢れた声で話す。

「初めまして。ルーフスです。そしてこっちがジャック、チェリー、ステーラです。」

「よろしくお願いします。」

「ワン！ワン！」

「こちらこそ。私はこの村の村長、テイローと言います。」

「村長さんですか!? …若いですね…」

チェリーは驚く。

「はは…実は村長であった祖父から、この前引き継いだばかりなのですよ。」

「なるほど…」

「では、この村を案内します。」

「はい！」

ジャックが元気よく返事をする。

ルーフス達も後をついていく。

ルーフス達はノコギリが置かれた風車と水車の前に着く。

「この村は王国の出来る前からの生活様式で生活しています。

例えばこの風車と水車。回転する力で機器を作動させています。全て、この土地に住む人々が私達に残してくれたのです。」

「この水車と風車はいつからあるのですか？」

「祖父が生まれた頃からあったようです。しっかりと造られていて、まだまだ使えるでしょう。」

「すごい…そんな昔からあるのか…!!」

「おお、村長さん、こんにちは。」

おじさんがテイローに話しかける。

「コーダさん、こんにちは…いい作品は出来ましたか？」

「ああ、今日もたくさんできましたぞ！」

「旅人の方々に見学をさせてもいいですか？」

「おう、いいよ。」

「こちらはこの村の陶器屋のご主人、コーダさんです。」

「よろしくー！」

「「よろしくお願いしますー！」」

コーダは台の上に粘土のカタマリを乗せる。

そして粘土が回り始めた。

コーダは慎重に粘土に筋を入れていく。

「「おおおー！」」

するとプランターが出来上がった。

「で、後はこれを、このかまどで焼くんだ。」

コーダは移動し、大きな炎の上に設置されたかまどにプランターを置く。

ふいごこの稼働を確認しながら、みるみるプランターが焼きあがっていった。

テイローが追加で説明をする。

「この回転台も、ふいごも水車と風車の動力で動いているのですよ。」

「へえ…自然を動力にする…かあ…！」



ジャックは目を輝かせた。

所変わって、ここはテイローの家。

「さあ、どうぞ。自家製のチャウダーです。」

ルーフス達は口へと運ぶ。

「うめえ！」

「…おいしい…！」

「すごいまろやかだあ〜！」

「ガツガツガツ」

ステーラは一心不乱にチャウダーを食べている。

「このチャウダーの食材には全て、村の農産物を使っています。」

そして私の母、ベラスが作っています。」

幸せそうに太った女性が笑う。

「喜んでもらえてうれしいねえ。」

「テイロー、お客さんかね？」

「あ、じいちゃん、

紹介します。私の祖父、そして前村長のマシロです。」

腰を大きく曲げ、杖をついた老人は笑顔を見せる。

「このチンケな村に、わざわざきてくれて、ありがとうよ。」

「いえ、とつても素敵な村です！」

ルーフス、ジャックもうなずいた。

「そうかい、気に入ってくれて何よりだ。」

「こんにはー。」

村に一人の兵士が来た。

「テイロー村長、マシロ前村長、ご無沙汰しております！」

マシロの顔が厳格になる。

「…また来たのか。」

「はい、街での通貨をこの村に普及すれば、この村はもつと豊かに」

「そんなカタマリなどいらんわい！とつと出ていけい！」

マシロは壁にかけてあるスピアを手に取り弱弱しく兵士に突き続ける。

「マ、マシロさん！お体に響きますよ！無理せず！」

「うるさい……ほっ、ほっ、ほっ……」

チエリーがマシロの元へ駆け寄る。

テイローは兵士に弁解の意を伝えた。

「すみません、わざわざ来ていただいたのに……」

しかしこの村は、東の街が歯車を守っているように、

私達も文化を守っているのです。どうかお引取りを……」

「いや、でも王様のご指名で……」

「では、私どもから王様にお詫びのご馳走を届けてもらってもよろしいですか？

試食もどうぞ。」

兵士はルーフス達のチャウダーを見て唾を飲んだ。

「で、では、お言葉に甘えて……」

その後、兵士はテイローからご馳走をもらい帰って行った。

マシロはベッドで寝そべっている。

チエリーが横で看病を行っていた。

「すまんのう…迷惑をかけて…」

「大丈夫ですよ。ゆつくり休んでくださいね。」

「…私はこの生活が好きなんじゃ。」

老人は唐突に話し出す。

「時に汗をかき、時に病にかかり、時に皆と談笑し、

自ら作る料理を食す。私はこの生活が何よりも大好きじゃ。

もし街へ食べ物を買に行けば、

食べ物の方がたさをきつと忘れてしまうだろう。

だから、私はわざと苦しい中で生きるのじゃ。

苦しいからこそ、食べ物の温かさが分かる。

私はこの生活が大好きなんじゃ…！」

「じいちゃん…」

ティローは口に出した。

「ブラウン村新村長として、あなたの伝統を守り抜いて見せます！」

マシロは笑顔でうなずいた。  
ルーフス達も笑う。

「ありがとうございます、テイローさん、マシロさん。」

「こちらこそじゃな。旅人が遊びに来る時は、本当に楽しくなる。」

「ベラスさん、レシピありがとうございます！」

チェリーがベラスにお礼を言う。

「いいのよ、いいのよ！あなた、昔の私にそっくりなんだもの。」

「え……？」

「私もね、昔から料理が大好きでねえ。ことあるごとに村のお母さん達から

レシピをもらって作っていたのよ。

またいつか、この村によつて頂戴ね。次までにまた新しいレシピ、考えておくわ！」

「はい！私、ベラスさんのようなお母さんになりたいです！」

「まあ、ありがとう！」

ベラスとチェリーは笑いあつた。

3人と1匹は手を振ってまた西へと向かって行った。  
デイラベル王国の西門が近づく。

王国ともお別れだ。

二人の兵士が名簿をつけてから敬礼をして言った。

「よき旅を!!」

「ありがとう!」

3人は手を振る。

「楽しかったなあ、デイラベル王国!」

「また寄りたいな、この街!」

「みんな、とても優しくかったですね!」

「ワオーン!」

「あんちゃん、次はどっち進む？」

「このまま『西』だな！いくぞ！お前ら！」

「おおー!!」

「ワオン!!」

3人と一匹は草原を西へと駆けていった。

## 28：機械の文明

サクツ

おいしいクッキーを食べながら草原を進むルーフス達。

「やっぱチェリーのクッキーはうめえな！」

「香ばしいんだよね〜」

「ありがとうございます♪」

「ワン！」

ステーラは骨をしゃぶっていた。

「はああ!？」



「ええ!？」

「…!!」

「ワオ…!？」

3人と1匹の目が一斉に見開く。  
骨が狼の口からポロツと落ちた。

まがまがしい幾何学模様で構成された大地と木。  
できれば目を合わせたくない光景だ。

「…なんだ？このキバツなバイオーム…」

「気持ち悪いね…」

「コンコン！」

「この木、硬いですよ！」

「本当だ、金属みたいだ！」

「わけがわからないよ…」

「おや、旅人の方ですか？」

見ると丸めがねに金髪、白衣の男がいた。  
ルーフスと同世代のようだ。

「君は…?」

「僕はクラバといいます。あなたとは同世代のようですね。」

「おう、俺はルーフス、そしてチエリー、ジャック、ステーラだ。」

「よろしくお願いします。」

「ところでクラバ、このバイオームがなんなのか知ってるのか?」

「このバイオームはですね、古代の文明の跡地なのです。」

「古代の文明!？」

ジャックは驚く。

「古代にこんな金属の文明なんてあったの!？」

「詳しくは分かりません。しかし古文書には

『天から光る輪が現われ、我らが大地に種を落としました。』と記されているのです。

つまり、推測するには、大昔に宇宙人がやってきて、一つの文明を作ったと考えられ

ます。

私はここで、その文明について調査しているのです。」

「宇宙人ですか……！」

「逆に宇宙人じゃなかったらありえないもんなあ……」

「クラバ クラバ シュウシュウ カンリヨウ。」

「ありがとう、ワーカー。」

小さなロボットがクラバに歩いてきた。

「かわいい〜！」

チェリーの目がハート型になる。

「ワーカー？」

「このロボットの事です。一生懸命私の調査を手伝ってくれる、良き相棒です。」

…ワーカー、ルーフスさんに、チェリーさん、ジャックくん、ステラくんです。」

ワーカーはルーフスに目を向ける。

「ルーフスサン、」

チェリーに。

「チェリーサン、」

ジャックに。

「ジャッククン、」

ステーラに。

「ステーラクン、」

「よろしくな！」

「ヨロシク ヨロシク。」

「ワーカー、次は採掘をおねがいしてもいいかな？」

「リヨウカイ リヨウカイ。」

ワーカーは遠くへ行く。

ワーカーが遠くに行ったことを確認すると、クラブはワーカーについて話し出した。

「…あいつは可愛そうなやつなんです。」

「かわいそう…というと？」

「僕はこのバイオームを見つけ、ワーカーと出会いました…」

クラブは語る。

機械で構成されたバイオームで。

クラブはロボットを発見した。

「君は？」

「……………」

ロボットは無視して去る。

クラブの科学者スイッチが入る。

なぜ逃げるのか？言葉は話せるのか？  
どうしてここにいるのか？…  
なんとしても、調査したい！

ロボットは歩いている。

木の陰からクラバが現われた。

「調査させてくれえー！」

ロボットは慌てて逃げる。

廃墟の中から白衣。

木の上から白衣。

土の中から白衣が。

いたるところから白衣の男が出てきた。

ある日の夜。

ロボットは廃墟のなかでスリープする。

かぼちやで変装したクラブはこつそりと廃墟の中に入り、

背中の接続端子に機器を挿す。

「規格は…よし、ピツタリだな。」

クラブはかぼちやを外し、コンピュータで確認する。

「これはこのロボットの見た映像履歴だな…これで文明の謎が分かるはずだ。」

カチッ



映像履歴のファイルを開いた。

たくさんの一つ目のロボットに囲まれている。

『フリヨウヒン』

クラブは衝撃に目を見開く。

『フリヨウヒン ヒツヨウ カイム』

『ハカイ スベキ』

『ゴミ フェルノミ』

『デハ エイエン ネムレ』

『フリオウヒン ネムレ』

『シツパイサク ネムレ』

『ネムレ』

『『ネムレ』』

『『『ネムレ』』』

『『『『ネムレ』』』』

『『『『『ネムレ』』』』』

映像が終わった。

そのほかの映像は無かった。

「…おまえ…」

クラバは涙を流す。

生まれてから、『不良品』『失敗作』とよばれ。

『眠れ』といわれ長い間電源を落とされた。

なんと非情なことだろう。

クラブはロボットを見る。

…こいつが逃げる理由がわかったよ。

こいつは何も信じられないんだ。

…僕はこいつをどうすればいいのか…

…ただ、愛すしかないだろう。

ロボットが起きる。

目の前に白衣の男。

ロボットは背筋が一気に伸びる。

クラブはロボットを抱いた。

「僕の相棒になつてくれないか？」

「ワーカー。」

クラブは名前を呼ぶ。

「ワタシハ イテ イイノ ?」

「ああ、僕の相棒なんだからな。」

クラブの涙が一筋流れ落ちた。

「キミノ ナマエハ？」

「クラブ。クラブだ。」

「クラブ　ワタシノ　アイボウ。

ズット　イツシヨ。」

「ああ、そうさ。」

「…あいつ…生まれてからずっと一人だったんだな。」

「なんて悲しいんでしょう…」

チエリーは顔を真っ赤にして泣いている。

「僕はこちらから、あいつと調査を続けようと思います。

あいつは、僕が守っていないければ駄目なんです。」

「No. 002647…フリヨウヒン ハツケン  
サツキユウ ニ ハカイ シマス。」

ドオン!!

「ワーカー！」

クラブは走っていく。

「まさか…まだそのロボットが残っているの!？」

「俺達も行くこうぜ。」

「ワオン！」

チエリーもうなずく。

見るとそこには背の高い一つ目ロボットがいた。

「いつ起きたー……こいつー！くらえー！」

クラブは持ち合わせのシャベルで殴る。

ビュン！

バシユ！

レーザーに撃たれた。

「うわ!!」

「クラブ……！」

ロボットが駆け寄る。

「このやろー!!」

ルーフスがロボットに剣を振るおうとする。

ビュン!

ビュン!

ビュン!

ビュン!

ビュン!

ビュン!

レーザーを高速で打ち込んでくる。

「おわあ!ちよ!くそ!」

ルーフスはよける、よける。

よけながらも何とか3回斬ることができた。



「うおおおお!!」

ジャックがハンマーを振るう。

衝撃波がロボットに命中した。

まだ倒れない。

「はああ!」

チェリーが勢い良く剣でロボットを斬る。

「ガブツ!」

ロボットに力強い噛み跡が付く。

「ギギギ フリヨウ ギギギ ヒン

ギギ ハカイ ギギギギ デキズ」

ドオン…

ロボットは爆発する。

「クラバさん、大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとうございます、チエリーさん。」

「ワーカーも大丈夫？」

「イジヨウ ナシ ゲンキ。」

「ふふ、それは良かった！」

「ありがとうございます、皆さん。僕とワーカーを守ってもらって。」

「いいってことよ。俺達もいい運動になったからさ。」

「ワンワン！」

「新しいモンスターのことも知れたしね！」

「こんなかわいらしい子を不良品と呼ぶなんて、許せませんよ！」

いつの間にかワーカーはチェリーに抱かれていた。

「アリガトウ アリガトウ。」

「ルーフスさん達はこのあと、どっちに行くのですか？」

「そうだな…このままこのバイオームを突っ切って西に行こうかな！」

「そのまま行くと…」

クラブは地図を開く。

「海を通ることになりますね！」

「お、久しぶりの海か…サンキュー、クラバ。」

クラバが笑顔で言う。

「船旅、お気をつけて！」

「サヨウナラ サヨウナラ」

「ああ、クラバもワーカーも、元気にやれよ。」

「さようなら！」「お元気で！」

「ワン!!」

ルーフス達は機械に侵食された大地を踏みしめ、西へと向かう。

## 番外編5：今日の世界旅

とある家の中で。

女の子が父に話しかける。

「とーさん!」

「ん?」

「世界旅、はじまるよ!」

「ああ、そうだったな。」

父はテレビを点け、チャンネルをまわした。

効果音の流れ、タイトルが現われる。

男性のアナウンサーが話し始める。

「どうも!ミスター・タニグチです!今日の世界旅のお時間ですよ。

さて、今日も気ままに旅をしていきたいと思えます!」

今日の世界旅は……？」

ミスター・タニグチがサイコロを振る。

「北！」

もう一回。

「西！」

もう一回。

「南！」

「では、今日は北、西、南と試してみよう！」

『まずミスター・タニグチが向かったのはここ、メデイウス・ライブラリー。』

ここは昨年にて建てられたばかりの図書館。

白い大理石でできた美しい外観の中には、100万冊を超える書物が蔵書されています。』

「うつくしいですね。この森と建物の色の対比がなんとも素晴らしい！」

では、早速、入ってみましょう！」

……どうもー。」

「ようこそ。メデイウス・ライブラリーへ。」

「えーつと、貴方は？」

「私は館長のバンダと申します。」

「ああー！館長さんでしたか。これは失礼しました。」

えーつと、ここは旅人しか来ないであろう森の中ですよね。

言ってしまうば、もっと人通りのいい街の中に建てればよろしかったのでは？」

「それでいいのです。私も昔は旅人だったのですが、砂漠や森の中には本は落ちていないでしょう。」

だから私は旅人のために、この図書館を建てたのです。…ああ、勿論、一般の方々も利用してください。」

本を読むことはとても楽しいことですから…」

ミスター・タニグチは顔をわざと歪ませて、

「すばらしい！なんとという本と旅人に対しての愛情！タニグチも感動しました！

では私も、このメデイウス・ライブラリーで、本を読んでもみたいと思います！」

「えーつと、では…この『爆笑！お笑い入門』をゆつたりと読みたいと思います。」

『ミスター・タニグチは読書していると…?』

「あー、本を読んでいると、時間が短く感じて、お腹がすいてきてしまいますね、バンドさん。」

「ははは。ではパンプキンパイでもどうですか?」

「おおお! 気が利いていますね! 好きな本を読みながらのティータイム。」

なんと贅沢なのでしょう!」

『メデイウス・ライブラリーではきれいなメイドさんのパンプキンパイと紅茶が

エメラルド1個で食べられる、素敵なサービスも!』

『おいしいスイーツと読書を堪能したミスター・タニグチは、次の場所へと向かいます。』

『ジエツトボートで、魚と共に進むミスター・タニグチ。

西の大陸が待ちきれないようです。』

「…さあ、大陸に着きました。…すごいですね。この灯台。誰が建てたのでしょうか?」

…お、きこりの方がいますね。ちよつと尋ねてみましょう。

…こんにちはー。」

「おお! あのみスター・タニガワじゃねえか?」

ミスター・タニグチは大げさに地団太を踏む。



「お・し・い！僕はミスター・タニグチですよ！もう！」

「おお、すまん、間違えてしまった…」

「お尋ねしたいのですが、あの灯台は誰が建てたのですか？」

「あの灯台はなあ、俺と俺の親友たちがいつしよに建てたんだよ。」

娘のためにな。」

「おお、娘さんのために…娘さんのお名前は？」

「ヴァイオレット、ってんだ。」

ミスター・タニグチが目と口を大きく開く。

「ええー!!ヴァイオレットというと、グレート・スライヴシティの新市長さんですか!？」

『そう、彼、ビストさんの娘はあのヴァイオレット市長なのでした。』

「あいつが働きはじめの時にな、初めて親子喧嘩したんだ。」

娘つてのは、いなくなると本当に寂しいもんで。その後、ヴァイオレットと会って、

お互いを認め合うことができたよ。」

ミスター・タニグチは顔に手を当てて、目を隠す。

「くう〜！なんとという親子愛！ミスター・タニグチ、またもや感動してしまいました！

…ビストさんはここできこりをやってらっしゃるのですよね？」



『森を後にして、ミスター・タニグチは南へと向かいます。』

「ジャングルを抜けた先に見えたのは…?」

「「「ようこそ！エンジェル村へ！」」」

「おおー!!」

ミスター・タニグチはまた目と口を大きく見開く。

「これはどこか？そう、天国ですよ皆さん！女の子達に囲まれています！」

『女性に目がないミスター・タニグチは村へと入ります。』

「おおっと、エンジェルの中に、一人だけ仙人がいますよ!？」

メイドたちは爆笑する。

「ほほほほ…残念ながら仙人ではないのお。私はこの村の村長じゃ。」

「おお、村長でしたか…よっ！えらい！日本一!!」

『素晴らしい村を作ったことを褒めるミスター・タニグチ。』

冷静な顔つきをした女性が話す。

「この村ではクツキーとお紅茶を楽しめます。」

ミスター・タニグチは手を合わせる。

「ああ、神様仏様…女性のクツキーを食べることが出来るなんて…！」

感動的ですー…ではお言葉に甘えて。」

『かわいらしい3人のお嬢さんがクッキーを運んできました。』

「「どうぞ。」」

「おおおお！こんなに可愛いお嬢さんにクッキーを持ってきてもらえるとは！

感動！感動！…もう感動しかいえません!!」

『無料でクッキー5個とお紅茶1杯をメイドさんと楽しめる村。一度言ってみては?』

「いやー、今回も、とっても素晴らしい旅でしたね！今日はここでお別れといたしまし  
う！」

皆さん、いいですか?」

「「「「「来週も！今日の世界旅！」「」「」「」」

「感動！感動です！」

「ピラフ。おもしろかったな！」

「うん！来週もみなきや！」

「…旅か。あいつら、元気にしているかなあ…」

ライモンは言った。

## 29 : 愉快的な海賊達

海の上。

巨大な帆船が浮かんでいる。

白いマストがたなびく中、アコーデオンと共に歌声が聞こえてきた。

♪我らが スターク海賊団

太陽が今日も 甲板を照らす

海に消えていく 波の音は

ふるさと  
故郷に届く はずもなく

ふるさと  
故郷を想う ためならば

今日の姿のままに 帰るのだ

「島は見えるか〜！」「ノー！」

「船は見えるか〜！」「ノー！」

それでは始めよう 宴の時！

船長が歌い終えるが、伴奏はまだ続いている。

船員達が酒や料理を甲板の上で頬張る。

「こっちにも酒だ！」 「まだ足りないよ！」

「がっはっはっは！」

「いいぞ！酒の飲み比べだ！」

「ゴキユ、ゴキユ」 「はっはっはっは！」

「おい！なさけねえぞ！」 「ど、どこさわってんのよ！」

「ほふっ！」 「うっぷ…もう駄目だ…」

「はっはっはっは！！」

筋肉質な体格の船長は豪快に笑う。

「今日も順調の航海だ!!」

ルーフス達は。

機械のバイオームを抜け、ボートで海を西に進んでいた。

太陽がまぶしく、温かくルーフス達を照らす。

「ふわああああああ…ねみいな…」

チエリーが目を開ける。

「あ…ついうとうとしちゃいました…」

「ほんつと、いい昼だねー。」



「クウン…」

ステーラもルーフスのボートの上で眠っている。

「「はあ…」」

ルーフス達も一斉に寝始める。

ルーフス達のはるか遠くで、ノコの刃のような三角が横切った。

「もういつちよう！」

♪我らが スターク海賊団

この世界の 全てを盗んでやる

あの娘に 花束贈るのなら

必ずや帰り 手渡すのだ

「島は見えるか〜！」 「ノー！」

「船は見えるか〜！」 「イエース！」

それでは始めよう 宴のと…

「なにいい!？」

アコーディオンが止まる。

「船は見えています。…とは言っても小船ですが…」

船長は船の前方を見た。

3人の少年少女、そして犬がボートの上で眠っているではないか。

船長は宝を見つけたのごとく目を見開く。

「おめえら、引き上げろ！」

「アイアイサー！」

ルーフス達は眠ったまま、海賊団に引き上げられた…

ルーフスが目を覚ます。

ここは……？

部屋の中？

見ればそこには樽や木箱が置いてあった。

ルーフス達はベッドに寝ていた。

「おい、ジャック、チェリー、ステーラ、おきろ！」

「うーん…エンダーマン、そんなにじやがいも食べられないよー…」

「わあ…触れるごとにクツキーが1万枚だなんて…」

「…なんの夢見てんだよ。」

皆おきて。

「で、ここはどこなんだ？」

「あんちゃん、これ！」

ジャックが×印の書かれた地図を見つけた。

「やばいよ、ここ、海賊船の中だよ！」

「ええええええええええええ!!?!」

「…どうする、ドアを蹴破って一気に逃げるか？」

「いや、ボートもどっかに行っちゃったですし、

海に飛び込んで近くにも近くに島がなかったら…」

「どうすればいいんだ…」

キィ。

屈強な男が部屋の中に入ってきた。

「ん?」

顔に傷跡がある。

モノホンの海賊だ。

ルーフス達は口を開けることしか出来なかった……  
ステーラはその横でのんきに眠っていた。

「はっはっは……船員が驚かせてすまなかったな！」

「はは、なんだ、サメが来てたから助けてくれただけだったのか！」

「もし助けてくれなかったら今頃……本当にありがとうございます……」

ジャックが青ざめた顔でお礼を言った。

「そりゃあ、サメが来れば誰でもびびるわな。」

まあ、お宝も頂いたしな！」

サクッ！

「ああー!!私のクツキー!!」

チエリーは驚く。

見れば船員達も全員食べている。

「もう!欲しいなら欲しいと行って下さいよー!なんで盗むようなまねしてるんですか  
!」

「」「」だつて海賊だし。」「」

「しかしうんめえな!これ!」「うまーい♪」

「お前の作るクソマズ料理よりぜんぜん最高だな!」

「あん?おめえのご飯明日から抜きにすんぞコラ。」

「母ちゃんのクツキー思い出すぜ…」

チエリーはおいしそうに食べる船員達の様子を見て、

笑顔になった。

「俺の名はスターク。お察しの通りこの海賊団の船長だ。」

「俺はルーフス。」

「ジャックです!」

「チェリーです。」

「ワンワン!!」

「こいつはステータだ。」

「おめえたち、まだ若いのに旅に出るとは、よくやる者達だ！」  
ルーフス達は照れる。

「で、おめえらはこれからどこへ行くつもりなんだ？」

船長は尋ねる。

「俺らは西の大陸に行こうと思ってるんだ。」

「お、奇遇だな！俺らはここから西にある、でっかい島に用があるのだ。」

「用ですか？」

「実はな……」

ここから西の島に見える城。

そこには魔術を操るネクロマンサーがいる。

そのネクロマンサーは莫大な宝を持っているらしい。



「俺らはその宝目当てに、その城へ突撃しようと思ってるのさ。」

「キャプテン！ 目標の城が見えました！」

「野郎ども！ 準備は出来たか！」

「「「「「おぉー!!」「「「「「」

「我々はなんだー!!」

「「「「「スターク海賊団!!」「「「「「」

「そうだ！ 我々はスターク海賊団！ 世界一の海賊だ!!」

船が砂浜に着く。

奥には巨大な城があった。

そしてスケルトン達は、すでに船の近くまで来ていた。  
恐ろしい数だ。

「突撃イ!!」

ワアアアアアアアアア!!

だがこちらの数も負けていない。

スケルトン達が襲う。

船員達が斬る。

スケルトンが倒れていく。

次々と海賊団は城へ攻めていく。

「皆つええ…」

「もう城の中に入っていくよ！」

「おめえらを危険にさらすわけにはいかねえ。ここで待つてくれねえか？」

返事を待つ前にスタークは船から飛び降りていった。

「…行っちゃった。」

「暇だねー。」

「釣りでもしていきましょうか。」

「ワオーン！」

数時間して、船員の一人があわただしく戻ってきた。

「どうしたんだ？」

「船員たちが皆瀕死になっちまって……！」

「なんで!? あんなに強かったのに！」

「途中のザコは皆倒したんだが、城主が厄介だ！」

今キャプテンが一人で戦っている……すまん、もう行かねば！」

ルーフス達が船から降りる。

「俺たちも行くよ。」

「あんたら……正気か！」

「私達だって、あなた達と同じ旅をする者なんです！」

「それに、恩を返さないと気がすまないよ！」

「ワンワン！」

「…ついて来い、はぐれるなよ！」

「船員とルーフス達は巨城へと駆けてゆく。」

「骸骨と骨、船員達の転がる階段をのぼり、最上階に着いた。」

「キャプテン!!」

「スタークは床に突っ伏していた。」

「ハア…すまねえ…血が足りねえ…」

「私の力を甘く見ていたようだなあ？海賊どもよ。」

十字架の前に腰掛ける骸骨が言う。

「おや？海賊の次は陸の賊か？」

ネクロマンサーは鼻で笑う。

「所詮、ただの人間どもよ。私の魔術で地獄まで送ってやろう！」

「気をつけろ！そいつは吸血弾を撃って来る！」

触れたらそいつを回復させるだけだ！」

ネクロマンサーが吸血弾を撃つ。

ルーフスがよける。

スケルトンがネクロマンサーの近くに現われる。

「召還した!?!」

チエリーは倒す。

「ステーラ、危ない！」

ジャックがステーラを抱え込み横転する。

ステーラの頭上だった場所には砂利が落ちた。

船員がスタークを2階へと運んだ。

「どうした？まだ逃げてしかないぞ？」

「ハンマー！！」

ドオオオン！！

ネクロマンサーに衝撃波が襲う。

「な…なんだこの衝撃は…！！」

カン！カン！カン！

ネクロマンサーに釘がささる。

「ぐおお!!」

ネクロマンサーは床に腕をつく。

チェリーが振りかぶる。

ステーラも突撃する。

「…愚民どもめ!!」

バリリリリ!!

「きやつ!」

「ワオン!」

チェリーとステーラは弾き飛ばされ、着地した。

電撃だ。

「大丈夫か!」

「はい！」「ワン！」

「スケルトン!!」

ネクロマンサーは叫んだ。

ルーフス達の後ろにスケルトンが現われ、ルーフス達を掴む。

「くそ！はなせ！」

「ふは…はははは…私は死なぬ…まだ生きる…はははは…！」

死ぬという恐怖に混乱しているようだ。

「死ぬことが怖くてココロいかれちゃうようじゃ、人間より上とは呼べねえな？ああ？」

「キャプテン！まだ完治してませんって！」

そこにはスタークが立っていた。

「俺たちや、死ぬこと承知で海に出てんだぜ？」

「殺す殺す殺す!!はははははははは!!」

ネクロマンサーが電撃を手に蓄えながらスタークに近づいてきた。



ルーフス達は目をつぶる。

「…あれ!？」

ネクロマンサーの前には何も無い。

ネクロマンサーの後ろに、みるみるスタークが現われた。

「良き航海たびを…」

ザムン!!

ネクロマンサーの背中から一突きする。

スケルトン達は消えていった。

「なんだ…なにがどうなったんだ…?」

「キャプテンは魔術を使える。」

「え？」

「何でも、子供の時、村にいるおばあさんから教わったそうだけ。」

「…もしかして魔女なのか？」

「さあ、そのことはあの人から聞かないとわかんねえな。」

「…っていつても、本人は何も語ってくれないんだけどな。」

「…」は甲板。

船員達の手当てでも終わり、みんなすっきり元気話合っている。

スタークはルーフスと椅子に座りながら話す。

「ルーフスよ。私の代わりに戦ってくれてありがとうよ。」

「俺達は恩を返しただけだよ。」

「はは、そうか。…野郎ども！」

スタークが船員達を大きな声で呼ぶ。

船員達は船長に真っ直ぐ向いた。

「今日は皆、久しぶりに死ぬ思いであった！」

しかし今宵は休めるか？ここに私達と同じ勇敢な旅をするものがある！  
寝て夢を見るわけにはいけまい！宴だ！！」

「「「「「イエツサー！！キャプテン！！「「「「」

甲板の上で愉快的な宴が始まった。

「どうだルーフス、お前と私の冒険を話し合おうではないか！！」

「お、いいぞ！スタークはどこから来たんだ？」

「わしはここから南の南の島出身でな…」

ジャックは甲板の中を見ていた。

「おう、ボウズ、おめえはこっち、こねえのかい？」

「あ、僕はこのキャノンが気になって…」

「キャノンならまかしときな！

この船で唯一レッドストーン回路を知ることのヤスベエが何でも、

質問に答えるぜ！」

「本当ですか！えっと、えっと、まず仕組みはどうなつて…」

女船員と話していたチェリーの前に、ポピーの花が差し伸べられた。

「お譲ちゃん、可愛い顔してるね、一緒に踊らないか？」

「はあ？なにアンタナンパしてんの？」

女船員が荒立ててこたえる。

「それって、船の中のプランターに植えられてた花ですよね。」

船員の一人がしたり顔でうなづく。

「植物を大切にしない人は嫌いですよ！」

チェリーはニコツと応えた。

船員は慌てて土下座し始める。

「ははは、あんたにや無理だよ、あきらめな！」

「はい、クツキー！」

チェリーがクツキーを船員に渡す。

しょんぼりしていた船員は一口食べて、一瞬で幸せそうな顔になった。

女船員達がなにやら群がっている。

「お手♪」

「ワン！」

ポテツ！

「「「や〜ん！かわいいい〜！！」」」

男勝りな女船員もこの時ばかりは黄色い声だ。

船員達がボソツと話す。

「まさか狼に負けるとはな…」

「俺達も狼になりたいぜ…」

「はあ〜」

一晩たって、

海賊船に連れられ、ルーフス達は西の大陸に上陸した。

「ここでもいいんだよな。」

「ああ。おくつてくれてありがとう。」

「最後に言っておく。」

「俺達が海を支配するなら、おめえは陸おかを支配しろよ!!」

「ああ、『全部』！行ってやる！」

「では……」

「じゃ……」

「良たき航た海びを……!!」

二つの拳骨がぶつかり合った。

船が離れていく。

しかし愉快的な歌声は離れていかなかった。

♪我らが スターク海賊団  
 舳先<sup>へさき</sup>で裂けてく 今日<sup>こんにち</sup>の海

大きくも小さき 船の形は

遠い友に届く はずもなく

友と再会を 果たすなら

今日の姿のままに 帰るのだ

「島は見えるか〜!」「ノー!」

「船は見えるか〜!」「ノー!」

それでは始めよう 宴の時!

それでは始めよう 宴の時!

「よし、皆、俺達も行こう!」

「おぉー!」「ワオン!」

ルーフス達は遠ざかる船に背を向けて砂漠の砂を踏みしめて歩く。



## 30：桜の咲く国

ここはグレート・スライヴシティ。

ハヤブサはビルの西窓から北西の方角を見つめている。

「ハヤブサ局長、何を見ているのですか？」

昔からの部下の記者が話しかける。

「…いや、ちよいと、昔離れた故郷のことを思い出してな…」

「へえ…故郷ですか。…私もいつかまた帰りたいですねー…」

ハヤブサは笑って記者と話す。

「誰しも、故郷は絶対に忘れられないものだな。」

「…今度久しぶりに、帰ってみるか。サクラノ国へ…」

海賊達の海を離れて西へ行くルーフス達。

砂漠を踏みしめる音が辺りに響く。

目の前には緑の気候帯が広がり始める。

空まで突き抜ける山は絶景だ。

「すげえ…」

「こんなにすごい高山始めてみたよ…」

「まだまだ、世界は広いですね！」

ルーフス達は更に進む。

険しい山を登る登る。

頂上に着いた。

「…!!」

「まあ…」

チェリーが感嘆をもらった。

目の前には薄い桃色の花の咲く木。

桜だ。

桜が所かしこに咲き誇っている。

桃色の花びらは高原の上を舞う。

「桜だ…」

「すげえ…」

「いいですねえ…!!」

「ワンワン!!」

ステーラがたまらず高原を下っていった。

「おい！ステーラ!! 待てよー!」

ルーフス達が追いかけていく先には

立派な城の立つ一つの国があった。

どどん！

堀の上に架かった橋の後ろには巨大な開いた門。

その前には二人の門番がいる。

ルーフス達はその橋の上に行った。

「ここはなんていう国なんだ？」

「うーんと…『ようこそ さくらの国へ』…サクラノ国だつて。」

「サクラノ国か…」

ルーフスは鼻から香りを吸った。

「なんだかいい匂いがするな…」

ステーラも舌を出して門に向かってクラウチングスタートのポーズだ。

…全く、行く気マンマンのようだ。

「行ってみましょう！ルーフスさん！私もこの良い匂いの料理、是非習いたいです！」

「行こうよあんちゃん！僕も、あの桜のこと聞きたいんだ!!」

「よし、じゃあ行ってみっか!!」

ルーフス達は門番へ話しかける。

「あの、この国に入りたいのですが…」

「旅人の者でございますか！ようこそサクラノ国へ！」

「ではまず殿に会っていただきましょう。」

「殿に？」

「お殿様のご命令で、お客人はまず、全て我が城に招待するようにと伝えられております。」

「分かりました。案内よろしく願います。」

「では、私にご引率くださいませ。…ゴハイ！ここは任せたぞ！」  
「へい！わかりやした！」

ルーフス達は門番について歩く。

城下町を歩くと、所かしこから声が聞こえる。

「すたみな満点！豚串はいかがかねー!!」

「まあ！この掛け軸美しいわ…!!」

「でしょう、奥様。それは有名な…」

「いい扇子あるよ！扇子だけに、センスがいいってか！」

「おいしい湯豆腐売ってるよ。」

「にぎやかな町だなー！」

「湯豆腐…」

チエリーが売り手のおじいさんに手を伸ばす。

「まあ、チェリー、城から戻ったら食えるつて。」

「さあ、着きました。ここが我が殿の住む城、サクラノ城でございます！」

「でっかいなあ…」

白と黒できめた城はなんとも壮観だ。

どどどん！



着物をまとったたくさん女の子達が横に並んで正座している。

床にはきつちりと詰められた畳。

部屋の上座に近い所に置いた机にルーフス達は座っていた。

細長く広い部屋の中に小さい机。

なんとも異質な光景だ。

爺が旅人に説明する。

「いいですか、お殿様がいらつしやったら上座に向かって正座で頭を下げるようお願い  
します。」

「は、はい!!」

「分かりました。」

「殿様の、おな〜り〜!!」

上座の横から殿が来る。

凛々しい顔立ちに八の字のひげとあごひげを持っている。

黄色に輝く着物を翻し、扇子を広げ仰ぐ。

涼しい顔で旅人を見た瞬間、驚いた顔になった。

そして爺に向かって激昂した。

「爺！お客人に何故<sup>おもて</sup>面を下げさせておる！」

ルーフス達は驚いて顔を上げる。

「殿、お言葉ですが、あなたは殿でございましょう！」

もつと自信をお持ちくださいなれ！」

「自信などとうに持つておる！私は彼らと同じ、人なのだぞ!？」

人が頭を下げていいのは神や仏しかおらん！」

一段落ついたところで殿は旅人と向き合った。

「これは失礼した、旅の者達よ。私がこのサクラノ国を統治する、

桜ノ道常<sup>ミチツネ</sup>だ。」

「ルーフスです。」

「ジャックです！」

「チエ、チエリーと申します。」

「こいつはステーラです。」

「ワン！」

「では、食事を持ってまいれ！」

女の子達が3人と1匹分の料理を持ってくる。

殿にも食事が持ってこられた。

湯豆腐に、牛飯、ゆで卵だ。

「あーさっきの湯豆腐〜♪」

チエリーがハート眼になる。

殿が説明する。

「この湯豆腐は城下町で歩いて売っているサルノスケのじいさんから頂いたものだ。遠慮なく、食べるがよい！」

「おいしい♪」

「うめえ!!」

「卵がとろけるよ〜！」

「ワン！」

「はっはっはっは…愉快的旅人達じゃ！」

お殿様はこの国の歴史を話す。

「この国は私の先祖であった道良ミチヨシが桜ノ木を見つけたことから始まる。

道良はそのあまりの美しさに、すぐにここに城を作ることをきめたのだそうだ。

そして旅人がそのまま国に居座り、次々と発展していった。

今では、この国の他にここまで桜の咲く国は無いとされているようになったのだ。」

「へえ…」

「この国は独特の文化を持っておる。私はそれを大切にしたいね。」

殿ははつと気づき、扇子を閉じてちよんまげ頭をペチン、と叩いて笑った。

「…いかん、私としたことが。熱くなり長くなつてしまった。では、宴会を続けるとしよ  
う！」

殿とルーフス達は語り合う。

「おぬし達、『ぐれえとすらいぶしてい』へ行つたと言うのか！」

では、ハヤブサに会つたのか？」

「え!? なんでお殿様がハヤブサさんを知つてるんですか!？」

「何故と言われても、ハヤブサは私が若い頃の側近であつたからだ。」

「「ええー!?!」」

「ガツガツ」

「ハヤブサさん、そうだったのかー!」

「やっぱすげえ人だったんだな!」

「ハヤブサの活躍は私も耳に入ってくる。さすがは私を育ててくれた人だ、と思つたよ

！」

殿は笑う。

サクラノ城の宴会は夜まで続いた。

「お、もう夜か。では、皆、外へ出てみよう。」  
「外へ？」

殿は障子を開ける。

「……!!」

声も出せなかった。

桜がまばゆく光っている。

薄い桃色の光が点々と照らしていた。

ジャックもチェリーも、ステーラもうつとりしている。

「私は毎日、この景色を見ずに眠ることが出来ないのだ。本当に、この国を統治していて、良かったと思うよ。」

こうして、ルーフス達のサクラノ国の旅が始まった。

## 31：正月花火

「わあ!!」

チエリーが鏡を見る。

薄い黄色に赤の帯。

髪は後ろでお団子になっている。

着物屋の御上さんは褒める。

「とても美しいですよ、お姫様!」

「もう…!お世辞言わないでくださいよ!」

チエリーは嬉しそうだ。

「おーい、チエリー、終わったか?」

「あ、はい!終わりました♪…じゃあ、エメラルド4個ですね。」

「毎度あり!大事に使ってやって!」



「はい！」

チエリーは店の外へ出て行つた。

「お、チエリーさん、いいね！」

「ありがとう、ジャック君♪…えつと…ルーフスさんは？」

「うん…あんちゃんはね…」

「うんめえ…!!」

…寿司を食べている。

「おつちゃん、これホントうめえな！」

「ありがとよ、ボウズ！そいつはサクラノ国名物だ！」

…塩焼きも食つてくか？」

「お！お言葉に甘えて…」

チエリーはポカンとする。

「はっはっは…お嬢ちゃん、『花より団子』だな！」

隣の扇子屋の主人が冗談を言う。

チエリーは不満そうな顔になる。

「ルーフスさん…」

「お、チェリ」

ガツン!!

少年は道に倒れる。

頭には巨大なたんこぶが。

ステーラはたんこぶを何度もつつく。

「もう、ルーフスさんたら…」

チェリーはルーフスの持っていた魚の塩焼きを食べる。

「んー…おいしい♪」

「はっはっはっはっは!」

周囲の町民達が笑う。

「そういえばお前ら。」

魚屋の主人が聴く。

『正月花火』 って知ってるか？」

「『正月花火??』」

「サクラノ国じゃ、年が明ける日のことを『正月』といってな。

その時に打ち上げる花火を『正月花火』 っていうんだ。」

「花火かー…」

「花火は誰が作って、打ち上げているの？」

「ここからすぐ近く、あの店で…」

ガツシャーン!!

丁度魚屋の主人が指差した店の前で砂煙がたった。

魚屋の主人は呆れた目をする。

「まーた始まったよ…」

店の前に倒れた青年は立ち上がって言う。

「おい！じじい！もう俺だつて大人なんだ！」

今年の花火こそ、俺があげるぞ!!」

「ばかやろう！まだわしは現役じゃ！この3号玉！」

「誰が一番ちつちええ花火玉だ？あ？こら？この音物！」

うるせえだけのじじいが！」

「たわけ！おめえにやあまだ早いんだよ！」

もつと昔の技わざつつーもんを磨いてから言うこつた！」

…丁度いい！食いもん買ってこい！」

と言って、店の奥へと入っていった。

「つたく…」

ルーフス達は魚屋の紹介で花火屋を見学することになった。

「俺はタネノスケだ。あのじじいはタマベエ。俺の親父だ。」

「ルーフスです。」

「ジャックです！」

「チェリーです。」

「で、この狼がステラだよ！」

「ワオン！」

「花火はまず火薬玉を作ることから始まるんだ。

染めたい光の色に合わせて火薬に染料を混ぜる。

大きくしたいならファイヤーチャージを混ぜる。

で、紙で花火球を巻きつけてロケット花火にすれば打ち上げられる。

普通ならここで終わるんだが、俺は一工夫する。」

「一工夫？」

「花火の形を、素材で変えてやるのさ。金塊を加えるなら星型に、羽を加えればバラけた  
りね。」

「おお！そいつは楽しそうですね！」

「でも、あの頑固じじいときたら、

『うちは長年、円い花火でやってきたんだ！花火を星型にするなど、もつての外だ！』

とか言って、今年も円くて、色とりどりだけの花火を打ち上げるつもりだぜ…

俺はいつも正月花火を見ている子供達の言葉を聞くんだ。

『つまらない』ってね。その言葉も知らずに、あのじじいは丸にこだわっている。」  
「だからさつきもめていたんですね。」

「…ま、俺は今日、河原にこの違う形の花火を持って行くけどな。」

タネノスケは腕を力強く曲げて言う。

「頑固なのは、親父譲りだからな！」

ルーフス達はほっとする。

ただ仲が悪いだけじゃないらしい。

「今日、花火を打ちあげるんですか？」

「ああ、河原から国中に見えるように打ち上げるんだ。」

「ぜひ、見て行ってほしいな。」

「はい！絶対見ます！」

「…ちよっとその河原に言ってみても良いですか？」

タネノスケは笑顔でうなづく。

「ここは河原。」

ルールが広くしいてあり、ディスプレイが繋いであった。

「レッドストーン回路とトロッコを使って打ち上げるんだね！」

「面白いな……」

「……あ、あれって、タマベエさんじゃない？」

あつちもこちらに気づいたようだ。

「おお、君らがアジヘイが言っていた旅の者達か！」

「……、見学しても良いですか！」

ジャックが興奮ぎみに尋ねる。

「おうよ、『正月花火』を打ち上げる仕掛けつつもんを、とことん教えてやろう！」

「ディテクターレールにディスプレイを繋げて、

トロッコが通るときに花火が出るんだ。時々、同時に何発も打ち上げるために、

レッドストーンだけ使った回路で制御することもあるがな！」

「へえ〜!!」

「ま、確実に回路を組めるのは、わししかおらんだらうよ！」

「タネノスケさんは出来ないのですか？」

タマベエはしかめっ面になる。

「あいつは何もできねえよ。」

「タネノスケさんは花火の形を変える技を作ったのですよね？」

「あんなものは、エセ花火だ！」

「でも、子供達は『つまんない』って言っているのでしょうか？」

チエリーがズバリと言った。

タマベエは核心を突かれて正直に話す。

「あいつは花火のことを分かっちゃいねえ。」

花火は先人の思いも打ち上げるものだ。

そんな花火を、勝手に星型にするなんて行為など、許せたものではない！」

「そんなことを言っているけど、子供達の評価は何も変わりませんか？」

「タネノスケさんを、一度信じてみてはどうですか？」

チエリーは言った。

タマベエはしぶしぶうなずく。

「…そうだな、今年が、あいつの作った花火の始めての打ち上げになりそうだ。」

日はもう地平線に見えていた。



夜になって。

寒いのに大勢の人たちが外に集まっている。

チエリーの下駄がカツカツとなる。

ステーラはクツキーを頬張っている。

「ここらへんでいいだろ！」

ルーフス達は河原の草の上に座った。

「もうすぐ始まるね！」

「楽しみです！」

「ワオーン！」

ピュ〜〜…

バン!!

橙色の大きな火花が空に舞った。

「はじまったー!」

観客はどよめき始める。

ピュッ

ピュッ

ピュッ

バン!!

バン!!

バン!!

星型に、円型に、クリーパー型だ。

「タネノスケさんの花火だ！」

「素敵……！」

その後も、何発もの花火が打ちあがる。  
城の上からも花火を見ている人がいる。

「天晴れな正月花火じゃ……」

青色、黄色、紫色……

パラパラと落ちていく花火、

きれいに真っ直ぐ落ちる花火……

小さい花火、大きい花火……

高く拡散する花火、低く拡散する花火……

どれも、新鮮な花火ばかりだ。  
子供達も喜んでいる。

タネノスケも真下から笑ってみていた。  
タマベエは不満そうに瞳だけで花火を見ている。

そして最後の花火。

ピュ〜…

ピュ〜…

ピュ〜…

ピュ〜…

ピュ〜…

同時に5発の花火が高く放たれた。

皆の視線が花火を捕らえている。

パアアアアン…!!

漆黒の空に。

桃色のしだれざくらが咲いた。

タマベエは花火と向き合った。

「ああ…桜が…桜が咲いておる…!!」

しだれざくらは花びらをあたりに散らすように消えていった。

観客達は感動で騒ぎ始める。

絶え間ない拍手が国中に響く。

殿様も日の丸を描いた扇子を開いて笑う。

「天晴れ！天晴れであった！はっはっはっはっは！！」

「これが…正月花火かあ…」

ルーフスが草に寝転がる。

「すっげえ…」

寒い空に舞った正月花火。

それは、人々の心にも焼きつくほど強い光であった。

## 32 : 「強い」刀

ルーフス達は今日もサクラノ国に行く。

タネノスケとタマベエの話では…

「ここから南の町へ歩いて行ってごらん。

サクラノ国の刀が見られるよ。」

「…その店主はわしに負けないぐらいに頑固な奴だな。  
斬られんように気をつけろよ。」

「…どんな人なんだろうな…」

「タマベエさんを超える頑固な人…」

「言葉には気をつけた方がいいかもしれないね…」

店の前に看板があった。



『刀や薙刀 売ります』

「ここみたいだね。」

ルーフス達は店に入っていく。

「…こんにちはー…」

店の中には今まさに刀を作っている男がいた。

黒く太い眉の間にしわを寄せて、刀をじっくりと見ている。

「あの一」

男は無言でギラツとした目で睨んだ。

「ここで刀をつく…」

ビュン！

「おわっ！」

「わー!!」

「きやつ！」

「ワオン！」

ルーフスの目と目の間に鋭い矛先が向けられる。

「…刀や薙刀も知らん外国人め…この国から追っ払ってやるわ！」

男は店から飛び出し、刀をルーフス達に向かって振り続ける。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

「ちよつと！話を聞いてください！」

「黙れ！この茶髪野朗め！」

店の中から小さい女の子が出てきた。

おかつぱにかわいらしい赤い着物を着ている。

続いて狼が一匹。

橙色の首輪。

ステーラがハート眼になる。

「だめだよとおちゃん！おちついてよお！」

「ウメは黙ってる！」

「いいかげんにしてよお！またおきやくさんへらすきななの！」

ウメと呼ばれる女の子は大人らしく言う。

男はさらにヒートアップする。

「俺の意思を通して何が悪い！」

「ウメちゃん！旅人達よ！離れてなさい！」

外からタマベエの声でした。

ウメは中へ入っていった。

ルーフス達は外へ逃げる。



女の子は小さな体で男を座敷に上げる。

ステーラと狼は仲良く駆け回っている。

「わたちはウメっていうの！とおちゃんはミネゴロウ。あのオオカミはユズ。メスなのよ！」

「ははは、ステーラ絶対ユズに惚れてるな！」

「ごめんなさい、とおちゃんがめいわくかけて。」

「いやいや、大丈夫だよ、いきなり押しかけた俺達も悪かった。」

「でもウメちゃん。」

チエリーが質問する。

「なんでお父さんはこの国以外の人を嫌うの？」

「とおちゃん、このごろ、とおい国の会社で店をつぶされそうなんだ。」

「この店の刀、国中ににんきで、つぶれることもないのね。」

「だからあんなに追い出そうとしてたんだね……」

タタタ、タタタ、タタタ……

馬の蹄ひづめの音がする。

「ははは！ドクーのだ平民達よ！」

「あ……うわさをすれば……」

男ががばつと起きて外へ行く。

「あなたはほんトーウに馬鹿なヒトーだー。」

こんなボロイー刀で、マードヤっていくつもりなのか？」

豚のように太った貴族が、馬に乗っていた。

なにやらおかしなしゃべり方で話す。

男は咄嗟に店に落ちていた薙刀を貴族に向ける。

従人が同時に男にピストルを向ける。

「とつとつこの国から出て行け。」

「ノンノン……私はこの店を差し出すだけでいいといつてールのです。

こんな火でどうにも消せる店など、ナクーでも変わりありマセーン！」

「この店は代々から受け継いだ店だ。そうやすやすと渡せるものか。」

貴族は笑って言う。

「あなたは世界を知らない。どんなに鉄をカタークしても、ダイヤモンドには勝てないのですよ。」

…そうだ！明日、河原で勝負をしましヨウ！わたくしがわが国から剣士を連れてきまーす。それであなーたの勝ち…つーまりあなたの刀が強いと証明されれば私はサガーリまーす！」

「本当だろうか。」

「本とーうでーす！でーは、わたーしは帰るーとしまーす。でーは、また明日。」

貴族は馬で強引に人々をよけさせながら帰っていった。

ステーラとユズが屋根の上で一緒に月を眺めている。

ルーフス達は刀屋の中で話をしていた。

「あの外人さんはランプスこうしゃくつていうの。」

2年前に突然やってきて、『店を売ってくれ』っていうのよ。」

「なんか話し方がウザイ奴だったな。」

「いかにもごくつぶしって感じでしたね…」

「でさ、ミネゴロウさん、どうするの？」

ジャックが尋ねてもミネゴロウは話そうとしない。

「とおちゃん、この人たちはあの人とちがつていい人たちだよ？」

「…ハン！」

ミネゴロウは2階へ上っていった。

バシン！

ふすまを力強く閉めた音が響く。

「ごめんなさい、わたしが話すよ、たびびとさん。」



ウメは話し始める。

「たぶん、明日、とおちゃんはあのけんしと戦うとおもいます。

だいじょうぶ、とおちゃんはすつごく強いんだ！」

ウメはミネゴロウの刀をまじまじと見て言う。

「わたしは、とおちゃんの刀はだれにもまけないとおもうんだ。

とおちゃんほど、刀をだいじにおもっている人はいないよ！」

「ウメちゃん……」

チエリーは懇願する。

「私も、その戦い、観ても良いかな？」

「え？」

「戦いが気になるんじゃない……」

ミネゴロウさんがどれだけ刀を愛しているかを観たいの！

……あ……でもミネゴロウさんが許さないかな……」

ウメはすぐに笑顔で言った。

「だいじょうぶ、とおちゃんは素直じゃないから、

今2階にいるあいだもわたし達の話、聞いているんじゃない？」

ドタン。

2階から物音が聞こえる。

ウメはくすくすと笑う。

「ほらね？」

「ははは、ウメちゃん、すっかりとおちゃんの事分かってんな！」

「ふふふ！」

「ははははは！」

「今夜はお兄ちゃん達、どうするの？」

「んーと……ここにいてもあの人の機嫌を損ねるだけだな、

ジャック、チエリー。宿を借りに行こうぜ。」

「そうだね……話を聞かせてくれてありがとう、ウメちゃん。」

「明日、また見に来るわ。」

ウメはニコツと笑う。

「うん！お兄ちゃん、お姉ちゃんたち！おおかみちゃんも！また明日！」

ルーフスは屋根の上のステーラを呼ぶ。

「おい！ステーラ！行くぞ！」

「ワン！」

ステーラは返事をしてからユズにお辞儀して屋根から下りる。

「キャン！キャン！」

ユズも挨拶をしているらしい。

ルーフス達は夜の町を歩いていった。

翌日。

ルーフス達は河原に来た。

ミネゴロウは仁王立ちで敵を待つ。

ウメはルーフス達の横で見ている。

前に馬に乗った貴族と剣士らしき男が見えた。

従人達も6人ほどか。

従人達は貴族と剣士を守るように遠くから囲んでいる。

貴族がある程度刀屋と近づいた所で、止まる。

「おやおやー！みなーさんおハヤーい！」

「そのふざけた声はもう聞きたくはない。さっさと始めよう。」

「わかりました！では、マンティース！行きなさい！」

「かしこまりました。」

マンティースという男が前に出る。

敵の姿を見た瞬間、マンティースは貴族に向かって話す。

「ランプス侯爵、私にはこの人とは向かいあわせできません。」

「どういーうことだ？そこまで強いというのか？」

「いえ。」

マンティースはミネゴロウをみて言う。

「私には老人を傷をつけることはしない。だから戦いはできないといっているのです。」

「おい、若造、敵に背を向けていいのか？」

剣士は避ける。

マンティースは目を鋭くさせる。

「侯爵、たった今、彼は敵となりました。始めましょう。」

「グレートであるぞ！始めよ！」

マンティースはダイヤの剣を抜いてミネゴロウに走り出す。

ミネゴロウは刀を見て呼びかけた。

「雷鳴…今日も轟とどろいてくれよ。」

刀から青白い光が走ったように見えた。

マンティースの刃の乱撃が始まる。

ミネゴロウはその乱撃を次々とさばいていく。

ミネゴロウの刀がダイヤの剣とぶつかることに雷が走っているようだ。

ルーフス達にも、不思議なくらいその光が見えた。

「ち、近づけねえ！」

「刀からこんななにパワーを感じるなんて……！」

「ひぎが笑ってるよ……」

ジャックはひぎを揺らす。

ステーラとユズも一生懸命に見ていた。

マンティースが乱撃の途中から話し始めた。

「そのような古めかしい刀でよく対戦を挑んできましたね。

さび臭くてたまりませんよ……」

「ハン……剣が壊れそうになって変えるようなお前らとは、違うんでねえ！」

キイン……！

ミネゴロウが刀を振り切って乱撃が止まった。

「この刀はもう30年使ってるんだよ！」

ミネゴロウが始めて笑顔を見せた。

まるで自分の子供を自慢するように。

「30年…しかし刀の歳が勝負に比例する訳ではあるまい！」

マンテイスが切りかかる。

ミネゴロウが力強く刀を振った。

ピキーン!!

マンテイスのダイヤの剣が背後に飛んでいった。

マンテイスは驚愕する。

ミネゴロウはマンティースの首元に刃を当てた。

「終わりだ。」

「やった！とおちゃんが勝った！」

ミネゴロウは刀を鞘に納める。

マンティースは潔く負けを認めた。

「…あなた…すごいですね。…私はここで、また成長できた気がします。

…あなたのサムライの心、しかと学びました。

…ついては、また5年後、勝負を申し込みたい。」

「…ハン…おめえのあの素早い刀さばき。到底素人の真似できるもんじゃねえ。

受けてやるよ。また5年後に！」

マンティースとミネゴロウは握手を交わす。

ランプス侯爵は悔しそうに言った。

「ぐぬぬ…でーは、わターシたちは下がるしかないでーすね！」



ランプス侯爵は馬をUターンさせる。

一件落着。

…？

ランプス侯爵の馬は3歩歩いてから、もう一度こちらを向いて止まった。

「はい、下ガりました♪」

ダン！ダン！ダン！

従人がミネゴロウに3発打ち込む。

「とおちゃん！」

「「ミネゴロウさん!!」」

ルーフスは駆け寄る。

「キャン！キャン！」

ミネゴロウは苦しそうに血を吐く。

「ジャック、医者呼んでくるぞ！」

「うん！」

ルーフスとジャックが駆けていった。

チェリーはランプス侯爵を睨む。

マンテイスも驚愕する。

マンテイスはランプス侯爵の前に立つ。

「なーんだ？ マンティース？」

「すぐにお止めなさい、侯爵、いや！ ランプス！

あなたは騎士道を侮辱した！」

「お前マーデも私に口答えする気か？」

ダン！ダン！ダン！

「マ…マンティ…ス…」

ミネゴロウが苦しそうにマンティースが撃たれるシーンを見た。

「では！あの店をたダーチに壊してしまうのでーす！」

「待つてください。」

ランプス侯爵が見ると黄色の着物姿の娘が立っていた。

「なーんだ？お前マーデも私にたてつく気か？…撃つてしまえ！」

ピュン！ピュン！ピュン！

チェリーは素早く動く。

ピストルの弾は地面に刺さっていった。

そしてチェリーが跳んで馬の頭を超える。

「な…」

ランプス侯爵は驚く。

ランプス侯爵の前に乗り、鼻先に剣を当てる。

「この国に…もう関わらないください！」

「ははははあい…もももう来ません…逃げろー!!」

ランプス侯爵は馬を走らせる。  
走ると同時にチェリーは地面に着地した。

ジャックとルーフスが戻ってきた。

「あれ？あのバカ侯爵は？」

「もう行きました、この国には関わらないって約束して：

それよりミネゴロウさんとマンティースさんを！」

「あ！マンティースも！」

「どうですか？先生！」

「大丈夫だ、どちらも、頭や心臓には当たっていない、

止血して私の家に運ぼう！」

そして。

ミネゴロウとマンティースは何事も無かったようで。

少し病院で休んで各々帰った。

ルーフス達も刀屋へ行く。

チェリーは既にメイド服に着替えていた。

刀屋の座敷で、ウメは眠っている。

どうやら疲れてしまったようだ。

「本当にすまなかった。外人だとひいきして、おもてなしも何も出来なかった！

何と魂が腐っていたことか！」

ミネゴロウが謝る。

「いいんですよ。それより、大事に至らなくてよかったですね！」

「本当に、ありがとう。」

ミネゴロウが笑顔を見せた。

ステーラとユズは寂しそうに向き合っている。

ステーラはユズに黙って背を向けた。

ユズは察して、元気良く吠える。

「キャン！」

「じゃあ、僕らはこれで。」

「ちよつと、お嬢さん、待ってくれないか。渡したいものがある。」

「私ですか？」

チエリーが刀屋へ戻った。

ルーフスとジャックが不思議そうに見守る。

「あの侯爵に、恐れも無く、命を賭けて向かってくれて、本当にありがとう。」

「いえ：私も、一人の剣を扱うものとして騎士道を侮辱されたのが許せなかっただけで  
す！」

「君は、本当に強いのだな。」

ミネゴロウは笑う。

「…えーと、それで渡したいというのは…？」

「これだ。」

黒紫色の細長い刀。

「私が作った刀、名前を『闇火』<sup>えんか</sup>という。

黒曜石を念入りに融かし鋼を作ったものだ。」

「黒曜石を…！」

「この刀を選ぶ持ち主。それに似合うのは、まさにお前さんしかない。」

チエリーはその刀が放つ気に怯えていた。

『貴様にこの私を扱えるのか』

まさにそう問いかけているようだ。

「…分かりました。大切に、使わせていただきます！」

ミネゴロウはうなずいた。



「「ありがとうございますました！」」

「またいつでも来なさい！」

「ワン！ワン！」

「キャン！キャン！！キャン！」

ステーラは再会を約束しているらしい。

町は橙色に染まる。

ルーフス達はサクラノ国の門を出ようとしていたのだった。

「ありがとう、サクラノ国。」

ルーフスは振り向いてつぶやく。

山に咲く桜と城と町が見える。

ルーフス達は別れを言うと、夕日に向かって元気良く走っていった。

「ジャック、チェリー、ステーラ、次の世界へ行くぞ！」

「「おお!!」」

「ワオン!!」

## 番外編6：クリーパーの恋

私、エンジェル村に住む、ナバーナと申します！

毎日の日課、料理の練習、運動、勉強、そして読書！

この前、グレートスライヴシティに行った時に買ってきた本を読んでいます！

タイトルは「クリーパーの恋」。今日で4周目！

では、一緒に読んでみましょう！

ナバーナは本を開く――

暗い暗い洞窟の中。

モンスター達は人間を襲うために各々の場所で隠れていた。

1匹のクリーパーがボーつとたっていた。

ドン！

スケルトンが触れて倒す。

「おらー！下っ端！ボーつとしてるんじゃねえよ！」

「あ、ごめんなさい…！」

僕はクリーパーといいます。

まだ人を襲うのになれていない、下っ端なのです。

今日もさつき、叱られてしまいました。

すっかり考えていたのになあ…

…

…

トン…

足音が聞こえる。

光が洞窟内に広がっていく。

「来たぞ…」

「キシシシ…」

先輩達がつぶやいています。

チャンスです。

ここでしつかりした所を先輩に見せれば…

クリーパーが陰から人間の姿を確認する。

僕のことをみと…

見るとそこには自分と同じ黄緑の服を着た女の子。

その時です。

僕の心が激しく震えだしました。

ただただその女の子を見ただけなのに。

そればかりではなく。

その女の子とお話したいとまで思ってしまった。

「あ〜れ〜」

クリーパーのすぐ後ろで先輩のスケルトンが飛んでいった。

「ここは廃坑。

エンダーマンが木材でバーカウンターを自作してポーションを作っていた。

「何なのでしょうか。」

「ん〜?」

エンダーマンが蝶ネクタイのホコリをはたいて首につける。

「僕は、女の子に会いました。」

「ほう。」

「その時です。僕の胸が大きく震えだしたのです。

この震えは病気なのでしょうか?」

「病気…か。」

エンダーマンはポーションを振る。

そしてそのまま話を続けた。

「それは恋…だね。」

「こい？」

エンダーマンはバーカウンターにポジションを置いた。

「彼女に、会いたいのだろうか？」

「うん。」

「ならば、勇気を出して、声をかけてごらんなさい。」

ぽーっ！

クリーパーの顔が赤くなる。

「なにやら熱がでてきたようです…」

「ほう、ならばなおさらだ。…恋とは、そんなものさ。」

「…うん。」

クリーパーは訳も分からずうなずいた。

それからというもの。



僕は勇気をだして告白しました。

返事は「よろこんで！」。

早速、夜にデートを申し込みました。

朝は苦手なので。

夜の都会はとてもきれいです。

まるで洞窟で光る鉱石みたいに。

「きれいだね〜」

女の子は僕に話しかけます。

「うん。」

僕も答えます。

たったこれだけなのに、僕はうれしかったのです。

エンダーマンのポーションを飲んだら、

心が更に躍りました。

女の子は僕と楽しそうに笑っています。

僕は嬉しさのあまり公園で踊り始めました。

気づけば彼女はもういませんでした。

そういえば途中で「もう帰らなくちや」と聞こえた気がします。

僕は立つ気力も無くなってその場で眠りました。

夢の中は全部彼女の色に染まっていました。

彼女の笑顔は心に焼きついていました。

僕はそれだけで十分でした。

十分幸せでした。

気がつくと、僕は草原で横になっていました。

そこで僕は、今のが全部夢だったことにきづきました。僕は告白もしていないし、彼女と笑っていないのです。僕が彼女に近づいたら、彼女は僕を避けていくだろう。もしくは僕は殺されてしまうだろう。

クリーパーは草原に咲いた一輪の花を見る。

きれいなバラです。

彼女に渡して、僕の気持ちを知ってもらいたいです。

僕は彼女に告白できますか？

クリーパーは月に問いかけるが、勿論月は答えなかった。クリーパーはうつむく。

…お月様は意地悪です。

…僕は彼女と…笑えないのですか…

「ぎゃあああああ!!」

クリーパーは南からの声を聞く。

…あの子の声です！

クリーパーは夢の情報から、バラを口で持っていて走っていった。

どこですか？

草原を駆け抜ける。

どこにいますか？

山を飛び越えていく。

ここなのですか？

砂漠の砂を蹴っていく。

聞こえない。

巨大なキノコの横を抜けていく。

感じられない。

堅い粘土を踏みしめる。

あなたはどこに…!!

冷たい氷の上を滑っていく。

!!

彼女が3匹のモンスターに襲われていた。

「ひっひっひっひっ…」

「この前はどうも」

「フツ飛ばしてくれて…」

「いや…いや!!」

夢の中の彼女の笑顔が思い浮かべる。

クリーパーは涙を流す。

僕は…

あなたの笑顔が見れただけで…

幸せです！

ありがとう!!

クリーパーが輝く。

ボオオオオオン…

「「ぎゃあああああああああああ!!」」  
モンスター達は吹っ飛んだ。

女の子は地面に落ちていたバラの花を取った。

「もしかして…私を…？」

女の子はその場に立ち尽くした。

それから。

女の子は大事そうにバラを家の鉢植えに植えたのだった。

私はこの話を讀むたびに思う。

恋って、人を勇気付けさせてくれるのだな、と。  
私もいつか、こんな恋を試してみたいな！

「おーい、ナバーナはおるか？」

「あ、はーい！」

ナバーナは机に本を置いたまま、駆けていった。



## 33：二つの燃える国

サクラノ国をあとにしたルーフス達。

広大な荒地に続く一本の道路を辿っていた。

荒地には動物も、植物も一切見当たらない。

驚くほど新鮮に、冷ややかな茶色の乾いた土が地平線まで続いていた。

ステーラは道路の白線で綱渡りをしている。

ジャックはバンダの辞書を開いて確かめた。

「この荒地の一本道……これだよね！」

見ると目の前の景色にそっくりな光景が白黒写真に写されていた。

「まさにここですね！」

「で、この道路の先の国はどんな国なんだ？」

ジャックは笑顔で話す。

「『ジエラーナ』って言う国で、石油で栄えた国だよ！」

国名はその土地の昔の言葉で『燃える』という意味らしいんだ。」

「なるほど…石油にうってつけの名前ってことだな。」

ジャックはいきなり冷静になった。

「でも『燃える』には二重の意味があつて…」

「二重の意味？」

チエリーが問う。

「その国と間に砂漠を挟んで『イクオラ・ジエラーナ』っていう国があつて…」

ジエラーナ国と石油問題で対立しているんだ。今も双方の国で犯罪が起きている。」

「石油問題か…」

「……」

ルーフスが沈黙する。

「…ってなんだ？」

チェリーとジャックがずつこける。

「あんちゃんも少しは知っておいてよ…」

「石油問題とは、石油の取り合いで対立する問題のことですよ！」

「あーなるほど。」

「ワン！ワン！！」

ステーラが吠える。

狼の鳴き声と共に前を見ると、そこには都会が広がっていた。

ビルを架け渡すガラスの通路を人がせわしなく歩いている。タクシーに並ぶ列からまた一人、タクシーに乗っていった。カフェにはカッブルが楽しそうにコーヒーを飲んでいたり、めがねの男性が足を組んで新聞を読んでいた。

「すごいですね〜！」

「グレートスライヴシティに戻ってきたみたいだ！」

「ワン！ワン！」

ステーラも大喜びのようだ。

「さて、まずはなんか食っていくぞ！」

「いいですねー！行きましょう！」

「おー！！」

「ワオン！！」

ジャック君は何が食べたいですか？

う〜ん…あ！ホットチキンに挑戦しようかな！

：

3人と1匹の会話を陰から見る黒服がいた。

誰かと連絡をとっているらしい。

ルーフス達は小さな屋台でホットチキンを作る様子を見ていた。

鶏肉にバターを塗って、唐辛子の粉を振りかけてかまどで焼く。

3人と1匹は顔を並べてよだれを垂らしていた。

「はい、どうぞー！」

美味しいチキンを求めて食べてきた、そんなことを言っているかのような

太ったコック姿のおじさんがホットチキンを1つずつ渡す。

「わあく♪ありがとうございますー！」

「クウン♪」

「おいしそ〜♪」

その時であった。

いきなりルーフス達の後ろの道路にすごい勢いで車が止まる。

ビーツ

窓が開く。

一人の男が話し始める。

「君達、旅人？旅人だよね？私はジユート放送局のドーカ・デナ記者というんだ！

早速だけど君達には我が放送局で君達の今までの旅路からこの国に来て何を思ったかを

聞かせてもらおう！大丈夫？」

「え、えっと」

「オーケー！では行こう！」

デナは無理やりルーフス達を車に押し込める。

コックのおじさんはルーフスのチキンを持ったまま困惑する。

「あの…？」

デナは一気にアクセルを踏む。

車は反動をつけて去っていった。  
そう、ルーフスのチキンから：

「俺のチキイイイイイイン!!」

ルーフスは窓から後ろに手を伸ばし、涙を道路に落としていった：

ルーフスの涙が小粒に収まった所で。

キイ!

「あれ?ここが放送局?」

見ると放送局以上に豪華な、神殿といった感じだ。

デナはさっきのテンションとは思えないくらいに冷静に話す。

「騙してしまつてすまなかつたな。だが仕方がない。これは国家機密だからな。」

「『国家機密う!?!』」

「ワオーン!?!」

「私は大統領からの命令で、君達をここに連れて来い、といわれたのだ。」

「でも…なんでただの一人の私達を…?」

「一人旅人…だからと答えておこう。これから、大統領から直々に詳細を説明してくれるからな。」

大きな扉が開く。

横にはボディガードが合わせて20人。

椅子の横にも二人、ボディガードがいた。

後ろの大きな窓からはこの都市の景色が覗いていた。

こげ茶色の椅子には大統領が座っている。

「ようこそ、燃える国、ジェラーナへ。」

黒いスーツに紺青のネクタイ。



白い肌に堀の深い目、薄い茶髪の男性だ。

「私がこの国の大統領、エルジア・ストックだ。」

緊張で口が一文字になるルーフスとチェリーの横で、ジャックは問う。

「何故僕達をここに呼んだのですか？ 国家機密ってなんですか？」

ストックは答える。

「私は、今対立している国、『イクオラ・ジェラーナ』と石油問題で和解したい。」

ストックはそのまま続ける。

「このまま彼らが悪い、私達が悪いといっているのは、何も進展しないと私は思った。そこで私は、この和解の手紙を筆したのだ。」

しかし、我が軍で各々が武器を持ち、行ってしまつては元も子もない…

油断した所を打ち滅ぼしてしまう、という意味をこめるだけになってしまうのだ。」

大統領は椅子から立ち上がり、面と向かつて話す。

「頼む。君達が、この手紙を届けてくれないか。」

突然の頼みにルーフス達は目を開く。

「でも、私達はこの国とは全く関係ありませんよ。」

そんな私達に、この国を賭けてしまつていいのですか？」

ストツクはうなづく。

「私のような、ジェラーナ国に偏つた者が行つてしまつては駄目なのだ。」

君達なら、この手紙を安全に、何の疑いもなく運んでくれる。

君達は『中立』な立場なのだ。：勿論、君達の判断に任せる。私のわがままを、

どうか叶えてくれるかな。」

ルーフスは真剣に悩む。

そしてジャックとチェリーとも話し合つた。

結果は…

「分かりました。やってみます！」

ストックは笑顔でルーフスの手を握る。

「ありがとう、勇者達よ！」

「あの一…」

ジャックが大統領に話しかける。

「もしこの手紙を届け終えたら…」

「この国の工場を見せてもらっても良いですか!!」

ストックは少年の目線でうなずく。

「わかった。私が工場に頼んでみよう。」

「ありがとうございます!!」

「では、行つて来ます!」

「幸運を祈る。」

バタン…

扉が閉じられる。

「…この手紙で、この対立が無くなればいいのだが…」

キィ…

「大統領、今の輩がフェイクの旅人達ですか?」

見ると金髪に金色の口ひげ、迷彩柄の帽子に制服を着た男が入ってきた。

「おお、アーティクル長官、そうだ。彼らがこの国の希望さ。」

「…なるほど、そうですねか。」

アーティクルは少し笑う。

「これで、本当に平和は訪れるのでしょうか…」

「…隣国も、戦争は望んでいないだろう。大丈夫だ。きつと上手くいくよ。」

二人は大きな窓から広大な砂漠の地平線に見えるイクオラ・ジエラーナを見ていた。

広大な砂漠を進むルーフス達。

イクオラ・ジエラーナはまだ遠い。

「まだまだあるな、これは…」

「あんちゃん、あれが石油だよ！」

見ると黒い液体がなみなみと湧き出ていた。

「これが機械の原動力になっているんだね。」

「うーん…この液体が…」

ルーフスはいまいち納得出来ていないようだ。

バババババババババババ!!

プロペラの音が近づいてくる。

「なんだ?…」

チエリーが後ろを見て慌てて言った。

「ルーフスさん、走りましょう!」

「え…!?!」

ババババババババババババババババ!!!!

後ろから赤いヘリコプターが突進してくる。

「わああああ!!」

ルーフス達は走る。

とにかく前に。

ダダダダダダ!!

ヘリコプターからマシンガンが放たれる。

ルーフス達のすぐ後ろの砂がはじかれていく。

ヘリコプターは執拗にルーフス達を追いかける。

「…逃がしてもくれなそうだな。」

ルーフスはジャックとチェリー、ステーラに言う。

「ジャック!チェリー!ステーラ!別れてヘリコプターを叩き落そう!」

「ワン!」「わかった!」「了解です!」

ジャックとステーラが左、チェリーが右、ルーフスは正面に立った。

ヘリコプターは作戦に勘付いて上昇し始める。

「くらえ！」

ルーフスが釘を発射する。

チェリーとジャックも弓矢を発射した。

ガン！ガン！ガン！

3つの攻撃は見事にヘリコプターに命中した。

ヘリコプターはふらふらと下降する。

「砂山に隠れろ！」

ルーフス達は急いで走る。

バアアアン！！

隠れるより前にヘリコプターは爆発した。



「おわあ!」「きやあ!」「うわあ!」「……!」

ルーフス達は衝撃につまづいた。

「あつぶね……」

ヘリコプターの方を見ると、慌てて赤いヘルメットの男が逃げようとしている。

「ジャック!あれ残ってるよな!」

「……!……わかった!あんちゃん!」

ジャックは黒い薬を男に投げつけた。

パシヤアン!

葉が割れる。

「あれ…」

男の動きが鈍くなる。

ルーフス達はすたすと男の前に立ちふさがった。

「おい、なんで俺らを攻撃したんだよ！」

男は奇術を使う魔法使いを前にしたような恐怖を感じて

土下座する。

「か…堪忍してくれえ！…こここれはある人からの命令でやったことだ！」

「いやだから…なんで攻撃したかって聞いてんだよ！」

心配すんな、俺達はお前をどうもしねえから。」

「…本当だな…」

男は深呼吸して話す。

「和解の手紙を届けさせないためだ！」

「…なんで和解しちやいけないんだ？」

「まあ、お前らは旅人だから知る由もねえよな。」

男は続けて話す。

「ジェラーナ国とイクオラ・ジェラーナ国には石油問題しかあるわけじゃない、

宗教問題もあるのだぞー！」

「宗教…!?!」

ルーフス達は驚く。

「でも、この辞書にはそのことは書いてないよ!?!」

男は辞書をまじまじと見た。

「宗教問題は最近、ある男から団体ではじまったものだ。

だからその古い辞書には載っていないんだよ。

…その男が我々のリーダーだ。我々は信仰する人が違うものと和解する気はない。」

「…その男って誰なんだ？」

「それは——」

「ここは大統領室。」

ボディーガード達が部屋の中で血を流して倒れていた。

大統領のスーツの肩が赤く染まっていた。

「まさか宗教問題の引き金が君だったとはな…！」

「アーティクル！」

赤い戦闘服を着たその人物が、大統領に銃をつきつけていた。



な。」

「今すぐ止めさせろ！」

「そうだ！」「ワン！」

ジャックとステーラも同意する。

チェリーもうなずいた。

「止めるものか……すべてはマクス・エルダム様に誓うためなのだからな！」  
ルーフスは男を振り落とす。

「ジャック、ステーラ。この手紙をイクオラ・ジェラーナに届けてくれ。  
俺とチェリーは大統領の所へ向かう。」

ジャックはうなずいた。

「わかった！必ず届けるよ！」

「パウ！」

ステーラも力強く吠える。

「よし、行こう！」

「待て！」

見ると赤いヘルメットの男がTNTの山に火をつけようとしている。

「…お前…まだ!!」

「俺がそれを許すと思うか…？マクス・エルダム様の思想を守るためなら！俺は例え身が滅んでも！」

ドオン!!

ルーフスが男の頭に強い蹴りを入れる。

男は砂漠を少し転がった。



「お前がそうしたら…：マクス・エルダムは喜ぶのか？」

…お前が自殺して、違う意見を殺して、マクス・エルダムは喜ぶのかよ！」

「……」

男は真顔で砂を見つめる。

「俺はマクス・エルダムの思想はわからねえ。だけど、

この世界のどこにも！心の底から戦争がしたいなんて奴はいない！」

ルーフスは動かない男を背にしてジェラーナに歩いていった。

チエリーも男を一度見つめてから、ルーフスの後をついていった。

「じゃあ、ジャック、ステーラ。頼んだぞ！」

ジャックとステーラはうなずいて、一つの包みを男の元へ置いて、

イクオラ・ジェラーナに向かった。

男が包みを開けると、そこにはパンとリンゴが二つずつ置いてあった。

男はパンを一噛みして、目を覆って震えた――

ここは大統領室。

アーテイクル長官は大統領の頭を足で踏む。

「あなたがあの隣国と仲良くしようとしたのが、間違っていたのだ。」

ストックはアーティクルを睨む。

「お前の目的は…サラピス教の弾圧だろう！」

アーティクルは冷静に答える。

「勿論だ。私はコーポリム教の一信者として、  
違<sup>たが</sup>う心を殺す義務があるのだ。」

「お前は宗教がなぜあるかを間違っている！」

ストックは怒鳴る。

バン！

ストックが目をつぶる。

パリン！！

アーティクルが銃を発砲する。

弾は大統領の後ろのガラスに当たり、一気に割れた。

ストツクの上に幾つもの破片が降り注ぐ。

「君はまだ一つ前の立場でいられるつもりなのか？」

ウ~~~~!!

パトカーのサイレンが聞こえてきた。

「…やはりな。」

「私の胸には……特殊な波長を感知する……防犯装置がしこんである。」

銃弾の衝撃波を……感知した瞬間……警察が作動するようになっていたのだ。」

ストックは息を切らせながら言った。

「だが残念だったな。警察にも私の仲間を紛れ込ませてある。」

ストックは目を見開く。

「警察が弾を一斉に撃つたその瞬間、何人が『流れ弾』で倒れるだろうか……！」

アーティクルの言葉が終わると同時に、人が悲鳴をあげて倒れる声があった。

「くそ……」

「さあ、命が惜しくば我々の言うとおりにするのだ……」

軍隊に命令しろ！『イクオラ・ジェラーナの人民を抹殺しろ』と！」

ジャックとステーラは砂漠を日が落ちる砂漠を一生懸命駆けていた。目の前には砂岩で組まれた神殿や住宅街が大きく見えている。

「…やっとなついた…大統領の宮殿は…」

遠く目だった宮殿が見える。

「あそこか…もう少しだね、ステーラ！」

「ワン！」

ジャックとステーラはもう一走り、砂を蹴っていった。

ボオン……!

大統領が壁に吹き飛ばされる。

アーティクルは大統領のもとへ歩んだ。

「早くしろ。」

ストツクは激しく呼吸をしている。

「……ハア……ぜつ……対に……言う……ものかあ！」

アーティクルはピストルを向ける。

ストツクは銃口を恐怖の目で見つめていた。

「これでも……どうだ……？」

アーティクルは人差し指を少しずつ曲げていく。

ストツクが目を閉じた。

「あ……！」

・ 「う！」

バタン！バタン！

断末魔と倒れる音がした。

「アーティクル指揮官！大変です！」

アーティクルはピストルの人差し指を戻す。

「どうした？」

「二人の少年少女が侵入してきました！」

「何！……あの鍛えられた隊員たちを……突破したというのか！！」

ボオン！！



大統領室の扉が開く。

「ストック大統領！」

「君達…!!」

ルーフスがアーティクル長官に殴りかかる。  
巨大な体は素早くよけた。

「お前がアーティクルか！」

「いかにもそうだ。小僧。何をしにきた？」

「国を繋げに来た!!」

少年は真剣な顔で言った。

チェリーがストックを大統領室からのつそりと抱えていった。

隊員たちと警官が倒れる廊下で、ストックは背負われながらチェリーにたずねる。

「手紙は…」

「ジャック君とステーラが運びに行っています。」

ストックは力を抜く。

「そうか。」

大統領室でルーフスとアーティクルが対峙する。

「恐らく、バークルの奴から聞き出したんだらう？」

「あのヘリで俺らを襲ってきた奴か？」

「そうさ、作戦ではお前らが死んで手紙を切り刻む。これで終わりであつたはずなのだがな…」

ルーフスは笑う。

「旅して歩く奴の体力なめんなよ！」

アーティクルは真顔のまま構える。

「すまなかつたな。全く、なめていたよ。」

ブウン!!

鞭のごとく巨大な左拳がルーフスを襲う。

ルーフスは左に避ける。

バキツ!!

床に拳が刺さった。

アーティクルは拳を抜いて木片を吹いて落とした。

「お前は共存のことが考えられねえのか？」

右拳のアップパーがルーフスを襲う。

ルーフスが避ける。

「違<sup>たが</sup>う心を持つ者と暮らして、何が面白い？」

左足のかかと落としが襲う。

「この世界に立つ者は、私と同じ思想を持つ者だけでいいのだよ！」

ルーフスがまた避ける。

バキッ!!

床にまた一つ穴があいた。

「へえ…じゃあ…」

アーティクルの右拳がルーフスの顔を狙う。

ルーフスが両腕で受けた。

ルーフスが後ろへ押されていく。

しかし途中で止まった。

「現在いまと全く変わらねえ世界じゃねえか！」

「なに？」

アーティクルの攻撃が止む。

「肌が違う、信じる人が違う、持つてるお金が違う、先祖が違う…  
その前に俺達はヒトだぜ？」

ルーフスが構える。

「お前と…何が違うんだよ!!」

ルーフスのパンチがアーティクルの腹に素早く向かう。

ルーフスが続いて次々とパンチをする。

「ハッハッハッハ…なんと平和ボケな思想だ！では考えてみる！

世界全体で皆が平和にできるのか？」

「できるさ。」

「なぜだ？その原理が答えられるのか？答えろ！」

「…世界の皆が心の奥で、平和を願っているからだ！」

ルーフスが構えた。

その時。

アーティクルの目に何かが見えた。

小僧の後ろに

痩せ細り、ローブを巻いた老人の姿が見えた。

マ…マクス・エルダム!?なぜコーポリム教ではない奴に力を貸しているのだ…!?  
『私は…悲しいぞ。私の教えは…戦争に導くものではないのだ…』

ドスン…

アーティクルが床に倒れた。

ルーフスは腕を下ろす。

「…終わったか。」

ドタドタドタ…

警官が大統領室になだれ込んできた。

「アーティクル！覚悟！…アレ？」

「あ…こいつをよろしく頼むよ。」

「…あ、ああ…」

警官たちがアーティクルに手錠をはめた。



ガチャリ。

こうして、違う宗教を弾圧しようとする  
アーティクル長官の企みは阻止されたのだった。

## 35 : パン工場見学!

アーテイクルが逮捕されてから。

ジャックとステーラはイクオラ・ジェラーナの大統領に無事、手紙を届けた。

イクオラ・ジェラーナの大統領はにっこり笑った。  
どうやら手紙に同意しているようだ。

「ありがとう、勇者達よ。」

ジャックとステーラがジェラーナ国へ戻った後、  
ルーフス達は大統領室でストックから感謝の言葉をもらっていた…

「ありがとう。君達は隣国との平和を守ってくれたと同時に、私も救ってくれた。」

一言では言い表せないほどだ……だが皆、もう疲れているだろう。

私が君達にホテルをとつておいた。ドーカ・デナに送ってもらいなさい。」

「ありがとうございます！」

「あの……工場見学は……」

大統領はジャックに笑顔で言う。

「心配はない。パン工場にコンタクトをとつておいたよ。」

ジャックは慌ててお礼を言った。

「ありがとうございます！」

ルーフスとチェリー、ステーラも笑った。

ルーフス達は一晩、ホテルでゆっくりと休んで翌日、パン工場へと向かった。

パン工場の受付係が出迎えていた。

「私が今回、案内を務めていただきます、アリス・ベルガートと申します。

本日はよろしくお願ひします!」

「「よろしくお願ひします!」」

「ワオン!」

「あ…すみません。この工場内は動物は入れることができないので…」

ステーラはしょんぼりする。

どちらかというどパンが食べたいだけらしいのだが。

「見学の最後にパンをステーラくんの分と合わせて、4つお配り致します。」

ステーラはほっとして、尻尾を振った。

「ステーラったら食いしん坊なんだから!」

チエリーは笑った。

ガラスで仕切られた空間の中に小麦が成長している。

成熟したと思えばレーザーで破壊され、パイプの中へ落ちていった。

小麦畑はずっと奥まで続いており、横幅にも同じく続いていた。

「ここでは小麦を育てて、収穫をしています。小麦がなければパンは作れませんからね。

ここでは1秒で約20000束もの小麦が収穫されています。」

「へえ！」

「すごいですね…」

「では、次のフロアに進みましょう！」

パイプの中を小麦が整列して左から流れてきた。

下にあるもう一つのパイプには種だけが流れている。

小麦のパイプには途中で違うパイプから小麦が流入している。

そしてそれぞれのパイプは多くのチェストに分配されていった。

「ここでは一度種と小麦を倉庫に格納し、整理をしています。」

「なぜ一度整理をするんですか？」

ジャックが質問する。

「次の工程で自動作業台でパンを作るのですが、整理をしないとそこで詰まって、溢れてしまうことがあるのですね。それを改善するために整理をしています。」

ちなみに、ここで集められた種は先ほどの工程に戻って、再度植えられるようになっていきます。

では最後の工程に移りましょう！」

さらに進むと、そこにはたくさん作業台が等間隔に置かれていてパイプにつながっていた。

右に通じるパイプからはパンが次々と出ている。

「「おおー」」

「ついにパンが出来ましたね。あの作業台にはパンのレシピが設定されています。後はパイプでチェストに貯蓄、トラックで出荷をするのみです。では、階段を降りて、玄関へ戻りましょう。」

3人は階段を降りていった。

「はい、どうぞ。」

「わあ！ありがとうございます！」

3人は4つのパンを受け取った。

「おいしい！」

「うめえ！」「うまい！」

「ステータ！」

「ワン！ワンワン！」

「どうやらパンが待ちきれなかったようだ。」

「はい、パンだよ!」

ステーラが口でくわえて、ムシヤムシヤと食べる。

「ワウーン!」

ホテルまでの車の中で。

ドーカ・デナは3人に感想を聞いた。

「どうだった? パン工場は?」

「すつげえ面白かったよ!」

「パイプの中をパンが流れる様子がとても面白かったです!」

「とても勉強になりました!」

「ははは。楽しめたようだね。…」



ドーカ・デナはホテルの前で車を停めた。

「じゃあ、皆、旅を楽しんでこいよ！」

「「ありがとうございました！」」

ドーカ・デナは笑って車を発進させる。

「じゃ、明日からまた、この都市から旅に出るぞ。」

「はい！」「ワオン！」「承知！」

ルーフス達はホテルへ入っていった——

ドーカ・デナは大統領室に入る。

「只今、ホテルまで送りました。」

「おお、ごくろう。パン工場、楽しんでいたかな？」

「とつても楽しめたようです。」

「それは良かった……」

笑ってから一変、ストックは真顔で椅子に座る。

「…先ほど、刑務所から連絡があつた。アーティクルが逃げ出したそうだ。」  
「アーティクルが!?!」

「何でも、厚さ2mのコンクリートを拳で破壊してしまつたらしい。」  
「ええ!?!」

ドーカ・デナは驚く。

「今、警察が調査を進めている。この都市から逃げていなければいいが…」

「ここは荒地。」

一人の巨大なコートの男が歩いていった。後ろにはジェラーナのビル群が見える。

「…マクス・エルダムは私をも裏切った…だが諦めないぞ…私が生きて正しいのだからな！」

「待て。」

コートの男は振り返る。

そこには赤いヘルメットを脱いだ男がいた。

「バークルじゃないか。どうした…私についてくれるのか？」

「残念ながら、その逆だよ。アーティクル。」

「何だと？」

「俺達は間違っていたんだ。マクス・エルダム様は殺人をしても絶対に喜ばないだろう。

もう、終わりにしよう。アーティクル。」

「それは、勿体無いな。」

ズキーン！

バークルの胸を銃弾が突き抜ける。

バークルは倒れる。

その目は衝撃を物語っている。

バークルを撃つたのはアーティクルではない。

バークルの後ろにいた——白衣の男だ。

その後ろにはまるまると太った男がいた。

「アーティクル……と言ったね。僕と手を組まないか？」

「お前は……誰だ？」

「……なあに、肩書きも何も無い、ただの一般人だよ。」

白衣の男がアーティクルに近づいて小声で話す。

「僕があれば、この世界は我々のものになる。」

静かな荒野を風が、冷たく走っていった。

## 番外編7：恐怖の館

ザー………

ゴローン!!

ピシャァン!!

天気は嵐。

「クウン！」

「ぎゃあ!……すごい雷！」

「あんちゃん……今日すごく寒いよ！」

「くっそ……こんな草原の中心で雨に会うなんてな……

……お！」

みると松の林の中に黒い屋根が飛び出して見えた。

「あっちになんか家あるぞ家！」

「泊めさせてもらいましよう！ルーフスさん！」

「行こう！あんちゃん！」

「そうだな……」

「ワオン！」

ルーフス達は屋根の見えるほうに走って行った。

目の前には黒くて大きい洋館。

とつても不気味なオーラが漂っている。

「うそ……」

チェリーの瞳孔が白く染まっている。

その目からだらだらと涙が垂れていた。

「チエリーさん！しっかり！」

「でもこのままじゃ風邪引いちゃうぜ。覚悟決めるんだ！チエリー！」

「ひいん！ルーフスさんのバカあ!!」

「大丈夫だって！お前の剣術ありや幽霊も逃げるって！」

チエリーはルーフスに引きずられながら入っていった。

ステーラとジャックも後に続く。

中はきらびやかにカーペットが敷かれ、豪華なシャンデリアまで点いている。

「な？家は見かけによらねえだろ？」

チエリーはほっとした。

「誰も住んでいないのかな？」

「でも電気が点いているってことは誰かいるだろ？」

「あ！あの！」

チエリーは二階に見えた男に尋ねた。

「私達、旅の者なんですけど、道中に雨に降られてしまって…」

「おお、そうか。じゃあ…1、2、3…、よし、こっちの3部屋が空いてるぜ。」

「ありがとうございます！」

チエリーは2階へ登っていく。

「おじゃまします。」

他も後に続いた。

チエリーが最後の段を上って男を見ると、視線が下に集中する。

チエリーがピタッと止まる。

「ん？チエリー、どうした？」

「ああ…ああ…あああ!!」

チエリーが震えて声を出す。

ジャックが前を覗く。



「前に何かあるの……!!!!!!」

ルーフス達は一階から、男の上半身しか見えていなかった。  
しかし……その男の下半身が……

蜘蛛であつた——!!

「ぎゃあああああああああああああああああああああああ!!!!」  
「ぎゃあああああああああああああああああああああああ!!!!」  
「うわあああああああああああああああああああああああ!!!!」

ステーラにいたっては放心中。

ルーフス達はステーラを引っ張って男の案内する方向とは逆の廊下を走って行った。

「あらら……そつちは我々の部屋なのに……」

「やっぱりお化け屋敷じゃないですかー！やだああ!!!」

チエリーが号泣する。

「だってあんなに普通に案内されちゃ誰だつてついていくだろー!？」

「今日僕夢で見ちゃいそうだよー!!」

「…」

「おやおや、雨に降られたんですか、びしょぬれじゃないですか。」

前には足が見えた。

視線を上げると…

顔が鶏であつた…

「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!」

「もうやだ…」

「あああああああああああああああああああ!!!!」



「チエリー！気をしつかりもてえ！」

「もうどうにでもならないじゃないですか！もうやだあ！」

「なんだよく！ここはああああ!!」

「…」

ここは2階のとある広い部屋。

一人の黒髪ボブショートの女性が人の顔を縫っている。

こちらは茶髪のぼさぼさで黒いマント、瓶底めがねの男が狂ったように何かを作っている。

台にはイカ足にクリーパーの体、豚の頭。

「ひひひひ…亡者の血と魂、それに移す体があれば…はははは！

奇怪な生物などいくらでも作ることが出来る！

楽しくな！つたら楽しいな！」

「正直趣味悪いよー。ネクロー。」

ネクロは驚いて言う。

「君もだよ!!ビアンカ!?!なんで人なの!?!普通テディベアとかでしょ!?!」

一度落ち着いてネクロは言った。

「まあ君がいてこそ、この悪趣味がはかどるつてもんだ。サンキューよ。」

「はいはい。」

ドーン!

ガラガシヤン!!

丸石で閉ざされた部屋が壊され、ネクロの前を3人と1匹が通り過ぎる。

「ごめんなさーい!…!」

ネクロは目を丸くしてそれを見つめていた。

子供と目が合った。

ビアンカはそのまま縫い続けている。

「なんだったんだ、一体…さてと、続きを…あれ。」

拾い集めたパーツにはイカ足が足りなかった。

「あんちゃん、」

「なんだ！ジャックどうした！」

走りながらルーフスが喋る。

「さっき普通の人がいなかった？」

「さあな！とりあえず一階に続く階段見つけて逃げるぞ！」

「さんせいです…」

「…」

チエリーはもう泣きつかれたようだ。

「ところでチエリーさん、」

「え？」

「その手に掴んでるの、何？」

チェリーは左手を見る。

イカ足がうのようによと動いていた。

「きゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」  
チェリーの速度が一気に上がる。

「あ、おい！待てチェリー!!」

「チェリーさあん!!」

「…」

投げられたイカ足は地面でもがいていた。

なんとか。

3人と1匹、外へ出ることが出来た。

気づくうちに外は晴天。

「はあ…怖かった…」

「まあいいじゃねえか。旅にはこれくらいの刺激もなくちやな！」

「…まあ、そうだね、あんちゃん…」

「…ワオ!?!」

ステーラがやっと起きた。

ステーラが草露を飛ばしながら走りまわる。

晴天だったことに大喜びのようだ。

「よし、行くか！」

「うん！」「はい！」「ワオン！」



いきなり2階の部屋の全部の窓が開く。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

ルーフス達は微笑む：

そして一気に吐き出した。

「「二度と来るかあ!!!」

「ワォーン!!」

その怒声は林中に響いたのだった：

## 36 : 空の英雄

燃える国を抜けて。

広大なひまわりの咲いた草原を駆けるルーフス達。

天気は快晴。ひまわりを揺らしてそよ風が草を持ち運んで行った。

チエリーはかわいいひまわりの花にテンションが上がっている。

ひまわりの草原を腕を広げて踊っていた。

「うふふ♪ルーフスさん、ジャックくん！早く早く♪」

「チエリー、今日はすげえ楽しそうだな！」

「チェリーさん、かわいいものには目が無いからねー！」  
「ワオン！ワオン！」

ステーラも笑顔でチェリーの元へ駆け出して行った。

「あ、おい、待てよ！」

「いいね〜！」

ルーフスとジャックも後に続いた。

チェリーの回転が止まる。

目の前には広大な海。

「すごい…！」

「ワン！ワン！」

ステーラは水遊びを始めた。

「お、なんだ？海か？」

「ボートで行かないとね。」

ジャックがボートを取り出す。

「チエリー、食べ物は何だけあるか？」

「えーと…3日は大丈夫です。」

「よし、じゃあ海を越えていこう！」

ジャバジャバ…

ガブツ！

ステーラの尻尾が何かに挟まれる。

「キャオン！キャオン！」

「ん…ステーラ、どうしたんだい…って！やばい！」

「きゃっ！」「うわ!!」

ステーラがサメに尻尾を噛まれていた。

ジャックが咄嗟に攻撃する。

「このーこのー！あつちいけー！」

ハンマーで叩かれたサメは遠くへと逃げていった。

ステーラはジャックの後ろに隠れる。

「大丈夫か？ステーラ…」

「クウン…」

なかなか怖かったらしい。

「あんちゃん、チエリーさん…アレ見て…」

「ああ？」

見るとうじやうじやとのこぎり型のヒレが右往左往している。

サメが群がっているのだ。

「これじゃ、海に出られませんか…」

「しかたがない…ちよつくらゆつくりするか！」

「やったー♪」

「わーい！」

「ワオン！」

草原に寝転ぶ3人と1匹。

そよ風が眠気をうながす。

「眠くなってきた…」

「いい天気ですね…」

「すう…」

「クウン…」

ここは海上。

大きな翼が風を後方へ流している。

クジラのような巨大な体が海に影を落とす。

飛行艇だ。

その飛行艇の中から一人の男性が望遠鏡で覗いていていた。

「………困り人か？」

飛行艇は徐々に下降していった……

草原のルーフス達に影がかぶさる。

「……？」

ルーフス達は目を開ける。

そして起き上がった。



後ろを見ると巨大な飛行艇が着陸しようとしている。

その巨体はずつしりと草の上に乗っかった。

「すつげえでけえ…」

「飛行艇…!?!」

「なんなのでしよう…」

「グルルルルル…」

ステーラは威嚇の構えだ。

鉄のドアが開く。

そして中から黒いマントと警官帽をかぶった女性が出てきた。

次に赤いマントと警官帽の男性、黄色のマントと警官帽の女の子、水色のマントと警官帽の男性が現われた。

黒い女性が問いかける。

「君達、何か困っているようだね。」

「えつと…」「あなた達は…?」「誰っすか?」

黒い女性がどこに持っていたのか、ラジカセを持ち上げて再生ボタンを押した。  
カチツ。

テーテーテーテーテーテーテー♪

ルーフス達はポカンとする。

いきなり黄色い女の子が前に出てきてポーズを決める。

「元氣爆発!おてんばな黄色!プルボネ!」

赤い男が前に出てきてまた違うポーズを決める。

「燃えろ魂!ネツケツの赤色!オリー!」

水色の男性が前に出てきてポーズを決める。

「清らかな心…清純の水色!テンドロン!」

そして黒い女性が決め顔でポーズを決めた。

「そして強い魅力！裁きの黒色！モイラ！」

そして赤が左、水色が後ろ、黄色が右、黒が前に来てポーズをとる。

「我ら、空飛ぶお助け隊！カラーリーオンズ！」

ポオオオオオン…

音楽が止まると同時に、草原に静寂が走る。

即席のテーブルを作って。

「ほう…サメがいてここから北へ行けないと…」

「はい。そうなんです。」

モイラは豊満な胸を片腕で支えて、カフェラテを飲んでいる。

テンドロンはモイラの傍で控える。

プルボネはクッキーをガツガツと食べている。

オリーは草原の上でトレーニングをしているようだ。

モイラはカップから口を離して言う。

「では私達の飛行艇で北まで送ろう。」

「いいんですか!?!」

「ああ、それが私達の仕事だからな。」

「…おい! お前ら! 行くぞ!」

「このクッキーおいしい〜♪」

「もつとだあ!! もつともつとお!! 私のは熱を求めているう!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

プルボネとオリーはまだやっている。

「こら! 行くぞ! お前ら!」

まだやっている。

モイラが涙目になる。

「ぐすん…いい加減泣くぞお前ら…」

テンドロンが汗を流す。

「また…隊長たる人が泣かないでくださいよ…」

「大丈夫かな…」「さあ…」

プルボネとオリーにたんこぶが出来た所で。

飛行艇は既に空を飛んでいた。

テンドロンが操縦を行っている。

モイラとプルボン、オリーはいつもの席に座る。

ルーフス達は客用の席に座っていた。

客席からジャックが尋ねる。

「テンドロンさん。」

「どうしました？」

「この船って…なんで浮いてるの？」

「ああ…この船はこの操舵輪が全て制御しているのです。」

「この操舵輪だけで…!?…不思議だなあ…」

テンドロンが慌ててモイラに報告する。

「隊長、右前方から空賊船が…！」

「なんだと…!?」

ドオン!!

飛行艇が大きく揺れる。

船が接触したようだ。

「え…空賊って…なんですか？」

「その名のとおり、空の海賊だよ。」

続けてプルボネが話す。

「でも海賊は堂々と向き合って戦うのに対して、空賊は空から奇襲をしかけるの。」

更に続けてテンドロンが話した。

「空賊は卑怯な臆病者達が集まった集団だ。」

オリーが話す。

「前なんか、空中から爆弾落として村を壊滅——

戦わずして村の資材を掻っ攫っていったんだぜ……？」

「空にそんな奴らがいたのか……」

「がーっはっはっはっはあ!!」

大声が窓の外から聞こえた。

ぶつくりと太った船長がこちらに話している。

「その飛行艇の船長……！その船ごと我らにゆずれえ!!」

「へー！貴様らなんぞにこの鋼鉄の飛行艇は譲れないねえ!!」

ぶつくりと太った船長はモイラに一目ぼれしたようだ。

「うほー!!まさか船長がセクシーな姉ちゃんだったとは！

変更だ変更!!船長と飛行艇ごと俺にゆずれえ！」

「隊長があんたの彼女になるわけないでしょ？デブ。」

プルボネが辛らつな言葉を吐いた。

空賊船長は怒りをあらわにしている。

「あの小娘……！やったるぞ！お前ら！」

テンドロンがルーフス達に言う。

「ここでもう少し、お待ちください。」

モイラとオリー、プルボネが飛行艇の屋上に乗る。

テンドロンも外に出た。

相手は遠くからこちらを見ている。

「がっはっはっは！お前らに親切に足場を貸しはしないぜ！」

ルーフスは歯をぎしと噛む。



「くっそ〜！めんどくせえ奴だ！」

「カラーリーオンズは、どうやって戦うんですかね…」

モイラは笑う。

「ありがとよ…こつちのほうが好都合だ！」

空賊船から大砲が撃たれる。

モイラが剣で跳ね返した。

空賊船に弾が命中した。

モイラが呆れる。

「はあ…あいつらバカか？」

「一斉に射撃しろ！」

船から幾千もの矢が飛んできた。

モイラ達は壁に隠れる。

「バカでもなさそうですね。」

「わたしがまず先にやっちゃうよー！」

プルボネが弓を引き絞る。

「元氣！ばくはくつ!!」

ピュン…

ボオオオオオン!!

「」「」「あああああああ!!」「」「」

甲板が崩れて船内が丸見えになった。

ルーフス達は観戦している。

「なんだ…？いきなり爆発したぞ…」

「なにしたんだろう？いったい…」

「船長！奴ら、どうやら特殊な矢を持っているみたいですよ！」

「ええい、なら、私達に当たらなければいい話だ！」

空賊船長が操舵輪を後ろに傾けた。

空賊船が上昇する。

「がっはっはっは!! 私達にあててみる!」

「どうやら俺の出番のようだ!」

「おお、頼むぞ、オリー。」

オリーが同じく弓を引き絞る。

「うおおおおおおおおおおお!」

オリーが何連発も矢を空賊船の底に向けて放つ。

底に刺さった矢から火が吹き出る。

「矢から火が出るよ!?!」

「じゃあさっきの爆発も矢なのか?」

「たぶんそうですね。あんな遠距離から爆弾は投げ込めませんし。」

「船長！船底から火が!!」

「何!?やばい！すぐに下降だ！海で消化するぞ！」

空賊船が下降していく。

「それを私達が許すと思っても？」

「よし、テンドロン。やれ。」

テンドロンが弓を引き絞った。

テンドロンの矢が甲板に落ちる。

船員が挑発する。

「がっはっはっは！当たってないよーだ！」

ゴロゴロゴロ…



「なあに!!?…接近戦だ!野郎ども!」

船長が操舵輪を回して飛行艇を正面にする。

「突撃だ!!」

「「うおおおおおお!!」」

空賊船ごとこちらに迫ってきた。

モイラが前に出る。

「さあ、いよいよ私の出番だな。」

モイラは弓を引き絞る。

「いったい…モイラさんはどんな矢で攻撃するんだ…?」

「わくわく…」「どきどき…」「ワオワオ…」

ルーフス達は唾を飲む。

矢が船長に向かって飛んでいった。

ズバシ！

「ウゝ…」

船長の胸に命中した。

「せ…」

「「「「せんちよおおおおおおおおお!!!」」」」

「大丈夫だよ。そいつは死んでいない。」  
モイラが言う。

「…へ？」





ルーフス達は目が点になる。

「は…」「これが…」「隊長の矢の力…?」「クウン?」

チエリーが冷静に考え始める。

「で、でも…冷静に考えると怖い…」

人間を一瞬で動物にしてしまうなんて…!

「お、おう…そうか?」

「ライモンみたいなことになったね…」

「…?」

ステーラは首を傾げる。

モイラが厳しい目で言う。

「さあ、どうする? もう一人二人、鶏になりたいか?」

「とーとんでもねえ!!」

「「逃げるー!!」」

空賊船はすごい勢いで逃げてった。

モイラ達はハイタッチを交わす。

飛行艇の中。

飛行艇は巨大な海を北に進んでいた。

ジャックが笑って言う。

「モイラさん、あんな矢を使っているんですね。」

モイラのほほが赤く染まる。

「や…やめろよ…その話は…」

オリーが笑って言う。

「実はこの矢のレシピは魔女にもらったんだが、そんな時に隊長がもらったのが余ったこの矢だったってわけさ。」

「ははは、そうなのか！」

「しよ…しよ…しよ…うがないだろ、もう一つの矢はただ水を凍らすだけで、戦闘向きではなかったんだから…」

「いつもながら照れてる隊長かわい〜♪」

プルボネが抱きつく。

「や、やめろ！あつくるしい！」

「ところでさ…」

ルーフスが問う。

「このカラーリーオンズって、なんなんだ？」

抱きつくプルボネをおいて、モイラが答える。

「この組織は私が、私的に作った組織だ。」

…私は今の警察だけじゃ足りないと思う。

真面目に書類をどうたらとか、そんなことを考えている大人に子供は安心できないと思う。

この世界には空想の中でいう英雄ヒーローが必要なんだ。

だから私はこの組織を作った。空を飛ぶお助けヒーロー…」

モイラは拳をにぎる。

「そいつらを見た子供達は、どれだけ満足することだろう！

私には分かる。私も、昔はその一人だったから！

だから。私はこいつらと一緒にヒーローとして皆を救ってあげたいんだ！」

プルボネとオリーとテンドロンは笑う。

「私は、隊長のそんなところに惹かれたんだよねー！」

「隊長！おれあ永遠にあなたについていきますぜ！！」

「あなたの正義というものに改めて感心しました…！」

ルーフスも笑う。

「確かに、こういう奴らがいれば、子供達も笑っていられるな！」

「ワオン！」

ジャックとチェリー、ステーラも笑った。

ここはるか北の大地。

山岳地帯の頂上に飛行艇がとまっていた。

「ありがとうございます！モイラさん！」

「またいつか会いましょう！」

「君達も、旅路、気をつけろよ。」

「チェリー！クツキーおいしかったよー！」

「今度会ったら、一緒に作りましょうね！」

「これこそが友情！一期一会！なんと熱い！熱い！」

「またいつの日か。」「ワオン！」

空に飛行艇が遠ざかっていく。

ルーフス達は空を飛ぶ英雄達ヒーローに手を振った――

ここはとある熱帯雨林。

謎の木製の小屋が建ててある。

傍にネザーゲートが作ってあった。

そのネザーゲートからゾンビピッグマンが現われる。

ゾンビピッグマンはしごを上って、扉を力強く開けた。

「おい、あんた。一人の人間にあのおまじないを教えたとは本当か。」

一人のばあさんが不適な笑顔で応える。

「ケツケツケ：聞かれたから教えただけじゃ。」

ゾンビピッグマンは荒立てる。

「ふぎけるな。あのおまじないは下手をすれば世界が滅ぶ力を持っているのだぞ!!」

ばあさんは右の人差し指で右耳をほじくる。

「そんなのは作った本人じゃから分かっていないわけないじゃろう。」

「では何故教えた!?!」

「私は、争いこそが平和を生むと思っっているからじゃ。幸せなだけでは平和は生まれな  
いのじゃよ。」

ゾンビピッグマンはため息をつく。

「あんたの考えは何年話していても解らない。」

ゾンビピッグマンは扉を開けた。

「あんたに振り回されてばかりでは身が持たない。あなたはもう私の友人でもなんでもない。じゃあな。」  
バタン！

「ケツケツケ…」



## 37：池を抜けると：

ここは地獄。

4人の人物が要塞の道の上を歩いていた。

黒いスケルトンが4人の前に立ちふさがる。

「ミナテキ…ハイジヨスルノミ…」

「ひい！」

白衣の男は慌てて制止する。

「ま…待ってくれ…！まだ殺さないでくれ…！お前が必要なんだ…！」  
「…!？」

ポオン!!

ドカン!!

巨大な男が不意打ちに後ろから地面に押しつぶす。  
スケルトンはレンガの中で息絶えた。

白衣の男は笑って答える。

「おまえらの…怨念のみがな。」

箒を持った女の子は言う。

「あんたってなんて残忍なのー？信じられない。」

白衣の男はスケルトンから落ちた骨と石炭をマグマの海へ投げた。

「お前ほどじゃないさ。チェリー。」

白衣の男はぶくぶくと太った男に尋ねる。

「おい、ランプス。お前に頼んどいた強力な武器は大丈夫か？」

「まーかせるのデース。私のこのありあまーる財力があれば、武器はいくらでも仕入

れられマース。

：アナタについてきいて良かったデース。あの憎きサクラノ国を手中におさめられーる!!

ワホホホホ!!」

アーテイクルはひっそりと白衣の男に尋ねる。

「なぜあの男はついてきたのだ？」

「俺が騙してやったのさ。それにまんまと引っかけた間抜けってことさ。」

本当はお前の国すらも滅ぶ結果となるのにな…」

アーテイクルも笑う。

「ほほう、それは傑作だ。」

白衣の男はつぶやく。

「まずは…この強力な武器のテストといこうか…」

白衣の男の右手には右側面に穴の開いた黒い頭蓋骨が握られていた。

木が覆いかぶさる森を、ルーフス達は走っていた。

ルーフス達の走った跡に矢が突き刺さる。

「くそー！なんなんだこの森！」

「まるで夜中みたいだね！」

「矢があたりそうですー！」

「バオ！」

前方に日の明かりが見えた。

「…ん?…」

「何かありますね…」

「…池?」

ルーフス達は陰から日のあたる場所へ出る。

見回してみると、モンスターが見失っている。

なんとかまいたようだ。

そして。

目の前の池。

花で飾られた小さな池。

その周りは丸石で飾られている。

ルーフスが池を覗いてみる…

「ああああ!!」

「どうしたんですか？ ルーフスさん。」

「ダイヤモンドじゃん！」

「え!? なんで!？」

見ると確かにダイヤモンドが沈んでいる。

「ラッキー！」

「あ！ ルーフスさん！ だめですよ！」

「でも池に落としたりして事はいらなくてことだよね？」

「あ…：そうですね。」

「もーらおうつと。」

ルーフスが池に足を踏み入れる。

ジャボン!!

ルーフスが丸ごと池に入っていった。

「ああ！ あんちゃん！」

「ルーフスさーん!!」

「ワオン!？」

……

息の泡がすぐに止まった。

チェリーは蒼白する。

「まさか…死んじゃった!？」

チェリーが急いで飛び込む。

「ああ!チェリーさん!待って!」

ジャックはチェリーの足を掴む。

「ワオ!?!ワオン!」

ステーラもジャックの足に噛み付いた。

ジャボン!!

…

モンスターたちは3人と1匹をいまだに探していた。

ルーフスが池に沈んでいく。

「がぼごぼー!がぼごぼー!」

(やべえ…!!深っ…!!)

チェリー、ジャック、ステーラもまっさかさまに沈んでいく。

「ごぼー!かぼー!」

(なんて深い池なの…!!このままじゃ…)

「がぼごぼー!ごぼー!」



(うう…息が苦しい…そして足がなんか痛い！)

「ばぼー！ばぼー！」

(バウ…！ワオ！)

ボシヤン!!

「「ぶはー…！ぶはー…！ぶはー…！」」

「ぶー…！ぶー…！」

3人と1匹は池から出た…!?

3人と1匹は池の周りに寝転がる。

「…あー…！あー…！あー…！」

「死ぬかと思った…！」

「はあ…！はあ…！」

「クウン…！」

「…( )は？」

見れば木に覆いかぶさった森だ。

だが、さつきと少し雰囲気が違う。

「さつきの場所じゃないようですね…」

「とにかく、散策してみようよ！」「ワオ！」

「そうだな。」

ルーフス達は森を歩く。

薄暗くて気味の悪い森。

ところどころでモンスターの鳴き声が聞こえる。

「…怖いなあ、この森…」

「急ぎましよう、ルーフスさん。」

「そうだな…」

左に巨大な蜘蛛にスケルトンが見えた。

ルーフス達は一瞥して通り過ぎる。

……

ルーフス達は確認するため後ずさりした。

「おりよりよ？人間だぞ？…」

「キシユキシユ…」

ルーフス達は口を大きく開く。

「逃げろー!!」

ルーフス達は走る。

「び、びつくりしたー!」

「なんであんなさりげなくいるんですか!」

グルルルルルル…

「「「ガオウ!!」」」

5匹の黒い狼がルーフス達を襲う。

「「ぎゃあああああああああ!!」」

「ワオーン!!!」

ルーフス達がスピードを上げる。

ルーフスが先頭を走る。

狼の鳴き声が聞こえなくなった。

「…はあ…まいたか…！」

いるのはルーフス一人。

「え」

どうやら、仲間までまいてしまったようだ…

くくくくチエリーの冒険くくくく

チエリーは走る走る。

既に狼は来ないが、チエリーは気づいていないようだ。

「はあ…はあ…」

前が明るくなる。

森の出口のようだ。

チエリーは息をふかくする。

「はあ…はあ…」ここまでくれば…!!」

チエリーは目の前の景色に驚愕する。

そこは虹色に染まる森。

草は青や緑に染まり、葉は七色に染まっている。

「素敵…!!」

~~~~ジャックの冒険~~~~

ジャックは走る走る。

狼はもう来ていない。

そして暗い森から抜けた。

「すっげー……」

そこは角の長い羊や鹿、猪がいる草原。

そこには天まで高く生える巨大な木が生えていた。

ジャングルの木の比ではない。よりもっと高く、太い木だ。

その木の幹にはセミが羽をかき鳴らしている。

ジャックは草原を進む。

「…にしても、ここはどこなんだろう…」

池の底にこんな空間があるってわけじゃないよね…」

すると、前に巨大な広場が見えた。

「…う…なんだろう、ここは。」

ジャックが広場に踏み入れる。

…?

奥に何か見える。

「…たい…たいよ…」

「…?」

奥から迫ってくる！

緑の大きな蛇だ。

「いたいよお…!!! いたいよおおお!!!」

大きな蛇がジャックに迫る。

何やら泣いている。

「うわあああ!!!」

くくくくステーラの冒険くくくく

ステーラは黒い狼達と対峙する。

黒い狼のリーダーが一声「ガウ！」と吠えた。

他の狼が一齐に飛び掛る。

ステーラは黒い狼達と噛み合っていた…!!

くくくくルーフスの冒険くくくく

「参ったな…皆とはぐれちまった…」

ルーフスは暗い森を歩く。

「武器は…良かった、それぞれ持っているようだ。

…まあでも始めに、今いる場所のことが知りたいな。

…散策するか。」

ルーフスはそのままだりを見回して歩いていた。

しばらくして。

「おー！」

謎の家を発見。

「誰か住んでいるのかな…」
ルーフスは家に近づく。

窓から覗く…

にゆい。

下からいきなりスケルトンが顔をだした。

「うわああ!!」

ルーフスは後ずさりをする。

「あれれ？お客さんかな？」

さらに家の後ろからもスケルトンが来た。

「いひひ！お客さんだ！」

そして後ろからも。

「おりよりよ。さっきの人間だ！」

「おまえ達は…?」

「あれれ？僕ら？僕らは魔女だよ！」

「いひひ！違うよ！魔女は僕らの師匠じゃないか！」

「おりよりよ。また間違ったね。」

ルーフスは顔が引きつる。

「だから…お前は？」

スケルトンはようやく自己紹介をする。

「あれれ」と言っている奴が答える。

「僕は魔女の弟子！ロリエ！」

「いひひ」と言っている奴が答える。

「僕も魔法の弟子！サフラ！」

「おりよりよ」と言っている奴が答える。

「僕も同じく！シナモ！君は？」

「俺はルーフス。旅人だ。」

ルーフスは魔法の家の中で3人と話す。

「あれれ？君は『タビビト』だよね。」

「ってことは、平凡世界からきたんだよね？」

「へ、平凡世界!?!何それ？」

「おりよりよ。この世界のことは何も知らないようだね。」

「いひひ。僕が話そう。」

サフラが説明する。

「君の世界じゃ、魔法は普通使えないものだろう？」

「うん、まあそうだな。いると分かってても数人…全部が魔女から教わったとかだな。」

「実はこの世界では魔法がふつうに使えているんだ。」

「そ、そうなのか？」

「うん。そんなこの世界のことを『魔法世界』というんだ。それと区別して、

君の住んでいる世界を『平凡世界』と呼んでいるわけ。

…で、たぶん君が通ったとされる池はそれらを繋ぐゲートってことさ。」

「ふーん…魔法世界なんてもんがあつたのか…」

ルーフスは椅子によりかかる。

「この魔法世界は、実は昔、平凡世界の一つの国だったんだ。」

シナモは話す。

その国の名は、ディブレーク王国。

ある伝統的な魔術師が魔法を完成、それを国民に授けるといふ声明を上げて、

様々な国々の人の移民により完成した国だ。

無論、犯罪者も現われるが魔法でそれを阻止できたため、問題はほとんどなかった。

だが、他の各国々は発展、ついには魔法をも超える強力な武器を創った。

各国王はこの武力を使って、ディブレーク王国を攻撃し始める。

魔術という世界征服に有益な力を奪うためだ。

ディブレーク国王は国を守るため、自身の強力な魔法により、別世界へと国ごと転移してしまった…

「嘘だろ…国ごと別世界に移すなんて…!」

「君の世界には、『ネーベルオプリース』という巨大な穴があるらしいね。」

「ああ、いつかテレビで見た気が…」

「あれはたぶん、かつてディブレーク王国があった場所なんだ。」

「へえ……すげえんだな、魔法って…」

「そういえば、この世界には、人がいないんだな。」

3人が目を開く。

そして悲しげに目だけをあわせて、うつむいた。

「……?……どうした?」

「この国はね。」

ロリエが話す。

「魔法で創りあげて、魔法で壊れた国なんだ。」

38：魔法世界の冒険（前編）

~~~~ジャックの冒険~~~~

大蛇がジャックに迫る。

ジャックが間一髪で避けた。

「うわああああん!!」

ドオオオン!!

柱を揺らす。

ジャックも揺れた。

「なんてパワーだ…!」

「うわあああああん!!」

ドオオオン!!

ジャックが大蛇が突撃した。

「いて!!」

ジャックは吹っ飛ばされる。

ジャックはゆっくり起き上がる。

「くっそ…いて…怒ったぞ!!」

ジャックから湯気が出る。

「くらええ!!」

ジャックが勢い良くハンマーを振った。

ボン!!

ドドドドドド…!!

衝撃波が大蛇を襲う。

大蛇がひっくり返された。

大蛇の腹から葉っぱが落ちた。

ドオン…

大蛇はゆっくりと起き上がる。

そしてカツと目を吊り上げる。

「怒ったぶーん!!」

ジャックと大蛇の子供のようなけんかが始まった。

ジャックがハンマーで大蛇の腹を叩き。

大蛇がジャックを体当たりで吹っ飛ばす。

「痛いじゃないかぶーん！」

「それはこっちの台詞だ！この蛇！」

「蛇と呼ぶなぶーん！僕はいちおう蛇神なんだぶーん!!」

途中で大蛇の体当たりが止まる。

「あ」

「？」

「治ってる……」

大蛇が謝る。

「すまなかつたぶーん。腹の痛みで巻き添えにしてしまったぶーん……」

「なんだ、ただ腹にこの……硬い葉っぱが刺さってただけだったんだね。」

「僕はナーガっていうんだぶーん。この世界の蛇神とは僕のことだぶーん。」  
「僕はジャックだよ。旅人だよ！」

『『タビビト』』：君は平凡世界から来たのかぶーん！」

『『平凡世界』？』

ルーフスが聞いた説明をジャックにする。

「そうなんだ…僕は今、異世界にいるのか…」

でも、その王様は異世界にこの国を転移させるのに成功させたんでしょ？  
なんでこんなに、人がいないの？」

ナーガは悲しい表情をした。

くくくくルーフスの冒険くくくく

ロリエが続ける。

「王様は国をこの世界に転移させることに成功した。

それから人々は昔の平和な生活を取り戻したんだ。

…でも王様は城を固く閉ざしてしまった。

少し前まで王様はいつも元気で、毎日外に出て国民達に挨拶をしていたのに…

ついに国民達は心配して、城の前で声をかけ始めた。」

「…そのときだったんだ。

城からとてつもなく大きな魔力の波が拡がった。

その波に触れた人間達は全て植物に変わっていった。

やがてその魔力は世界を包み、世界の有する時間も止まってしまった。

動物と僕達、師匠のような強力な守る魔術を知っていた者だけが残ったんだ。…

これが、人間がいない理由だよ。」

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

ナーガが続ける。

「…植物にされた国民達も悲しいだろうけど、

僕が思うに国民を大切に思っていた王様が誰よりも悲しんでいると思うぶん…」

~~~~~ルースの冒険~~~~~

「…そうだったのか…」

「…実は王様が生きているかどうかかも、僕達には分からないんだ。」

城からは普通の人間には感じない強い魔力が出ているんだけど、王様自身の魔力かどうかは分からない……

僕達も、城へ行つて確かめたいんだよ。

……でもその強い魔力が僕達を拒んで近づけないんだ。」

「……じゃあさ。」

ルーフスが笑つて言う。

「俺が確かめてくるよ！」

3人は驚く。

「行つては駄目だ！君だつてどうなるか、分からないよ！」

「でも、誰が他に行くんだ？」

「えつと……」

「ロリエ、行かせてあげよう。」

「シナモ……」

「彼の言っている事もその通りだ。誰かが往かないと解らずじまいさ。」

「僕も賛成だ。」

「サフラ……」

ロリエは考える。

「…分かった。ルーフスさん。ご無事を祈ります。」

「ああ、行つてくる!!」

ルーフスは高くそびえたつ城へ駆けていった。

~~~~~チェリーの冒険~~~~~

青と緑の草の上をリスとウサギが跳ね回っている。
歩くチェリーの周りをウサギ達がついてきている。

「あはは♪あはは♪うさぎさん♪こっちこっち♪」

ウサギはびよこびよこことついていく。

「かわいい子〜!!」

なんて素敵な所なのかしら〜♪

もしかして私…死んでて天国にいるのかも〜♪

でもこれなら悔いは無いわ〜♪

シユウウウウウ…

目の前には黒く焼けたバイオーム。
地面から煙が出ている。

(ここって…まさか地獄…!?)

チエリーは口を広く開ける。

チエリーは二つの風景の境を見る。

(な…なんでこんな夢のある場所からいきなり地獄みたいな場所に…)

チエリーは気になって黒い土を踏み歩いていく。

「なんて暑い…!」

チエリーはメイド服の襟をぱたぱたさせる。

歩いていくと円形の巨大な何かがあった。

大きな切れ目がある。

「…?…何かしら…」

グウウウウウウウウ…

「え?…何?何?」

円形の何かの中から聞こえる…!

『グルオオオオオオ!!』

中から3つ首の竜が現われた。

「竜!」

左の頭が話す。

「おいおい!2番目!獲物見つけたな!見つけたな!見つけたんだな!」

中央の頭が話す。

「ああ、分かっている…分かっているから黙れ。」

右の頭があくびをして言う。

「早くしとめて、ディナーにしようぜ…」

チエリーが厳しい顔をする。

チエリーが日本刀を取り出した。

「…戦うしかないようね!」

~~~~~ステラの冒険~~~~~

「ガウガウ!ガウガウ!」

(訳:へえ、おまえ彼女いたの!)

「ワオ!ワンワン!!…クウ…バウ!ワウ!」

(訳:ああ、そうだよ。…でも僕は旅があったから…)

「ワオーン!ガウガウ!ガオ!!ガウ!!」

(訳:クロー!!いいないないな!俺もそんな出会いないかな!)

「ガウ、ガウガウ、ガウガウガウ」

(訳:お前はまずそのどてっ腹をどうにかしようぜ。)

「ガウガウ、ガウガウ。ガウガウガウ。」

（訳：そういえばお前のいつてたあのコ。あのガープとくつついたらしいぜ。）

「グル！ガウガウ！グルルルルガウガウ！！」

（訳：何!?許せんガープ：嘯み付いてやらあ！）

「ワオーン！ガウガウ!!ガウガウ！」

（訳：あつはつはつは！やめとけよ、お前じゃ無理だ。）

…なにか…すごく打ち解けていた。

ガサガサ…

暗い森をルーフスが横切る。

「…お！ステーラ…つてうわ！」

ルーフスが驚く。

ステーラが遠吠えをした。

「ワオーーーーーーン！」

続けて5匹も遠吠えをする。

「ワオーーーーーーン！」

「ワオーーーーーーン！」

「ワオーーーーーーン！」

「ワオーーーーーーン！」

「ワオーーーーーーン！」

「…なんで打ち解けてんだよ…」

「でもちようどいい。お前達、ちよつとジャックとチェリーを探してきてくれ。で、池の前に集合するように誘導してくれないか？」

俺は今からちよつとあの城に行くてくる。」

「ワン！」「「「ガウ！」「「「」

「よし、頼んだぞ！」

ルーフスは走っていった…

「ガウガウ…ガウガウ…」

（訳：王様か…今どうしているのかな…）

「クウン？」

くくくくチェリーの冒険くくくく

左の頭が言う。

「はーっはっは！ようこそ俺達の巢へえ!!」

中央の頭が言う。

「そしてどうぞいらつしやい俺達、ヒドラの腹の中へ。」

右の頭が言う。

「2番目…そんなにくまくねえよお…それより早く食べちやおうぜ…」

中央の頭が言った。

「では、まずは軽く火通しといこうか…」

中央の頭から火炎放射が放たれた。

ボオオオオ!!

チェリーは慌てて避ける…!

チェリーの袖が燃えた。

「熱ッ…!!」

チェリーは腕に点いた炎をバケツの水で消した。

チェリーの右腕の袖はほとんどがこげてなくなっていた。

「強い…!」

左の頭から火の玉が出た。

ボオオオン!!

火の玉はチェリーのすぐ左で爆発する。

チェリーは走り、高く飛び、中央の頭に刀を振りかぶる。

「1番目!」

「あいよ!」

左の頭が一瞬縮むのが尻目に見えた。

次の瞬間、チェリーは歯に押しつぶされる。

「かはっ…」

チェリーは血を吐く。

中央と右の頭が笑う。

「いいぞー番目ー!」

「あーでもそのまま食うんじゃねえぞー。俺達の口にも分けるよ…」

チェリーは地面に落とされる。

…もう…駄目…



ルーフスさん…

ジャックくん…

チェリーの視界は閉じていった——

### 39：魔法世界の冒険（中編）

~~~~~チエリーの冒険~~~~~

黒いだけの世界。

チエリーはそこに立っていた。

ここはどこだろう。

独りぼっち。

チエリーは涙目になる。

悲しい。

寂しい。

…
!!

独りじゃないようだ。

私より一回り小さい女の子。

茶色でさらさらの長い髪に水色ワンピース。

その可愛い瞳でにっこりと私に笑いかけた。

「あなたは…?」

少女が口を開く。

「プラムだよ。…久しぶり、お姉ちゃん。」

たまらず目を見開いた。

私の頬に涙が伝ったのがやっと分かった。

脚は勝手に走り出す。

「ダメー！」

プラムが制止する。

チエリーの脚は止まった。

手が届きそうなのに…

こんなに近いのに。

抱きしめられないなんて。

「うう…あああああああああ!!」

チエリーは大声を出して泣く。

泣き顔をあげっぴろげにして。

今までで一番大きな声で。

「コホ…ケホ…」

喉が追いつけなくて、咳き込む。

「わあああああああ…」

プラムは優しく笑って弁解する。

「泣かないで。お姉ちゃん。」

チエリーの泣き声が静かになっていく。

次第に息を吸う音だけになった。

チエリーは下を向いて涙を手で抑える。

「私はお姉ちゃんが嫌いなわけじゃないよ。

…でも…ここでお姉ちゃんが私を抱きしめちゃったら、

今の仲間達を大切に想えなくなっちゃう…私だけを想っちゃう…！

だから私は止めたの。」
頭の中にルーフスとジャック、ステーラの姿が浮かぶ。

プラムは続けた。

「今、お姉ちゃんにはお姉ちゃんを大切に想う人がいっぱいいるんだよ。

だから…負けないで。お母さんもお父さんも、私も、お姉ちゃんを守っているから…」
プラムの目が次第に潤ってくる。

「でも…私…やっぱり…プラムちゃんと…一緒に…！」

チェリーの心の底に隠れていた本音が口から出る。

次の瞬間。

冷たい涙が伝っていた頬に温かい感触が来た。

プラムがチェリーを抱きしめている。

プラムは大粒の涙を流す。

「……こうすれば、……問題無いかな……！お姉ちゃん……!!」

チェリーはまた涙を流し始める。

しかしさっすきの涙とは違う、温かい涙だ。

「私達……今、一緒にいるんだよ……！」

チェリーはやすらかな笑顔になる。

「ありがとう…プラムちゃん…」

プラムの姿が消えていく。

でももう追いかけてようとはしなかった。

願いはもう果たされたから…

生きなくちや。

私…まだ死ぬのは早い…！

（貴様の炎…しかと受け取った…！）

黒い世界を紫の炎が燃やしていった。

茶色く焦げて、炎が噴出す地獄のような場所。

寝ている娘の背後には3つ首の竜。

「じゃ、俺は脚から！」「俺は胴か。」「俺は胸から上だなー…」

中央の頭が近づく。

思い切って口を開く。

ガキン……！

！！

バリバリバリ……

中央の頭の歯がどンドン落ちていく。

「あが————！！！！」

中央の頭はショックで倒れる。

「2番目！！」

「この人間……まだ生きていたのか……?」

3つ首竜の前には、真剣な顔をしたチエリーが立っていた。

ぼろぼろの服に血がしみこんでいる。

深い傷と対して、なんと心強い顔であろうか。

手に持った日本刀がギラリと光る。

彼女の目には、紫の炎が瞬いていた。

「その傷でく！！」「動けるわけやないっしょ！！」

ボオオオオオオオ！！

左と右の頭は同時に火炎放射を放つ。

娘の姿は炎で見えなくなった：

1番目は3番目を見て話し始める。

「今度こそやったな3番目！」

「ふわあ…早くディナーに」

ボオオオ!!

娘が炎の中を超えて飛んできた。

日本刀を両手で左に構える。

右の頭は目を大きく丸くした。

瞳はチェリーを大きく映していた。

ズサ…!!

紫の斬撃が一閃する。

右の頭の首を中ほどまで斬った。

「ヤ……3番目ー!!」

1番目は娘を震えながら見た。

娘の目は真つ直ぐに左の頭の目を見る。

娘の近づく足音が静かに響く。

1番目はたまらず目を逸らした。

歯が恐怖でがたがたと震えだす。

「ひ……ひいーお、お許してください!!ごめんなさい!」

ドサツ……!

途端に、娘が倒れる。

1番目は目を向ける。

「……お……おーい……生きてるか……」

スー……スー……

どうやら疲れて眠っているようらしい。

「……へ、へへ、やっと飯が食える……へへ……へ……」

左の頭から笑みが消える。

今まで……我らヒドラは人間に倒されることは絶対に無かった……
しかし……1頭どころか2頭も倒してみせるとはな……

…敵ながら…感服だ…

ヒドラはチェリーを優しく口で巣まで運び、
枯れた草を布団がわりにしてかぶせる。

「なんで俺がこんなかあちゃんみたいなのを…」

1番目のヒドラは嫌な目をしてつぶやいた。

そして静かに3番目を治療するのだった…

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

「……だな。」

前には高く聳え立った城。  
確かに扉は丸石で閉じられていた。

ルーフスはつるはしで丸石を壊して進む。

「マ…マジかよ…」

ルーフスは上を見上げた。

長い長い螺旋階段。

螺旋階段の途中では枝分かれがいくつもある。

ルーフスは住み着いたゾンビやスケルトンを跳ね除けて進む。

螺旋階段を上って上って。

なにやら床が見えてきた。

「…もうすぐ最上階か…？」

ヒツク…ウエー…

なにやら声が聞こえる。

…と同時に、異臭もした。  
酒の匂いだ。

ルーフスは鼻を押さえる。

「う…すげえ匂い…」

ルーフスは最上階の床を踏んだ。

そこには王冠を被った骸骨がワインを飲んでいる。

顔は驚くほど真っ赤だ。

床には大量のワイングラス。

骸骨は突然大きな声を上げた。

「この世界は終わつれいるんたよお……！」

「な……なんだ……」

「もう誰も救えれえんだよお……！」

「おい……おっさん落ち着けて……」

いきなり泣き出す。

「これが落ちついでいられたらよお！」

誰もいねえんだ……誰も……」

そしていきなり怒り出した。

「れていけえ！おらえはよお……！」

ビュウ！！

「あぶね……！！」

ルーフスは避ける。

ルーフスに向かって魔法弾を撃ってきた。

魔法弾は壁に刺さって消えた。

「…眠らせて冷まさせるしかないようだ…！」

ルーフスは釘を撃った。

骸骨は消える。

そしてルーフスの後ろからファイアボールを撃ってきた。

ポオン!!!

ルーフスに当たる。

「ツッ!!」

ドオオオオン!!

ルーフスは壁まで吹き飛ばされる。

ルーフスは起き上がる。

「くっそ…」

目の前には王冠を被った骸骨が3人もいた。

「な…なんだと…」

「「連れていけえ！」」

3人から魔法弾が3発ルーフスに向けられる。

ルーフスは右へ走る。

魔法弾は壁に刺さって消滅した。

骸骨はまたテレポルトする。

ルーフスはテレポルトした場所を見つけた。

「くっえ!!」

剣で振りかぶる。

しかし剣で振り払ったのはただの煙であった。  
幻影だったのだ。

追い討ちに後ろから魔法弾を撃たれた。

ドオン…！

ルーフスに直撃。

「ぐっ…!!」

ルーフスは螺旋階段へと落ちる。

ボオオオン!!



ルーフスは息を上がらせながら起き上がった。

「くっそお…まずはどれが幻影か分かんねえとな…」

ルーフスはふらふらと見回している3体を良く見る。

あれ…？

一人だけ守りが硬い…

確かに一人だけ、3つの盾を魔法で漂わせている。

…幻影じゃない奴は分かった…あとは…

あの盾をぶっ壊して、攻撃するだけだ！

ビュウ…!

ファイアボールが飛んでくる。

「うわ…!」

ルーフスは慌てて身を翻す。

ボオオオン!!

壁に当たって爆発する。

骸骨はテレポートした。

…どこだ…

ビュッ

ビュッ

ビュツ…

そこだ!!

中央の骸骨に剣で連撃を行う。

カキン！カキン！ガキン！ガキン！

また魔法弾が3発繰り出される。

「だあああ!!」

ドオン!!

3発全て当たった。

ルーフスは床に転がった。

「…やべえ…ひとまず撤退だ…」

ルーフスは螺旋階段をよたよたと下る。

骸骨は追いかけてよたよたとするが、

「うっふ……！」

……察しのとおりである。

ルーフスは螺旋階段を中ほどまで下って、壁に寄りかかって座る。そして鞆から肉を取り出してかじりついた。

「……どうやってあんな奴止めりゃいいんだ……」

明るくなつた城の中で考え込むルーフスであつた。

## 40：魔法世界の冒険（後編）

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

「ガウガウ!!」

「うわあ! さっきの狼!!」

ジャックに向かって何かを伝えようとしている。

時々ジャックの服の裾を引っ張った。

「…ん? 何か言おうとしてるぶーん?」

ナーガが聞き取る。

「ナーガ、狼の言葉が分かるのか!？」

「僕は蛇の神様なんだぶん。動物の言葉はある程度わかるぶーん!

…少年から君に伝言だ、『池の前で全員集合だ』…つて言ってるぶん。」

「で、でもなんであの狼が…!？」

…まあありがとう。君はあの池の場所分かる?」

「ガウガウ!! ガウガウ!!」

「ふむふむ…『暗い森は俺達の庭のようなもんだ』…って言ってるぶん！」
「分かった…ありがとう、ナーガ！ここでお別れだ！」

「こつちこそ、久しぶりに人と話せて楽しかったぶん！」

「さようならぶん!!」

ジャックは黒い狼と共に去っていった…

~~~~~チエリーの冒険~~~~~

チエリーが目を覚ます。

そしてヒドラを見てびっくりした。

チエリーは立ち上がって構える。

「あ…あなた達！」

左の頭から順に言う。

「お、起きたか！」

「そう構えるな。俺達はもうお前を食べようとはしねえよ。」

「お前を食って、腹の中で暴れたらひとたまりもねえからなー…」

「へ…：？」

ギュルルルルル…

チエリーの小さい腹が大きくなる。

チエリーは顔を赤らめて腰を落とした。

「ほらよ、ミーフストロガノフだ。」

ちえリーの前に大きな頭が近づく。

頭の上にはキノコシチューのようなものが。

チエリーはそれを受け取って食べる。

「おいしい…：…」

チェリーはこの世界についてヒドラから聞いた。

「そんな悲しい事が…」

左の頭が言う。

「その城の王は俺達を毎日討伐にきていたんだ。」

右の頭があくびをして言う。

「あいつが来なくなつて、俺達は暇になつちまつたよ。」

中央の頭が城を仰ぎ見て言う。

「あの王は今どうしているのだろうか…」

「ガルルルルルルル…」

見るとステーラがいた。

「ステーラ！違うの！この竜はもう仲間よ！」

ステーラは威嚇をやめてチェリーに近づいた。

チェリーはステーラの頭を撫でる。

「よかつた、ステーラが見つかつて…」

ステーラは腹の血に気づいてチェリーの腹をなめる。

「あはははは！くすぐつたいよ…でもありがとう、ステーラ。」



「クウン……！」

ステーラはいきなり急いだようにチェリーのスカートを引っ張る。

「……ついでこい、つて言ってるの？」

「ワオン！」

そうだと言わんばかりに吠えた。

「ヒドラさん、私もう行かなきゃ。」

「そうか、仕方が無い。」

中央の頭はうなずく。

「また遊びに来いよ！」

左の頭が笑って言う。

「今度は食ってやるからなく」

右の頭が冗談を言って笑った。

「はいー！」

チェリーも笑顔で返す。

チェリーはステーラと共にヒドラの巣から去っていった……

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフスは回復してから再戦、

回復してから再戦を何度も繰り返していた。

だが、一向に相手の3つの盾は割れない。

…！魔法弾だ…！

ルーフスは剣でとっさに跳ね返した。

すると、魔法弾は盾に向かっていく。

パリン…

なんと、いとも簡単に割れてしまったのだ。

「…もしかして…！あの盾、魔法は防げないのか…！

…そうと分かったら！始めようぜ！ピンポン！」
ルーフスは幻影達の攻撃をかわしながら、
リズム良く弾を跳ね返して盾を次々に割っていく。

最後の盾が割れた!!

「ウイ〜ヒック！まだまだ〜!!」

骸骨はふらふらしながらゾンビを2体召還した。

ゾンビなら毎晩戦っている。

ルーフスはゾンビを倒して盾のない骸骨を斬った。

骸骨がいきなり怒り冗語になって言った。

「いいられんにしろお!!俺は死にてえんらよお…!!」

平凡せらいの住人の分際で…!!ほつろいてくれるお!!」

「ほつとけるかよ。」

骸骨がふらふらと剣を力強く振る。

ガキイン…!!

ルーフスの剣と重なって大きい音を出した。

そのまま骸骨はゆったりと振りかぶって斬るを繰り返す。

ルーフスは後ろに下がりがらその剣をさばく。

「俺はこの世界の住人に頼まれたんだ。

王様が生きているかどうかを確かめてくれつてな!

…住人を心配させておいて酒を飲んでいる奴なんてな!」

ルーフスが骸骨の剣を振り払った。

骸骨の剣はくるくると回って後ろの壁に刺さる。

ルーフスは自分の剣を後ろに投げて、王に平手打ちをする。

バシン!!

骸骨は酒の酔いがやっと醒めたようだ。

「今、この世界に住んでいる奴が何を求めているか知っているか…?」
骸骨はルーフスの目を見た。

「王様だよ!」

骸骨はふらふらと地面に座って震える。

「…こんな私を…か…」

「そうだ。」

骸骨は激昂する。

「…この国を滅ぼした…この私をか!!」
ルーフスは驚く。

「!…お前が…!」

骸骨は話し始めた。

大砲の弾が上空から降り注ぐ。

ピユウウン…

ボオオオオン!!

「キヤアアアアア!!」

民家が次々に燃えていく。

住民達は走り回る。

親とはぐれた少女が泣き。

逃げ遅れた男性は燃えた瓦礫にうずもれて見えなくなつた。

凜々しい口ひげを持った王様はベランダからその様子を見ていた。

「王様！大変です！我が国の住人達が…！次々と武器により殺されていきます!!」

「…もはやあれしかない…!!」

執事が引き止める。

「お止めくださいませ！その方法を使えばあなたがどうなるか…！」

「このままこの国をこの世界に置いたままでもいいというのか!？」

「この国の住人がこれ以上殺されてもいいというのか!？」

「……」

執事は黙る。

「…分かりました…おいぼれの爺は何も言うことはありません！ただ…がんばってください！」

王様は笑って答えた。

「…ああ…ありがとう…」

王様は呪文を唱え始める。

すると国全体に光の線が描かれ始めた。

その線はやがて曲がり…

さらに曲がつて…

ついに六芒星が出来た…!!

王様は光に包まれる。

「おい…：…なんだあれは！」

他国の兵士達は戦車からその光景を見ていた。

国が地面ごと浮き始めているではないか！

少し地面が崩れて落ちていく。

そして…

国はサーッと消えていった。

総帥も驚くことしか出来なかった…

別世界へ移された後の3ヶ月後…

街の復興も終わり、元の平和な生活を取り戻していた。
畑で作物を作り。

魔法で大量の土を鉄に変えたり…

子供達は魔法学校で魔法を楽しく学んでいた。

そんな中。

立派な城の自室の中で

王様は寝こんでいたままだった：

メイドが食事を運んできた。

「王様。ここに食事を置いて…」

「黙れ…殺すぞ…」

メイドが不安気に立ち去る。

王様の使った魔法はあまりに強大で——

あまりに副作用が大きかったのだ。

胸が溶けるように熱い。

頭が破裂するように痛い。

王様はその苦しみから自分に対する言葉さえも全て拒絶するしかなかったのだ。
王様は自分の情けなさに涙をながす。

「王様——！」

王様の目が見開く。

駄目だ……

「大丈夫ですか——！」

止めろ……

王様は布団で耳をふさぐ。

住人達が応援の言葉を次々に語りかける。

お前らを殺してしまう……！

止めろ……！！

「うああああああああああああああ!!!」

ついに王様は怒りと悲しみに叫び始めた。

魔法がはたらいってしまったのだ。

王様は四つんばいでペランダへ行く。

外の景色はあまりに酷いものだった。

人が根に蝕まれ…木に変わっていく。

子供はぐんぐんと縮み…草花に変わっていく。

私の国民達が…次々に植物になっていく…

王様は悲しみで自分を殴り始める。

しかし死ねなかつた。

それから、どんな自殺をはかっても死ねないのだ。

首を絞め、毒を飲み、剣で腹を斬り：

魔法の暴走は、自らを不死身にしてしまったのだ：

気がつけば肉は腐り、骨だけになっていた：

「私が国民を植物に変えた張本人なんだ：

もうこの世界は終焉を迎える。

この世界の太陽を見たか？いつも沈んだままで！

この世界は、太陽と同じように沈んでいくんだよ……！」

「…沈んだまま…いいんじやねえのか？」

ルーフスは言った。

「観てみるよ。」

骸骨はベランダに出て太陽を見る。

数分経ってから骸骨の目から涙があふれ出る。

「…本当だ…」

大きな大蛇がくねくねと城の下に来る。

「王様！」

「ナーガ……！」

ナーガは大きな涙を流す。

「良かったぶーん……王様が……生きてたぶん！」

ドスン、ドスン、ドスン……

三つ首の竜が草を踏み潰して城の下に来た。

「おめえよお！あんなに俺達にけんか売つといでどこに行つてやがった！」

「まだ我々と決着がついていないだろう？」

「ふわあく……見つかるのがおせえーんだよ。」

「……ヒドラ……！」

「あれれ？王様だ！」

「いひひひひ！やった！生きてたんだ！」

「おりよりよ。心配してたんだよ！」

「お前ら……！」

「ワオooooooooooooン！」

「ワオooooooooooooン！」

「ワオooooooooooooン！」

「ワオooooooooooooン！」

「ワオooooooooooooン！」

黒い狼達が見て遠吠えをする。

更に木の間から猪に、鹿に羊が。

草の間から小鳥やリス、ウサギ、カラスが。

城壁には蛍やセミが止まりに来た。

「…みな…」

動物達も一斉に鳴き始める。

木々が自らざわめいた。

王は涙を更に流す。

「ただいま…！」

こうして、王様の心の氷は溶けたのであった…
ルーフスは狼に連れられて池へと行く。

「おーいー！」「ルーフスさーん！」「ワオン！」

「おお！お前達！」

ルーフスは手を振る。

ルーフスがチェリーの体の包帯を見ていった。

「お…おい！大丈夫か！お前…！」

「大丈夫です。たくさん寝て、食べて、ジャックくんの手当てしてもらいましたし…！」

チェリーがただ笑って言った。

包帯を持ったジャックがなにやら顔を真っ赤にしてチェリーから目を逸らす。

「それならいいんだけどな…」

ステラと黒い狼は別れの遠吠えをする。

「ありがとな！お前ら！」

「ガオ！ガオ！！」

木々が風に揺らされる。

まるで風がルーフス達を見送っているようだ。

「さようなら。ディブレーク王国。」

ルーフス達は池に息を吸って飛び込んだ。

ジャボン！！

池を抜けて…

バツシャーン!!

元の場所だ。

「…戻ったんだな。」

「不思議な世界でしたね。」

「ふう…」

「ワオン！」

ルーフスは指揮をとる。

「さあ！次の世界！行くぞ！」

「おー!!」「ワオン！」

ルーフス達は暗い森の中を駆け抜けていった。

41 : 災いの少女

天気は曇り空。

今にも雨が降りそうだ。

ルーフス達は呆然とする。

「なんなんだこれは……」

目の前にはとても大きな穴。

そしてその周りの木々にも点々と「穴」が空いていた。

チェリー達は穴を避けて前に進む。

「しかも……この森、動物が全く見られませんよね……?」

「王様の魔法の影響があつた場所なのかな……?」

「クウン?」

ステーラは首を傾げる。

「……そうっばいな……」

ルーフス達は壊された木々を横目に先へ進む。

「!!!」

「ええ!?!」

「ひどい…!!!」

ルーフス達は目の前の光景に驚く。

人が数人、倒れていた。

何かが複数回爆発したような跡。

荒れた地面には穴が空き、

民家があつたのだろうか、家の残骸が所々に見える。

ルーフスは倒れている男性を揺らし、問いかけた。

「おい!何があつたんだ!おい!!」

男性は今にも閉じそうな目でルーフスを見る。

「白衣…男…」

「白衣の男…?」

男性の目が閉じ、首がガクツと落ちる。

「…!! ジャック! 脈は!」

ジャックは悲しそうに首を振る。

「…!! ……」

他の村人も、もう既に死んでいたのだった…

「何があつたんだ…?」

「あ!」

ジャックが人物を遠くに発見する。

「あつちに生きてる人がいるよ…!!」

「聞いてみるか…」

ルーフス達は遠くの人物の元へ向かう。

ルーフス達は一人の少女が見えた。

髪はぼさぼさで黒いストレート、黒い肌に大きくはつきりした目、骨がくつきりと見えた手足。

そして茶色く土のついたワンピースを着ていた。

少女はぼーっと突っ立っている。

ルーフスは聞く。

「あの…何かあった」

「近づかないで。」

少女はさえぎって言う。

「それはどういう…」

「殺されてもしらないよ?」

見た目とは裏腹の言動にルーフス達は驚いた。

「この惨状…私がやったんだ。」

私がこの村を壊したんだ…

皆を殺したんだー…

私は悪魔…

私は災害…

…だから近づかないで…」

少女は微笑んだ。

ルーフス達は沈黙する。

ルーフス達と少女の間を冷たい風が吹いていった。

ルーフスは一步踏み出す。

また一步。また一步。

少女は急におびえた顔になって叫ぶ。

「近づかないで！そう言ったでしょ！」

ルーフスが少女の目の前に顔を寄せて…

トン！

「痛い！」

少女にチョップを放つ。

ルーフスは目を少し閉じて言った。

「バーカ。ならお前、殺してみろよ。」

少女は額をさする。

「どうやってお前がこの村を壊滅させたんだ？」

どうやってお前が皆を殺したんだ？

…少なくとも、お前はそんなことする奴には見えないし、お前にはそんなこと出来そうにもない…

…俺達に話してみろよ。お前に何があつたんだ？」

少女は涙をポロポロと流し始めた。

少女の涙が収まった所で。

チェリーが少女の目の前に差し出す。

「はい、クッキーをどうぞ。」

少女はぼーっと頬張る。

「で、何があつたんだ？」

「……」

少女は話し始める。

おぎやああああ！おぎやあああ！

「村長さん！赤ちゃんが生まれました！」

「おお！ガーナ達の子供か！男か、女か？」

「女の子です！」

「…またこの村に、新たな命が出来たのだな…」

ありがたや、ありがたや…！」

村長は手をすりすりとお合わせる。

村長は母親の元へと歩く。

「どうだい、ガーナ。名前は決まったかい？」

「はい……名前はココア。東の森のココアの木のように、すくすくと伸びて欲しい……そう思い名づけました。」

「そうか。良い名前じゃないか。」

村長はココアを持ち上げた。

「神様、ありがとう……」

村長は太陽とココアを重ね合わせる。

その年からであった。

草原は荒地に侵食され、植物も全く育たなくなり

村民たちは食べ物に苦しんでいた。

さらに、池の水も黒く濁り、水も飲めなくなったのだ。

加えて、ココアが生まれてから3年後、村長が病気で亡くなり、

9年後には母親が飢餓で亡くなった…

父親は悲しい村を見てはおれず、夜に失踪。

村民達も次々に痩せ細り倒れていく。

村には笑顔がまるで無かったのだ…

5年経ったある日、4人での村の会議が始まる。

「この状況を…どうにか出来ないのか…!」

「何故こんなに災いが起こるのだ…!」

「…一つ、気がかりがある。…ココアだ。」

ココアが生まれてから、母親が死に、村長が死に…

そして村は不作。…彼女が原因だ…」

「お前…そんなことを言うか!」

「そう考えるしかないじゃないか!」

「二人とも!落ち着いて!」

乱闘になりかかった男性二人を女性が制止する。

「だが……このまま指をなめて見守るだけでは何も生まれない……」

賭けてみるしかない……！

……すまない……！ココア！！」

キィ……

ガコン……

石で閉じられる。

ココアは地下の遺跡に閉じ込められた。

ココアは石の扉を叩く。

「開けて……出してよ……開けて……」

石の扉をはさんで、閉じ込めた村民は涙を流して階段を駆け上がっていった。

金色に松明で明るく照らされたまがましい部屋。

大きい像は厳しく少女を睨んでいるように、

少女はなるべく目を合わせないように座っていた……

食事は上から覗く小さな穴から配給された。

…とは言っても、食事は小さな生魚が1匹程度。

日に日に汚い池に魚が棲まなくなり、食事量も徐々に減っていった。

トン！トン！トン！！

石の扉に石が当たる音が幾つも聞こえる。

子供達が文句を言いに行きやってくるのだ。

「この悪魔！どっかいけ！」

「お前は災害なんだよ！」

「この村から出て行け！！」

少女にとってはこれが一番の幸せだった。

人が傍にすることが、彼女にとっては嬉しかったのだ。

そしてついさつき。

閉じ込められてから数ヶ月後。

ドオオオン……！

「ぎゃあああああ!!」

「逃げろ！速く逃げろんだ！」

「ぐああああ!!」

「ああああああ!!」

ドオオオン!!ドオオオン!!

ガラガラ……

遺跡が大きく揺れる。

大きな像が横に倒れる。

ボオオオン!!

ガラガラガラ：

遺跡の天井が崩れた。

天井からは太陽の光が照らす。

少女は瓦礫を踏み越えて、外に出た。

皆はもういなかった。

村はもう無かったのだ：

少女は悲しみと自分への恐怖で立ち尽くすことしか出来なかった…

「私がいたからなんだ…私が不運だったから、

この村は壊滅したんだ…」

ルーフス達は真顔のまま聴いていた。

ルーフスが話す。

「お前よお…」

「運なんて信じているのか？」

「え…?」

「運が悪かったから作物が育たない？

運が悪かったから皆が死んだ？

運が悪かったから村が終わった？
違うな。

ただ、偶然の偶然に偶然が重なって、そんなことが起きただけだと思うぜ？
…それでも信じられないっていうならさ…」

ルーフスは握手の手を差し出す。

「俺らと一緒に来てみないか？」

俺らと一緒にいて、運とかそんなものは無いって証明してやるよ！」
ルーフスは笑う。

チエリー達も笑ってルーフスの横につく。

「私と居て…いいの…？」

「俺達は大歓迎だぜ！」

「僕も大歓迎だよ！」

「私も！」

「ワオン！ワオン！」

ステーラは少女の横で飛び跳ねる。

ココアはもう一度涙を流す。

「…ありがとう。皆さん…！」

ココアはルーフスの手を握った。

「決まりだな！」

チエリーがまじまじと少女を見て提案する。

「まずは服が必要ですね！」

ジャックが地図で確認する。

「じゃあ、ここから西にある都市へ行こう！」

ルーフスが問う。

「夜になるまでに着きそうか？」

「うん！1時間歩けば着くね！」

「よっしゃ！じゃあ行こう！」

チエリーはココアしよっていつてくれねえか？」

「分かりました！」

チェリーがココアをおぶった。

「じゃ！元気にいつもの掛け声だ！

…行くぞ！」

「「おー!!」」

「ワオン！」

5人に増えたルーフス達の旅路は、更に続く…

42：グルメの街

ルーフス達は西の都会に向かって草原を進む。

ココアはチェリーの背中で小さな口にお肉を運んでいる。

「ココアちゃん、おいしい?」

ココアは幸せそうにコクンとうなずく。

「お料理上手いんだね、チェリーさん!」

「ありがとう!」

チェリーとココアは笑いあう。

ステーラはチェリーにお肉をおねだりする。

「はいはい、ステーラの分もちゃんとあるから。」

「ステーラったらかわいい!」

ココアはステーラの頭を撫でる。

ジャックとルーフスが考える。

「…あの穴は、隕石とかじゃないと思うんだ…」

「確か…さっきの村人は『白衣の男』とか言ってたな。」

「その白衣の男が、村を壊したんだと思う。」

「…そいつ見つけて、一発殴ってやりたいぜ…」

ルーフスは真剣な顔で言った。

「あ！見えたよ！」

「おー!!あれが都会か…どんな場所なんだ?」

「あの都会は…『イリーガシテイ』。グルメの街だつて！」

「グルメか…！おいしそうな街だな！」

チエリーが横を走って先頭にくる。

慌てて振り向いて言う。

「早く行きましょう！」

チエリーはココアをしょいながら走っていく。

「慌てるなつて…」

「ワン！ワン！」

ステーラもルーフスとジャックを追い抜いて走っていく。

ルーフスとジャックも走って行った。

「やあ、ようこそ！イリーガシテイへ！」

「ようこそ！イリーガシテイへ！」

見るとやせ細っていてダサイマスクをつけた、小さい男が話しかけてきた。横には太っていて同じくダサイマスクの小さい男だ。

細いほうが甲高い声で言う。

「旅人さんですよね？」

私達、『ネズミのお助け屋』と申します！お荷物をお持ちしますよ！」

太いほうが低い声で言う。

「おもぢまゝです」

「お、いいサービスじゃんか……じゃあ、3人分、頼むわ！」

ルーフス達は笑って荷物を預ける。

「はいはい！」

太いほうが2人分、細いほうが1人分のバッグを持つ。

「あんさん、じつでまずが？」

太ったほうが尋ねる。

「ねずみがどんな生き物かってね！」

「ん？…ん…」

ルーフスは考える。

そしてピンときた。

「食べ物が大好き！」

「そのとーり!!」

二人組はいきなり走る。

「ばくか！まんまと騙されやがった！」

「ぷ。ぷ。ぷ。ぷ!!だべものいだきやく!!」

「「ああああああ!!」」

「バウワウ!!」

ステーラが怒って追いかける。

「俺達も追うぞ！」「はい！」「うん！」

ココアもうなずいた。

ここは市場。

二人組と旅人が人の波を掻き分けて逃走劇を続けていた。

「待てええええ!!」

「やなこつた!」

二人組は二手に分かれる。

太いほうが直進し、

細いほうは路地裏に入っていった。

「チェリーとココアは路地裏頼む!」

「はい!」「うん!」

「ジャック、ステーラ!デブのほう行くぞ!」

「うん!」「バウ!」

ルーフス達も二手に分かれた。

「ひい！助けてくれ！」

細いほうが路地裏で追いつかれたチエリーに剣を向けられている。

「あなたを傷つけることはしないわ。さあ、荷物を返しなさい！」
細いほうは何も持っていない。

細いほうはにやりと笑った。

「ひっかかったな！」

「やーい！やーい！」

上からの声。

上を見ると、隣の店の屋上に細い男がいた。

「俺たちは双子なんだよーん！」

「クウン♪」

「おい！ステーラあ！」

「バイビく!!」

太ったネズミは去っていく。

ルーフスとジャック、ステーラも顔を真っ赤にして怒る。

「くそく！姑息な手使いやがって!!」

「ワオン！」

「バンダさんの辞書返せ!!」

怒声は都会に響いていった。

月はもうすぐ真上に昇る。

ルーフス達は宿に止まるエメラルドも奪われ、店の前の路上に座っていた。明るい店内からはおいしい匂いが漂ってくる。

チリーン…

カップルが今店の中から出てきて、道路を歩いていった。

ギョルルルルルル…

4人と1匹のお腹が同時に鳴る。

「腹減った〜…」「クウン…」

「ココアちゃん…ごめんね。お腹いっぱいご飯食べさせてあげたかったのに…」

「ううん、いいよ、そんなことより、みんなのバッグを盗んだ、

あの人達が許せないよ！」

ココアは口を結ぶ。

「でも…」

「やっぱりお腹すいた〜…」

「「「はあ…」」」

「クウン…」

陽気な鼻唄が大きくなる。

チリーン：

中からはでっぷりと太った、口ひげを生やした料理人が。

鼻唄を歌いながら扉の看板を裏返している。

「ん？」

料理人は4人と一匹に気づく。

「君達、どうしたんだ。宿に泊まらないと風邪を引いてしまうよ。」

「いえ…お金が無いものですから…」

料理人は黒い肌の女の子を見て驚愕する。

「君！食事はきちんと食べているのか！

骨がくつきりと見えているじゃないか！」

「あ…」

女の子は緊張で声が出ないようだ。

料理人は急いで扉を開ける。

「さあ、君達、入りたまえ。」

4人の目の前には魚、卵、チーズに鶏肉のサンドイッチセットにサラダとチョコミル
クが。

ステーラの前にはステーキが2枚も乗せられた皿があつた。

ステーラは早速かぶりつく。

「俺たちまでいいんですか!？」

「ああ、たとと召し上がれ。」

料理人は笑顔で言う。

黒い肌の女の子はサンドイッチをぼーっと見ていた。

料理人は女の子に話しかける。

「どうしたのだい?…サンドイッチは嫌いだったかな?」

ココアは確認する。

「これ…食べてもいいの?」

「むしろ、君は食べなければいけないな。」

…これはね、こう…手で持ってたかぶりつくのが一番うまいんだ!」
料理人はココアの小さな手を持って教える。

ココアはかぶりついた。

「…おいしい…!」

「ホホホ!!そりやそうき!なにせ、この私が作ったのだから!」

ルーフス達もかぶりつく。

「うめえ…!」

「うん!うん!」

「感動しました…!」

「ワオン!!」

料理人はうなづく。

「私は『グラッツソ・ガビアーノ・レストラン』の店長、アルミロ・ボンピアーニだ。」
「俺はルーフスといいいます。」

「ジャックです!」

「チェリーと申します!」

「ココアです。」

「こいつはステーラ。」

「ワオン!!」

「ありがとうございます、食べさせてもらって。」

「いいんだよ。食べ物食べるためだからな!」

でも君達、どうして旅人なのにバッグも何も持っていないのかい？」
「それが…『ネズミ』と名乗る奴らに奪われてしまったのです。」

アルミロはあつと気づく。

「なるほど…あいつらは本当に卑怯だからな。」

…よし、今夜、私が手を打ってみよう！…君達も協力してくれ。」

「はい！」「」

「ワオン！」

レストランの明かりも、もう点いてはいない。

ただ月の幽かな光だけが道路を照らす。

家の屋上に3人の影が映った。

「おい、見てみろよ…あそこ！」

細い男はレストラン前のダンボールを双眼鏡で覗いている。

もう一人の細い男が双眼鏡を覗く。

「おほ！…あれはもしや、牛肉じゃねえか!？」

「うへへへへ…あれがあればじょくりようにはごまらねえぜ！」

「早速行くぞ！お前ら！」

3人はスタツと屋上から飛び降りて牛肉に近づく。

「うっへっへ…いますぐ食っちゃまおうぜ。」

「どうせ誰もいねえしな！」

「いだだぎまーず！」

がぶっ…

「「おええええええええええ!!」」

3人は舌をまずそうに出す。

「なんだこれ……」

「あれ……なんか……すごく腹が減ってきた……」

「うごげねえ……」

「ホホホホ！また引っかかりおつて！

それはもう既に腐った肉さ！」

3人はへとへとになって言う。

「お前は……」

「アルミロー……」

「ぐぞー……だまざれだー……」

アルミローは真剣な顔で言う。

「食べ物への恨みは恐ろしいのだぞ！」

……さあ、たらふくおいしいもん食わしてやるから、

旅人たちの荷物を返すんだ！」

ガツガツガツガツ

ムシヤムシヤムシヤムシヤ

夜中のレストランの中で。

3人組は一心不乱にご馳走を食べる。

アルミロは欠伸を掻きながら流し台でお皿を洗っていた。

キッチンにココアが入ってくる。

「おお、君、どうしたんだい？」

「寝れなくて。私は…ずっと独りで夜も過ごしてたから…

皆と寝るのが…不安で…」

少女は悲しそうに言う。

店長は笑つて言う。

「じゃあ、私と少しお喋りでもしようか。」

店長は食べている3人の横から椅子を2脚かついでキッチンに置く。

そしてココアを座らせて、自分もどつしりと椅子に座る。

ココアは泥棒をよそ目に言う。

「何でおじさんは、泥棒にも食べさせてるの？」

「ん？…それはね…」

『食べる』…とこそ幸せなものはないからさ。

どんなに機嫌の悪い人でも、食べ物や口に運ぶと幸せな気分になれる。

そんな相手の感情を思つて料理をしていると、悪い奴でもついつい食べさせてやりたくなるのさ。

ホツホツホ…全く、お人よしにも程があるとは思わないかい？」

ココアは慌てて首を振る。

「私…嬉しかったよ。」

いつもはお魚を一匹だけで…

今日ほどたっぷり食べたことは無かったから…」

ひつく…ひつく…

ココアは泣き始める。

「幸せだったから…本当に…こんなに食べさせてくれるのかな…って…

疑っちゃって…疑うことしか出来なくて…」

アルミロは驚いた顔でココアを見つめていた。

アルミロはそつと冷蔵庫を探って、

二つのアイスクリームをココアの前に差し出した。

「さあ、召し上がれ。」

君は、よほど辛いことがあったんだね。」

ココアは涙まみれの顔でアイスクリームを舐める。

ココアは笑顔になる。

「おいし…」

アルミロも笑顔でアイスクリームを食べはじめた。

「君は泣くより、笑ったほうが可愛いよ。」

あの子達…ステーラも加えて、皆、君を大切に思っているはずさ。

だから、もっとあの子達と楽しく話してみてはどうかかな？」

ココアは頷いた。

「うん！」

泥棒達は空き皿を机の上に積んで、既にいなくなっていた…

「あー!」「ワン!ワン!」

ルーフス達は玄関の扉の前に荷物が置いてあるのを発見する。

ステーラは荷物の前で嬉しそうに尻尾を振っていた。

「良かった〜!返してくれただー!」

「アルミロさん、ありがとうございます!」

「なあと、返したのは、泥棒たち自身の判断さ。」

アルミロは白い歯を見せて笑った。

ビルの屋上から泥棒たちは旅人たちを望む。

「…なあ…俺らは本当にこのままでいいのか…」

「これが俺達の求めているものなのか…?」

「…このままじゃ…もうぬげだせないど…」

泥棒たちは静かに座って考えていた…

ルーフス達は手を振る。

「レシピアありがとうございます！」

「さようなら〜！」

アルミロも手を振った。

「しつかりと食べるんだぞ〜!!」

ルーフス達は地平線の向こうへと見えなくなつた。

アルミロは体操をして店の準備に取り掛かる。

店のテレビにはニュースが流れる。

『速報です。昨夜何者かの手によってロックベースシティ全域に渡り、

謎の破壊跡が発見されました。この事件による死傷者は2000人に及び、

警察は原因解明のため調査を進めています。…』

43：10億人を殺した科学者

ここはイリーガシテイの服屋。

ルーフス達は飾ってある本を手にとつて読んでいた。

チエリーがカーテンの中から出る。

「ワン！」お、着替えたか？」

チエリーが楽しそうに笑つて言う。

「ふふふ♪ジャックくん、驚いちゃうかもよ！」

「？」

ジャックは首を傾げる。

「じゃあ！開けますよ！」

チエリーがカーテンを開いた。

「シャア！」

中には変身したココアが立っていた。

ベージュ色のショートパンツにピンク色のTシャツ。

髪はきれいにとかしてあり、水色のカチューシャをつけている。
ココアは恥ずかしそうに後ろに手を組み、顔を赤くしてうつむく。

ジャツクの心臓が飛び出そうになった。
目はハート型になっている。

「おー！ココア似合ってるじゃん！」

ルーフスが目を少し大きく開く。

「ワン！ワン！」

ステーラも同調しているようだ。

「ちえ…チエリーさん…恥ずかしいよお…」

「なくに言ってるの！女の子なんだからこれぐらいおめかししなきゃダメ！」
チエリーは楽しそうだ。

ルーフス達はレジでお金を払って店を後にする。

ジャックとココアが先頭で、その後ろにチェリー、ルーフス、ステーラが並ぶ。チェリーの提案でこの配置にしたそうだ。

ジャックは珍しそうに道路の脇に立ち並ぶ店を見ているココアの横で顔を赤くしながら逆さまに辞書を読んでいた。

ルーフスはふと気づいてジャックに声をかける。

「おいジャック、辞書逆さまだぞ?」

ジャックは慌てて辞書を持ち直す。

チェリーはくすつと笑う。

「どうしたんだ、ジャック?どつか具合でも悪いのか?」

ジャックは後ろ歩きで両手をじたばたさせて言う。

「そそそそそそそそそそんことないよ!うん!正常すぎて逆にやばいよ!」

「???」
「…そ、そうか…」

ルーフスは意味も分からず了解する。

チェリーは相変わらず笑っている。

ドン!!

後ろ歩きで進んでいたジャックに人が当たった。

ジャックは前を見る。

「……めんなさい!!」

白いぼさぼさに白髭の男性が振り返った。

「いや、いいんだよ。」

ジャックは目を見開く。

「あなたは……!!」

アルフォード・マグネス博士ですよね……!」

男性はうなずく。

「ああ、いかにも。私がアルフォードだ。」

「「アルフォード博士?」」

ルーフスとチェリーとココアは首を傾げる。

「酸の研究者で、新しい燃料を作り出した偉大な人なんだ。」

アルフォード博士は帽子を取って挨拶をする。

「ああ…会いたかったです。あなたにお聞きしたいことがあって…」

アルフォード博士は笑顔で言った。

「君は研究者の卵みたいだね。…では私の研究所に来なさい。」

「いいんですか!」

アルフォードはうなづく。

「ありがとうございます!」

博士は歩きながら旅人たちと話す。

「ほう! 君達は旅人なのか!…それはいいな。世界はとても広いだろう?」

「ええ、とつても。まだまだ自分も知らない場所があつて…」

「よく学ばせていただきます!」

「今のうちに、よく学んでおきなさい。例えどんなものであろうと、

将来、問題を解く鍵となることだろう。」

「「はー!」」

「ワオン!」

「…さあ、着いたよ。」

「…!!」「え…!!」「なんで…!!」

「…!!」

ジャックだけが悲しくうつむいていた。

博士の研究所の壁には落書きがところどころにあつたのだ。

『die!!』

『You're enemy of this world!!』

『disaster!!!!』

どれも悪口。

書きなぐつたかのような汚い字から垂れる液の様子は血文字のようにも見える。

「重いものを見せてしまつてすまない。君達。」

さあ、どうぞ中へ。」

ルーフス達は中へ入っていく。

専門書が汚く散らばった部屋の中にはきれいな色をした小瓶がいくつもあつた。修復した跡のある窓ガラスからヒビの入った光が机を照らしていた。

「ここがアルフォードさんの研究室かあー……」

ジャックは興味深々に部屋の中を見ている。

チェリーがたずねる。

「この液体は何ですか？」

「腐食性液体といってね。動物にとっては危険で触ることのできない、

有害な液体なんだ。」

「有害なんですか!!……こんなにきれいなのに……」

アルフォードが研究室を探りながら話す。

「そのまま…ではね。これを更に私が独自に開発した、

このプラズマ製錬機で製錬するんだ。するとゲルと呼んでいる物質が出来る。

更にこれを製錬するとこんな固体になるんだ。」

アルフォードが一つの塊を見せる。

「こうなつちやうのか…」

ルーフス達がまじまじと見る。

「私はこの物質を発見してから、更に二つの特定の腐食性液体のゲルと

インゴットを混ぜることで、この惑星^{ほし}を救うことの出来る燃料の開発に成功したん

だ。

それがこれなんだよ。」

アルフォードが小さなひし形の物体を見せる。

「……これが…?」

「石炭よりも小さいですわね…」

「そう思うだろう?だがこの燃料一つで、木炭を約5000個も焼くことができる。」

「(?!)…5000個!」

「すごい……」

ココアも驚く。

「すごいな……！惑星を救うほどのものを作るなんて……」

アルフォードは少しうつむく。

「それと同時に……惑星を破壊するまでのものも作ってしまったのだが……」

ルーフス達は驚く。

ジャックは悲しい顔になった。

「それって……どういうことですか……？」

チェリーが尋ねる。

「先ほど、腐食性液体は人間にとって有害なもの……といたただろう。

人間とは皆強欲なものだ。各国の国々は他国を自分の領土とするために人間を殺すための武器を作っていく。」

「戦争……」

ルーフスがつぶやいた。
アルフォードはうなずく。

「レールガン、レーザーライフル、プラズマライフル、クリオブラスター、酸手榴弾……
これらは全て、各国の軍部が私の研究を応用して作られたものだ。」
ルーフス達は静かに聴いている。

「私は浅はかだった……『腐食性物質』という危険なものを人間の
役に立つため『だけ』に活動してきたのだ。

……危険な因子を防ごうとする努力は何もしなかったのだ……！
私は世界中の人間10億人を殺してしまったのと同罪に当たるのだ……！
アルフォードは大声で言い切った。

「家の壁の悪口は……そういうことだったのですね……」
「……………」
ルーフスは何も言うことが出来なかった。

「アルフォードさん…あなただからこそ聞きたいことがあったのです。」
沈黙を破ってジャックがアルフォードに問う。

「『作る』って…どんなことなんですか？」

アルフォードがジャックと向き合う。

「『子供を育てる』…ことと同じことだと思っうね。」

子供が悪人にそそのかされて悪さをした時、

責任はその悪人ではなく父、母にかかってくる。

だからこそ、責任を持って育てていかなければならないんだ。」

アルフォードは笑顔で言う。

「だが、同時に『愛すべきもの』でもあると思っうね。」

私はどんなに悪口をいわれたとしても、この燃料をゴミ箱に捨てることは無い。

自分の子供を捨てることは、悲しいことだからね。」

ジャックも笑顔で返した。

「お話できて嬉しかったです。ありがとうございます！」

「お礼を言いたいのは私の方だ。この私を尊敬してくれるなんてね。」

ルーフスとチェリー、ココアも温かい気持ちになった。

「「「ありがとうございます！」「」」

「ワオン!!」

「またいつでも遊びに来なさい！」

ルーフス達はアルフォードの研究所を後にする。

ジャックはとても嬉しそうだ。

バンドアの辞書に付箋を追加する。

ココアが興味を持つ。

「ねえ…ジャックくん…これって、何が書いてあるの？」
ジャックは笑顔で教える。

「これはね…」

ココアも嬉しそうだ。

チエリーはそれをにやにやしながら見ている。

ルーフスは笑った。

「さあ、明日、また次の街へ出発だ！」

今日はとことん食っていこうぜ！」

「「おおー!!」「」

「ワン！ワン！」

ルーフス達は楽しそうに店へと入っていくのであった。

44：宇宙の壁

ルーフス達は目の前の絶景に驚愕する。

6色程の固い粘土層が積もった気候帯。

今までの風景とは正反対の色彩を持った気候帯に、ルーフス達は啞然としていたのだ。

「すげえ…」

「メサバイオーム…侵食によって形作られた美しい台地だよ…!」

「絶景ですね…」

ココアは何も言わずに口を開いていた。

「すごい…」

ココアが一つつぶやいた。

「この世界に……こんなきれいな場所があるなんて……！」

「本当だな……」

ルーフスは続ける。

「ココア……俺たちはよ、お前に会うまでもいっばいすげえ景色を見てきたんだ……

でも、世界にはまだまだ、星の数ほどきれいな景色があるんだろうな……！」

お前も、その景色の数々を、これからいっばい見られるよ……！」

ココアは笑顔でうなずいた。

「ワン！ワン！」

ステーラがルーフス達を急かす。

「ははは……分かった、ステーラ……じゃあ行くか！」

ルーフス達は歩を進める。

ルーフス達の横を切り立った崖が通り過ぎていく。

橙色をベースに、青色、白色、茶色…

自然が作り出したとは思えない色の数々。

「本当に不思議だよね…なんでこんな色の土が自然に出来たのか…」

「鮮やかだねー…」

「ワンワン！」

ジャックが指差す。

「あれ、あそこに人だからが出来ているよ？」

見ると崖の上に人がざわざわといる。

「あ、本当…」

「何をやってるんだ…?」

「行ってみましょう！」

ルーフス達は崖の上によじ登る。

台地の上ではカメラやマイクもセットされ、

壇も設けられていた。

帽子を被った人達があわただしく動いている。

人ごみの一人に話を聞いてみた。

「すみません、この人ばかりはなんですか？」

「ああ、今から宇宙船ホープスター号の発射式が始まるんだよ！」

「宇宙船?!」

「そう、今回はロバート・バーリスが月への着陸を目指して、

1年間、宇宙を旅するのさ。今、彼の偉大なスピーチが始まるから、是非、聴くとい
いよ。」

パチパチパチパチ：

壇上に宇宙服を着た一人の男が現われた。

長い鼻に青い目、さっぱりと切った金髪に、がっしりとした体格だ。

ロバートがマイクに向かって話し始める。

「皆さん。私は今回、初めて宇宙に行けることに感謝します。

私がこの壇上に立てるのも、宇宙に行くために指導指示をしてくださったDIXIAの人々、

応援して下さった家族やその他の人達のおかげです。本当にありがとうございます。

私が子供だった頃、本に書いてあったのは「宇宙は無限に広がっている」ということでした。

私は本当にそうなのか、誰かが本当に、壁が無いことを証明したのか…

私は先生や親に何度も訊きました。

でも返ってくる答えはいつも『先生に訊け』『親に訊け』『先生に訊け』…

まさにいたちごっこでした。」

ロバートのコミカルなジェスチャーにギャラリイは緊張がほぐれて笑う。

「私はそれから宇宙飛行士になることを決意したのです。

宇宙に壁があるのかないのか…数で語るより目で見た方が早いでしょう。

もし私の人生の中で見つけられなくてもいい。

ただ、私はこういった宇宙探査の一つの架け橋になってさえくれればいい…

私は今日、この日を迎えられて本当に幸せです。

素晴らしい宇宙を身体で感じられるのですから…

家族にも伝えたいことがあります。『私は、必ず帰ってくるよ』と…」

パチパチパチパチ…!!

ワー!! ヒュー!!

拍手喝采が起こる。

ルーフス達も声を上げて、拍手をしていた。

アナウンスが流れる。

「ついに、この時がやってまいりました。ロバート・バーリス宇宙飛行士が宇宙へ旅立ちます—」

パチパチパチ…!!

「がんばれ—!!」「また1年後—!!」「お父さんががんばれ—」

拍手と共に応援の言葉が浴びせられる。

ロバートは子供やその他の人々に手を振って宇宙船に乗った。

「では、カウントダウンを始めます—」

空に小さくなっていくロケット。

やがてロケットは見えなくなった。

管制室はロケットを固唾を吞んで見守る。

ガピー…

ロケットからの応答。

「こちらロバート。無事大気圏を突破した。」

観衆と管制室から歓声上がる。

「良かった…！」

チェリーは安心する。

「宇宙か…どんな所なんだろうな…!!」

「星がきれいなんだろうな…!!」

「いいところ見られたな!」

「ワオン!!」

管制室はマイクを通して返事をする。

「ロバート、君が思い描いていた景色はもう目の前だ。

よき宇宙の旅を。」

「あ!!」

「ん? どうした、ジャック。」

「あんちゃん、チェリーさん、ミラーボって覚えてる?」

「ああ! あの南国のおっさんだな!」

「あの人ですね!」

「??だれ？」

ココアはきよんとする。

ルーフスは一文で答える。

「まあサングラスかけたおっさんだな！」

「????」

ココアは更に首を傾げる。

「ワン!!」

チエリーが問う。

「…あの人がかしたんですか？」

「この地域のメサバイオームの別名は『ディスク・マウンテン』…」

もうすぐミラーボの生まれた町に着くんだよ！」

「おお！そうか！次は一体どんな町なんだろうな！」

「楽しみですね〜！」

「ワンワン！」

「じゃあ、次はその町へ向かおう！」

「「「おおー!!」「ワオーン！」」

ルーフス達は固い台地を走って行った。

45: アートの街 (前編)

日が沈み、月がルーフス達を明るく照らす。

その周囲では星がきらきらと瞬いていた。

ココアは横から襲い来るモンスターに怯えながら、チェリーに背負われていた。チェリーとルーフス、ステーラにジャックがモンスターを払いのけていく。

背中には大量のモンスターが地面に這いつくばっていた。

ルーフス達とはある街の前に立つ。

「Welcome to music and painting town!」

木でできた看板にこう書かれてあった。

後ろには埋まるほどの住宅の中にビルが点々とそびえたっている。

中には大きな学校らしきものも見えた。

「ココがミラーボの生まれた街か…」

「賑やかそうな街ですね!」

「「ふわ〜あ…」」

時間はもう深夜。

ジャックとココアは同時にあくびをする。

「眠いなあ…」

「まずは宿を探しましょう。」

「そうだな。」

ルーフス達は街へと入っていく。

宿のチェックインを済ませて、ロビーから部屋へと向かう。

「あれ？」

ルーフス達はココアが傍にいないことに気づく。

「どこ行ったのかな…?」

「あ、いましたよ!」

ロビーの大きな壁の前。

ココアは目を輝かせて前を見ていた。

壁画だ。

筆とパレットを持った一人の男性が脚立の上で絵を描いている。

神聖な純白のベールに包まれた女神だ。

背中には光の羽が生えていて、胸には赤ちゃんを抱えている。

女神は優しく赤ちゃんに微笑んでいる。

その姿が母と重なって。

ココアはとつても幸せな気持ちになっていた。

「わあ!きれいな絵…!!」

「すっげえ…」

「おつきいなく…」

「ワン！ワン！」

ルーフス達も絵を鑑賞する。

男性がこちらに気づいた。

「おお、旅人さんかい？」

白と水色の水玉模様に、赤いタンクトップ。

茶色の髪に焼けた肌。

服にはカラフルに跳ねた絵の具がついていた。

「「「こんにちは！」」」 「ワオン！」

「こんにちは。」

男性は元気に笑う。

「僕はアミディオっていうんだ。まだ駆け出しだけど、デザイナーをやっているんだ。」

「へえ、そうなのですか。」

「この絵はなんで女神様にしたのですか？」

「この絵はね。母の温もりをイメージしたんだ。

だから僕は女神様にしてみたのさ……

まあ、ただ単に女神様を描いてみたかったっていうこともあるんだけどね。」

ココアは感動していた。

『絵』って……こんなに伝わってくるものなんだ……！

「あ、そうだ。今日はもう寝たいだろう。」

明日、僕が入っている会社の主催する絵の展覧会があるんだ。

場所はこのホテルの西にあるプロス・デセクラーズ美術大学で行うよ。

絵も描いてみることも出来るから、是非、来てほしいな。」

「はい！分かりました。では、おやすみなさい。」

「おやすみ！」

ルーフス達は部屋へと向かっていった。

翌朝。

ルーフス達はホテルを出て、ブロス・デセクラーズ大学へと向かった。

開催してから間もないのに、もうたくさんの人が集まっている。

横にはおじいさんが油絵を売っていたり、若い人たちがストリートダンスを見せている。

他にも食べ物の屋台が大きな大学の楓の並木道に詰まっていた。

男性陣は早速食べ物を頼む。

「おばちゃん！チョコレートドーナツ一つ！」

「僕はシュガードーナツで!!」

「ワオンワオン!!」

「はいよ、エメラルド1個ずつね！」

「じゃがバター！」

「ソルトピーナッツ！」

「ワワオン!!」

「焼き芋！」「プレッツェル！」

「ワッフル！」「チリビーンズ！」

チェリーは屋台を右へ左へ飛び交う3人に呆れて笑う。

「…ココアちゃん、先行ってみる？」

「うん！」

チェリーとココアは並木道を進んでいく。

大学の中には様々な絵が。

歪んだ顔の絵や、天使達が楽しそうに歌っている絵。

直線と円だけで描かれたような象徴的なものや、

1コマずつ描かれたアニメーションまで。

始めてみる絵画の世界を、ココアは歩いていったのだ。

チエリーはココアの今まで見たことの無い楽しそうな顔に安心していた。

チエリーはココアと絵を見ているうちに、美術室を見つけた。

中には子供達が真剣に筆で好きな絵を描いている。

「ココアちゃん、ここで絵が描けるそうよ。」

描いてみる?」

「えー! いいの!?!」

「もちろん!」

チエリーは笑顔でココアに言う。

ココアとチェリーは美術室に入っていく。

「お！やあ。来てくれたんだね！」

「あ…アミディオさん！」

「こんにちは！」

「さあさあ！どうぞ座って！」

アミディオはチェリーとココアに丸椅子を用意する。

「今日はココアちゃんだけが描くのかな？」

「はい、そうです。」

「じゃあこれが絵を描く道具だよ。」

アミディオはココアにパレットと2本の筆、水のバケツを渡す。そしてアミディオがココアの前に紙を持ってきた。

ココアは早速紙に向かって赤い絵の具で筆を付ける。

しかし…

何かちがうんだよなー…？

もっと太い方がいいかな？

もう一方の太い筆を持って筆を付けてみた。

ちがうなあ…？

わたしが描きたいのはもっと擦れてて…

ココアは閃いた。

「チエリーさん、筆持ってきてくれる？」

「え？…うん…」

「え!？」

チエリーは驚いた。

ココアは指にべたつと絵の具をつけて

紙に塗り始めていた。

これだ…!

「ココアちゃん…筆、使わないの?」

ココアはうなずく。

「だって、筆じゃこの線は描けないんだもん!」

隣にいた少年はココアを馬鹿にしたように笑う。

ココアはしれつとしたまま絵の具を水で洗っては描いている。

アミディオがココアの方へ廻ってくる。

アミディオも驚いた。

少女が筆じゃなくて指を使って紙に絵の具を塗っているじゃないか。

少女の描いているのは赤と緑…カーネーションの粹のようだ。

アミデイオは後ろからじつくり見始める。

そして一通り描き終わり、更に絵の具を筆で自分の右手に塗りたくり、絵の中心より少し右にぺたつと押す。

かわいい小さな手形が絵に咲いた。

「チエリーさん、左手、いいかな？」

チエリーは察したようだ。

「ええー！」

チエリーの左手に同じように絵の具を塗りたくる。

そしてココアの手の左に、親指が重なるように押した。

ココアの絵は完成した。

アミデイオはつい訊いてしまった。

「…題名はあるのかい？」

ココアは楽しそうに笑って答える。

「『おかあさん』です！」

チエリーは涙目になる。

自分の境遇と重なったのだろう。

「…とつても、いい絵だよ…」

アミ、ディオはただただ感心する。

それと同時に、こんなことも思い始めていた。

この子は常識を持っていない。

けど、常識を持たないということは、自由に生きることができるといふことなのか…

！

私も含めて、みんな常識にとらわれているといふことか…

この子の才能を、このまま見捨ててしまつていいのだろうか…？

「ココアちゃん、…この展覧会が終わった後、ホテルのロビーに来てくれないか…?」
「?…はい…。」

ココアはアミディオの態度に不思議そうに答えた。

「おーっす、チェリー。」

「ごっつぁんです。チェリーさん。」

「モオモオ。」

そこにはぶつくりと太った男性陣。

「…あなた達、誰…!？」

3人が元に戻った所で。

ホテルの部屋でチェリーは今日のことを話していた。

「へえ！これをココアが描いたのか…！…すげえな！」

「筆を使わないなんて、斬新だね…」

「ワオン！」

「でしょう？…でも、今ココアちゃん、アミデイオさんに呼ばれて話をしてるんです。

もしかしたら…絵の才能が認められて、スカウトされているんじゃない？」

「え!？」

ジャックが驚く。

「…そうか。…でも俺達は何も言うことはできないよ。
これはあいつの問題だからな…」

ステーラが悲しい声をだす。

「…クウン…」

「もしも行ってしまったら…寂しいです。」

「………」

「俺もだよ……」

4人は静かにココアが帰ってくるのを待っていた。

「アミディオさん、話ってなんですか？」

「君の『おかあさん』という絵…僕はそれに惚れこんだんだ。わざと筆を使わないことで生まれる柔らかさと温かさ。君にはとても良い才能があると思うんだ。」

アミディオはココアの目線に合わせて真剣に問う。

「僕の助手として、その才能を磨いて見ないか？」

「え……」

ココアはいきなりの問いかけに戸惑う。

「勿論、断ってくれてもかまわない！」

…君の素直な意見を僕は聞きたい!!」

アミディオはつい声を張り上げてしまった。

ロビー中の人々が注目する。

アミディオは慌てて言った。

「(ぎ)……(ぎ)めん、つい気合が入っちゃって…」

ココアは冷静に口を開き始めた。

「アミディオさん…わたし…」

ギイ…

ココアが部屋に入ってきた。

「お、こ、ココア、お帰り…」

「お帰りなさい…」

「お帰り…」

「ワン！」

みんなはいつもの雰囲気を作ろうと頑張った。

ココアは律儀に頭を下げる。

ルーフスが唾を飲む。

ジャックはうつむく。

チェリーは口を押さえる。

ステーラは無言で待っている。

「みなさん、今後とも…

よろしくお願いします！」

ジャックとチェリーはほつと息をついた。

「おどかしやがってえ〜!!!」

ルーフスは涙ながらにココアに駆け寄った。

そしてココアの手をとった。

「良かった! またみんなで旅が出来るんだな!!」

「はは! 結局あんちゃんが一番あせってたんじゃないか!」

「ルーフスさんらしいですね!」

「ワオン! ワオン!!」

「でもよ…なんで断ったんだ?」

「わたし、この旅で世界をまだぜんぜん知らないことが分かったの…」

だから、あと3年だけ、世界を見る時間をくださいって言ったんだ!」

「なるほどな…」

「(ち)ち(こ)こ、よろしくな!」

「よろしくね!」 「よろしく!」

「ワオン!」

部屋の一室から、愉快的な笑い声が聞こえていた。

46：アートの街（後編）

天気は晴天。

旅人達はアミディオと会話していた。

「昨日はありがとうございまして！アミディオさん。」

「いや、こちらこそ。新しい才能の芽を発見できて、とっても嬉しいよ。」

…君達はここから西へ行くのかい？」

「はい！そうです。」

「ここから西の地域はこことは全く違う景色になるよ。」

「え…というと？」

チエリーが質問する。

「ここは絵画が中心の文化が根付いている。」

しかし隣の地域では、面白いことに音楽が文化として根付いているんだ。」

「へえ！そうなんですか！」

ジャックが楽しそうに返す。

「とっても賑やかな場所だね。」

僕も静かな生活に疲れたとき、よく遊びに行っているよ。」

「あの…アミディオさん！」

「？」

アミディオはココアと向き合う。

「3年後…この街で会いましょう！」

アミディオは笑顔で返す。

「ああ！約束しよう！」

アミディオの大きな手とココアの小さな手が固く握られた。

「「さようならー！」」「ワン！ワン！」

アミディオさんは手を振る。

ココア達も元気に手を振った。

少し歩いて。

街の雰囲気はアミディオさんの言ったとおりガラツと変わった。

町中に音楽が流れる。

ドラムが大きく響くポップ調の音楽。

楽しい雰囲気はその街には溢れていた。

「すごいなあ……！」

「やあ旅人の皆さん、ようこそおいでくださいました。」

見ると背の小さい、落ち着いた黄色のハンチングキャップに白い口ひげを付けた

老人が黄色い旗を持って立っていた。

黄色い旗には「town ture」と黒文字で描かれている。

「私はここに来た旅人の方々をご案内する、フォルカー・デーベライナーといひます。

よろしくお願いします。」

「「「よろしくお願いします！」「」「ワオン！」」

老人は笑って案内を始める。

「では、少し、歩いてみましょう。」

目的地までの間で。

「まずこれから向かう場所はセントラルシアターです。」

今日は丁度良く、有名なロツカーグループ、レシーバーズの演奏会があります。」

「おお！早速音楽が聴けるのですね！」

「楽しみだな〜!!」

老人はシアターに案内する。

受付のお姉さんが目を開いて嬉しそうに言う。

「あら！フォルカーさんじゃない！」

「やあ、サブリーナ。久しぶりだな！」

「本当！…旅人さんが来てくれたのね。お金は私が払っておくわ。」

どうぞ中に入って！」

「ありがとう、後で共に酒でも飲もう。」

老人は旅人たちを引き連れてシアターへと入っていく。

お姉さんは笑顔で迎えた。

シアター内はほぼ満席で、運よく5人分の席があつた。

「おお〜！」

「ふっかふかだ〜!!」

「気持ちいいですね…」

「何が始まるんだろうな！」

「ワン！ワン！」

ブーーーー…

音が鳴ってシアターが暗くなる。

中心に立った司会者が照らされた。

ワーーーー…!!

パチパチパチパチ…!

観客席から一斉に拍手が起こる。

「レディース！ エンド ジェントルメン！」

今日はなんと、あのグループがこのシアターに来てくれたぞ!?

そのグループの名前は…レシーバーズです！」

4人の男性と女性のグループが左から姿を現す。

ウオオオオオオオ!!!

キャアアアアアア!!

観客は最高潮だ。

ルーフス達はびっくりする。

「ハハハ…すごいなあ…」

「皆さん盛り上がってますね…」

「暑くなってきたちやった…」

「どんな音楽なんだろうなー?」

老人は楽しそうに見ている。

茶髪の天然パーマの男性が元気よく言う。

「皆！こんにちは！ボーカル兼ギターのシンです！」

それじゃあいつものように、メンバー紹介に入りたいと思います！」

ヒューーーーーー!!!

「渋い低音を鳴らせ！ベース担当、ソウ！」

ツンツンの金髪の男性が軽快にベースを弾き鳴らす。

ワアアアア!!

「かわいく弦をはじけ！キーボード担当、アン！」

ギザギザにカールのかかった短髪の女性が跳ねるようにピアノを奏でた。

キヤアアアア!!

「最後に、力強くリズムをならせ！ドラム担当、デイズ！」

肥満体にゴーグラスを付けた男性がかっこよくドラムをならした。

ワアアアアアア!!

「以上がメンバーだ！それじゃあ、早速第1曲目：『Run!!』」

ワアアアアアアアアアアアアアアア…!!!

観客の拍手と歓声が鳴り止む。

ドラムが力強くバスとスネアを叩き始める。

観客の拍手もリズムに加わる。

それに続いてベースとキーボードが重なった。

最後にギターが入る。

前奏が終わり、シンが歌い始める。

♪ グレーに染まる世界に 独りでただ籠ってた

3年前の本 もう何十回読んだだろう

自分の周りには 誰もいないって決め付けた

はみ出た荷物 背に持って強い光に満ちる世界へ

光も 雲も 草も 空も 僕は何も知らなかったんだ

ここに僕の人生《たび》を見つけた 行こう

街を駆け抜けて 雲追い越して

草を飛び越えて 海掻き分けて

この星は なんて素晴らしく

鮮やかだったんだろう

灰色のこの心が 虹色に染まっていくよ

駆けろこの道を どこまででも はるかな未来へと

「素敵な歌詞ですね…」

「ああ…いいな…」

チエリーとルーフスが感嘆をもらす。

ジャック達は静かに聴いていた。

演奏が終わり、観客から声援と拍手が送られる。

パチパチパチパチ!!

ワアアアアアアア!!

「ありがとー!!」

ヒューー!!

「サイコー!!」

レシーバーズも手を振って返した。

その後、4曲の演奏が終わり、ライブは幕を下ろした。

辺りは夕方。西の空が赤く染まる。

ルーフス達はシアターを出て、フォルカーの後をついて歩いている。

「楽しかったですねー!!」

「ホント!行つて良かったぜ!」

「喜んでいただけ良かったです。私も案内をした甲斐がありました。」

「フォルカーさん、次はどこへ行くのですか?」

「次は先ほどどうつてかわつて、落ち着いたカフェに行つてみましょう。」

皆さん、お腹が減つたでしょう?」

グオオオオオオ…

ココアのおながが鳴る。

ココアは顔を赤らめてうなずいた。

カフェの店内には落ち着いたピアノの生演奏が流れている。

ルーフス達のテーブルにオムライスとコーヒ―、飲み物が運ばれてきた。

「良い雰囲気ですねー…」

「オムライスもうめえなー！」

ルーフスはオムライスをがつつく。

「この街はとても良いところですよ。私は5年ほど前にここに来たのですが、

この街ほど良い街は他に無いですね。」

フォルカーさんは話す。

ココアが問う。

「あれ？この街出身じゃないのですか？」

フオルカーは答えた。

「私はロックベースシテイという街で生まれたんだ。」

ジャックが何気なく聞く。

「ロックベースシテイって世界有数の経済大国ですよね？」

「…なぜこんな遠い街に引っ越したのですか？」

フオルカーは真剣な顔で話し始める。

「私は幼い頃からバイオリンを弾いていてね…」

バイオリンを弾く時が一番楽しくて、家に帰れば勉強そっちのけで

バイオリンを弾いていたりしていたよ。

そしてロックベースシテイで有名なバイオリニストとなった。

もう40年前になるな…

しかし、その10年後、『音楽が騒がしい』という市民の怒号に怯えた政府が

即座に音楽禁止令を出した。ロックベースシテイの憩いの地でもあったステージは

撤去され、楽器も政府によって奪われてしまった。

私は反対活動を行った。

だが世間の目は違ったのだ。皆が皆お金に目を奪われ、音楽はゴミのように扱われたのだ…

心が疲れた私は酒に溺れ、泣き疲れていたのだ…

そんな私に声をかけてくれた人物がいたのだ。」

『Hey・じいさん、この街に泣いているのかい？

…それなら、Meの街に来てみなよ。あなたにぴったりの場所さ。』

「男は変な話口調で私を誘ったのだ。確か名前は…ミラーボだったな。

男は地図を渡してくれた。あの男がいなければ、私は酒に殺されていたのだよ。

あの男は命の恩人なんだ。」

「そうだったのか…」

「音楽が無い生活なんて…どんなに悲しい生活なんでしょう。」

フォルカーさんは笑顔で言う。

「私は、この街に来て、本当に幸せさ。」

「フォルカーさんじゃないですか！」

程よく酔った男性が呼びかける。

「バイオリン、弾いてくださいよ！」

「私、伴奏やつてもいいですか！」

「私も聞きたいです！」

「僕も！」「俺も！」

カフェの客がフォルカーさんと呼ぶ。

「この街は、なんて楽しい町なんだろう……！」

フォルカーさんはつぶやいた。

ルーフス達も笑顔で言う。

「「バイオリン、聞かせてください！」」「」」

フォルカーさんのバイオリンが始まる。

その心地よい音色は、何を表しているのだろうか。

悲しみ？ 楽しみ？ 失望？ 希望？ 夢？

恐らく、その全てを包括しているのだ。

これまでの人生を、バイオリンのメロディーに乗せて

人々に見せているのだろう。

音楽というものは、一人一人が作ることができるのだから…

ホテルで夜を過ごし翌日。

ルーフス達はディスコ・マウンテンを後にしようとしていた。

「もう旅立ってしまうのかい？」

「はい。この街にもとどまって居たいけど、また次の場所も見たいですから。」

「…そうか。身体には気をつけてください。」

「…はい！ フォルカーさんも健康にお過ごしください！」

ルーフス達はお辞儀をする。

「…素晴らしい演奏、ありがとうございました！」 「ワン！」

フオルカーさんは笑う。

「アンコールが聞きたいなら、また遊びに来なさい。」

「さようならー！」

「また来ます!!」「ありがとうございますー！」

「ワオン!!」

ルーフス達は赤い台地を駆けていった。

ここは地下の廃坑。

ノイズの入ったテレビから音声が流れる。

『ロッキンベースシティの復興も順調に進んでおり、政府は引き続き犯人の捜索を進めております…』

「ねー…まーだー?…次の都市はどーこー?」

魔女が浮いた筈の上で寝転がって言う。

白衣の男が真顔で答える。

「まだだ…まだ街の機能が停止しないレベルなのだ…

もっと強大な力が必要なのだよ。…」

太った男が言う。

「金ナーらいくらデーモ出しマース!

はやくあのにくーき都市を破壊するのデース!」

「慌てるな。必ず破壊してやる。」

大きな男が言う。

「…私たちは何を進めれば良いのだ?」

白衣の男は歯をかみ締めてから言った。

「…ミュータントの薬の醸造に、ウィザースケルトンの頭蓋骨と

ソウルサンドを大量に集めるぞ。」

47：海底の涙

デイスコマウンテンを発って、

ルーフス達は海の上をボートで進んでいた。

ルーフス達は反省を生かしてサメを見守る。

「…大丈夫そうだな。」

「油断はいけないよ！あんちゃん！」

「そうですね。しつかりと見張らないと…」

ココアは初めての海におびえてチエリーにしがみついていた。

天気は快晴、海風が程よく吹いている。

昼寝には絶好の条件だ。

「…zzzz…」

ルーフスの首が落ちそうになる。

パチン！

ジャックが舟の上から平手打ちする。

「あんちゃん！」

「おおっと…ごめん、ごめん」

「…zzzzzzzz…」

ジャックの首が落ちそうになる。

バチン!!

ルーフスが平手打ち。

「ジャック！」

「おっと…ごめん…」

「…zzzzzzzzzzzz…」

二人同時に首が下がる。

ハッ

そして二人同時に向かい合って平手打ちした。

パン!! パン!!

平手打ち合戦開始。

「いてえなこの野郎！」

「こつちの台詞だよ！」

パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！
パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！
パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！パン！
二つの舟が暴れる。

「きゃあー！」

「ちよつと！海の上で暴れないでくださいよ！！」

「ワオーン！！」

ステーラが楽しそうに海面から二人の舟を揺らす。

「わわわ!!ばかおめえ!!」

バツシャアアアン!!!

チエリーは呆れる。

ココアは腹を抱えて笑っていた。

びしょぬれになった服をボートの上に絞って。
4人と1匹は舟を順調に西に進ませていた。

「ジャック、地図はどうだ？」

「びつたり西だよ！」

「おっし…このまま…」

「きゃああ!!」

バシヤアアン!!

チエリーとココアが海へ落ちる。

「…?…ステーラ、またお前やったのか?」

ステーラは慌てて首を振る。

…とその時、ステーラが海中に引つ張られたように見えた。

「ステーラ…! チェリー! ココア!!」

「…あんちゃん…この海には何かいるよ…!!」

「…何でもいい!」

ルーフスは。パンツ一丁で海へ飛び込む。

「あんちゃん!!」

ジャックとルーフスのボートが下へ沈む。

ジャックも足をつかまれ、引つ張られていった…

ルーフスは三人を探す。

こここの地域は深海のようだ。

(くそ……どい……)

その時、長い髪のようなものが目じりに見えた。

そして強い力で引っ張られていく。

(!!)

ルーフスはすごい速度で魚を横目に海の底へと向かう。
意識が遠のく。

(もうだめだ…息が…!!)

がば…

「がはっ!!」

ルーフスは気が付いた。

目の前にはルーフスと同じくらいの娘だ。

「気がついたようね…」

「ここは…?」

「ここは私の家。」

青と水色の羊毛で彩られた室内。

照明で明るく照らされた部屋は、

チェストに絵画などもあり、普通の家のようだ。

「……君は……」

ルーフスが女の子の特徴に気づく。

白色貝殻のブラジャーに白い魚の尾。

海砂を連想させるさらさらなブロンズの長い髪。

娘は話す。

「私はアーフィス。ご覧の通り人魚よ。ちなみにあなた達の舟を沈めたのは私。」

ルーフスは目を開く。

「おい……どういふことだよ。」

アーフィスはしれっとした顔ですましている。

ルーフスは娘の肩を掴んで揺さぶる。

「あいつらは無事なのか!?!」

「さあねえ。知ったこっちゃ無いわ。もう諦めなさい。」

「あなたが私の家から来たのはもう20分前。もうとつくに溺れてるわ。」

「おい……嘘だろ……」

ルーフスは絶望でいっぱいになる。

「それよりも……」

アーフィスは身体力が抜けたルーフスをベッドに押し倒す。

「私と良いことしない……?」

ルーフスは思い巡らせていた。

あいつらは死んじやったのか……

そうか……溺れて……

……俺は一人だけ……

……

アーフィスの唇がルーフスの唇に近づく。

……いや、違う!

俺はその死んだ顔を見たか？

見てない！…あいつらなら…あいつらなら！！

「生きてる！！」

キ~~~~ン…

いきなりの大声にアーフィスは反り返って耳をふさぐ。

「ど、どうしたの!? あなた!? ついに狂ったの!?」

「狂ってなんかいねえさ。あいつらは生きてるんだよ。」

アーフィスは罵倒する。

「ばっかじゃないの!? こんな海底で人間が生きていられるわけじゃない!?」

ルーフスは答える。

「確かに、人間は海底じゃ生きていけない…それは常識だ。」

「だけど、俺はそれと同じように非常識もたくさん見てきたんだ！

あいつらなら奇跡や気力でなんとか出来るはずだ！」

「何を言っているの!?!そんな訳ないじゃない!!」

「俺は例え、バカとか言われようが、あいつらを信じる道を選ぶ！」

ルーフスの声が海に響き、小魚達が逃げ出した。

ここは海底の地下溪谷。

横に伸びる明るく照らした洞窟の中。

ピュー!!

口から水が噴出す。

ココアは目を覚ました。

目の前にはステーラにジャックにチエリーだ。

「ああ…よかった…ココアちゃん…」

「よかったあ…」

「ワオン！」

「皆…ここは…つてうわ!!」

横を見るとサメが二足歩行で歩いていた。

「良かったな、ココアちゃん、こいつら心配してたんだぜ。」

しかも話した。

「このサメの方はシャーコさんっていうの。海底に棲むサメの半魚人らしいのよ！」

「驚かせてすまなかったな。」

「あ…よろしくお願いします。」

ココアは辺りを見回す。

「あれ?! ルーフスさんは?!」

「ああ、少年のことなら私が話そう。」

シャーコがいつものように海の偵察をしていると少年が何かを探るように海を眺め

ていた。

その時、少年は何かに足を掴まれて遠くへと消えてしまったのだ。

追いかけようとした時ジャックなる少年が上から降ってくる。

彼を助けた後にもう二人の人間が海底に溺れているという情報を聞いて、間一髪で助けたというわけらしい。

「何かに引きずられたって…ルーフスさんは何に引きずられたの!？」

「大丈夫だ、ココアちゃん。ルーフスは死んでいないだろう。」

もう犯人の目星は付いているからな。」

「そうなんだ…」

「…まあ、今から食事としようか。それから私が彼と合流してやろう。」

シャーコは魚を焼き始める。

ココアが半目で言った。

「…共食い?」

「…弱肉強食だよ。」

アーフィスはわなわなと震える。
なにやら怒っているようだ。

「え？え？なんで…？」

ルーフスは慌てる。

その時。

アーフィスの目から涙が一筋流れた。

「え…」

「なんで私を恨まないの!?!こんなに人間を殺す私を!!ねえ!」

ルーフスは冷静になって問う。

「お前は、もしかしてこんな行為を今までずっとやってきたのか?」

アーフィスは涙の流れる目を手の平で抑えながらうなづく。

「…理由があつたんだろ?…俺に話してみろよ。」

人魚と人間では時の流れる時間が違う。

人間での100年は人魚での1000年なのだ。

これは今から200年も昔の話。

アーフィスはある男に恋をしていた。

男は人間で、ある国の王子様であった。

アーフィスは告白をしたが、人種の壁を越えることは出来ない。

アーフィスの心はいつも高鳴り、もやもやとしていたのだ。

そんなある日。

彼女は髪飾りに浜辺の貝殻を取りに来た。

その時、王子様が偶然海の近くに来たのであった。

アーフィスは勇気を出して地上の岩に腰掛け、姿を現した。

しかし…

パン!!パン!!

パン!!

アーフィスのわき腹に弾が当たった。

王子はアーフィスを見つけるや否や、「捕らえろ」と兵士達に発砲を命じたのだった。王子の目は『珍しいもの』を見つめるかのような目であった。

口は残忍そうに笑っている。

アーフィスは涙を流して海へと逃げ出した。

傷はサメの半魚人のシャーコに手当てしてもらったが…

心の傷は深く残ったのだった…

アーフィスはそれから人間に恨みを持って、

この海域を渡る人間を沈め殺していったのだった…

アーフィスは泣き続ける。

「……もしかしてさ。」

「俺だけ助けたのは、王子様と顔が似てたからなのか？」

アーフィスはうなずいた。

「…なんであなたは…ひつく…こんな私を…ひつく…恨まないのよ…」

ルーフスは温かくアーフィスを抱く。
まるで父のように。

「恨めないよ…誰だって…人間だって…失恋は辛いものだから…」
「…ああああああああ！」

アーフィスは大きく泣いた。
「本当に、辛かったんだな…」

チエリー達は水中呼吸のポジションを飲んで海中をシャークに連れられ歩いていく。
チエリー達は籠った声で話す。

「僕達を沈めたのはその人魚が犯人なんだね。」

「ああ、そうさ。だが分かってくれ、

…彼女には、さつき話したような辛い思い出があるのだから…」

「……」「クウン？」

チェリーはシャーコをじつと見る。

ステーラは首を傾げた。

「あなた…もしかしてその人魚に恋しているんじゃないの？」

シャーコは赤くなる。

「…そうさ。…片思いだ。」

ココアも話に乗った。

「好きなこと、人魚さんには言ったの？」

シャーコは首を振る。

「言わないとだめだよ！好きなら好きって！」

ズブツ。

ジャックの胸に大きな矢印が突き刺さる。

「それじゃあ何にも伝わらないよ！」

グサツ。

もう一つおまけに。

「ココアちゃん……」

チエリーは悟る。

シャーコはしょんぼりと顔を赤らめていた。

「おい、アーフィス！お前、また人間を沈め……」

シャーコが石のように硬くなる。

「ルーフスさん？」

チエリーも同時に石のようになった。

「あんちゃん！」「ルーフスさん！」

ベッドの上でルーフスの腕にアーフィスが絡み付いている。

しかもルーフスはもぐった時の格好でパンツ一丁。

ルーフスが慌てて引き離そうとしている。

「うぐぐぐぐ……もういいだろ！離れろって！」

「あーん！まだこうしていたいのだ！！」

「おい！そのサメ！どうにかしてくれよ！」

こいつタコみたいに取れないんだよ！」

石と化したシャーコに助けを求めるルーフスであった。

ココアがチェリーを突つつく。

チェリーも全く動かない。

「…チェリーさん？」

「ごめんなさい！」

アーフィスが旅人たちに謝る。

「いいんですよ。死ななかつたんだし。…ねえ？」

チェリーがジャックとココアに問う。

「許すけど…もうこういふことはやめて欲しいね！」

ジャックが少し怒って言う。

「辛かつたんでしょ？ならしかたないよ！」

ココアは笑つて言った。

「…ありがとう！…お詫びにもてなすわ！」

ココアとジャック、ステラとアーフィスが笑つて話していた。

チエリーとルーフスはシャーコに呼ばれて家の外で話す。

「ありがとう。…アーフィスはずっと、この海で独りぼっちだったのだが…」

今はあんなに楽しそうに人間と話している。君達は彼女を救つてくれたのだ。

ありがとう。」

「いや、俺たちは海底に招かれただけだから！」

「そうですよ！お魚もおいしいですし！」

シャーコは笑う。

「…そう言い換えてくれると、嬉しいよ。」

「…ところで君はスターク海賊団にあつたのか？」

「ああ！あつたよ、とつてもおもしろえ奴らだった！」

「シャーコさんもスターク海賊団にあつたんですか？」

「ああ、ただし、最初は『敵』としてな。でも私達の種族のことを話したら、すぐに受け入れてもてなしてくれたよ…」

海底での会話が進む。

海底には月の輝きと共に波の動きが映されていた…

翌日。

シャーク達が向こうの島まで渡してくれた。

「じゃあ、また会おうぜ、シャーク。」

「ああ！元気でいろよ！」

「…アーフィスは？」

「今チエリーと話をしているぞ。」

二人の娘の間に波のさざめきが流れる。

アーフィスはチェリーに貝のペンダントを差し出す。

チェリーは受け取った。

「…これは？」

「これは、恋のライバルの証！

私…絶対に負けないから！あんたもがんばりなさいよ！

私が頑張る意味がなくなっちゃうじゃない！」

チェリーは笑う。

「友達の証じゃなくて？」

アーフィスは顔を赤くしてもじもじとする。

「りよ…両方よ両方！両方って言ってもライバル成分のほうが強くて…

と…友達とか…だい、だい大歓迎よ!!分かった!？」

「分かったわ！」

「じゃあねー!!」

「また会おう!!」

「「「さようならー!!」」」

「ワオン!!」

ルーフス達は緑の密林へと入っていった。

48：小さな島の研究所

小さな島にたどり着いたルーフス達。

シダやツタ、巨木に邪魔をされ、なかなか前に進まない。

「ジャングルは嫌だなー…」

「とつても進みにくいですよねー。」

「あ！ネコさんだ！」

「ココア！危ないよ！噛まれちゃうよ！」

「グルルルルル…ガオウ!!」

「ニャアアア!!」

「こら！ステーラ！めっ！」

ジャックが制止する。

密林を更に奥に進むと、開けた場所に謎の研究所があった。鉄で囲まれたものものしい研究所。

中には試験管のようなものが立てられている。

「…なんの研究所でしようね…?」

「…誰もいないな…」

キャアオ！ギャアオ！

「ワン！ワン！ワン！ワン!!」

ステーラが空に向かって吠える。

バサ…バサ…バサ…

ココアが空を凝視する。

ココアがジャックの肩をつついた。

「ねえねえ、ジャックくん。」

「ん?」

「あのおつきな鳥、なんていうの?」

「ああ、あの見たことある外観、あれは…プテラノドンだね!

今じゃあもう絶滅しちゃって、どこに行っても化石でしか見られない恐竜だよ。」

「見えてるよ?」

「……」

ジャックが空を2度見した。
もう空には何にもいない。

「……あれ…海底にいたから疲れちゃったのかな…」

「…う…何なんだろう…?」

ココアには疑問符がついたままだ。

「ちよつと池があつたから水飲んでくるわ。」

ルーフスが池の方へ行つた。

「ああ…そうか…バッグが海水でびちよびちよだわ…」

後で買い換えないとなあ…」

チエリーはびちよびちよになつたクッキーを食べてまずそうに舌を出す。

ジャックとココア、ステーラも口にした。

「これはまずいね…」

「うう…」

「クウン……」

みんなの顔が青くなる。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

ルーフスの最大の叫び声が島に響き渡る。

チエリー達は池へと向かう。

ルーフスが池のほとりに腰を落としていた。

「おい……これって……俺でもわかるぞ……これは……」

チエリー達が目を見開いて口をぽっぴり開ける。

ステーラは威嚇をしているようだ。

「グルルルル……」

「恐竜だろ!?!」

池には首の長い橙色の竜がいた。

大きさはルーフスの背とほぼ同じぐらいといった所か。

「コアア！コアア！」

首長竜は鳴き声を出してルーフスに寄ってきた。

「ひいひい!!こっちきたあ！」

チエリーは慌てて海水にぬれたクツキーをホイと投げた。

首長竜が口でキャッチ！

首長竜はおいしそうに食べる。

チエリーはもう一つ投げる。

ホイッ。

パクッ。

∴

ホイッ。

パクッ。

∴

チエリーの顔が驚愕の表情から徐々に笑顔へと移行していく。

「かわいい〜!!」

ホイッ!ホイッ!ホイッ!ホイッ!

パクッ!パクッ!パクッ!パクッ!

「チエリーさん、投げすぎ…」

「まあ…旅人さん?」

池のほとりに慌てて駆けてきた女性。

茶色のショートに白衣を着ている。

見た目から言えば30歳ほどの女性だ。

ジャックがいきなり目を輝かせて聞いた。

「なんで恐竜がいるんですか!？」

女性は少し戸惑って話し始める。

「えっと……まあ、私の研究室でゆっくりお話しましょうか。」

白く清潔な研究室の中で。

ステーラはエミリアから差し出された牛肉を食べている。

「私はエミリア・ブライトウエル。ここで恐竜蘇生の実験をしているのよ。」

「『恐竜蘇生!』『ワオン!』」

エミリア博士は機械の横に立って説明する。

「化石をこの分析器にかけて恐竜のDNAを取り出して、それを培養することで恐竜の卵に育てるの。」

でもこの過程に至るまでに相当の運が必要なんだけどね。」

「今は何匹ほど育てられたのですか？」

「うーん…2年前から始めて…6匹ぐらいかな？」

「2年間で6匹!?!」

「育てるのも卵を作るのもとても大変なんですわね!」

エミリア博士はうなずく。

「今までに何匹もの恐竜を殺してきてしまったの。」

その子達もかわいそうだけど、私もとても悲しかったわ。

自分の子供を殺したのも同然ですから…」

「そうですね…」

チエリーは共感する。

「でも私は、ここで一歩進まなきゃいけないと考えたの。」

ここで止まれば、人間は進歩できない。私も含めてね。

私はこの恐竜蘇生の研究に人生をささげて、未来へつなげたいと感じているの。」

「すばらしいなあ…」

ジャックが感心した。

「あの…」

ココアが言う。

「恐竜を見せてもらってもいいですか？」

エミリア博士は笑顔で言った。

「もちろん…さあ、じゃあ恐竜の世界へ冒険するわよー!!」
エミリア博士は無邪気に腕を上上げる。

「「「おおー!!」「「「ワオーン!!」

ルーフス達も手を上げた。

「まずはさつきあなた達が見たこの子。プレシオサウルスよ。

名前はリナ。人懐っこい女の子よ。」

エミリア博士はリナの頭を撫でる。

「コアア♪コアア♪」

リナは嬉しそうだ。

「かわいい♪」

「この子は大きいから、この私も乗ることが出来るの。」

…「コアちゃんとジャックくん、乗ってみる?」

「やったあ! 恐竜に乗れるのかあ!」

「わーい!」

二人とも子供っぽくはしやぐ。

「すごいなあ! リナ!」

「いい子いい子♪」

「コアア! コアア!」

「次に…」

ピュイー…

ビームスから何かが落ちていくのがココア達に見えた。

「…ああああああああああああああああ!!」

ボシヤアアン…

遠くで高く水しぶきが上がった。

「「あ」「ワオ」

目の前には首長の青い竜だ。

「えーと次はこの子！ブラキオサウルスのルーパちゃん！

こんなに大きいけど、こう見えておしとやかな女の子なのよ！」

ルーパは黙々と葉っぱを食べている。

「のんびりしてますね！」

「ここまで大きくなるとね。すばやく動けなくなっちゃうの。」

スタタタタ…

「ハハ！！」

エミリア博士がチエリーに向かってどなる。

「え!? す…すみません…」

「ああ、ごめんね、あなたに怒っているんじゃないの…

後ろの子にね！」

チエリーの後ろにはぬれたクツキーを持ち去ろうとしている小さい恐竜が。

反省を示しているのか寂しそうな顔をしている。

「かわいい〜♪ いいのよ〜 どんどん持ってっちゃって！」

チエリーが小さな恐竜にクツキーを与える。

小さな恐竜はガツガツとおいしそうに食べ始める。

「この子はヴェロキラプトルのマイク。いたずら好きな男の子よ。」

「次にステゴサウルスのエレナ。この子はもう大人で私と同じくらいのおばさんなのよ！」

「いやいや、エミリアさんはまだ若いっすよ！」

「やだ〜！もう！ルーフスくんだったら♪お世辞言わないの！」

「♪」

ステゴサウルスも同時に喜ぶ。

「次にトリケラトプスのランダよ。この子は中学生くらいの子ね！」

「…チエリーちゃん乗ってみる？」

「わああ！乗りたいですー！」

チエリーがランダの上に乗る。

ランダがいきなり楽しそうに歩き出した。

ドスン♪ドスン♪

「きゃあー！」

「あら…フフフ。この子の性格がやつと分かったわ。」

「この子は女の子好きなのね！」

「はははははは！」

「チェリーは楽しそうだ。」

「…あと一人なんだけどね。」

「どうかしたのですか？」

「一人だけ柵の中で育てているの。」

「もしかして…肉食恐竜だからですか？」

「ジャックが予想する。」

「そう。…テイラノサウルスのゼットっていう子なんだけどね。」

柱で枠組みされた柵の中でゼットが眠っている。

「この子はね、愛情を見せても私に心を開いてくれないの。」

撫でようとすれば手を噛まれるし、近づいても避けられてしまう。…」

「そうなのですか…」

エミリアは悲しい表情から少し笑ってみせる。

「でもね、最近、分かったことがあるのよ。」

私がエサを与えても私の前では食べてくれないけど、

私がゼットの所にもう一回来てみると、そのエサはなくなっていたのよ。

少しだけ、愛情が伝わった証拠かな！」

ルーフス達は笑う。

「ルーフスくん達はもうここを出るの？」

「はい、研究の邪魔になつてはいけけないので…」

「なら、せめて研究所で夜を過ごしてから行きなさいな。」

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

ルーフス達は研究所へと入っていった。

研究所での会話は弾む。

「ええ!?!あなた達、アルファード博士に会ったの？」

アルファード博士は私の尊敬する博士の一人なのよ!」

「おお! そうなのですか!」

「人々の批判にも負けずに、自分の研究を愛し続ける。

私はまだまだだね。批判されるとすぐに落ち込んだりして。」

「エミリア博士もがんばっているじゃないですか!」

「そうですよ!」

「ふふ! そう言ってくれると嬉しいわ!」

「ワン!」

翌日。

ルーフス達は舟を浜辺につける。

海にはリナ、そしてビームスも待ってくれた。

「コオウ…」

リナは寂しそうだ。

「大丈夫だよ、私達、またきつと来るからね。」

ココアが優しく頭を撫でる。

「コアア！」

リナは笑顔になった。

「おう、お前も元気でいろよな！」

「今度は僕も乗せてよ…安全速度で」

「キャアオ!!キャアオ!!」

ビームスも笑っている。

「エミリアさんも研究、頑張ってください!」「ワオン!」

「あなたたちも、風邪には気をつけるのよ?」

エミリアはステータラを撫でた。

「さようならー!!」「お元気でー!」

「ワン！ワン！」

「またいつでもおいで！」

「キヤアオ!!キヤアオ!!」「コアア！コアア！」

舟は小さな島から、どンドン遠ざかっていった：

49：嵐の前の静けさ

青く溶けそうな空にふわふわと白い雲が浮かんでいる。

ルーフス達は1日ほど海を渡り、

「セルバースタウン」という港町についた。

大きな灯台はどっしりと構えており、漁船と貿易船がゆらゆらと波の上で揺れている。

クア、クア…

カモメが鳴いて旋回をしている。

ルーフス達は美しい町の風景を堪能しながら砂浜を歩く。

「いい風ですね…」

「ああ…」

ステーラは砂浜を駆ける。

町は道行く人の静かな賑わいで包まれていた。

ある人は路上で時計や地図などを売り。
カップルはベンチで静かに愛を感じていた。

チェリーは路上販売で4人分のバッグパックを買う。
チェリーはルーフスとジャック、ココアに手渡した。

「お、ありがとう。」

「これで荷物も安心だね！」

「チェリーさん、食材もここで買っちゃおうよ！」

「ワオン！」

ステーラがチェリーを急かす。

「そうですね、食材を買いに行きましょう！」

ルーフス達は別れて買い物をすることにした。

ルーフスとココア、ステーラは肉屋さんと魚屋さんに。

チェリーとジャックは小麦と野菜やパンを買いに行くようだ。

それぞれの買い物を楽しむルーフス達。

「牛肉と豚肉に…鶏肉も買っておくか、ココア好きだもんな！」

「うん！ありがとう！」

「ハッハッハッハ…」

「はは、ステーラ、嬉しそうだな！」

「はい、サービスだよ。」

ステーラの前にステーキが置かれる。

「ワン！ワン!!」

ステーラはお肉にがぶりついた。

「あ！ありがとうございます！…良かったな、ステーラ！」

「ワン！」

「はい、チェリーさん、にんじん持って来たよ。」

「あ、ありがとう！ジャックくん。」

「あとは何が必要なんだっけ？」

「うーん…じゃがいもにカカオ豆ですね！」

「じゃあ僕カカオ豆持つてくるよ！」
「ありがとう！…じゃがいも…じゃがいも…」

5人の旅は平和に過ぎていく。

チエリーの笑顔の中には、不安げな表情も同時にあつた。

正午のキャンプ場。

旅人たちの腹もすいてくる頃だ。

チエリーとココアの手料理が始まる。

「今日はフレンチトーストをつくってみよっか！」

「フレンチトーストって？」

チエリーは優しく笑う。

「作って食べて見た方がわかるかな?…じゃあまず材料は…」
チエリーはココアに説明をする。

ココアは一生懸命に卵を割る。

チエリーはシロップを作りながら見守っていた。

ルーフス達は静かに本を読んで待つ。

ステーラは暖かさに眠ってしまったようだ。

「出来たよ!」

「お!完成したか!」

「うまそうだね!!」

「ワオン!」

ココアは不安そうにルーフスたちの反応を待つ。

「…どうかな?」

「んー！うめえよ！」「最高！」「ワオーン！」

「良かったね！ココアちゃん！」

「うん!!」

ココアは笑顔で応えた。

ステーラが木陰で座っている中。

ジャックとココアが開いたままの辞書を挟んで、ビニールシートの上で眠ってしまった。

チェリーは二人にタオルケットをかけた。

「ルーフスさん。」

「ん？どうした？」

チェリーはジャックとココアを見て微笑みながら話す。

「最近、とつても平和ですよね。」

「まあそうだな、モンスタ―は時々出るけど、前よりじたばたしてねえっつーか…」

「…平和ならそれでいい、って思いたいのです。でも…」

この幸せな日々が、いつか不幸になって帰ってくるんじゃないかって、思うことがあるんです。…どうしたらいいのでしょうか…？」

「…まあ、そうだな…」

ルーフスは考える。

「でもよ、俺たちなら吹き飛ばせんじゃねえか！そんな不幸ぐらい！

俺達がこの町まで来れたのも、俺達の力なんだからよ。

大丈夫さ、今の幸せを、そのまんまかみ締めておこうぜ。」

「…そうですね。」

チエリーは幸せそうに微笑みながらいった。

50：計画始動

鮮やかな黄緑色の芝生と白い柵に囲まれた赤い一軒家。

女性は少ない皿を洗い終わってから、机でアルバムを見ていた。

「いつのまにかあなたは大きくなっていくのね…」

女性は笑う。

「ルーフス…あなたは今、どこまで大きくなっているのかな！」

ドオオオオオオオン…！

「きやあああああ!!」

「うわあああああ!!」

人々の悲鳴が外から聞こえる。

女性は慌てて外を見る。

遠くに謎の巨大な黒い影が見える。
黒い影の目は不気味に白く光った。

ここはセルバースタウン。

漁師が今日も陽気に鼻唄を歌いながら網を引く。

漁師に影がかかる。

「ん…？…飛行機か…」

三つ首の髑髏は漁師を凝視する。

漁師は驚く間もなかった。

ドオオオオオオオン!!
ボシヤアアアアン!!

漁師の船は半分になって沈んでいった。

「父さんー！」

他の漁師は大きな水しぶきが見えた。

水しぶきの中から謎の黒いモンスターが現われた。

「逃げろおお!!」

ワアアアアアア!!

船はそれぞれがモンスターから逃げていった。

ドオオオン!!

ボオオオオン!!

船は次々に沈められていく。

沈んだ船員達は浮き上がっては来なかった。

モンスターは青く光りはじめる。

モンスターの目は静かに閉じた。

セルバースタウンの砂浜には今日も人で溢れている。

砂浜の監視員は双眼鏡で恐ろしい光景を観てしまった。

モンスターがこちらに向かって近づいてくる…!!

「皆さん！謎のモンスターがこの砂浜に近づいています！

速やかに海から上がってください!!」

観客はモンスターを確認してから海から急いで上がる。

キヤアアアアアア!!

「お子さんの手を離さずに！速やかに海から上がってください!!」

ドオオオオン!!

謎の爆発物が監視員の目の前で落ちて砂を上げる。

「まずい！我々も逃げるぞ!!」

監視員も機材を置いて砂浜を引き上げる。

砂浜に大きな口を開けて泣いている少年がいた。

ルーフス達は逃げる人ごみを掻き分けて砂浜に出る。

「なんだ…!この騒ぎは…!」

「グルルルル!!」

ステーラが気づいて威嚇する。

「!!」

黒い三つ首の髑髏に、巨大な肋骨を持ったモンスターが近づいてくる。

ルーフスの後に、女性がたどり着いた。

「レック!」

「ママ!」

少年は喜んで走っていく。

「うわー！」

バシヤア！

しかし砂に引っかかって転んでしまった。

モンスターは少年の背後から髑髏を少年に向かって放った。

チエリーが咄嗟に判断して砂浜を駆ける。

「たあー！」

刀で髑髏を横に弾き飛ばした。

髑髏は砂浜に当たって爆発した。

ポオオオオン!!!

遠くで砂が上がる。

「早く逃げて！」

「うわああああん!!」

少年は泣きながら母親の元へ駆けていった。

ルーフスとジャックもチェリーの元へと行く。

「なんだかわかんねえけど……ここで食い止めとかなきゃ街が壊されちゃう！」
「そうだね！」

チェリーは真剣な表情のままうなずいた。

ボオオオオン!!!

モンスターが爆風を上げる。

ルーフスは風を腕で防ぐ。

モンスターは上に上がり、海の彼方へと消えていった。

ルーフス達は呆然とする。

「…なんだったんだ一体…」

「さあ…」

セルバースシティのカフェにはいつも以上の人で溢れていた。

テレビでの情報を家に帰るより先に手に入れるためだ。

店長もカウンターを出て客の中に混じってテレビを見る。

テレビキャスターが話す。

『速報です。先ほど全国各地で謎の黒いモンスターによる襲撃が行われました。』

この事件には死亡者や重傷者も出ており、全国の警察による調査が行われています。

…各地のテレビ局に中継が繋がっております。…』

「この街だけじゃなかったのか…」

屈強な漁師は言う。

「そしてあの黒い奴はどうやら何匹もいるようだぜ。」

魚屋は言った。

「一体あのモンスターは何者なんですの…」

教会のシスターは言った。

『…こちらサク…』

プツン…

テレビの表示が途絶える。

「おい、サントス！お前のカフェのテレビが壊れたぞ！」

カフェの店長は腕を組んで考えながら言い返す。

「いや、私のカフェのテレビは、先月取り替えたばかりだが？」

「いやでも現に表示が出来てねえじゃんかよ！」

「それはすまないが、私が得意なのはコーヒーを入れることぐらいだから
どうしようもできないさ。」

カフェの客からは不満がもれる。

その不満を掻き消すかのようにいきなりテレビが点いた。
テレビに映っていたのは謎の白衣の男。

「なんだ…？」

「電波ジャック？」

「誰だ…？」

白衣の男は狐のような笑顔で話し出す。

「やあ諸君。私はMr. Fと言う者だ。以後お見知りおきを…」

「白衣の…男…」

ルーフスは怒りで震える。

ココアの村を襲撃したのはこいつなのだ。

白衣の男は続ける。

「君達はなんて滑稽で臆病な人たちなのだろう！まさに爆笑ものさ…」

なぜならこんな救われない世界に、黙って住んでいられるのだから！」
白衣の男は両手を差し出して言った。

「そんな君達に、最高のプレゼントを贈ってあげよう。

我々の30分間のデモンストレーション：気に入ってくれたかな？

明日の正午から、我々はこの世界を破壊して0に戻す計画を開始する。

君達はただ待っていてくれればいい：

そうすれば、皆が幸せになれる世界が築けるはずさ：

どうだ、最高のプレゼントだろう？

…ただし、どうしても受け取りたくは無いですという者は

バツダボーナ火山のふもとに集まればいい。

もし500万人以上に達せば我々の飛行機に乗せてやろう。

さあ、君達は箱舟に乗るか、死を選ぶか：

君達の判断：楽しみにしているよ。」

プツン…

『……………!!失礼しました。先ほど何者かの電波ジャックにより…』

客の間に静寂が訪れる。

チエリーの手は机の下で震えていた。

客達の目はさまざまだった。

理不尽な行動に怒りを見せるもの：

滅亡の恐怖に怯えるもの：

怯えた客はカフェを後にし、最後の晚餐に出かけていった。

ドン!!

一番屈強そうな男が取り仕切る。

「ここに残っている奴の中にや…チキン野郎はいねえだろうな…?」

「当たり前だ!」

「そうだ!!」

多数の男女は賛同する。

「…俺達だけじゃ世界は守れねえ…だがこの世界にや、俺達のように共に戦ってくれる奴がいるはずだ！」

「「「そうだ!!」」」

「「「そうだ!!」」」

ルーフスとジャック、ステーラも掛け声を合わす。

「そしてそれすらも同じように求めているのが…」

俺達さー！」

「「「「おおおおおお!!」」」」

勇者達は初対面もいるが、心は既に一つになっていた。

力強い掛け声を屈強な男に浴びせる。

「よし…じゃあまずは今日はもう寝るぞ！力がなきや戦はできねえ！」

「待ちなさい。」

カフェの店長が言った。

「それを言うなら君…腹が減っては戦が出来ぬだろう。」

今日は世界最後の大サービスだ。私の料理をいっぱい食べていきなさい。」

「「「わあああああああああ!!!」」」

客達は大いに喜ぶ。

「ありがとよ!サントス!」

「俺にはコーヒー入れることぐらいしかできねえって言つたろう?」

サントスは冷静に手を洗いながら言った。

チェリーがカフェの人々を見つめて、涙を拭いたように、ルーフスには見えた。

腹が一杯になり。

ルーフス達はホテルで予約をする。

ホテルはすでにほぼ満杯で、二人部屋が二部屋のみであった。

ルーフスとチェリー、ジャックとココアとステーラで、二部屋に分ける。

~~~~ジャック、ココア、ステーラの部屋~~~~

部屋の明かりを消して、それぞれのベッドのランプでほのかに照らされている。

ココアが本を読んでいるジャックに話しかけた。

「…ねえ、ジャックくん…」

「どうしたの？ココア。」

ココアは不安そうにジャックに尋ねる。

「…この戦いでさ、私がいても…足手まといになるだけだよね…」

私はどうしたらいいのかな…？」

ジャックは答えた。

「…僕は君に、一緒にいて欲しいな。」

ココアはジャックを見る。

ジャックは震えながら答える。

「正直、僕はこの戦いから逃げ出したいんだ…

僕の中の臆病な気持ちだが、そうさせているんだよ。

でも、」

ジャックは真剣な顔でココアと向き合って話した。

「君がいれば、僕は逃げずに戦えると思うんだ。」

ココアはジャックをポカンと見たままだ。



ジャックはココアの顔に慌てる。

「ご……ごめん、やっぱり無理かな？ そうだよね、

君を戦場の中に置いておくなんて」

「そんなことないよ！」

ココアは笑顔でジャックの手を取った。

「私……ジャックくんを応援する！」

ジャックくんの傍にいた方が、私も安心できるから！」

ジャックは赤くなる。

ジャックは顔の暑さを振り落としてから、

ココアの手を強く握り返した。

「必ず、君を守って見せるから！」

ココアは笑顔で言った。

「うん！よろしくね！」

「ワオン！ワオン！」

ステーラはココアを安心させるように、ココアの顔をなめる。

「あははは！ステーラも守ってくれるんだね！」

「ワン！ワン！」

「お！ステーラ、気合入ってるな！」

僕も気合入れていかないよ！」

「ワン！ワン！」

ステーラは元気な鳴き声を発する。

「じゃあ、今日はもう寝よう！」

「そうだね！しっかり眠っておかなくちゃ！」

「ワン！」

パチン…

部屋のランプが消える。

くくくくルーフス、チエリーの部屋くくくく

「うっし、じゃあもう電気消すぞ。」

「はい……」

パチン……

ぐす…

うう…

ルーフスの隣のベッドからすすり泣く声が聞こえる。

カチツ…

部屋の電気が点いた。

「…チエリー、泣いているのか？」

「怖い…」

チエリーは本音を吐き出した。

「私……これまでに出会った人達が……みんな消えてしまうのが……

とても……怖いよ……!!」

チェリーは泣き始める。

チェリーは思い出してしまった。

お父さんが暗闇に去っていく。

お母さんが霧に奪われていく。

プラムがボロボロに傷ついていく。

そしてチェリーはいろんな人々の笑顔を思い出していた。

「チェリー。」

ルーフスは話す。

「俺達が出会った仲間だよ、みんなお前と同じような事を思ってるんだぞ。」

チェリーの涙は少し治まる。

「俺も、ジャックもチェリーも、これまでに会ったみんな、みんな『お前』が消えたら嫌だ、って思ってたんだよ。」

じゃあ、お前は、その仲間達に出来ることはなんだ？

『生き残る』ことさ。お前は今、泣いてる場合じゃないぞ。」

チェリーは涙をごしごしと拭いた。

「…そうですね、私は…生き残る…！」

生き残ってみせる…！」

チェリーは言い聞かせるが、涙は次々に溢れてくる。

「チェリー…！」

二人の間に沈黙が訪れる。

チェリーは涙で濡れた顔でルーフスに話しかけた。

「ルーフスさん……」

「ん？」

「…ルーフスさんの…すぐ横に居たいです。」

ルーフスは目を見開く。

そしてたちまち赤くなつた。

ルーフスはベッドの左に寄って顔を逸らして言った。

「…全く…大丈夫だよ。」

チェリーはルーフスの背中の中に入る。

ルーフスさんの背中…



温かい…

私は…自分で守ることしか考えてなかったけど…  
みんなが、私を守ってくれていたんだな…

チェリーの涙は止まった。

「…夜這いはしませんから、安心してくださいね。」  
ルーフスは一瞬止まった後に怒る。

「わ…わざわざ口に出すなよ!!」  
「…いふふ♪」

チェリーは幸せそうに笑う。

すやすやと眠るルーフスとチエリーの顔は、

両方、温かい笑顔であつた。

深夜。

馬の蹄が砂を裂く。

モンスターが徘徊する砂漠の中の小さな家に向かって、様々な方向から時間差で人々が馬で集まってきた。

人々は白いマントで身を包み、体格も様々だ。

商人達は家の中に入り、下りのエレベーターに乗る。

そこは寂しい砂漠とは裏腹の、豪華な会議室。

商人達はマントを脱ぐ。

その面々は…

グレート・スライヴ・シテイ 市長／ヴァイオレット・カーライル  
 ジエラーナ国 大統領／エルジア・ストック  
 イクオラ・ジエラーナ国 大統領／イブン・ジャリル  
 アルヘンシキ国 大統領／イスコ・トウーツカ・ケウルライネン  
 デイラベル王国 国王／コンラッド・デイラベル  
 デイラベル王国 女王／ローナ・デイラベル  
 バルダン・オートリウム・シテイ 市長／バリー・オドウクル  
 イリーガシテイ 市長／エツツイオ・ベツツイーニ  
 サクラノ国 国王／桜ノ道常<sup>ミチツネ</sup>  
 ザラメユキ国 国王／松原郷玄<sup>マツハラゴウゲン</sup>  
 デイスコ・マウンテン・シテイ 市長／リリアーヌ・ボルデ  
 モンス・パールシテイ 市長／オスニエル・ロングハースト

以上の大都市を統べる者達だ。

これから、緊急の、秘密裏の国際会議が始まる所であつた：

## 51 : 国際会議

~~~~とある荒地より~~~~

「あと…もう少し、もう少し…」

ボロボロに汚れた車掌帽の少女は爆破された土地を丸石で埋め立てた後に線路を敷く。

あともう少しで…鉄道産業の中心地——ヘールタイル・タウンに着くんだし…そこには既に通っている、鉄道がある…!

この線路を繋げればきつと…計画阻止に役立てるかもしれない…!!

少女の背後に、やっとヘールタイルの町並みが映ってきた。

~~~~

くくくく秘密国際会議部屋よりくくくく

国の元首達が互いに握手をする。

デイラベル王国国王、コンラッド・デイラベルとジェラーナ国大統領、エルジア・ストック。

グレート・スライヴ・シテイ市長、ヴァイオレット・カーライルとバルダン・オートリウム・シテイ市長、バリー・オドウクル。

サクラノ国国王、桜ノ道常とザラメユキ国国王、松原郷玄は…

ギユイ…

握手の手は震えだす。

「久しぶりではないか郷玄よ…」

「ああ、全く久しぶりだ…ワシとしてはもつと久しく会ったほうが良かったのじゃがのう…」

「私もだよこのヒゲじじいが。」

「青ボウズに言われる筋合いは無いな！」

「二国とも冷静になつてくたされ…」

イクオラ・ジェラーナ国大統領、イブン・ジャリルが仲裁に入る。

「では、今回議長を務めさせて頂く、コンラッド・ディラベルです。よろしくお願ひします。」

元首達は拍手を贈る。

「まず確認したいのですが……まだ来ていらつしやらない国はありますか？」

アルヘンシキ国の若き大統領、イスコ・トウツカ・ケウルライネンは言う。

「ロックベースシテイのおつさんが来てないぜ……」

全く……本当にのろまと来たもんだ……」

ケウルライネン大統領は机に足を乗せてあくびをする。

松原郷玄国王はその態度に激昂する。

「この若造が！無礼とは思わんのか！」

ケウルライネンはしれつと応えた。

「へっ……これだから常識でしか語れねえじじいは嫌いなんだ……」

「何を……」

チャキ……

郷玄が刀を抜き始める。

モンス・パールシテイの市長、オスニエル・ロングハーストが郷玄を押さえる。





「マック市長！今回の会議は、敵に知られないように

変装し、さらに馬を使うという約束だったではありませんか！」

「だまれ小娘！私が低賃金労働者の変装などできるか！」

それに車で来なければ、明日の正午までにバツダボーナ火山に着かないのだ！」

各国の長に失望という静寂が走る。

黒い肌をしたバリー市長は大声で怒る。

「あなたは…国民をおいて自分だけ逃げるつもりなのですか!!」

「当たり前だ！私はまだ稼ぎ足りていないのだからな！」

…いいか、私は一つの都市を治める者だ！この仕事は才能が無くてはできないのだよ

！

その才能と国民を比べれば簡単に答えがつかはずだ！」

バリーに青筋が走る。

「……この……エセ統治者が！」

バリーはマツクの胸襟を掴む。

慌てて他国の元首が止める。

会議室はもう会議どころではなかった。

みんながみんな、明日の世界崩壊にあせっていたのだ。

郷玄と道常が、なんとかしてバリーを引っぺがしたが、

口論はまだまだ続いていた。

「離せ！……いつは努力で勝ち取った私の誇りをなめたんだ！」

「ハッ、貧乏な小国のくせに、何を言っておるのか！」

「私の国民達は！お前の国の奴らよりはよっほど幸せに暮らしてるぞ！」

お前の国は！お前が長になったことがなによりも幸せに失敗だ！」

ローナ・ディラベルが仲裁に入ろうとしたその時。

ドン!!

各国が静かになる。

コンラッド・デイラベルが机を叩いたのだ。  
ローナ・デイラベルは驚いて国王を見る。  
各国もコンラッド・デイラベルを見る。

コンラッド・デイラベルは場をゆるくするために嘘を言った。

「おおっと、すまない、蚊がいたものでね…」

ロックベースシティのマック市長。

「そこまで逃げていきただければ、どうぞお逃げください。」

コンラッド・デイラベルは真面目に言った。

「ロックベースシティの防衛については、近隣のイリーガシティのエッツイオ市長にお願いしよう。」

エッツイオ市長は驚いた。

「私の都市がですか!?!」

「そして…」

デイラベル国王は質問をさえぎって言った。

「国民にこうお伝えしてもらいましょう。『あなたの市長は国を捨てて鳥のように逃げた。』と！」

マックは引き下がる。

デイラベルは更に続ける。

「国民を捨てて逃げるなど、あなたには元首としての才能のかけらもないのですな。」

マックは怒りに震える。

そして席について負け惜しみを言い放った。

「後悔するなよ……この恵まれた知識の泉が失ってしまうことを！」

デイラベルはうなずいて再度呼びかける。

「さあ、皆さんも席について……そうだ、バリー市長、コーヒーでもいかがかな。」

バリーは疲れたように笑って言った。

「ああ、ありがとう、デイラベルさん。」

ローナがコンラッドに向かって笑顔で言った。

「かっこよかったですよ。あなた。」

コンラッドは赤くなる。

「…お世辞を言うな。議長として当然のことをしたまだけよ。」

~~~~~

~~~~~鈍行世界より~~~~~

クリスタルがたくさんそびえたっている草原。

その中の一つの村で二人の老人は話していた。

青緑色の髪をしたメイドとそばかすの少年はアップルパイのあった皿とコーヒーのカップを下げる。

「ありがとうございます、アルガさん。ブロッカスくん。」

「……いえ……ごゆつくり……」

「……それなら……しかた……ありませんね……」

私達も……協力します……」

「おお、その言葉を聞けてよかったです。」

これで、世界の人々の避難所が確保できました……」  
バンダは微笑んで言った。

村の横には、青いクリスタルで囲まれた門があった。

~~~~~

~~~~~ 秘密国際会議部屋より~~~~~

イリーガシテイの市長は話をする。

「私の都市の国民から、ビデオレターを預かっています。

差出人の名前は『アルフォード・マグネス』と言います。

この名前を聞いて、二つのイメージが思い浮かんだでしょう。

一つは化学を切り開いた第一人者、

もう一つは世界に武力を与えてしまった悪魔……

そんな彼からのメッセージです。」

「では皆さん、早速聞いてみようではありませんか。」

パソコンにフロッピーディスクを挿入する。

画面には研究所内の博士が映し出された。

『世界各国の皆さん、こんばんは。』

私は酸の研究をしている、アルフォード・マグネス博士です。

私はとんでもない過ちを犯してしまいました。

この世界に『武器』という不良たちを解き放ってしまったのです。

そこで皆さんにお願いがあります。

その不良たちをモンスターに向けて、『世界を救った英雄』ヒーロー

にしてくださいませんか。

そうすれば、私の子供達を最良に使ってもらうことができます。

：以上です。皆さんのご武運を祈っています。』

映像は博士の敬礼で終わった。

ケウルライネンは言う。

「アルフォード博士の思いは、無駄にはできねえな…」

バリーも応える。

「その通りだ。私の国も、ある小さな都市と戦っている。

その銃を人から背け、モンスターに共に向けることが今できることだ。」

「私の国も協力しますわ。」



デイスコ・マウンテン・シティ市長、リリアーナ・ボルデは賛同する。  
「…私も賛成だ…」

不機嫌そうにマツク市長も賛同する。

その他全員もこれに賛同した。

「次の件に移りたいと思います…防衛作戦はどうするべきであるか、皆さんの意見を伺いたい。」

最初に手を上げたのは、イスコ・トゥーツカ・ケウルライネン市長であった。

「みんな、それぞれの国を守るってことでもいいんじゃないか？」

俺も含めて、お前ら全員、自国を守ることであせってんだろ？」

「ちよつと待つてください。」

ヴァイオレット市長が手を上げる。

「それでは、大きな都市に属さない小さな村や街はどうするのですか？」

「そうだった…盲点だったよ。」

ケウルライネンは納得する。

イブン・ジャリル市長が手を上げる。

「ではこうするのはどうでしょう。」

保護されない地区が出ないように近隣の村をそれぞれ分けていくというのは、ケウルライネン市長と、ヴァイオレット市長のそれぞれの意見を統合したアイディアではないでしょうか。」

各国はうなずく。

しかしロックベースシティの市長はやはり違った。

「近隣の弱小国も守れだど!? 国の資金が底を尽きてしまうではないか！」

私は反対だ!……」

各国は冷たい目でマック市長を見つめる。

桜ノ道常が言う。

「マック市長よ……残念ながら、おぬしの他に反対するものはおらん。

各国が皆、財政がきつい中で今回の防衛をするのだ。

それを一番経済力のあるおぬしの都市が言っているのはどうするのか?」

「……クソツツ! お前達、後悔してもしらんからな!」

マック市長は悲しく負け惜しみを言った。

「……では、これから保護区分を決めましょう。……」

——世界壊滅予定時刻まであと10時間。

国際会議は順調に進んでいた。

飛行艇のバルコニーで白衣の男は写真を見ていた。  
きれいな肌の白い女性の写真だ。

「…もうすぐ…君の無念が果たせるよ…ヴェロニカ…」

## 52 : 賽はなげられた

~~~~セルバースタウンのホテルより~~~~  
ルーフスはベッドから起きた。

いつもとは違う、すっきりした寝覚め。

チェリーはもうすでに起きていた。

「おはようございます。」

「ああ、おはよう。」

2人は隣の部屋の3人を誘う。

「おはよう！」「おはよー！」「ワオン！」

「おはようございますー！」「おはようー！」

5人はロビーのレストランへと向かった。

コトツ！

チエリーはコーヒーに、ハンバーガーにフライドポテト、そしてクッキーを自分の前に置く。

「今日は、ガッツリと食べないと！」

チエリーは元気よく言う。

ルーフスも皿にめいっぱい料理を載せて机に置いた。

「そうだ！今日から暴れることになるぞ〜！」

皆、いっぱい食べておけよ！」

「もちろんだよ！」「はい！」「ワオン！」

5人はがつがつと料理を食べる。

5人にもはや怯えた顔は無かった。

「この世界を壊させはしない。」この思いで満ち溢れていた。

5人の戦士達は、臨戦態勢に入っていたのだった：

~~~~~

~~~~~ 秘密国際会議部屋より~~~~~

「…ではまとまった結果を発表します。

まずは先程の区画で分けた地域を各国が守っていただき、敵の勢力が収まったところで敵の本拠地だと推定される、

『バッドボーナ火山』のふもとへと集結し、

首謀者達を捕える。…これで大丈夫ですかな。」

各国は拍手を送る。

ロックベースシティのマック市長は腑に落ちない顔で微妙な拍手を送った。

グレートスライヴシティ市長、ヴァイオレット・カーライルは時計を見て言った。

「…あと6時間…みなさん、早速私たちの仕事に移りましょう。」

「この世界を…守ろうではありませんか！」

各国の首長はうなずいた。

各国は白いマントをまとい、それぞれエレベーターに乗る。

ヴァイオレットは立ち止まった。

ヴァイオレットは唇を震わせる。

「ジャックくん…ステラ、ルーフスさん…チエリー…」

どうか無事でいてね…」

ヴァイオレットはエレベーターに乗った。

~~~~~

~~~~~とある飛行艇より~~~~~

Mr. Fは台座に座っている。

Mr. Fは2人に呼びかける。

「チエリー……アーティクル……」

ついに私たちの世界を作る時が来たのだ……！」

チエリーとアーティクルは立って聴く。

ランプスは両手を後ろに縄で縛られていた。

ランプスは顔を真っ赤にしてガラガラ声で叫ぶ。

「騙したのだな！お前たち……許さないぞ！我が財力と兵で消し去ってやるわ！」

Mr. Fはランプスの顔に自らの靴を乗せた。

Mr. Fの後ろにはランプスの兵達だ。

「私が欲しかったのは兵と武器……」

お前などいなくても別に良かったのさ。」

ランプスは更に怒る。

「おい、お前ら。」

「「「「「はっ!」」」」」

Mr. Fは兵達に命令する。

「この豚を殺せ。」

カチャ…

ランプスに銃が一齐に向けられる。

ランプスの顔は真っ青になった。

「おい…お前達…お前達にはできないよな…な!?!」

「まだ気づかないようだな。」

Mr. Fは言った。

「この兵士たちは、お前に『雇われた』からやっただけなのだよ。

私を買ってしまったなら…お前は『雇い主』じゃなく『ただの豚』だ。」

ランプスは目を見開いて涙を流した。

涙が床に落ちた瞬間、銃の引き金は握られた。

ダダダダダダダダダダ!!

ドサツ…

太った男は血まみれで床に倒れた。

「おい、早く片付けろ。」

「「「「はっ！」「」」」」

兵士たちは袋に男を詰める。

「あっはっはっは!! やつと逝ったわね! あの豚!」

「本当に、馬鹿な奴だ…」

チェリーとアーティクルは嘲笑する。

Mr. Fは呼びかける。

「さあ、お前たちもショーの準備を始めろ…」

「はいはい。」「了解だ。」

~~~~~

時刻は迫る。

バツダボーナ火山の上空には無数のウイザー達。

地上にもミュータントモンスター達が集まっている。

バツダボーナ火山には各国から人々が集まっていた。

怯えた者…家族を持つ者…

様々な人々が飛行艇のバルコニーに集結した。

チエリーは人を数えていく。

「ありやーもう400万人かー…こりや500万人超えちゃうなー…」

あと30分…

今の人数、499万人程度…あと1000人というところだろうか。

富裕層の民は騒ぎ立てる。

「さあ、あと1000人…！早く来るのだ！」

「お!!」

遠くに茶色い肌をした人の群れが来る。

バツダボーナ火山の近くの村に住む原住民族…ボルム族だ。

「おお…この人数ならば1000などとうに超えよう！」

そこの貧しい平民どもよ！さっさとこの飛行艇に乗るのだ！」

原住民族は大きな声で言った。

「各国の首長から一通の手紙が届いている！ Mr. F を呼んでくれ！」

アーティクルは飛行艇の中へと入り Mr. F を連れてきた。

Mr. F は何も持たずに原住民族へと近づく。

ボルム族の一人が手紙を渡した。

---

Mr. F に告ぐ

我々各国家は君の計画に対し尾を巻いて逃げないことを決めた。  
この世界の人民達、古代の遺産、建造物など、全てを守る覚悟だ。  
向かう敵は出迎える。君に宣戦布告を申し上げよう。

---

下には各国の長の指名と指紋が載せられていた。

Mr. Fは歯を強く噛む。

「なぜだ…なぜ皆恐れない…」

Mr. Fは激昂した。

「世界が崩壊するのだぞ!!?それなのに逃げないだ!!?なぜそんなことができる!!?」

ボルム族の一人は口を開く。

「各国の長の意図は私達にはわからない。

だが、私達が思うのは、

『壊されるなら、精一杯守り、また再生すればいい』ということだ。

今まで人に作られたものが作れないわけがないだろう。

私たちも、各国と同じように宣戦布告をするつもりで来たのだよ。」

ボルム族は槍を構える。

「…勝手にしろ…さっさと滅びてしまえばいいのだ…!!」

Mr. Fは飛行艇へと駆けていく。

ガコン…

飛行艇のバルコニーが傾いて柵が沈んでいった。

人々は地上へと流されていく。



「ああ！ああ！！」

人々は火山岩の上へ落ちていった。

ドサツ…

ドサツ…

ドサツ…

「君たちには失望したよ。…もうこの世界は滅亡しか道がないようだな…

…これより世界を壊滅させる!!! 行け！ワイザー!!」

「『『『キシヤアアウ!!』』』」

ワイザー達は各方面へと拡散していった。

人々は叫ぶ。

「なぜ逃げさせてくれないんだあ!!」

「俺たちを殺す気かー!!」

「ママー!!」

ドオオオオン!!

叫び声の中に爆弾は発射される。

「もうこの世界は終わりだー!!」

人々が叫ぶ中、

また一つ、大きな飛行艇が地面に降りた。

くくくくデイラベル王国正門にてくくくく

デイラベル国王は武装をして待ち構える。

(…逃げたい民にはわがままのよう<sup>で</sup>申し訳ないが…

避難場所<sup>は</sup>世界の各地で用意されている。

この惑星<sup>ほし</sup>の未来を…守って見せようではないか…！)

そう思うデイラベルの前の地平線の彼方に

多くのウィザードが迫っていたのだった。

くくくセルバースタウン東門くくく

ルーフス達はセルバースタウンの東門で待機していた。

チエリーも日本刀『閻火』を構える。

ジャックもハンマーを手入れする。

ルーフスはおにぎりを食べてさらに腹を満たす。

ステーラも歯を鳴らして待ち構えていた。

ココアも息を飲んですぐ後ろで見守る。

大男、バンブは真剣に言う。

「そのガキども。無理はすんじゃねえぞ。

逃げたいならさっさと逃げろ！」

ルーフスは言い返した。

「ガキだって戦えるってことを見せてやるよ。」

砂漠の地平線に見える黒い点。

ウィザーが10体ほど、こちらへ向かってくる。

バンブは叫ぶ。

「おめえらあー！ いっちょ暴れんぞおー！」

『『『『『おおおおおおおおおおおお!!』』』』』

人々の闘志は地上をも揺らしていた。

くくくくサクラノ国にてくくくく

バシユウ!!バシユウ!!

ドオオオオン!!

ウィザーの攻撃がついに始まった。

大勢の兵士たちはウィザーと交戦する。

武装した道常が叫ぶ。

「兵士たちよ！爆発にひるむな！受ける思いで戦えい！！」

ウイザーに矢と槍が刺さり、刀の斬り傷が入っていく。

ウイザーは攻撃の間もなく、ぼろぼろになっていくのであった…

~~~~~

~~~~~機械バイオームにて~~~~~

「ウォーカー！しっかりしろ！どうしたんだ！…ウォーカー！」

クラブは小さなロボットを揺さぶって問いかける。

ロボットは無言でぐったりと倒れていた。

顔の画面には、謎の文字列が次々と書き換わっていたのだった——

## 53：防星近況①

~~~~~地獄にて~~~~~

ゾンビピッグマンとブレイズは水晶で地上界を観ていた。

「…地上界が危ない。」

「このままでは本当に地上界は滅んでしまうぞ。」

ゾンビピッグマンは焦るようにその場を歩き回る。

「…だが…私達には手出しが出来ない。」

「…だな、非情だが、我々には関係がない。」

手出しをすれば運命の掟に反してしまう。」

ブレイズは悔しそうに言った。

「もしこの世界の住人が皆死んだとしても…」

我々には…生き返らせることは出来ないのだ…」

「いや、待て。」

ブレイズははっと気づく。

「生命の蘇生は出来なくとも、悪人を裁くことはできるのではないか？」

『それは無理だ…』

上空から声が響き渡る。

ブレイズは大きな声で聞き返す。

「天…：…何故ですか!?! 幾多の人々を殺そうとする悪人が…ここにいるではありませんか!?!」

『彼は…ただ世界を変えようとしているだけだ…例え裁きができるとしても…』

それは彼が新世界を築き悪行を犯した後の話だ…』

「そんな…理屈がまかり通るのですか!?!」

『…ブレイズ…お前の気持ちも分かる…だが…』

『一人の意思も守らなければ…独裁となってしまう…
これが裁きの難しいところなのだ…』

~~~~~

~~~~~とある島にて~~~~~

ドオオン!!

ボオオオン!!

「ギャアオ!!…」

プテラノドンは宙から撃ち落とされる。

「コアア!!」

「ゴオオ!!」

「キャオ！」

「オオオン……」

地上の恐竜たちは爆発に怯え逃げ惑っていた。

背後には黒い三つ首の怪物が。

ポオオオオン!!

パリイーン!!

試験管が割れる。

バチバチ……

書類は炭をあたりに撒き散らし燃えていた。

「私の……子供達と……研究成果が……!!」

女性は絶望と怒りに震えていた。

たまらず近くのほうきを持ってウイザーに殴りかかる。

パシッ!!パシッ!!

「出てけ!この島から!出てけ!!」

ドオオオン!!

ウイザーは威嚇するように爆発する。

「きやあ!!」

研究所は無残な姿だ。

壁や天井はすっかりはがれてしまった。

ウイザーは女性にゆっくりと近づく。

女性は地面に落ちたまま後ずさりする。

ワイザーの対象が変わった。

柵の中。

小さな恐竜。

小さな恐竜は怯えたようにワイザーを見て震えていた。

ゴオオオ!!

ウイザーはエミリアを通り過ぎてテイラノサウルスへと向かった。
「ゼット!!」

エミリアは咄嗟にゼットへと自分の身体を投げた。

ドオオオン!!!

ゼットは目を開ける。

ゼットの目の前にはエミリアが笑って覆いかぶさっていた。

エミリアの背中は痛々しく赤く焼き焦げていた。

「よかった…ゼット…当たらなくて…」

ドサツ…

エミリアは横に倒れる。

ゼットの目にある景色が思い浮かんだ。

ゴオオオオオオオオ：

世界は瞬く間に氷河に包まれる。

暗い洞窟の中。

ここに一つの卵があった。

パリツ…

一つの卵の殻が少し割れる。

穴の中から、小さな赤ちゃんは景色を見た。

大きな恐竜が自分を氷から守るように覆いかぶさっていた。

(…ママ……)

ゼットの意識は今に戻る。

(…ママ……)

ゼットは目の前の倒れた女性を見つめる。

そしてゼットは怪物に目を向けた。

(…ママを…よくも…!!!)

『ギャアアアアアオオオオオオオ!!』

ドドドドドドドドドド…

ゼットの怒りの叫びが島を揺らす。

バサバサバサバサ…

鳥達は島から逃げ出した。

地面に落ちたプテラノドンのビームスも、
逃げ惑っていた草食恐竜達も、
皆がその声に気づく。

((((ゼットが戦おうとしている…!!)))

ドス…ドス…ドス…

サツサツサツ…

トトツトトツトツ…

シャー…

恐竜達は皆研究所へと向かう。

ウイザーはゼットの鳴き声に驚いてバリアを張った。

ゼットはバリアを張ったウイザーにかまわず噛み付く。

ガブジュツ!!

パリン…

バリアは割れ、ウイザーに牙が深く刺さる。

「シユオオオオオ!!!」

ボオオオン!!

ウイザーは苦しみながらゼットを振り落として逃げようとする。

「ギャアオ!!」

プテラノドンのビームスが高速で突撃する。

ドオオオオン!!

そのままウイザーは草原へ落ちる。

トリケラトプスのランダが更に頭突きをかます。

ドン!!

ヒュウウウ…

ウイザーはボロボロに飛ばされていく。

そこにブラキオサウルスのルーパは鞭のような首でウイザーをかつ飛ばす!

カキイイイイン!!

ウイザーはロケットのごとく空へと飛ばされていき…

ウイザーはそのまま光となった…

ヴェロキラプトルのマイクは近くから薬草をむしりとる。
バシヤアアン!!

プレシオサウルスのリナがマイクごと薬草に水をかけた。

マイクは薬草をエミリアの患部に置く。

ステゴサウルスのエレナは巨大な木の葉っぱを口でむしりとりてエミリアにおおわ
せる。

「コオ…」「キヤオ…」「オオン…」

一仕事終わったゼット、ビームス、ランダ、ルーパーもエミリアの元へ駆けつけ、
エミリアの回復を祈っていた。

~~~~~

~~~~~宇宙にて~~~~~

星が周りに美しく散らばる宇宙。

惑星から出発したロケットは月へと向かっていた。

ロケットは宇宙船の窓から不思議な光景を見ていた。

「なんだ…あの円盤は…!?!」

無数の円盤が自分の惑星へと向かっていた。

ドオオオン!!

「うお!!」

ロケットに何かが激突した。

「ここは地下に作られた緊急用司令室。

「ロバートの宇宙船から衝撃と思われる音波を検知しました！」

「こちら司令塔、ロバート、応答せよ！ロバート！」

ビビッ…

「…こちらロバートだ。」

「こちら司令塔、状況はどうした。」

「こちらロバート…こちらの…操作ミスだ。ロケットに異常なし…」

ロバートの背後には——

宇宙人が浮いていた。

脳がむき出しのガラス張りで、顔や体の輪郭が曖昧の、人型の宇宙人。

「…バダ…ギツ…エルマ…サウイ…」

「…?…君は…何を言っているんだ…?」

ピチユウ…

宇宙人の脳に電撃が走った。

「言語の特定が完了した。…すまなかつたな…エルマ星人よ…」

「!…」

宇宙人はロボットの惑星の言語で話始めた。

どうやら、自分達の星を「エルマ星」と呼んでいるらしい。

「我々はソラール星から来た者だ…大事にはしたくないために君を脅し、他のエルマ星人には内密にでもらった。」

「…何が目的なのだ?」

「…我々は、1000年前に我々の先祖の星、デケル星をA-10星に襲撃された。

我々は自分達の機械の文明を守るため、広い宇宙へと機械の種子を放したのだ。

我々は戦ったが敗れ、デケル星はA-10星に侵略された。予想通りデケル星の文明は滅ぼされ、A-10星の文明となったのだ。

法律により我々は渡星を禁じられ、エルマ星から機械たちを回収することが出来なくなってしまった。

それから867年が過ぎ、政権は変わり、渡星もゆるされるようになった。

デケル星人の子孫である我々は早速、100光年先のエルマ星へと旅立ち、今に至るというわけだ。」

「…貴重で壮大な宇宙の歴史をどうもありがとう。

しかし、君はまだ本題を話していない。君達の目的は何だ!？」

ロバートは問う。

「たいした目的ではない。

君は私の星から来たと思われるロボット達を知っているか？

我々はそのヒントが知りたいだけなのだ。」

ロバートは自らの記憶を探る。

「…すまない。残念だが心当たりはないな…」

「ありがとう。私達の質問に答えてくれただけありがとうがたい。」

ピピピピピピ…

宇宙人から音が鳴った。

「フエタ…ビス…ギエロ…ムル…エルマ…」

「ロル…クエンタ…ルード…エルマ…」

何か宇宙人同士で交信しているらしい。

ピピピピピピ…

交信が終わったようだ。

「君達の惑星が…大変な事態に陥っているようだ。」

「何だって…!？」

宇宙にいたロバートは司令塔から何も知らされてはいなかった。

ロボートの家族からの願いで、司令塔からは何も伝えなかったのだ。

「一人のエルマ星人が自らの惑星を壊そうとしている。

…君はこれから、どうするつもりだ？家族に会いに行くか？」

ロバートは決断する。

「家族の願いは…『俺に宇宙を見て欲しい』ということだ。

家族だけではない。司令塔も、他の応援してくれる皆もそう思っている。

俺は月へと向かうよ。」

シラール星人は無言になる。

「…エルマ星が、美しい理由がやっと分かったよ。

君のような心から美しい者達がたくさんいるからなのだな。」

ロバートは少し照れて頬をかく。

「我々もそれに応えなければならぬな。

君の星を宇宙から護衛しよう。」

ロバートはシラール星人と泣いて握手をした。

「ありがとう…どうかこの惑星を…守ってくれ…」

「…これはエルマ星での感謝の印なのだ。…了解した。」

ロバートの惑星は変わらず青と緑で美しく輝いていた。

54：防星近況②

~~~~~鈍行世界にて~~~~~

鈍行世界には幾多の人々が避難していた。  
アルガとプロツカスは人々に食事を配る。

サクラノ国の人々もすでに避難を終えていた。

タマベエとタネノスケに、  
ウメと狼のユズもいる。

「ルーフスのあんちゃんたち…今どうしているのかなあ…？」  
「クン…」

ユズは遠く見たステーラを心配しているようだ。



大男は更に一発ウイザーに鉄槌打ちを喰らわせた。

ウイザーは頭蓋骨が割れ、地に埋まった。

大男はルーフス達の横に戻り言う。

「ガキのくせにやるじゃねえかお前ら！」

「そりやどうも。」

「だが、そつちの嬢ちゃんは戦えないみたいだな！」



大男はココアを指差し言った。

「嬢ちゃん、戦えねえんなら逃げた方がいいぜ。ここじゃ足手まといだからな。」

ココアは一瞬言葉に押される。

ココアはまぶたを一旦閉めてから  
開いて言った。

「私…ジャックくんの側にいたいから！」

ジャックは赤くなった。

「まあ♪」

チエリーはハート眼で二人を見る。  
ルーフスも少し照れるような目だ。

大男は呆れて言いはなった。

「そうかい、それなら、俺は助けるつもりはねえからな。」

「元から要らないわよ！」

ココアはベーと舌を出した。

「ちよっココア…」

大男は驚いて笑う。

「…本当に要りそうにねえな。

おい小坊主！」

大男はジャックに向かって言った。

「その嬢ちゃん、しっかり守ってやんな。」

ジャックは返す。

「…絶対に！」

ポオオオン……！

大男は振り返る。

さつきのウィザーが地面から浮き上がり、光で身を防護した。

そのウィザーだけではない。

世界中のウィザー達が一斉にバリアを張り始めたのだ。

それから

世界の人々が

異変に気がついたのだ。

ウイザーの切り傷は埋められ。

殴打のへこみは無くなり。

銃痕も全て埋められたのだ。

ウィザーは完全回復していた。





「…そうだ…これがウィザーの恐ろしい所だ。  
ウィザーは自らを回復し何度も蘇ってくる。  
ただただ、攻撃が強いだけではないのだ…!!」  
ゾンビピッグマンは絶望に押し倒れる。

「人民達よ…どうか未来の為に…!」

~~~~~

~~~~~クレイソルジャーズの村より~~~~~

クレイソルジャーズ達は青、赤が一つになって戦っていた。  
スチルもダイヤの装備で自らを包んで戦っていた。

「…何てことだ…回復しただと…!!」

クレイソルジャーズも何匹死んだことか。

「…だがこいつらのパワーもなめてもらっては困る！  
彼らは…！…どんなに小さくとも『戦士』なのだ!!」  
スチルはクレイソルジャーズ達を起き上がらせる。

ドスン…

ドスン…

スチルの体が小さく縦に揺れる。

クレイソルジャーズ達は大きく跳ねた。

「……違う敵か……!!!」

スチルは背後を向いた。

スチルは口をあけっぴろげにして汗を流す。

スチルに巨大な影が落ちる。

クレイソルジャーズ達も影の元を凝視した。

ウイザーも恐怖に震えるばかりであった。



くくくくくくとある上空くくくくくく  
飛行艇は空を行く。

2体のウィザーが飛行艇に向かって射撃する。

ボツ：

ボツ：

ボツ：

「元気爆発!!」

「神の鉄槌!!」

「シンプル・イズ・ザ・ベスト!」

ドオオオオン!!!      ドオオオオン!!

ドオオオオン!!

「厄介な敵がでてきたものだ！」

モイラは顔をしかめて言う。

「でも中の乗客を守らなきゃね！」

プルボネが返す。

「そうです！ 私たちは絶対に勝たねばならないのです！」

テンドロンも返した。

「正義は必ず勝つツツ！」

モイラ達は一心不乱に攻防を繰り返していた。

飛行艇の中。

中は400万人の人々であふれていた。

オリーは人々の対応をしなければならなかった。

オリーは外で守りたい気持ちを抑えながら心で言った。

(3人とも…どうかこの人々を守ってやってくだせえ!!)

「おじさーん、おなか減ったー、ソフトクリームちよーだーい。」

~~~~~

~~~~~セルバースタウンにて~~~~~

戦士たちは言葉にならない悔しみにでモンスターを見つめていた。

戦士たちの戦闘意欲がそれがれようとしている。

でも…こいつらを倒さなければ…

世界は消滅してしまう。

「ダアーーーーー!!」

バンプが叫んでウイザーに連続で殴り掛かる。

「おりやあーーーー!!」

「たあっ!!」

「はああああ!!」

「ガウ!!ガウ!!」

ルーフス達もそれに続く。

叫びながら戦士達に問いかけた。

「お前らあ! 相手が回復するからなんだあ!」



戦士達は耳を傾ける。

「バンブ…例え私たちが悪あがきを続けても…  
それはまた無駄になるんだぞ…」

「上等だ！」

バンブは大声で答える。

「世界が簡単に救えるわけねえんだ！  
でもそれは一つのチャンス…！」

俺たちが『進化』するチャンスじゃねえか！！

お前らは惑星最後の日まで弱いままでもいいのか！！」

戦士達はこぶしを握った。

戦士が一人…また一人とウイザーに向かっていく。

ウイザーの光が途切れようとしている。

「「「「「俺たちは…『進化』してみせる!!」」」」」

ウイザーの光は壊れるように放たれた。

## 55：防星近況③

~~~~~宇宙にて~~~~~

無数のUFOが惑星を取り囲んでいた。

No. 01のUFOが連絡を受け取る。

「デバ…レリカ…フェッタ…ベガ…サウア…」

（こちらNo. 98。太陽光エネルギーの充填完了。）

「ゲル…ドク…マツサ…グリド…ヘラ…テルモ…ルータ…エルマ…」

（これより攻撃段階に入る！エルマ星人を狙わぬよう照準を定めよ！）

~~~~~

~~~~バルダン・オートリウム・シテイより~~~~

ビュンビュンビュン!!

ジシュー…

プラズマエネルギーの弾はワイザーに次々と当たる。

「シユオオオオオオ!!」

ギユイイ…

ギユイイ…

ギユイイ…

ギユイイ…

戦闘民族達は力強く弓を引き絞る。
年老いた族長は命令を下した。

「マラーター!」(撃て!)

スウウウ!!

シューウウ!!

スウウウウ!!

ビュウ!!

シューウウ!!

ドツ! ドスツ!! ザシュ!! ドツ!!

無数の矢がウイザーに降り注ぐ。

「シューオオオオオオオ!!」

ウイザーは辺りに爆弾を3発放った。

ボオ… ボオツ!! ボオ…

ドオオオオン!!

「うわあああ!!」

第一部隊が吹っ飛ばされた。

ドオオオオオン!!

「グオオオオオオオ!!」

戦闘民族達も吹っ飛んだ。

クリオブラスターを構えた軍人は舌打ちをして立つ。

「くそ…!! 私は救護へと向かう! お前たちはそのまま攻撃を続けてくれ!」
「おう!」「分かった!!」

「しかし…なんてしぶとい奴らだ…!!」

「我が軍の食糧も、もうすぐ底をつく…」

「食糧があれば…!」

ビュウウウウ…!!

バアアアアアアン!!

空から雷のようなものが一匹のウィザーに降った。

それに続き、他のウィザーにも降り注ぐ。

「!!」

軍人達と戦闘民族達は驚いた。

「…なんだ…？まさか…戦闘民族達がやったのか…!？」

「いや…まさか…あの雷を呼び出す技術など…いまだ開発されていないはずだ…！」

「…まあいい！攻撃を続けるぞ!!」

~~~~~

~~~~~グレートスライヴシティ~~~~~

ドオオオオン!!

ガシヤアアアアン!!

パライイイン!!

この都会の被害は甚大であった。

あまりにも広いために、別方向からの攻撃を惜しくも防げなかったのだ。

ヴァイオレットは地下の会議室から軍指揮官に指令を出す。

「武器庫や調理場が攻撃されてはいけません。この近辺のエリア二つを重点的に守るよう軍の配置をお願いします!」

「はっ!!」

軍指揮官が去るのを見届けると、ヴァイオレットはため息をついた。

コトツ…

「ヴァイオレットさん、コーヒーお持ちしました!」

まだ9歳程だろうか。小さな少女がコーヒーを自分より背の高い机によたつと置いた。

「ありがとう、リサ。」

彼女はまだ小学生でありながらも秘書の仕事についた天才少女だ。

「大丈夫ですか？ 疲れた顔になってます…」

リサは心配そうにヴァイオレットを見つめる。

ヴァイオレットはかがんで話をする。

「うん、大丈夫よ。」

…私は街の皆さんの期待に応えられなかった。

こんなにビルや住宅を破壊されてしまったから…

だから、私はこれからの被害を最小限に抑えられるように、

頑張らなくちゃならないの！」

リサはヴァイオレットを尊敬のまなざしで見ると、

「さすがはヴァイオレットさんです…」

「でも…ごめんね、あなたまでこの戦争にまきこんじゃって…」

「私はヴァイオレットさんといっしょなら大丈夫です！」

リサはえへへと笑った。

ヴァイオレットはその笑顔にひきつられて笑う。

「ありがとう。リサ！」

~~~~~

~~~~~  
ハールタイルタウン（鉄道の町）より~~~~~

「!!!!」

へー、ルタウンの町長は驚く。

「おおお!!」

町長の地図を持つ手が震える。

町長はリナの手をがしつと握る。

「ありがとう！リナちゃん！君はさらに食糧を届けられる地域を増やしてくれた！」

「良かったです！お力になれて！」

「よし、食糧をもっと増やし…早速戦士たちの元へ届けよう！」

~~~~~

くくくくサクラノ国よりくくく

「殿……今治療します……!!どうか生きていてください……!!」

布団の上には目を閉じたままの道常がいた。

くくくくくくくくくくくくく

## 56 : 集まる戦士達

~~~~~魔法世界より~~~~~

気が屋根のように覆いかぶさる魔法の森。

遠くから砂埃を上げて走ってってくる影が見える。

「大変だ！大変だよー!!」

「このままじゃ現実世界が…!」

「滅んじやうよー!!」

魔法の弟子達は城へと一目散に向かっていく。

黒い狼達も声を耳にした。

「バウワウ…？」

（訳：現実世界が…？）

「バウバウ…？」

（訳：滅ぶ…？）

「ワオーーーン!!」

（訳：俺たちもついていくぞ!!）

ササツササツササツ…

「王様ー!!」

ドオオオオオオン!!

魔法の弟子達と狼達は城の壁を粉碎して城内に突入。

屋上で寝ていた王様は衝撃に体ごと浮いてたたき起こされた。

「おわあああ!!」

そこにテロリスト達が登場。

「お前ら無茶すんな!!」

「大変だよ!」

異変に気づいた王様は話を聴く。

王様は水晶で現実世界の様子を見ていた。

王様はウィザーを見て衝撃が走る。

「なんと…あれはかつてヴィンテンド・サロムが召還したモンスターではないか…！」

しかし…なぜ只の人間が奴を召還をしているのだ…？」

「たぶん師匠が教えたんだよ！」

「この頃は何度も現実世界に行っていたからね！」

「何を考えているんだろう…？」

「そうだな…奴の考えは私にも全く分からん…」

だが、まず心配なのは現実世界の住人達だ。」

王様は壁にかけたマントを手に取り、階段へと向かって行った。

「我々も加勢に行くぞ！」

狼達はナーガとヒドラ…そしてあの男を呼んで来い！」

「「「「パウ!!」」」」

「しまった！後ろから…!!」

テンドロンは端末で状況を確認する。

「左ジェットタンクが破壊されました…!」

左の燃料が漏れています！左ジェットエンジンが停止するのは時間の問題です!!」

「どうするの！隊長!!」

モイラは舌打ちをする。

「乗客達に避難準備をさせておけ…!!」

ヒュウウウウ…

ウイザーに砲弾が向かう…!!

ドオオオオオオオオオオオオン!!

砲弾はウイザーに当たって爆発した。

!!!

カラーリーオンズは左を見る。

視線はその影を追ってすこし上になった。

「おお……これはこれは……」

「こんな……!!!」

モイラ、テンドロンさえも驚嘆せざるを得なかった。

そこにはカラーリーオンズよりも更にはるかに巨大な戦艦が。

無限の空に音声が流される。

『こちらはアルヘンシキ国空軍部隊Rose…英雄達、乗客達の救援をしにやって来た。そのまま浮遊状態で待機せよ。そのまま浮遊状態で待機せよ。…』

「助かった…」

「よかったあ…」

戦艦の前面の蓋が開く。

その様子を見ていた輩がいた。

「かーっかつかつかつか!!まさか空軍の奴らが自ら蓋をあけてくるとはな!

それに憎きカラーリーオンズも一緒とは!!なんたる幸運!!」

太った鶏の船長は笑いながら喋る。

「「うわあ!鶏がしゃべってる!!」」

「そのノリあきたつっの!!」

鶏は鳴き…泣きながら語る。

「苦節4ヶ月…!!『コ』と『ケ』から始まった発声練習の果て、

ようやく元の言葉を話せるようになった…!」

鶏はいきなり怒り始める。

「つしかーし……これも奴らの奇術が無ければ、

私はふつーにビッグなねーちゃん達と

スイートな夜を過ごせるはずだった…!!」

「その怒りを私はこの鳴き声にこめる！行くぞチキン共！コケー!!」

(((案外気に入ってるんだな……)))

船員達はそう思いながらエンジン全開で空軍の中へと飛び込んでいった。

カラーリーオンズが空軍の中へ入ると同時に

空賊の一船も入ってしまった。

「かーかつか!!おらあ空軍ども！金品を渡せ……つて」

空賊船長は辺りを見回す。

どれも女性船員ばかりではないか。
しかもほとんどが美人。

鶏の顔が赤くなる。

「なんと……ここは桃源郷か……!!」

カチャ

カチャ

カチャ

カチャ

相手の勢力が衰退したため、バツダボーナ火山への行進が始まっていた。

「お疲れ！」

ココアがおにぎりとお水を配る。

「お、さんきゅーな！」

「ありがとっ！ココアちゃん！」

「ありがとっ！」

ジャックがおにぎりを手に取りろうとしたとき。

「あ！」

ココアがひよいとおにぎりを奪った。

「え？どうしたの？」

「ジャックくん手が汚れてる！えーつと水道は…」

周囲の人も歩いてるため掻き分けることもできない。

チエリーがキューピッドの助言を言う。

「ココアちゃんが食べさせてあげればいいんじゃない？」

「あーそっか！」

ジャックの顔が赤くなる。

「はい、あーん！」

「あー…」

ジャックの口におにぎりが入った。

「おいしい？」

「うん、おいしいよー…」

ジャックは照れながら言った。

「もう少しだよ！頑張ってね！」

ココアはにこつと笑う。

ジャックもにこつと笑い返した。

「うん！頑張る!!」

「ワオン!!」

ステーラも同調した。

ルーフスとチェリーもその光景をほほえましく見守る。

「…この戦いを…絶対に勝ち抜くぞ…！チェリー!!」

「…はい!!」

~~~~~

白く光る部屋で私は叫んでいる。

「ヴェロニカ…ヴェロニカ…!!大丈夫か…!水飲むか…!」

女性の口元は優しく私に笑う。

「もういいの…」

「この世界の何もかも…私達には敵だったんだ…」

「こんな世界なんて…無くなっちゃえばいいのに…」

白い光と彼女を、悪魔が引き裂いた。

「ああああああ!!」

Mr. Fはベッドから起きる。

「はあ…はあ…はあ…」

Mr. Fは胸を押さえて深呼吸をする。

今日もまたいつもの夢を見た。

今ではあの悪夢が俺の目覚ましだ。

Mr. Fは顔を洗う。

ウィザーもあと少し…

悪魔達はこの火山へと進攻中…

では、お次はミュータントモンスターズを放つとしよう。

この世界は——俺が変えるべきなんだ——



## 57：ミュータントモンスターズ

ここはバツダボーナ火山。

今、世界中の戦士たちが集結した。

人々の色に、顔立ちに、服装。

どれも多種多様だ。

その戦士たちは巨大なモンスター達の前に立っていた。

ゾンビにクリーパー、エンダーマンだ。

世界中は沈黙する。

各国の長達も黙って立っていた。

敵が迫ってくるのをひたすら待っていた。

ガピー…

音声が流れる。

「諸君…よくぞウイザーを殲滅してくれた。

だが、最終局面はここからさ…

はたしてこいつらに勝てるかな…？」

ルーフス達は気付く。

あの巨大な体躯をしたゾンビ…

メットとそっくりであったことを。

「…なんとなくそんな感じはしてたんだ…」

ジャックは歯を食いしばる。

「メット…力をくれ…!!」

ハンマーは青く光った。

「行け。」

Mr. Fの合図とともにミュータントモンスターズは咆哮を上げる。

「ヴァアアアアアアアアアアアオ!!」

「シューウウオオオオオオ!!」

「ヒュウウウウウ!!」

「「「「!!」」」」

戦士たちはモンスターへ向かう。

しかし

悲劇は始まったのだ。

ミュータントゾンビは10人を一気に薙ぎ倒す。

「「「うわあああああ!!!」」」

ミュータントクリーパーは高々とジャンプをし：

一気に地上に爆風を落とした。

ボオオオオオオン!!

「「あああああ!!」」

ミュータントエンダーマンは地上の岩石を4つ持ち上げた。

ザザツ…!!

4つの岩石は紫色の光とともに浮き上がる。

「コアアアアアアアアオオ!!」

岩石は一斉に戦士たちへと向かっていく。

戦士たちは血を流す。

「くそおおおお!!」

空からはウィザーの爆撃。

戦士たちは次々に倒れていった。

ルーフスとチェリーとステーラも一斉にゾンビにとびかかる。

2つの斬撃と一つの牙がゾンビに命中した。

巨大な男がさらに追撃を加える。

ドゴツ!!

ゾンビは倒れない。

「へへ…楽しませてくれんじゃねえか…!!」

マンティースの連撃はクリーパーを刺す…刺す!!

しかしミニクリーパーの爆撃に押し流される…!

ジャックはココアの前でハンマーで殴る。

エンダーマンの岩石がジャックに命中した。

「ぐっ…!!」「大丈夫!？」

「うん…まだまだ!!」

ジャックは上からの閃光に気付く。

バン!!

ココアを力強く押した。

「きゃあああ！」

ココアは後ろへと倒れる。

ドゴオオオオオン!!

ジャックの上に爆撃が落ちた。

「ジャックくん!!」

ジャックは真つ黒になりながらゆったりと立ち上がる。

「よかった…当たらなくて…!!」



ジャックは回復ポーションを飲む。

(まだ戦える…!!彼女を必ず守るんだ…!!)

信じられない出来事が起きた。

30分で既に1000人が戦闘不能となったのだ。

苦しめているのは、自らの技術で作り出したしまった屈強なモンスターたち。

私たちは…自分の作ったものに世界で戦っても倒せないものをつくってしまったのだ…

「ハハハハハ!!素晴らしい!まさに世界の終焉にふさわしい!」

Mr. Fは火山のふもとに転がった人々の山を見て叫ぶ。

「平和な日常を送っているお前らの傍らで!!

俺はある人のために計画を準備してきたのだ!!

俺は…世界に勝った!!ハハハハハ!!」

火山にMr. Fの笑い声が響く。

「それはとんだ勘違いだ。」

火山に別の音声が響き渡る。

Mr. Fは真顔になった。

「なんだと…!？」

「まだ世界中の人々は…」

「全員そろっていなかったんだよ!!」

そこにあつたのはルーフスの父の姿。

ルーフスは気が付く。

「親父…!!」

その背後にはたくさんのお戦士たちがいた。

魔法世界より…

王様、魔法の弟子3人組…

ナーガにヒドラ…

黒い狼達…赤い牛男…？

さらにはエンド世界の住人達にエンダードラゴン、  
クレイソルジャーズに巨人、さらに狼男のピスト！

スターク海賊団に、エミリア率いる恐竜軍団…！！

ジョーに、アイアンゴーレム…！！

そしてかつて別れたライモンもいるではないか…！！

なんと頼もしい援軍であろうか…！！

魔法世界の王様は黄金の羽をかざす。

「…まずは戦士たちを戻さねばなるまい…！！」

ピー——…!!

黄金の羽は光る。

人々の流れる血は止まり、

人々の傷はなくなっていく。

「…!!」

「なんだ…!!」

「うわ！なんかいつぱいいるぞ！」

人々は次々に立ち上がる。

「馬鹿な…!!最悪だ…！世界にはこんな奴らがいるのか…!？」  
Mr. Fの瞳は恐怖の色に染まった。

「ミュータントモンスターズ!!何をしている!!早くやつてしまえ!!

チエリー!アーティクル!お前らも戦うんだ!!早く!!」

「はいはい。」「了解だ。」

チエリーとアーティクルは飛行艇の外へと飛び出していた。

Mr. Fは本棚をあさりある本を手取る。

「…なあに…大丈夫さ…俺にはまだ…この魔法がある…!!」

本には「Morph」と記されていた…

バツダボーナ火山には世界中の戦士たちが集まっていた。

皆が皆、目的は一つ…!!

((((Mr. Fを倒す!!)))

~~~~宇宙より~~~~

「フェツタ…ベガ…リゲルバ…サウア…」

（太陽光エネルギー再充填完了。）

「ドク!!」

（撃て!!）

~~~~~

ビュウウウウウン!!

ミュータントモンスターズ達にまた雷が降り注ぐ。

「よし…謎の攻撃が効いた!!」

「われらも続くぞ!!」

「!!」「!!」「!!」

くくくステーラの戦闘くくく

ステーラがミュータントエンダーマンに噛みつく。

ただし振り落とされた。

そこにライモンが現れる。

「よう、お前がルーフスの新しい相棒なんだってな…!!」

「クウン？」

「…俺も昔は、お前と同じだったんだぜ…」

ま、説明は後だ、一緒に闘おうぜ。」

「おいおい、俺も外してもらっちゃ困るぜ!!」

巨大な狼男が現れる。

「ガウ!!ガウ!!」



(訳：待たせたな！ステーラ！)

黒い狼たちも。

「ほう…面白いな…ここに狼たちが揃ったってことか…」

「名付けて…『狼軍団』…だ!!」

狼たちに沈黙が訪れる。

「もっとマシなネーミングはないのかよ…」

「行くぞおおお!!」

「[[「ガウ！ガウ!!」]]」

「パウ!!」

「へへ!!」

狼たちはミュータントモンスターを襲う。

ズシヤ!!

バシユ!!

ガブチュ!!

牙や爪、剣はエンダーマンに深く突き刺さる。

エンダーマンは消えていった。

「ワン!!」「ガウ!!」「やったな!」「ああ!!」

~~~~~

~~~~~ルーフスの戦闘~~~~~

ルーフスと父はミュータントクリーパーに剣を浴びせる。

「ルーフス…強くなつたな…」

「親父の血を引いたからな!!」

ビュン!!

ミュータントクリーパーは飛び上がる。

「やべえ!!」「逃げ…おわあ!!」

シュツ…

ドオオオオオオオン!!

クリーパーが着地したところには誰もいない。

黒いドラゴンがルーフスと親父、周りの戦士たちを胴に乗せる。

「うわあああ!!」

「なんだこの竜は…」

「でも助かった…」

竜はルーフスに話す。

「父がお世話になりました…」

「お前…あいつの子供なのか!？」

「はい…私は父が死んだとき、卵から孵ったのです。」

暴君である父を倒していたとき、本当にありがとうございます!」

「いや、そんな…こっちこそ助けてくれてありがとうよ!」

「では、片づけてしましましょう!!」

みなさん、しっかりつかまっています!!」

エンダードラゴンは高速に移動し、炎のブレスをミュータントクリーパーに浴びせる。

「シューウウウウ!!」

ミュータントクリーパーは卵を残して消えた。

エンダードラゴンは背中から戦士たちを降ろした。  
「ありがとう！」

「サンキューー！」

戦士たちはお礼を言つて次のモンスターへと向かっていく。

ドオオオオン!!

「ぎゃああああ!!」

「うわああああ!!」

人々が次々に吹っ飛ばされていく。

「雑魚には何の用もない!!」

ルーフスに向かって突撃してくる影が見えた…!!

ルーフスはあわててて剣で受け身をとる。

ガキイイイイン…

ズザザザ…

ルーフスの体は5 m程吹っ飛ばされた。

そこには装備に身を包んだ大男がいた。

「俺はお前と戦いに来たのだよ…!!」

「アーティクル…!!」

~~~~~

~~~~~チエリーの戦闘~~~~~

ドシヤア!!

チエリーとマンティースと戦士達は見事ミュータントゾンビを倒した。

「腕を上げたな、チエリーよ…」

「マンティースさんも強くなりましたよ!」

ヒユウウウ…

「!!」

チエリーは咄嗟に弾を斬る。

バシヤン!!

「ぎやあ!!」

「これは…負傷のポジション!!」

「ふふふ…バカねえ…投げられたものはちゃんと見ないと…」

「…あなたは…?」

「私はチエリー…純血の魔女よ…」

「…奇遇ね、私もチエリー。」

魔女はあざ笑うような笑みで言った。

「あなたここで何してるの？せっかく綺麗な顔が汚くなっちゃうわよ？」

「私はあなたたちの侵攻を終わらせにきたの…この皆とね…！」

「へえ…あなたには何ができるのかしら！」

魔女とチェリーはにらみ合う。

マンティースと他の戦士はとても介入できなかつた。

「…チェリー、健闘を祈るぞ。」

~~~~~

~~~~~列車の中より~~~~~

車内に少女の声が流れる。

「次は、サクランノ国、サクランノ国、お出口は左側です…」

小さなロボットは尋ねる。

「セカイ…オワル…？」

「大丈夫だよ、世界中の戦士達が今戦っているんだ。きっと救ってくれるさ。」



メデイウス・ライブラリーに向かう避難列車の中で、クラブは考えていた。

(さっきのウォーカーの挙動はなんだったのだろうか…)

(一定時間経ってすつかり元通りだ。)

クラブには何か悪い予感がした。

もしかして、ウォーカーが来た宇宙から何かあったのだろうか。

ウォーカーは星へ返され——もう2度と会えなくなってしまうんじゃないかと。

地上を走っていく列車を、昇りはじめた月は冷ややかに見ていた。

## 58 : 世界決戦

「…只今！バツダボーナ火山の様子を地上からお届けしております!!」

一人の記者が現場の緊張を話す。

「世界を守るため、ここに集まった世界中の戦士達が命を賭けて戦っております！

我々は戦えません…が、応援をすることが出来ます!!皆さん、戦士達を異次元から応援しましょう!!

負けるなーーーーー!!」

記者はカメラも気にせず背中を向けて応援する。

異次元でも。

「がんばれーーーー!!」

「やれーーーー!!」

「やっつけろー！！」

多くの人たちが戦士達を応援していた。

既に世界は一つになっていたのだった。

「オラオラ！俺達の炎をくらいやがれ！」

「これは美味しそうなモンスターだ…」

「早くくたばれよ…」

ヒドラの炎が舞う。

「ヴォツホツホツホ…」

巨人が巨大な剣でミュータントを2人串刺しにする。

クレイソルジャーズはエンダーマンに張り付いて攻撃する。

そして…赤い牛男は…

「ヘーイ！戦いさ！俺の鍛えたマツスルが火を噴くぜ！！

ウゝ…」

赤い牛男が引き気味のミュータントクリーパーに向かって拳を矯める。

ボオオオオオオオオオオオン!!!

巨大なミュータントクリーパーが見えない高さまで飛んでいった。

「マツスウル!!ハッハー!!!」

戦士達はひそひそと話す。

「…なんなんだあいつは？」

「でもすっげえつええな…」

アーティクルは白い鎧でダイヤの剣を振りかざす。

ルーフスは避けた。

ガキツ…

ボオオオ!!

地面に当たった剣の先が燃える。

「…魔法か…!!」

「その通りだ…」

アーティクルは剣を振りかざしながら説明する。

「武器に魔法を施したことにより…!!」

炎の剣となったのさ!!」

シュツ!!

シャクツ!!

シュツ!!

次々に連撃がルーフスを襲う。

「おりゃああ!!」

ルーフスも反撃しようとダイヤの剣で突く。

ガキツ…

しかし鎧に跳ね返される。

「さらに…これはガストの鎧だ!!」

防御力は抜群、さらに体の傷は癒えていく!

勝負あったな!! ルーフス!!」

「そんなんまだ…わからねえよ!!」

ルーフスとアーティクルは刃を交わす。

強く、強く、ルーフスは押し斬っていく。

しかしアーティクルの重い一撃が…!!

ズバツ…!!

ルーフスのダイヤの鎧の肩を貫通した。

「ぐう…!!」

ルーフスはよろけながらも立つ。

アーティクルは剣を抜いて腹を狙って突いた。

ビュツ…!!

グラツ…!

ルーフスは間一髪でかわす。



だがそのまま地面に倒れる。

「チエツクメイト…だな…」

アーティクルは剣をうつぶせになったルーフスの背中を狙って振りかざした。

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン!!

ゴオオオオオン!!

アーティクルの反応より先に金槌が横から頬に当たった。

「ああああああああああ!!」

アーテイクルは横になりうずくまる。

「…！スチルさん…！！ありがとうございます…！」

「…お礼はよせ。それよりお前さんに言いたいことがある。」

スチルは起き上がったルーフスに詰め寄り憤怒した。

「お前さんは私の説教を水に流してしまったのか！！」

「え…！？」

「さっきの剣はなんだ！！力をただ押し付けているだけではないか！！」  
「す、すみません！ごめんなさい…！！」

アーテイクルが立ち上がる。

目は赤く充血し、顔は怒りで真っ赤に染まっている。

「このじじいが…！！」

「おっと…」

スチルは冷静になる。

「ルーフス、私の説教を思い返すのだ。

思い返せば、お前は必ず、強くなれる。」

思い返す…

スチルは逃げ出した。

「待て!!」

アーティクルは追いかけてしようとする。

ルーフスはアーティクルの肩に剣を置いた。

「待つのはお前だよ。」

ルーフスは真剣な目で言った。

「お前の敵はまだここにいるだろ？」

アーティクルは不敵な笑みで答えた。

「そこまで天国へ行かせて欲しいのだな…」

「ならば本望に行かせてやろう!!」

アーティクルとルーフスの斬りあいが再度始まる。

ルーフスはじりじりと痛む肩をこらえて考える。

思い返す…

(…これはひどい。なんて乱暴な斬り方をしとるのだ。)

乱暴な斬り方…つて…？

キン!!

ルーフスの剣が弾き飛ばされる。

ルーフスは急いで剣を手に取り

アーテイクルの剣を防いだ。

まてよ…??

チェリーにはなんて言ったのだったけ…

(静、動の剣さばきはどちらも完璧、とてもきれいな傷み方をしている!!)

静、動の剣さばき…

そうか…

俺には『静』…これが足りないんだ…！

ルーフスはわざと目を閉じる。

アーテイクルは剣を振った瞬間、ルーフスの行動に気づき目を丸くする。

アーテイクルの剣はルーフスの頭へと向かう。

…感じない…

…まだ何も…

！  
キーン！！

ルーフスの剣は光のごとく真上の攻撃を防いだ。

「何!?!?!?!」

アーテイクルは驚く。

今…防いだ…のか…？

アーテイクルは呆然とする。

信じられない…！この俺が…

このアーティクルが…!!

目をつぶった奴に勝てないだど!?

「…へへ、…出来た…」

アーティクル、次は俺から行かせてもらうぜ。」

アーティクルは初めて目の前の敵に本構えをした。

ルーフスが光となってアーティクルの胸元に向かって斬っていく。

アーティクルは気合でその一つ一つを防ぐ。

しかし間に合いそうにない!!





キキキキキキキ  
!!!!!!

剣が開かれる!!

キキキキキキキキキキキキキキ  
!!!!

ガァン!!

アーティクルの腕は開かれる。

最後!!

ルーフスは一瞬目を閉じる。

剣に力が集中した…!!

今!!

ザシユ…!!

アーテイクルの胸にダイヤの剣が刺さる。

アーテイクルは驚いた表情のまま後ろに倒れていく。

ドタ…

ルーフスはアーティクルの体から剣を抜く。

ルーフスは悲しい顔つきでアーティクルから去る。

「…敵がいるって…辛いな…」

ルーフスは涙を一筋流す。

しかし今は泣いているときではない。

ルーフスは涙をごしごしと拭いて目の前の巨大な飛行艇を見た。

後ろでは戦士達がまだ戦っている。

：

行くぞ…

「ルーフスは飛行艇の扉を蹴破った。

「降りてきなさい！私と勝負してよ!!」

「あら〜？してるじゃなくい…モグモグ…」

魔女はほうきを高く飛ばしてドーナツを食べている。

そして時折蜘蛛を手から召還してチェリーに攻撃させていたのだ。

「私傷が付くのがいやなの〜、せつかく手入れた肌が台無しになっちゃう。」

「人をおちよくるのもいい加減にして!!」

「ふくん…じゃあ…」

パチン!

魔女は指を鳴らす。

チェリーの上に礫岩が降り注ぐ。

ドドドドドド!!

礫岩の山が出来た。

魔女は得意気に笑う。

「足場をありがとう。」

魔女はドーナツを喉に詰まらせる。

チェリーが礫岩を踏み越えて跳びあがってきた。

「ん~~~~~!!!!!!」

魔女は詰まらせたまま驚いた。

スパツ…!!

魔女のほうきはスパツと二分割に切れた。

魔女はほうきとともに地面に落ちる。

ドサツ！

チエリーが魔女に詰め寄る。

「…で、どうするの？戦うの？」

「へ!?!」

魔女は口を歪ませて汗を流した。

「ホホ、ホホホホ…」

チエリーはため息をついた。



チェリーはドーナツを魔女の口に咥えさせる。

「それ、食べていいから。あなたの負けてことでもいいわよね？」

「は、はい！私の負けです!!」

「本当に拍子抜けだわ…同名なのに只の卑怯者だったなんて…」

愚痴をこぼしながらチェリーは去っていく。

「…チャンスだけ…」

私じゃ勝てそうにないな…

59 : Mr. F

「そこまでだ!!」

チャカ…

ルーフスに5、6人の兵隊達の銃が一斉に向けられる。

ルーフスは黙ったまま瞳でMr. Fを探す。

「Mr. Fはどこだ。」

「奥の部屋で休まれている。我々はここで見張りを頼まれたのだ。」  
兵隊達は円形の部屋で、半円のような陣を作つて銃を向けている。

「残念だったな。君はこの危機から脱せられまい。」

ルーフスは言った。

「確かにそうだ…だけどやるつきやないんだよ。」

兵隊達とルーフスは静止して睨みあう。

ルーフスの放つ緊張感から、銃の引き金を引くことができないのだ。

ルーフスもまた然り。

複数の銃はいつ放たれるのか…

「…撃て！」

バン!!

バン!!

・  
・

・  
・  
・

バン!!  
バン!!

バン!!  
バン!!  
バン!!

ルーフスは無傷。

隊員達全員の胸から血が噴出す。

ルーフスは目を開いて驚く。

「…分かっていたさ…お前らには到底倒せないよ…」  
奥の扉が開いて白衣の男が現われた。

「…Mr. F…!!」

Mr. Fは挨拶をする。

「わたしがMr. F…本名も教えておこう。フェリクス・デイルだ。」

ルーフスは倒れた兵隊達を見て問う。

「…なんで仲間を殺したんだ…?」

「簡単さ。使い終わったぼろ雑巾は捨てるしか道は無いだろう?」

Mr. Fは更に続ける。

「こいつらもどうせ後に裏切るのさ。王の座を狙ってね。」

…アーティクルやチェリーももう倒された。あいつらも私を裏切ったのだ。自分の力を過信しただけのただの悪魔なのだよ…」

ルーフスは何も言わずに聴く。

「この世界の全て、皆皆、悪魔なのさ。

悪魔のように救いはなく、醜いものさ。

俺はこの世界に捨てられたのだよ。」

ルーフスは言った。

「……で？……独り言は終わったのか？フェリクス。」

ルーフスは剣を構えていった。

「『世界は悪魔だー』とか、『世界は醜いものだー』とか、  
そんな自論を聴きにきたわけじゃねえんだよ。

要はよ……お前を倒せば、世界は救えるんだろ？」

フェリクスは舌打ちする。

「英雄ぶるなよ……この悪魔め……!!」

ボアアアアア……!!

フェリクスの影が床から離れ、フェリクスの体にオーラのようにまとわりついた。

「……!!」

(これは……魔法か!!)

「……さあ、私に食われるがいい……!!」



~~~~~

チエリーはステーラと共に飛行艇の中へ突入する。

ステーラはルーフスの飛行艇に入る瞬間を見ていたのだ。

入るとすぐにルーフスの姿が見えた。

「ルーフスさん!!」

ルーフスはこっちに振り向く。

「…今から突入するんですね!!」

「いや…終わったよ。」

「え?」

ルーフスは喜んで言う。

「全部終わったのさー! Mr. Fはもう倒れたんだよ!!」

世界はもう救われたんだ!!

ほら、喜べよ!! お前ら!!」

ルーフスは笑顔で話す。

チエリーとステーラはポカんとする。

チエリーはうつむく。

「…違う…」

ルーフスは心配する。

「ん？どうした、傷が痛むのか？」

ステーラもうなる。

「グルルルルル!!」

ルーフスは動揺した。

「な、なんだよ、お前まで、

それが主人に向かってする態度か!？」

「違うって言うてるでしょ!!」

「バウ!!」

ルーフスはチェリーとステーラの剣幕に怯えて後ずさりする。

「ルーフスさんは…例え…Mr. Fを倒したとしても…」

Mr. Fのことまで考えているはず…!」

(本当は敵として対峙しなきゃいけないんだ。…

だから、あいつがこの旅で大きくなったら、自分の存在を考えるようになるだろう。)

「見えているものの裏まで…他人の気持ちまで考えちゃう人なんだ!!」

(強くなるために残しておいた命を…お前は全て踏みにじる気か!?)

「私はルーフスさんがそんな人だって信じてる…!! 『大好きだから』!!」

ルーフスは真顔になる。

・
・
・
・
・
・

・
・

・

ルーフスは赤い世界にいた。

ここは…フェリクス記憶の中か…??

——降りしきる雨の中。
空き缶が一つ置いてある。

——知らない男。
こわい。にげたい。
ああ、けらないで…なぐらないで…おじさん。
がんばるから。ぼく、がんばるから…

——檻の中。
目…目…目…

——汚れた少女。

ぼくとおなじ年。君はぼくに笑ってくれた。
きみを見たら、なんだかとてもうれしくなった。

——また雨の中。

手を繋いで、裸足で走る少年少女。
逃げるんだ。しあわせになるんだ。

——工場。

彼女のためだけに…

彼女が苦しまないように…!!

——小さな部屋。

これでもう、寒くないよね…

君といつまでも一緒にいられるよ…

——病院での指輪。彼女の泣いた顔。

何年かかって買えただろう…

遅くなつたけど、これが僕の君への気持ちだ。

——雨の中。

彼女がいなくなる？

彼女はいなくなってしまう？

そんなのごめんだ…!!私…!!

——病院の中。

水が欲しいのか？それとも何か食べたいか？

なんでそんなことをいうんだ!?

お願いだ!!まだ私の前から消えないでいてくれ…!!

!!……………ああああああ
!!!!!!

——憎い。

悪魔達が私を睨みつけている。

全てが私を嫌っている。

そうか、皆敵なんだ。この世界など消えてしまえ

消えてしまえ

消えてしまえ

消えてくれ…

皆…消えてくれ…

彼の世界では、雨がいつも滴り落ちていた——

なんで私の姿なのよ…」

「近くになれそうな奴がいなかった。」

ルーフスの姿は黒い影となった。

そして中から

ルーフスとフェリクスが現われる。

ドサツ…

「ルーフスさん!!…はあ…良かったです〜!!」

チエリーが泣いて抱きしめる。

チェリーの胸が顔に当たる。

「ちよつと…チェ…チェリー…」

チェリーの姿のヘロブラインは真顔で、顔にダラーと流れる涙をハンカチで押さええた。

ルーフス達は体制を立て直して言った。

ヘロブラインは言う。

「偶然にも、私はMorphの魔法を無効化できるのさ。

さあ、降参するんだ。Mr. F。」

Mr. Fは言った。

「…諦めるとでも…?」

Mr. Fは白衣の裾に隠したボタンを押す。

ビュウウウ!!

Mr. Fの乗っていた中央の丸い床が天井まで突き出した。

「しまった…!!外に出られてしまった!!」

既にミュータントモンスターズの屍があちらこちらに転がっていた。

Mr. Fはバルコニーに立つ。

「いた！Mr. Fだ!!」

火山の戦士達はざわめく。

民族の長は命令する。

「矢を構えろお!!」

「……！待て、何か話すつもりだ。もしかしたら降参宣言かもしれない。」

Mr. Fはピンマイクで放送を開始する。

「君達、今から私は、この惑星ほしになろうと思う。」

「…何？」

「あいつ…とうとう頭が狂っちゃったようだ…」

「Mr. F!!お前の負けだ!!降参しろ!!」

「「「「「降参!!」」」」」

「「「「「降参!!」」」」」

「「「「「降参!!」」」」」

戦士達はコールをする。

Mr. Fはあざけ笑ってバルコニーから降りる。

中からチェリーの姿のヘロブラインが叫ぶ。

「みんな!!逃げろおおお!!」

ボアアアアアア!!!

「な…なんだあの影のようなものは…!!」

魔法の国の王様は気づく。

「あれは…M o r p hの魔法…!!」

…まさかそれを…惑星に適用するというのか!!

止めろ…!!」

魔法の国の王様は叫ぶ。

「私でさえ国を制御し大きな副作用を負ったのだぞ…!?

素人のお前では無理だ…!!制御すらできなくなるぞ!!!」

「王様…!!」

サフラが心配そうに王様を見た。

バツ…

世界は光に包まれる。

60：結末

戦士達は目を開ける。

Mr. Fの姿が消えただけで、何も変化はない。

「……？……何も起こらない……」

「Mr. Fは何をしたの？」

「さあ……まさか嘘言って逃げ出したんじゃないの？」

「うわああああ!!」

「コアア! コアア!!」

「オーーン…!!」

「きゃああああ!!」

戦士達は悲鳴を上げる。

地面が大きく揺れだす。

バリ…バババババ…!!

火山に亀裂が入る。

バアアアアアアアアアアン
!!!!

火山が噴火した!!

火山弾に、大量の煙が向かってくる…！

「全員逃げろおおお!!」

ルーフス達も飛行艇から飛び降りて逃げる。

「あんちゃん!」「チェリーさん!」

ジャックとココアはルーフス達を見つけた。

「おう!よかった、お前ら無事だな…」

「逃げるぞ!!」

「恐竜たちはまた俺の船に乗るんだ!あわてるな!!」

スタークが誘導する。

「どこまで持つかは分からないが…我々はバリアを張るぞ!」

「分かった!!」「おう!」「うん!!」

ヒドラと王様、弟子三人組、ナーガは前に魔法で壁を作る。

煙はバリアに防がれ、上に乗って行く。
しかし火山弾は戦士達の頭上へと降り注ぐ。

赤い牛男がでしゃばってくる。

「俺の出番のようだな!! マツス…!」

「待て! 壊したらもつと被害出るだろ!!」

「ここは…避けるんだ!!」

「私がいこう…」

名乗り出たのは巨人だ。

巨人は巨大な剣を腰に差して一つの火山弾へと向かう。

「こんなものなど…私の手のひらに劣る大きさだ…」

バシユツ…!!

シユウウウ…!!

巨人の顔がゆがむ。

熱さで手が少し焼けた。

巨人はがっちりと掴み、

近くの海へと放り投げた。

バシヤアアン!!

「「「おおおおお!!」」」

「いいぞー！巨人!!」

巨人は汗を流して答える。

「これで終わればいいがな…」

火山弾はまだ降り続ける。

「さすがにこの量は受け止めきれん…!!」

「やばい!! 次の奴が来るぞ!!」

火山弾は船に近づいてくる。

「まずい!! 後退できるか!？」

「間に合いません!!」

「ゴゴ…!!」

「「「ん?」」」

船が後ろに動いた…?

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

ジャバアアアア……

船が勝手に後ろに動いている……!!

バツシヤアアアアン!!

間一髪。

火山弾は島の岸に落っこちた。

大量の水しぶきが船に降り注ぐ。

スターク船長は海を見る。

「おお!! シャーコじゃねえか!!」

そこにはたくさんのサメが船を押ししていた。

「久しぶりだな。今日は俺の友人達を連れてきたぜ。」
隣には照れながらあいさつする人魚がいた。

「おお、これはかわいい友達じゃねえか…」

お前らありがとう!! 恩に着る!!」

「船は任せとけ。俺らがうまく避けてやっからよ!」

「…あとは地上だ…巨人だけで防げるはずがない…!!」

…つぎゆ…つぎゆ…

ブラキオサウルスのルーパが必死に海水を飲んでる。

「ルーパ…あなた…何する気なの？」

エミリアは不思議そうに見る。

「くっちくるぞ!!」

ルーパは口から水鉄砲を噴射する。

シュパアアアアアア!!

火山弾の勢いが弱まり…

なんとかバリアの向こう側へ落ちた。

ドオオオオン!!

グアアオオオ：

ドオオオオオオオン！！

火山弾にエンダードラゴンが突撃する。

シャアアン！！

火山弾は海へと落ちていった。

火山弾は次々に巨大な戦士たちに防がれていく。

「うーん！！」

「ありがとうー！！」

「…よし、もうバリアはいいだろう…」

「次はどうするぶん?」

「ん…そうだな…どうすれば…」

「おい、おっさん。」

そこにいたのはメイド服の娘。

しかし姿が変わり王様のすがたになった。

「お前は…へロブラインか…」

へロブラインは魔法世界の住人達に呼びかけた。

「みんな、魔力を充填させておけ。俺に策がある。」

『…ぐうう!!…体が痛い…引き裂かれる…!!』

王様は惑星の声に気付く。

「副作用が始まったようだ…

奴は制御できなくなるだろう。」

ヒドラーは受けた。

「…災害が収まりや吉、災害の猛攻が始まりや、凶ってこつたな。」

「…神様…どうか…」

「どうか幸運を…」

ヒュウウ…

ヒュオオオオオオオ!!!

ビュウウウウウウウウ!!!

突如火山のふもとに竜巻が出現した。

巨人が丸くすっぽり収まってしまうような巨大な竜巻。

戦士たちは絶望した。

「なんだと…」

「あんなもん…」

「どうやって避ければいいんだよお…!!!」

竜巻はこちらに急接近してくる。

エミリアが叫ぶ。

「みなさん!! 恐竜の足につかまって!!!」

巨人も叫んだ。

「俺にもじゃんじゃんつかめ!!!」

戦士たちは大きな恐竜と巨人の足を掴む。

「絶対に離すなよ……!!」

ビュオオオオオオオオオオオ
!!!!

火山は煙の混じった暴風に包まれて何も見えなくなつた。

暴風がやっと晴れた。

戦士達は…

「…死ぬかと思った…」

どうやら全員無事のようだ。

『……………』

世界は静かに唸っている。

「…どうやら魔力が衰え始めているようだ。

では諸君!!…ヘロブラインに魔力を送るのだ!!」

「OK、任せとけ…!」

ヘロブラインは呪文を唱える。

Morphの魔法を無効化する魔法を唱えているのだ。

しかしヘロブラインだけでは魔力が足りない。

そこで魔法世界の住民が魔法を送っているのだ。

…!!

(何やら違う輩からも魔力が送られている…?)

船の上から。

スターク船長がヘロブラインに向かって手をかざす。

クレイソルジャーズ達も小さな手をかざしていたのだった。

(ありがたい…魔力は十分足りた…!!)

(今…!!)

世界はまた光に包まれた。

戦士たちは閉じた目を開ける。

大地にMr. Fが横たえていた。

「死んだのか？」

「動かないな……」

戦士達全員が駆け寄る。

Mr. Fは目を覚ます。

「…これで終わりだ…」

Mr. Fはふらふらと周りに落ちていた石を取る。

そして弱弱しくルーフスに投げつけた。

ルーフスの頬に石がぺしつと当る。

「…よせ、体に響くぞ。」

戦士たちはその反撃を沈黙してみていた。

Mr. Fはルーフスに殴りかかる。

ぱしん。

ルーフスの頬にこぶしが跳ね返される。

「…やめろ。」

「まだだ…次で…」

フェリクスはもう一回殴ろうとした。

そのまま肩から崩れ落ちる。

ドサツ…

「はあ…はあ…」

フェリクスは震えながら右腕を持ち上げて殴る構えをしようとする。

「やめろ!!!」

ルーフスは怒鳴る。

フェリクスの体がびくつと驚き、腕が落ちていった。

「世界は消えないのか…世界は終わらないのか…!!」

消えろ消えろ消えろ消えろ!!みな消えてしまえ!!

このくそ野郎がああああ!!!あああああああああ!!!」

フェリクスは混乱しているようだ。

無茶苦茶に叫び始めた。

ちよん…

ルーフスは人差し指でおでこを軽く突く。

フェリクスはそのまま後ろの大地へと開いた。

フェリクスは涙に染まった目を開く。

フェリクスは叫ぶのをやめた。

そこには無限に、壮大にひろがる星空があつた。

こんなものがこの世界にあつたなんて。

「どうだい？この世界で、何よりも一番素敵なものさ。」

ルーフスは笑顔で言った。

戦士達も星空を見上げる。

「おお…」

「すげえ…」

「戦いで気にも留めなかったが…本当に素敵な景色だ…」

フェリクスは違う涙を流して笑って言った。

「…なんて…最高な世界なんだ…!!」

私はこの世界の影しか知らなかったのだ。

私のこれまでには感動が無かったのだ。

だからくだらない計画なんか立てて。

くだらない計画をくそまじめに実行して。

くだらない敗北をしてしまったんだ。

もう世界が存在しようが、どうでもいい…

過去の悪い思い出などどうでもいい…

今私が思うのは、

なんて素晴らしい世界に、
私は住んでいたのだろう…

「その巨人よ。」

「…ん？」

フェリクスは巨人を呼ぶ。

「俺を連れて行ってもらいたい場所がある。」

巨人は不機嫌な顔をする。

「さつきまで世界をどうかしようとしていた男の頼みを
引き受けるバカがどこにしよう…」

「…自殺を懇願してもか？」

巨人は驚愕の目をフェリクスに向ける。

疲れ切ってるが、目はどうやら本気のようなだ。

「…分かった。」

戦士たちはフェリクスを運ぶ巨人の様子を見つめている。

「…火山の火口だ。」

「おうよ。」

ドスン…

ドスン…

ドスン…

「…巨人さん、ちょっと失礼します。」

「おう。」

ルーフスは勝手に巨人の腕に乗る。

「なんで自殺するんだ？」

「俺にはこれから生きる義理はないよ。」

「…そうか。」

フェリクスは笑う。

「まさか俺を止めに来たんじゃねえだろうな？」

「別にとめないさ。お前の決断だ。それに…」

「彼女もあつちにいるんだろ？」

フェリクスは笑う。

「ハハ…どうせ会えねえだろうけどな。」

「そうか？俺は会えると思うけどな？」

火山の火口に到着した。

「お前らには迷惑かけちゃったな。」

「なあに、旅には刺激が必要さ。」

「…よく言うぜ。」

フェリクスとルーフスは笑いあう。

人生最後の笑い。

巨人が問う。

「お二人さん、もういいか？」

「ああ。」

「わかった。」

「あ。よ。」

巨人の手のひらがひっくり返される。

フェリクスは火口へと落ちて行った。

フェリクスの目には星空が映る。

ありがとう、世界……

フェリクスは笑ったまま溶岩に包まれていった。

こうして、フェリクスの野望は打ち砕かれ、

世界は救われたのだった……

最終回：The beginning.

「やったあああああ!!」

「勝ったぞおお!!」

「世界の勝利だ!!」

「ヒュウウウ!!!」

戦士たちは騒ぎ始める。

我々は世界の危機を見事脱して見せたのだ。

世界中の。

いろんな肌の色の。

いろんな瞳の色の。

小さい者、大きい者。

さらに恐竜やモンスターまで。

全員が喜びを分かち合ったのだ。

ルーフスは巨人の肩から降りて火山を見た。

そして火山に背を向け、悲しみを含め笑ったのだ。

「ルーフスさん！」

「あんちゃん！」

「ルーフスさん!!」

「ワオン!!」

4人が飛びついてきた。

「おっと、ははは、お前ら…」

ルーフスは笑う。

チエリーが泣きながら笑う。

「よかった…誰も…失わなかった…!!」

「全員が無事でよかったよ!」

「私も…とっつてもうれいな!!」

「ワン!ワン!!」

ルーフスは幸せそうに笑った。

「本当によかった…！」

シヤツシヤツシヤツシヤツシヤ…

ポー…!!

見れば草原を走る長い機関車には大勢の人が乗っていた。

さらに巨大な軍艦に飛行艇も泊まる。

「ありがとうおおおお!!」

「かっこよかったぞおお!!」

「お疲れ様〜!!」

戦士達に避難していた人々がお土産を持って駆け寄ってくる。

戦士たちは力強く手を振った。

火山はすぐに人でいっぱいになった。

人々は互いにハグをし合った。

世界は一つに集まっていたのだった。

「世界の人民たちよ!!」

スターク船長は船の上から大きな声で叫ぶ。

世界中の人たちがスタークに注目する。

「ここに、世界の人々が集まった！一部ではない、全員だ!!
これから私たちは、復興などいろいろあるかもしれない。
しかしこの時を見過ごすわけにはいかないだろう！」

皆で宴を！始めようではないか!!」

『ワアアアアアアアアアアアアアアア…』

全世界の人々が賛成する。

さつそく準備が始まった。

舞台は火山近くの真つ平らな草原の上。

世界中の大工たちが屋台やステージを建て。

世界中のシェフ達が腕によりをかけ料理を作る。

世界中の大道芸人たちは自らの芸を練習し。

世界中の医療関係者たちは道具を揃えていた。

世界中の一般市民たちは飾り付けを手伝い。

世界中の戦士たちは力仕事を手伝った。

これは『世界』が主催する、『世界』の宴である。

全てのセッティングが終わった。

いよいよ宴が始まるのだ。

司会がマイクのテストをしてから、

「全世界のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、
おねえちゃんお兄ちゃんに妹さんに弟さん、戦士達もモンスターも恐竜も!!
ただいまより「世界の宴」が始まるよー!!」

『ヒュー———!!』

『ワアアアアアアア!!』

どつと歓声があがる。

「この中央のステージでは、世界中の芸人たちが自分の芸を見せてくれるぞ！

有名なアーティストも出演しちゃうだろうな!!

さらにここでは世界中のいろんな屋台も食べられるぞ!!

体調悪けりや救護テントへ急ぐんだ！それだけ！

さあ、じゃあみんな、めいっばい楽しんで行けよー!!」

『ワ———!!』

「あんちゃん、僕たちはどうする？」

「そうだな、みんないろんな人に会いたいだろう。」

「ここは各自解散つてことで……でもそうだな、時間経ったらまた集まろう！」

「はい!!」「うんわかった！」

「ワオン!!」「了解!!」

ルーフス達は各自散つて行った。

~~~~~ココアの冒険~~~~~

私はチェリーさんの後をついていく。

「チエリーさん！」

「あら、ココアちゃん。」

「私、チエリーさんと一緒に歩きたいな！」

チエリーさんはほえんでくれた。

「私もよ。ココアちゃん！」

「チエリーさんは誰に会うつもりなの？」

「そうね…まずはヴァイオレットかな？」

「ヴァイオレットさん？」

「うん、私の親友なの！」



「チエリー!!」

噂をすればスーツ姿の女の人が涙ながらに駆け寄ってきた。

その女の人はチエリーさんに抱き着いた。

「よかった! チエリーが無事で!」

「えー? まさかヴァイオレット、私が死んじやうって思ってたの? ふふ!」

「そうよね! チエリーなら死ぬはずもないわ!」

チエリーが抱き着き返した。

「私も、あなたが生きてて本当によかった…!」

チエリーさんの瞳がすこしうるんだ気がした。

「ヴァイオレットさんー速いですよー…」

後ろからとことこと私と同じくらいの女の子が近寄ってきた。

女の子はチエリーさんを見かけるとペこりと挨拶する。

「こんにちは！」

チエリーさんは笑って答えた。

「こんにちは！」

「？」 「？」

目が合う。

私は恥ずかしながらに咄嗟に目を地面にそらしてしまった。

顔があつくなる。

私は同年代の女の子とは話したことがないのだ。

「わたしはリサっていうんだ！あなたは？」

女の子は元気に話してくれた。

「…わ、私はココアっていうんだ…よろしく…！」

恥ずかしながら話す私とは対照的に女の子は笑顔で答える。

「一緒にまわろ！」

「！…うん！」

でも私は、この時初めて友達ができたと分かったのです。

「チエリーさん、ごめん、リサと遊んでくる！」

チエリーとヴァイオレットさんは笑顔で送ってくれた。

「いらつてらつしゃいー！」

~~~~~

~~~~~チエリーの冒険~~~~~

「いやーあの子かわいいねー。新しい仲間？」

「うん！最近であつた仲間なんだけど。」

…あの子はね、私と同じ境遇なんだ…」

「…両親がいないの？」

チエリーはうなずく。

「だから私は、あの子の気持ちがわかるんだ。」

自分は独りなんだってさびしい気持ちだね。

だから私は、あの子の母親の存在になりたいって、あの子を守りたいって思ってる。」

「…偶然だね。私も同じ。」

「え？リサとヴァイオレットも？」

「そう。私はね、昔っから勉強熱心で、学校の休み時間でも勉強してたんだ。」

それで、ほかの女の子たちは私に近寄りづらくなっちゃって、友達なんてできなかつた。

彼女はね、まだ10歳なのに私の秘書さんなんだよ。」

「そうなんだ！…」

「そして、彼女も同じだったんだ。だから私も、彼女を守りたいってそう思っちゃうの。」

「ふふ…お互い、頑張らないとね。」

「そうだね。」

私とヴァイオレットは微笑みながらリサとココアを見つめていた。

~~~~~ジャックの冒険~~~~~

ジャックは両親とともに行動していた。

「ジャック、何が食べたい？」

「うーん…そうだな…ハンバーガー食べたいな！」

「よし、じゃあハンバーガーの屋台へ行こう！…」

えーつと…あれ…これは…こつちかな？こつちか…」

「お父さん、貸してみて。」

ジャックは父から地図を受け取る。

「こつちの方角だね！」

「まあ！」

お母さんは僕の成長に驚いたようだった。
僕は少しうれしくなる。

ハンバーガーの屋台のとなり。

「グラツソ・ガビアーノ・レストラン」と書いてあった。

「あ、アルミロさんのレストランだ！ごめん、母さん、父さん、こっちに変更するよ！」
「いらつじやいませ〜」

このしやがれた独特の声は…!!

あの『ネズミのお助け屋』のデブではないか！

「ああ!!ネズミ男!!」

「げ?!あんさん私だちのごと知っでんのかいな!?!」

「今度は騙されないぞ〜」

ジャックは鞆を警戒する。

店内からアルミロさんが出てきた。

「久しぶりだね、ジャックくん。」

「あ！お久しぶりです！…何でこいつらここにいますか!？」

「ああ、それはね。」

彼らはやつと改心したそうなんだ。2週間前にこのレストランに弟子入りを求められてね。

料理を教えながら、ウェイターとして雇っているんだ。」

「…へえ…そうだったのか」

細いネズミ二人も駆けつけて3人で照れた。

「さつきはごめんね、疑っちゃって。」

細いネズミが答える。

「いやいや、元は俺たちがしつかりしてなかっただけですから。

俺たちはこのレストランで皆に罪滅ぼしをして、同時にシェフになる夢をかなえたいと思ってるんです。」

ネズミは食べ物が好き物ですからね!!」

アルミロは自慢の弟子だといわんばかりにうなづく。

「おお！応援するよ！3人とも！」

「へへへ…ありがとうございます。…おおっと、そうだ、ご注文をどうぞ！」

「じゃ、ハンバーガーセット3つで!!」

「かしこまりました!!」「お手拭きおもちじま〜」

ネズミたちは元気よく駆けていく。

泥棒の時よりも目が一段と輝いていた。

僕には、分かったのだ。

~~~~~

~~~~~ステーラの冒険~~~~~

「狼軍団！バンザイ！！」

狼達は互いの皿やグラスをぶつけ合う。

ビストは元の人間の姿に戻っていた。

「がっはっはっはっは！」

ビストとライモンは互いに酔いながら笑いあう。

「いやー！あっぱれだ！こんなたくさんの仲間と話し合えるなんてな！！」

「ワオン！！」

「ガウ!!」「バウ!!」

「……?……ところでお前はどこが狼なんだ?」「ガウ。」(訳: そうだよ)
ビストはライモンに尋ねる。

ライモンは少し考えた。

「う〜ん……どこから話そう……ん?」

ライモンが遠くに見える狼を見つけた。

ステーラ達も見る。

みると頭にゆずのワンポイントをつけたかわいい狼だ。
サクラノ国のミネゴロウの家に住む狼、ユズだ。

「ガウ!?!」

魔法の森の狼達とビスト率いる狼たちはハート眼になった。

「ワン!!」

ステーラが近づく。

「キャン!!」

ユズとステーラはうれしそうに回る。

ビストとライモンは互いに笑う。

「おう！嬢ちゃんもこっち来て話し合おうじゃねえか！」

「ガウガウ！ガウガウ！」（訳：こっちだ！こっちだ！）

「ワン!!」

ステーラは「行こう！」と誘う。

「…キャン！」

ユズは少し赤くなって「うん！」と答えたのだった。

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフスは人ごみをかき分けて探す。

どこだろう。

無事なのだろうか？

無事でいてくれ…!!

…

どこにもいなかった。

お母さんならこの場所に来てくれるはず。  
そう思っていた。

「おう、ルーフス。」

「親父……」

なにやら父も形相を変えて走ってくる。

「お母さんみたか？」

「いや、見てないよ。」

「……どこにいるんだ……」

ぐぎゆるるるる…

二人の腹が同時に鳴った。

「…なんか食うか…」

「そうだね…」

ルーフス達は屋台を歩く。

「…久しぶりだな。こうやって親子で平和に歩くのも。」

「だね。確かに、前に会ったときもごちやごちやした最中だったからね。」

「こうやって…確か昔は、ホットドッグを丸かじりしてたっけな。」

「はは、懐かしいや！…そうだ！ホットドッグ食おうぜ！」

「お、いいな。じゃあその屋台にしよう。」

見るとエプロンと三角巾をつけた女性がソーセージを焼いていた。

「すみません！」

「はい、何個にしましょう…」

父と子はぼかんとした表情になった。

なんと。

お母さんではないか。



「!!」

お母さんはびっくりしたようだ。

顔に手を重ねて声もなく驚いた。

ルーフスと父は先に、仲良く吹き出してしまった。

「はははははは!!そりゃ見つからないわけだ!!」「はははは!!」  
母はきよんととしていたままだった。

店の番を近所のおばさんに代わってもらって。

ルーフスは親子三人で仲良く話をした。

「ルーフス…本当におつきくなつたね。」

「はは、まあ食って寝てうごいてりやそのうちね。」

「いや、外見だけじゃないぞ。最初は弱弱しいヒヨっこだったのが、いまじゃ力強い獅子のようだ。」

「…それは俺だけで成長したわけじゃないよ…」

旅で、いろんな仲間と出会った結果が、今の自分になっていると思うんだ。」  
母と父は互いに顔を見合わせて笑う。

「はっはっは!!」「ふふふ!!」

「?…なんかおかしいこと言ったか?」

「その言葉、俺も昔に言ったことがあるんだよ。」

「お父さんにそっくりなんだから!」

ルーフスは照れてきた。

「ルーフスさん!!」「あんちゃん!」「ルーフスさん!」「ワン!」

チエリーとジャック、ココアにステーラが走ってくる。

皆もう個人でいっぱい遊んできたようだ。

「お、母さん、親父、俺の大切な仲間達だよ。」

チエリー達はルーフスの父と母の前に立って挨拶する。

「はじめまして！チエリーと申します！」

「ジャックです！」「ココアです！」「ワオン！」

「こいつは、ステーラっていうんだ。」

「まあ！ルーフスがお世話になってます！」

「いえ！私達のほうがお世話になっていきますから！」

「すまねえなーこいつ俺に似てバカだから!!」

「う、うるせえ親父!!」

「ハハハハ!!」

「よっしや！君たち、これから私たちといっぱい話そうじゃないか！」

「はい！」「俺たちの旅の話聞いたらびっくりするだろうな！」

「ふふ！そうですね！」「あっちのテーブル空いてるよ！」

「ワオン!!」

ルーフス達と父と母は楽しく、夕方まで話したのだった。

ルーフス達だけが楽しんでいたのではなく。

他の場所でもいろいろな出会いがあったのだ。

~~~~~桜ノ道常の冒険~~~~~

「道常様、お体は大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

私はハマをして戦士としてほとんど戦いには出られなかったからな。

せめて戦士達をたたえる宴には参加したいのだよ。」

「承知しました。」

「おおお道常様!!」

見ると小さな老人が手を握りに来た。

ハヤブサだ。

「おお！よかった…よかった…!!道常様！

桜ノ国の戦況で道常様の負いた傷を聞いたとき、じいやはもう心配で心配で!!」
「はっはっは…心配をかけたのう。だが大丈夫だ。傷は浅かったからな。」

「ふん、天下の桜を治める国の長なるものが、なんというさまだ。」

そこにはわが宿敵、松原郷玄がいた。

ハヤブサは激昂する。

「郷玄！お前はまた道常様の悪口を！！このじじいの拳で成敗してくれよう！！」

「待て待て待て、抑えるのじゃ。今回は全く、おぬしの言う通りじゃ。」

私は少々油断していたのだよ。」

「そんなお主に、今日はいいものを持ってきてやったぞ。ほれ。差しだせい！」
「はは！！」

侍は私に皿に乗ったお揚げを渡した。

「ザラメユキ国名物、お揚げじゃ、侍たちはみんな、これを食べ戦へと向かう。」

いわば戦のために作られた料理というわけじゃのう！わっはっはっは！！」

「郷玄……」

ハヤブサは驚く。

私はお揚げをもらうと郷玄に背をむける。

そして一生懸命に涙をこらえた。

なんという情けじゃ……！！

憎いぞ郷玄よ…なぜ面と向かって渡すのか!!

お主はそこまで私の泣き顔を見たいというのか!!

ここで退いてはならぬ…!!退いたら男がすたるといふものよ!!

「おぬしは…敵に塩を送ったというわけだな!!…なんたる侮辱!!

これは宣戦布告とみた!!次の召し物祭ではサクラノ国が見事!一位の旗を取ってやろう!!」

「がっはっはっは!!無駄にあがくがいい!!」

郷玄は道常の芝居に乗って去っていった。

ハヤブサはボソツと話す。

「ずっとこの関係で、やっていければいいものですな。」

「ああ!全くじゃ!!あっぱれ!今日は誠に天晴れであるぞ!!」

道常はお揚げをかじる。

その味は、雪に似合わず温かい味であった。

くくくくクラブの冒険くくくく

僕はワーカーと共に屋台を歩く。

やっぱり、世界が集まるところまで活気に満ち溢れるものなんだな。

シューウウウ：

…!?

周りの世界が止まっている？

気付けば皆がみんな動かないのだ。

「クラブ、クラブ、ミナ、ドウシタ？」

「…わからない…一体何が!？」

そのとき。

上空にUFOらしきものを見た。

「なんだと…」

UFOの中から宇宙人が舞い降りる。

まさか…世界が救われたと思っていれば…今度は宇宙人だと…!?
自分の足が勝手に揺れるのがわかった。

怖い。

この宇宙人はいったい何をしでかすのだろう。

「…No. 002647。やっと見つけたぞ。」

僕はワーカーを見ていることを知り、自分の胸にぎゅっと締め付ける。
頬に汗が流れる。

「クラブ、クルシイ、クルシイ…」

宇宙人はこちらによって来る。

「さあ、私の星に帰ろう。No. 002647。」

踏み出さなきや。

ここで踏み出さなきや。

ワーカーとは永遠に離れ離れになる気がする。

そして、ワーカーはまた同じ恐怖を味わうことになるんだ。

そんなの、絶対にごめんだ。

「教えてください。」

「……？」

「教えてください!!ワーカーをあなたに渡したら、どうなるのですか!？」

「…それは我々ランラール星人の役に立つロボットとして…」

「…それを強要して、また捨てるつもりなのですか？」

…彼のログを見ました。彼の映像には悪口しかありませんでしたよ。

…そのログを見る限り。僕はあなたたちを信用なりません。」

「……………」

「僕なら、あなたたちよりワーカーを大切にできる自信がある。」

「ボク、ココ、イル」

「…!!」

ワーカーが自分の感情を言った。

「クラブ、イツシヨ、イチバン」

僕はワーカーを強く抱きしめた。

よかった。

ワーカーも同じことを言ってくれた。

僕と戦ってくれた。

「…だめだ。私はこの地球上のロボットをすべて回収するためにここに来たのだ。聞き分けるわけにはいかない。」

僕は悟った。

やっぱりだめなのかな…

「クラブ、アンシンシテ。」

ワーカーが自分の手を振り上げる。

カン!!カン!!

自分の頭を殴り始めたのだ。

「!?…No. 002647!?何をしている!しっかりしろ!!」
「ワーカー!」

ガン!!ガン!!

ワーカーの画面表示がゆがむ。

「やめろ!!私はお前の傷つく姿を見に来たのではない!No. 002647!No. 002647!」

私は呼んだ。

彼の『名前』を。

「ワーカー!やめるんだ!!」

びたっ！

ワーカーは止めた。

宇宙人は打ちのめされたみたいだ。

「ボク、キク、クラバダケ。」

「…分かった。命令の聞かないロボットなど、いても仕方がない。好きにするがいい。」

宇宙人は怒ってUFOに乗る。

「最後に一つ。私たちの話をしたとき。その時は君達の地球によからぬことが起こるであらう。」

バシユウウウウウウウ…

宇宙人はそう言うとすぐに上昇して消えて行った。

ガヤガヤ…

周りの景色は動き出す。

「…どうやら戻ったようだね。ワーカー。」

「クラバ、クラバ。」

見るといつのまにやらケーキを持っていた。

「ケーキ、ケーキ!!」

「…ははは、いっしょに食べよつか。」

一件落着…か…

またワーカーと一緒に、仲良く暮らせるんだな。

ワーカー。これからも、よろしく頼むよ。

~~~~~ルーフスの冒険~~~~~

ルーフス達を含む戦士達は大きな町で休息を取るために寝台特急を手配された。部屋は4人ずつの一室で、ルーフス達は別れることなく座ることができたのだ。

ココアとジャックとステーラははしやぎ疲れたのか、もう寝てしまったようだ。

ルーフスとチェリーは窓の外の夜景を見ていた。

チェリーが話し始める。

「ルーフスさん。」

「ん?」

「最初のルーフスさんが私にかけてくれた言葉、覚えてますか？」

「ん？…なんだっけ？」

「えー？忘れちゃったんですか!？」

「あははは…ごめん…」

チエリーはぶすつとしながら言った。

「ルーフスさん、私に『お前の太陽が見たい』って言ってくれたじゃありませんか!？」

「あ、そーいやそーうだったな…」

チエリーは首をかしげて確認する。

「私は、ココアちゃんにジャックくん、ステーラにヴァイオレット…」

「今までの皆の太陽になっているのでしょうか？」

ルーフスは笑って言った。

「叶えられてるよ。みんな、チエリーのことが好きなんだ。」

太陽を嫌いな奴なんて、この世界にはいないだろう？」

チエリーは笑う。

そしてからかった。

「ルーフスさんは、私の事好きですか？」

ルーフスは赤くなってから笑った。

「大好きだよ。」

チエリーとルーフスの唇が触れ合った。

チェリーの顔が一気に赤くなる。

ぷはっ…

ルーフスは唇を離す。

「へへ！からかい返し！」

と言つてチェリーに笑った。

チェリーも笑う。

「わぁー…」

びくう!!

見ればココアだけ起きていた。

ココアはどきどきしているようだ。

「ココココココアちゃん？ここここここれはね？」

「そそそそそそうだ、ココア、ここここここれはだな」

「ルーフスさん、チェリーさん、…ラブラブだね！」

「はうう!!」

ルーフスとチェリーは汗を垂れ流す。

「でも…」

ココアは続けた。

「私、ルーフスさんとチェリーさん、

とっっても似合ってると思うよ!!

だってルーフスさんとチェリーさん、  
私のお父さんとお母さんみたいなものだもん!!」  
ココアはえへへと笑った。

チェリーは涙を流す。

ルーフスもなんとか涙をこらえていた。

チェリーはココアを抱きしめる。

「…ありがとう…ココアちゃん!!!」

ココアは幸せそうに笑い続ける。

ルーフス達を、満月は温かく見守っていた。

翌朝。

目覚ましを止める。

服を着替える。

ご飯をかきいれる。

荷物を詰める。

カバンのチャックを閉める。

そして、ルーフス達は外へ飛び出した。

「よっしゃ!! 次の場所! 行こうぜ!」

「はい!」「行くぞー!!」「うん!」「ワオン!」

5人の元気な声が、街の中に響き渡る。

ここで5人の旅を語るのはおしまい。

しかし、彼らの旅はまた、『始まり』なのである。

—  
終わり  
—



## エピソード：地獄にて

ここは地獄。

地上世界の崩壊も免れ、ゾンビピッグマンやブレイズも監視を終えていつもの仕事に戻っていた。

ゾンビピッグマンが十人の罪人達を歩かせる。

彼らが向かっている彼方には灼熱の炎があった。

ここで罪人達は身を燃やされ、魂はガストと化し地獄をさまようのだ。

その中にはフェリクスもいたのだった。

ガチャン…ガチャン…

足かせが重く地獄に響く。

フェリクスは苦悶の声を上げる。

熱い。苦しい。

「助けてくれえ……」

「……その痛みは、今までに犯した罪の大きさを表している。

お前は世界規模の罪を犯したのだから。痛いのも当然だ。」

ゾンビピッグマンは冷静に答えた。

バアアアアン……！

ガラガラガラ……

「!?……地獄の天井が……!!」

地獄の天井が壊れ、赤い空が見えている。

天の音が響く。

「エーテル（天国）から一人の天使が……自ら墮天使と化して地獄を目指している……」

「なんですと!!!」

空いた天井から黒い羽根をした女の墮天使が舞い降りた。

ブレイズ軍団が動き出す。

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

ボツ!!

炎の弾丸が墮天使を襲う。

シュウ!

シュイ!!

シューウウ!!

堕天使は機敏な動きでそのすべてを避け罪人に急接近する。

「この…!!」

ゾンビピッグマンが剣を振りかぶる。

ドン!!

堕天使はそのままゾンビピッグマンの顔に足蹴りをくらわす。

「ぶほあ!!」

ボタン!!

カララン：

金の剣が転がり、

ゾンビピッグマンは伸びてしまった。

堕天使は一度勢いをつけるため通り過ぎる。

そして罪人にむかって高速で飛ぶ。

そして一言叫んだのだった。

「フエリクス!!腕あげて!!」



罪人の中の一人が反応し、咄嗟に手を上げる。

墮天使はその手を掴んだ。

ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ ガチャ…

しかし手かせが十人についている。

「おお！いいぞ！！姉ちゃん！」

「そのままここから連れ出してくれ！！」

他の罪人たちが騒ぎ立てる。

墮天使は倒れたゾンビピッグマンの金の剣を持ち、他の鎖を断ち切った。

チャキン!!

墮天使とフェリクスは赤い空へと向かっていく。

「い…」

「「「「「「「「この期待外れやろおお!!」「「「「「「」

「ふざけんなああああああ!!!」

「ゆるさねえぞ!!」

後ろの罪人達の怒号には目も触れず。

墮天使は地獄から脱出したのだった。

地獄の穴を移動中。

墮天使は泣いてつぶやいた。

「…ごめんね…ごめんね…」

私が…あんなこと言ったから…」

「ヴェロニカ…」

「私は…あなたの人生を…狂わせてしまったのかもしれない…」

フェリクスは笑いかけた。

「君が、あの言葉をかけてくれたから。」

俺はくだらないことやって、結局負けたんだ。

でもそのおかげで、俺はこの世界が素晴らしいって気付いたよ。君には、最後まで助けられてしまったね。」

「…フェリクス…!!」

周りが光で包まれた。

そこにはエーテルの広大な空が広がっていた。

ヴェロニカは話す。

「…あなたと、この景色を一緒に見たかったんだ…」

「…そうだったのか。」

「この後は、私もあなたも、地獄へ落とされることになっちゃうけどね…」  
ヴェロニカは悲しい表情を浮かべる。

「俺は、今が一番幸せな時間だよ。」

ヴェロニカはフェリクスを見る。

「世界一素晴らしいものを、僕にとって世界一きれいな人と一緒に見られるんだからね。」

ヴェロニカはフェリクスの笑顔に、つられて笑う。

「私も！」

分厚い雲に、くつきりと二人の影が映し出されていた。